

三 谷 遺 跡

— 広島市安芸区中野東三丁目・中野東町所在 —

2006

財団法人広島市文化財団

は し が き

広島市安芸区の旧瀬野川町は、中央を瀬野川が広島湾へと流れ、その両岸には山並が連なる自然に恵まれた町です。また、古くは山陽道、現在ではＪＲ山陽本線や一般国道２号といった幹線が通る交通の要衝の地でもあります。このことを示すかのように、この地域には古墳や山城など、数多くの遺跡が確認されています。

さて、この瀬野川流域は、これまで遺跡の発掘調査があまり行われていなかった地域でしたが、近年、一般国道２号の渋滞の解消などを目的とするバイパス道路の建設事業地内で発掘調査が進められ、この地域の弥生時代から古墳時代にかけての様子が少しずつ明らかになって来ました。この三谷遺跡の発掘調査も、その一環として行われたものです。

調査では、弥生時代中期から後期の竪穴住居跡 24 軒をはじめとする遺構と、土器、鉄器などの多数の遺物を発見しました。こうした弥生時代の大規模な集落跡の発掘調査はこの地域で初めてのことで、貴重な資料を得ることができました。

この報告書が一人でも多くの方に活用され、広島市域の歴史を理解する一助となれば幸いです。最後になりましたが、この調査にあたってご指導、ご助言をいただきました諸先生方、ご協力いただきました関係諸機関と関係者の皆様、ならびに調査に従事していただいた皆様に、厚くお礼申し上げます。

平成 18 (2006) 年 3 月

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

例 言

1. 本書は、広島市安芸区中野東三丁目および中野東町における一般国道2号（東広島バイパス）建設工事に伴い、平成13年度から平成16年度にかけて実施した三谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所から委託を受け、財団法人広島市文化財団が実施した。
3. 本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱを松田雅之が、Ⅲを田村規充・松田・楳木敬太が、Ⅳを田村・楳木が行い、楳木が編集した。
4. 遺構の実測及び写真撮影は荒川正己・田村・松田・楳木が実施した。遺物の実測及び図面の製図は田村・松田・楳木が、写真撮影は楳木が実施した。
5. 本書に掲載した航空写真の撮影は、スタジオ・ユニに委託した。
6. 基準点測量は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。なお、第3図における基準点のデータは下記のとおりである。
基準点① $X = -178610.416$ $Y = 38250.088$
基準点② $X = -178586.550$ $Y = 38271.838$
基準点③ $X = -178547.157$ $Y = 38216.812$
基準点④ $X = -178581.089$ $Y = 38205.390$
方向角は、基準点①から基準点②は $42^{\circ} 20' 39''$ 、基準点②から基準点③は $305^{\circ} 35' 56''$ 、基準点③から基準点④は $198^{\circ} 36' 14''$ 、基準点④から基準点①は $123^{\circ} 16' 10''$ である。
7. 本書に掲載した挿図の方位は、第1図は真北、その他は全て磁北である。
8. 第1図は、国土交通省国土地理院発行の50,000分の1の地形図（海田）を複製して使用した。
9. 本書に使用した遺構の略記号は下記のとおりである。
SH：竪穴住居跡 SX：テラス状遺構 SD：溝状遺構 SK：土坑 P：ピット
10. 土層断面図及び土器の色調は『新版標準土色帖』（1999年版 日本色研事業株式会社発行）に拠った。
11. 本発掘調査で得られた資料は、広島市教育委員会から委託を受けて、財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課において保管している。

目 次

I はじめに	7
II 位置と環境	9
III 遺構と遺物	14
IV まとめ	121

挿 図 目 次

第 1 図 三谷遺跡周辺主要遺跡分布図	11
第 2 図 三谷遺跡周辺地形図	13
第 3 図 遺構配置図	15
第 4 図 基本層序	17
第 5 図 SH1 実測図	20
第 6 図 SH2 実測図	21
第 7 図 SH3 実測図	25
第 8 図 SH4・SH9・SH12・SX2・SX5・SX10 実測図	27
第 9 図 SH5 実測図	31
第 10 図 SH6・SH7・SH8・SK12・SK13・SK14 実測図	33
第 11 図 SH7 炉跡実測図	36
第 12 図 SK12 実測図	37
第 13 図 SK13・SK14 実測図	38
第 14 図 SH10 実測図	39
第 15 図 SH11 実測図	40
第 16 図 SH13・SX6・SX7・SX8・SX9 実測図	43
第 17 図 SH14・SH15・SH16・SX11・SK7 実測図	45
第 18 図 SH17 実測図	49
第 19 図 SH18 実測図	50
第 20 図 SH19・SH20・SX12 実測図	52
第 21 図 SH21・SH22・SH23・SX13 実測図	54
第 22 図 SH24 実測図	56
第 23 図 SX1 実測図	56
第 24 図 SX3 実測図	57
第 25 図 SX4 実測図	58
第 26 図 SX14 実測図	59
第 27 図 SX15 実測図	60
第 28 図 SX16 実測図	61

第 29 図	柱穴群・SK1 実測図	63
第 30 図	SK1 実測図	65
第 31 図	SD1・SK5 実測図	65
第 32 図	SK2 実測図	67
第 33 図	SK3 実測図	67
第 34 図	SK4 実測図	68
第 35 図	SK6 実測図	70
第 36 図	SK8 実測図	70
第 37 図	SK9 実測図	71
第 38 図	SK10・SK11 実測図	72
第 39 図	出土遺物実測図 (1)	105
第 40 図	出土遺物実測図 (2)	106
第 41 図	出土遺物実測図 (3)	107
第 42 図	出土遺物実測図 (4)	108
第 43 図	出土遺物実測図 (5)	109
第 44 図	出土遺物実測図 (6)	110
第 45 図	出土遺物実測図 (7)	111
第 46 図	出土遺物実測図 (8)	112
第 47 図	出土遺物実測図 (9)	113
第 48 図	出土遺物実測図 (10)	114
第 49 図	出土遺物実測図 (11)	115
第 50 図	出土遺物実測図 (12)	116
第 51 図	出土遺物実測図 (13)	117
第 52 図	出土遺物実測図 (14)	118
第 53 図	出土遺物実測図 (15)	119
第 54 図	出土遺物実測図 (16)	120

付 表 目 次

第 1 表	三谷遺跡出土土器観察表	78
第 2 表	三谷遺跡出土鉄器観察表	102
第 3 表	三谷遺跡出土石器観察表	104
第 4 表	三谷遺跡出土土製品観察表	104
第 5 表	三谷遺跡 SH7 出土鉄器分析表①	122
第 6 表	三谷遺跡 SH7 出土鉄器分析表②	122

図 版 目 次

図版 扉	三谷遺跡遠景（航空写真・調査後）	図版 17 a	SH13 炭化材検出状況
図版 1 a	三谷遺跡遠景（航空写真・調査前）	b	SH13・SX6～9
	b	図版 18 a	SH14
図版 2 a	三谷遺跡（航空写真・調査後）	b	SH15・16・SX10・11・SK7
	b	図版 19 a	SH17 周辺写真
図版 3 a	SH1 炭化材検出状況	b	SH17
	b	図版 20 a	SH18
図版 4 a	SH2	b	SH19・20・SX12
	b	図版 21 a	SH21～23・SX13
図版 5 a	SH3 遺物出土状況	b	SH23 刀子出土状況
	b	図版 22 a	SH23
図版 6 a	SH3	b	SH24
	b	図版 23 a	SX1
図版 7 a	SH4	b	SX3
	b	図版 24 a	SX4 土器出土状況
図版 8 a	SH12	b	SX4
	b	図版 25 a	SX14
図版 9 a	SH4・12～16・SX2・5～11・SK7	b	SX15
図版 9 a	SH5	図版 26 a	SX15
	b	b	SX16
図版 10 a	SH5 炉跡	図版 27 a	柱穴群 a・b
図版 10 a	SH6・7・8	b	柱穴群 c
	b	図版 28 a	柱穴群 c
図版 11 a	SH6 炉跡	b	SK1
	b	図版 29 a	SD1・SK5
図版 12 a	SH7 炉跡	b	SK2 貝殻出土状況
	b	図版 30 a	SK2
図版 13 a	SH7 管玉出土状況	b	SK3 礫出土状況
図版 13 a	SK12 礫検出状況	図版 31 a	SK3
	b	b	SK4 礫出土状況
図版 14 a	SK12	図版 32 a	SK4
図版 14 a	SK13 礫検出状況	b	SK6 礫出土状況
	b	図版 33 a	SK6
図版 15 a	SK13	b	SK8
図版 15 a	SK14		
	b		
図版 16 a	SH10		
	b		
図版 16 a	SH11		
	b		
図版 16 a	SH11b 炉跡		

图版 34 a SK9

b SK10·11

图版 35 出土遺物 (1)

图版 36 出土遺物 (2)

图版 37 出土遺物 (3)

图版 38 出土遺物 (4)

图版 39 出土遺物 (5)

图版 40 出土遺物 (6)

图版 41 出土遺物 (7)

图版 42 出土遺物 (8)

图版 43 出土遺物 (9)

图版 44 出土遺物 (10)

图版 45 出土遺物 (11)

图版 46 出土遺物 (12)

图版 47 出土遺物 (13)

I はじめに

広島県教育委員会は平成12年度に、国土交通省中国地方整備局広島国道工事事務所（現広島国道事務所。以下「広島国道」）の依頼を受け、一般国道2号（東広島バイパス）建設事業地内において試掘調査を実施し、安芸区中野東三丁目及び同区中野東町字三谷地内において遺跡の存在を確認した。この遺跡の取り扱いについて両者で協議が行われたが、計画の変更は困難であり、記録保存の措置を講ずることとなった。

そこで、広島国道は平成13年5月11日に、財団法人広島市文化財団（以下「文化財団」とする）に発掘調査及び報告書作成の実施を依頼した。これを受け、文化財団文化科学部文化財課では、現地調査を平成13年6月18日から平成14年5月28日、一時の中断期間を挟んで平成14年9月24日から平成15年12月26日にかけて実施した。報告書作成は平成16年1月から平成17年3月にかけて実施した。

発掘調査の関係者は以下のとおりである。

調査委託者 国土交通省中国地方整備局広島国道事務所

調査主体 財団法人広島市文化財団

調査担当課 財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課

調査関係者 平成13年度

玉田常行 常務理事

桑野克彦 常務理事

堂官正昭 文化科学部長

石田彰紀 文化財課長

若島一則 文化財課主任指導主事

今田日出登 文化財課主任

平成14年度

桑野克彦 常務理事

井川 實 文化科学部長

石田彰紀 文化財課長

若島一則 文化財課主任指導主事

波田秀穂 文化財課主任

平成15年度

桑野克彦 常務理事

東山章次 常務理事

沼田眞之輔 文化科学部長

石田彰紀 文化財課長

若島一則 文化財課主任指導主事

波田秀穂 文化財課主任
平成 16 年度
東山章次 常務理事
沼田眞之輔 文化科学部長
幸田 淳 文化財課長
若島一則 文化財課主任指導主事
波田秀穂 文化財課主任

調 査 者 平成 13 ～ 14 年度

荒川正己 文化財課学芸員
田村規充 文化財課学芸員
楳木敬太 文化財課学芸員
平成 15 ～ 16 年度

田村規充 文化財課学芸員
松田雅之 文化財課学芸員
楳木敬太 文化財課学芸員

調査補助員（50 音順）

今田章範（故人） 岩村京子 植木真澄 上原安次郎 大塚勝宏 小倉武
梶谷ミエ子 加藤恒子 加藤幸恵 加藤淑子 川手京子 河野幸子
久保田弘子 倉本勝太郎 倉本登志子 桑原晴美 合田慶江 河野勝
貞藤静磨 澤岡忠重 柴田昌記 住川義治 大上健治 大上敏子 高木素子
高本すがこ 宅見陽子 俵司寿馬 築地正義 坪木征子 中村和子 中村健次
中村茂 野田希和子 浜田由倭子 平岡俊哉 平田法男 檜和田正登
藤岡真弓 前田晴美 政木由里子 森田美恵子 森田美智子 山本隆教
横光美里 吉井清 和田実千代

整理作業員（50 音順）

酒本由理郁 菅原彰子 住川香代子 橋本礼子

なお、国土交通省中国地方整備局広島国道事務所、広島市教育委員会生涯学習課文化財担当の職員の方々、中野地区の住民の方々には、調査を円滑に進めるにあたって多大なご配慮とご協力をいただいた。さらに、調査期間中及び報告書作成にあたり、本財団埋蔵文化財発掘調査指導委員会の委員である広島大学名誉教授潮見浩先生、同教授川越哲志先生、同教授河瀬正利先生、同教授古瀬清秀先生からは、貴重なご助言、ご指導をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

Ⅱ 位置と環境

1. 自然的・地理的環境

三谷遺跡は広島市安芸区中野東三丁目・同区中野東町に所在する。

安芸区は広島市の南東部に位置し、東を東広島市、西を安芸郡府中町・海田町、南を安芸郡熊野町・坂町・呉市と接している。また、南西では広島湾北東岸に面している。同区の北半を占めるのが遺跡の所在する中野地区を含む旧瀬野川町域で、その中央を南西へ流れるのが瀬野川である。瀬野川は、東広島市東部の八本松町・志和町に源を発して広島湾へと流れている。瀬野川の北には標高 300～500 m 程、南には標高 600～700 m 程の山並が連なっており、そこから瀬野川両岸に向かって低丘陵や扇状地が延びている。平地は瀬野川とその支流沿いに細長く形成されており、特に広い平地が分布するのは瀬野川と支流との合流点一帯、即ち、熊野川との合流点一帯の上瀬野地区、伏附川・榎ノ山川との合流点一帯の瀬野地区、大藤川・山王川・押手川・畑賀川との合流点一帯の中野地区並びに畑賀川沿いの畑賀地区である。

本遺跡は、中野地区の東にそびえる鉾取山山頂部（標高 711.5 m）の西南西にある峰（標高 676 m）から、西北西へと下る尾根が傾斜を緩める、標高 90～100 m 前後の南に面した日当たりの良い地点に位置し、そこからは中野地区の平地が一望できる。本遺跡の西側は、約 45～50 m 先を北西へ流れる瀬野川の支流・山王川へと下る。そして、この山王川による扇状地が、本遺跡から南東側へ約 250 m 離れた標高約 150 m の地点から瀬野川にかけて形成されている。ところで、本遺跡から南東側へ約 400 m 離れた尾根の標高約 300 m の山腹には、蛇岩と呼ばれる巨岩が露頭しており、本遺跡からも望むことができる。

なお、瀬野川河口部は瀬野川の沖積作用と埋め立てによって次第に西へ移動しており、鎌倉時代では現在の位置よりも東、本遺跡から約 4 km の瀬野川と唐谷川の合流点付近にあったと考えられている¹⁾。このことから、弥生時代にはさらに東寄りであった可能性がある。

2. 歴史的環境

瀬野川沿いは現在、広島市と東広島市を結ぶ主要ルートである。その交通の要衝としての歴史は古く、古代以来、山陽道が通っていた。中野地区には、延喜式（927 年）に記載されている山陽道の荒山駅が所在したと考えられている²⁾。また、12 世紀末には瀬野地区から中野地区一帯に世能荒山荘が成立している³⁾。こうしたことから、本地域は交通の要衝という地理条件のもと、古くから開発されて来たものと推測される。

瀬野川流域で確認されている遺跡のほとんどは、弥生時代以降のものである。それ以前のものとしては、縄文時代の例として、塔之原遺跡⁴⁾から石匙が、海田町石原から石斧⁵⁾が、畑谷貝塚⁶⁾から大分県姫島産の黒曜石製石鏃が、矢野小学校校庭遺跡⁷⁾から縄文時代早期から晩期にかけての土器片・石斧・石鏃が出土している。

瀬野川流域における弥生時代の遺跡は、瀬野川やその支流の畑賀川沿いの丘陵上を中心に分布している。それらのほとんどは未発掘のため詳細は不明であるが、井原遺跡⁸⁾では弥生時代中期後半に、川原地貝塚⁹⁾では弥生時代後半に、蓮華寺山頂遺跡¹⁰⁾では弥生時代後期に、山王貝塚¹¹⁾では弥生時代後期中葉に、中須賀神社境内遺跡¹²⁾では弥生時代後期から古墳時代前半に属する土器が出土している。近年、発掘調査が行われたものとしては成岡 A 地点遺跡¹³⁾、成岡 B 地点遺跡¹⁴⁾、塔之原遺跡、段之原山遺跡¹⁵⁾がある。成岡 A 地点遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭に属する住居跡 3 軒等からなる集落跡と古墳時代前期前半期の古墳群が、成岡 B 地点遺跡では弥生時代中期後半から古墳時代初頭に属する土壙墓 13 基・土器棺墓 3 基・土器蓋土壙墓 1 基等が、塔之原遺跡では弥生時代終末から古墳時代初頭に属する集落跡と土壙墓群が、段之原山遺跡では弥生時代後期から古墳時代初頭に属する竪穴住居跡 4 軒、テラス状遺構 3 か所、土坑 6 基からなる集落跡と土壙墓 3 基が確認された。

さて、本遺跡では弥生時代の集落跡を確認したが、瀬野川流域では弥生時代の集落跡の発掘調査例が少なく、その様相について十分に検討を行うのは困難である。そこで、本遺跡とは比較的大きな河川を望む高所に立地する点で共通性が見られる、広島市内の他地域における当該期の集落跡の状況を述べる。太田川とその支流の安佐南区の安川、市の南西部に当たる佐伯区の八幡川とその支流の石内川の流域等における発掘調査により、これらの地域では弥生時代後期に、丘陵上に営まれた集落が急増することが知られている。

さて、広島市内の弥生時代後期を中心とした時期の集落形態については、発掘調査の成果によって、

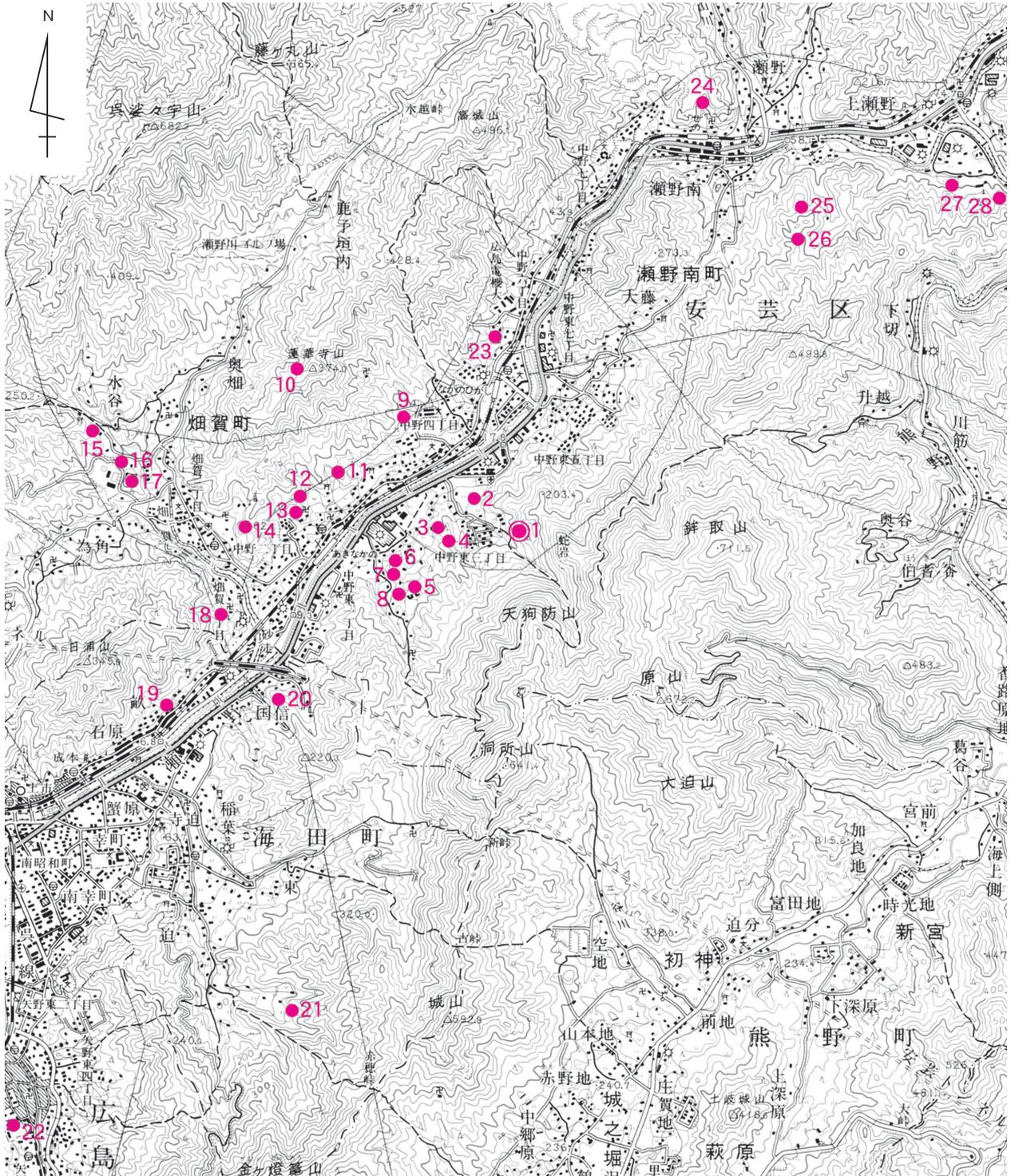
① 10 数軒以上の住居からなり、弥生時代中期末葉もしくは後期の早い時期から古墳時代初頭まで、長期間存続するもの。

② 1 ～数軒程度の住居からなり、短期間のみ存続するもの。

に大別できる¹⁶⁾。

ところで、本遺跡では床の最大径が約 10.4 m の竪穴住居跡を確認したが、これは市内でも最大規模である。市内では、城前遺跡¹⁷⁾で確認された 11.5 × 8.5 m の竪穴住居跡を例外として、大型住居の規模としては径 8 ～ 9 m が最大級である。また、本遺跡からは鉄片も含めると約 60 点という多数の鉄器が出土しており、このうち約 50 点が第 7 号住居跡から出土した。これは、一か所の住居跡からの出土数としては県内でも最多である。市内の弥生時代の集落跡からの鉄器出土数は、通常は 1 遺跡につき数点まであり、比較的多数の鉄器が出土した例としては大町七九谷 A 地点遺跡¹⁸⁾の 23 点、大町七九谷 B 地点遺跡¹⁹⁾の 27 点、毘沙門台東 B・C 地点遺跡²⁰⁾の 17 点、浄安寺遺跡²¹⁾の 24 点がある。

さて、瀬野川流域では続く古墳時代前期前半期に属する古墳として、成岡 A 地点遺跡における成岡古墳群並びに上安井古墳²²⁾が確認されている。成岡古墳群は市内最古級の古墳群で、第 3 号古墳からは朝鮮半島で見られるタイプの鉄鏃が出土する等、他地域との交流を伺わせる。また、上安井古墳は主体部の竪穴式石室の構造や遺物の内容等から、畿内の要素が強いとされる円墳である。その他、瀬野川流域では箱形石棺、横穴式石室を主体部とする古墳がいくつか分布している²³⁾。



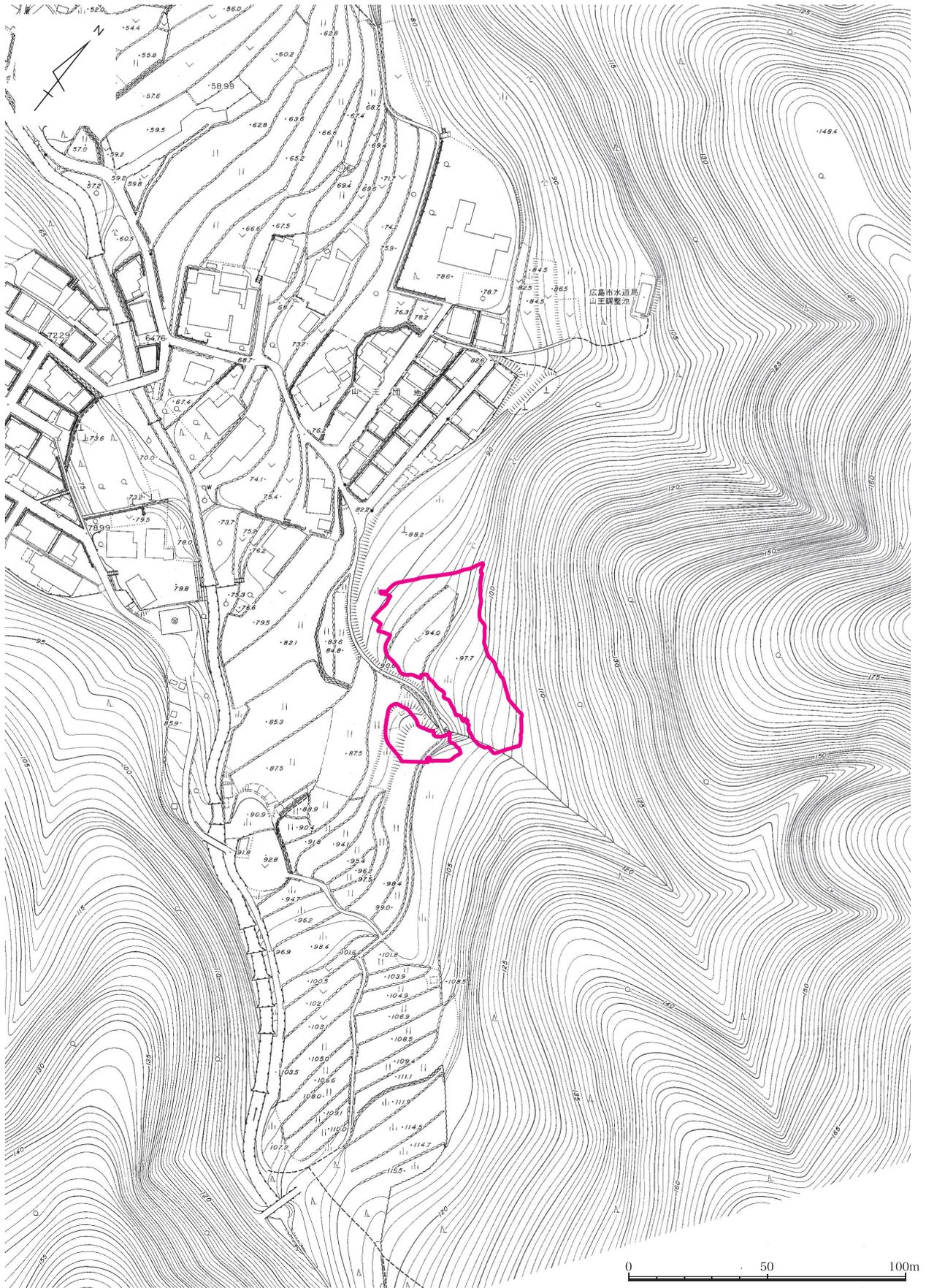
1. 三谷遺跡 2. 備中遺跡 3. 山王貝塚 4. 花見山遺跡 5. 成岡貝塚 6. 成岡A地点遺跡
7. 成岡第4号古墳 8. 成岡B地点遺跡 9. 中野遺跡 10. 蓮華寺山頂遺跡 11. 川原地貝塚
12. 大師堂裏山古墳群 13. 大師堂裏古墳 14. 本郷遺跡 15. 水谷貝塚 16. 水谷遺跡
17. 中須賀神社境内遺跡・中須賀神社境内古墳 18. こもり塚古墳群 19. 畝観音免古墳群
20. 上安井古墳 21. 畑谷貝塚 22. 矢野小学校校庭遺跡 23. 井原遺跡 24. 桑原東遺跡
25. 坂山遺跡 26. 一井木貝塚 27. 塔之原遺跡 28. 段之原山遺跡

第1図 三谷遺跡周辺主要遺跡分布図 (S=1:50,000)

太田川流域等に比べ、瀬野川流域の弥生時代の集落跡は発掘調査例が少なく、その実態が良く分かっていなかった。瀬野川流域で初めての弥生時代の大規模な集落跡の発掘調査である本調査の成果は、広島市域のみならず、東広島市域をも含めた地域における弥生時代の集落の様相を解明する一助となる、新たな資料を提供したといえる。

注

- 1) 広島県安芸郡海田町『海田町史』通史編 1986年
- 2) 財団法人広島市歴史科学教育事業団編『古路・古道調査報告』広島市教育委員会 1992年
- 3) 広島市役所『瀬野川町史』 1980年
- 4) 平成15年度に財団法人広島県教育事業団によって発掘調査された。
- 5) 広島県安芸郡海田町『海田町史』資料編 1981年
- 6) 5に同じ。
- 7) 広島県『広島県史』考古編 1979年
- 8) 3に同じ。
- 9) 3に同じ。
- 10) 3に同じ。
- 11) 3に同じ。
- 12) 3に同じ。
- 13) 財団法人広島市文化財団『成岡A地点遺跡』 2001年
- 14) 財団法人広島市文化財団『成岡B地点遺跡』 2001年
- 15) 平成16年度に財団法人広島市文化財団によって発掘調査された。
- 16) 財団法人広島市文化財団『鯛之迫遺跡』 2001年
- 17) 広島市役所『沼田町史』 1980年
- 18) 財団法人広島市文化財団「大町七九谷A地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』 1999年
- 19) 財団法人広島市文化財団「大町七九谷B地点遺跡」『大町七九谷遺跡群発掘調査報告』 1999年
- 20) 広島市教育委員会『毘沙門台東遺跡発掘調査報告』 1990年
- 21) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「浄安寺遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅲ)』 1986年
- 22) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』 2001年
- 23) 3・5に同じ。箱形石棺が主体部と考えられる中須賀神社境内古墳(5世紀中葉～後半)・大師堂裏山古墳群(5世紀後半頃)、横穴式石室を主体部とする大師堂裏古墳(7世紀前半頃)・こもり塚古墳群(7世紀前半頃)・畝観音免古墳群(7世紀前半～中葉)等がある。



第2図 三谷遺跡周辺地形図 (S=1/2000)

Ⅲ 遺構と遺物

1. 調査の概要

本遺跡は、鉾取山の山頂部（標高 711.5 m）の西南西約 0.5Km に位置する峰（標高 676 m）から西北西へ派生する尾根筋の中腹に位置する。調査範囲が水路の形成する谷状地形を挟んでまたがるため、便宜上、北側調査区と南側調査区に分けて調査を行った。北側調査区は東から西方向へ緩やかに傾斜し、最高所の東端で標高 102.63 m、最低所の西端で標高 87.63 m を測る。南側調査区も東から西方向へ緩やかに傾斜し、最高所の東端で標高 99 m、最低所の西端で標高 92 m を測る。

本遺跡は、調査前に北側調査区が畑、南側調査区が水田（休耕田）として使用されていたこと、さらに二つの調査区の間を里道が通っており削平を受けていること、里道沿いを流れる水路による浸食を受けていることから、かなりの地形改変を受けていると想定された。

広島県教育委員会の試掘調査と、調査開始時に調査区全域に設定した試掘溝の調査による土層観察から、竪穴住居跡と考えられる遺構や弥生土器片を確認し、本遺跡を数次にわたる土石流によって形成された地盤の上に成立した弥生時代の集落として調査を開始した。

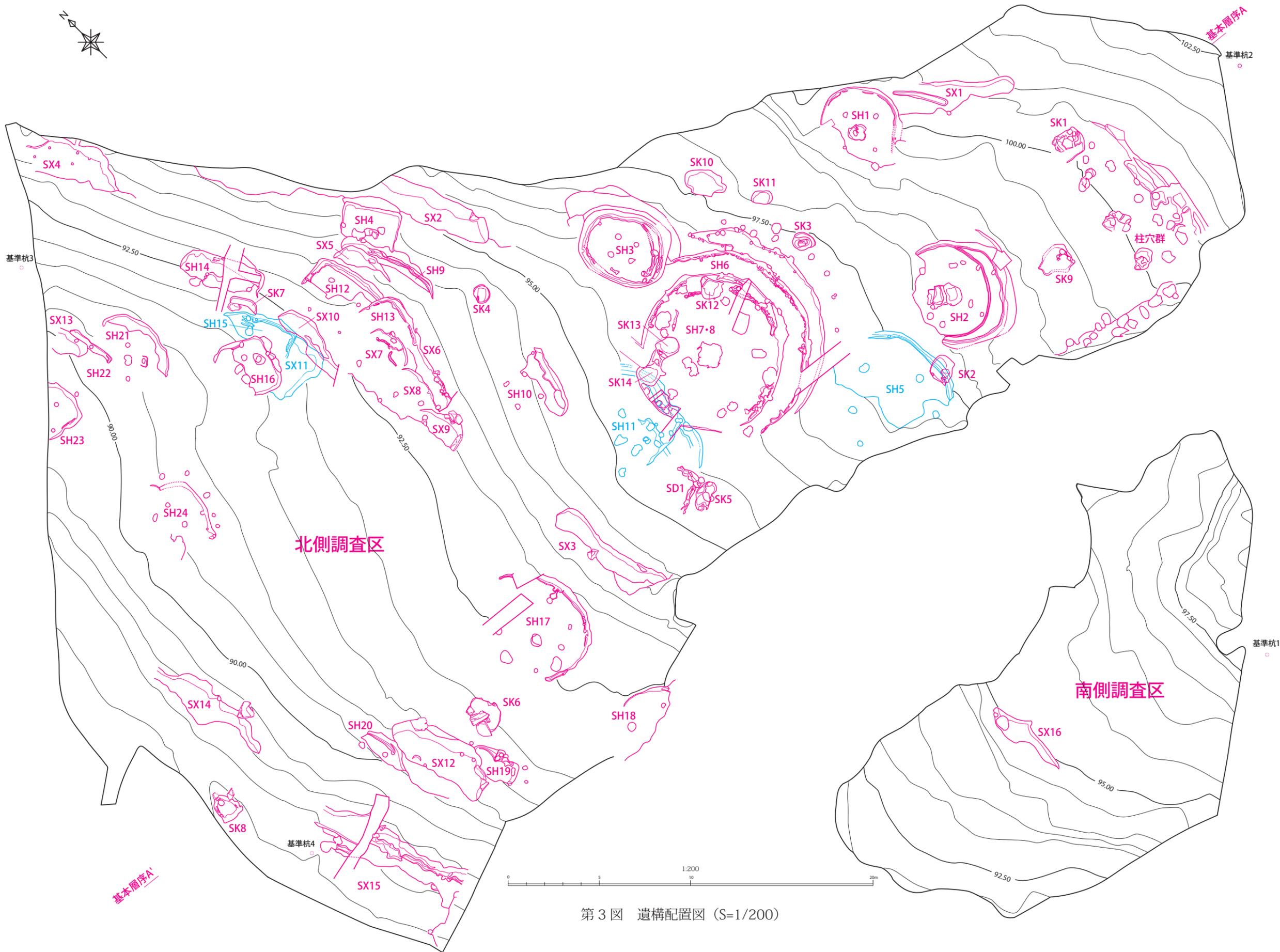
調査の結果、北側調査区のほぼ全域にわたり、竪穴住居跡 24 軒（SH1 ～ SH24）、テラス状遺構 15 か所（SX1 ～ SX15）、柱穴群 1 か所、溝状遺構（SD1）、土坑 14 基（SK1 ～ SK14）を、南側調査区でテラス状遺構 1 か所（SX16）をそれぞれ確認した。遺物は弥生土器・鉄器・石器等が出土した。

2. 基本層序（第 4 図）

本遺跡の所在地は、山王川によって北西方向に開かれた谷の東側斜面上である。発掘調査前は段々畑・棚田となっており、このため表土面が階段状となっている。本遺跡では調査区全域に試掘溝 27 本を設け、土層観察を行った。その中で、本遺跡の堆積状況を最も良く表していると考えられる、東側最高所から西側最低所にかけての全長約 73.3 m にわたる、A - A' の土層を基本層序として述べる。この地点では、繰り返し起きた土石流を含む厚い堆積層が形成されており、その中の 50・56・61・62・63・67 層上に、弥生時代に属する遺構が形成されていることを確認した。このうち 62・63・67 層は、大量の礫・岩を含む土石流層である。遺構面の上方には、現状で最大 2 m の厚さの堆積層が形成されており、その中にも土石流層が含まれる。これらの堆積層は、本遺跡の東側背後の尾根から流出したものと見られ、一帯の地盤をなす花崗岩が風化したものからなり、土色からは黄橙色系と黄褐色・黒褐色系のものに大別される。

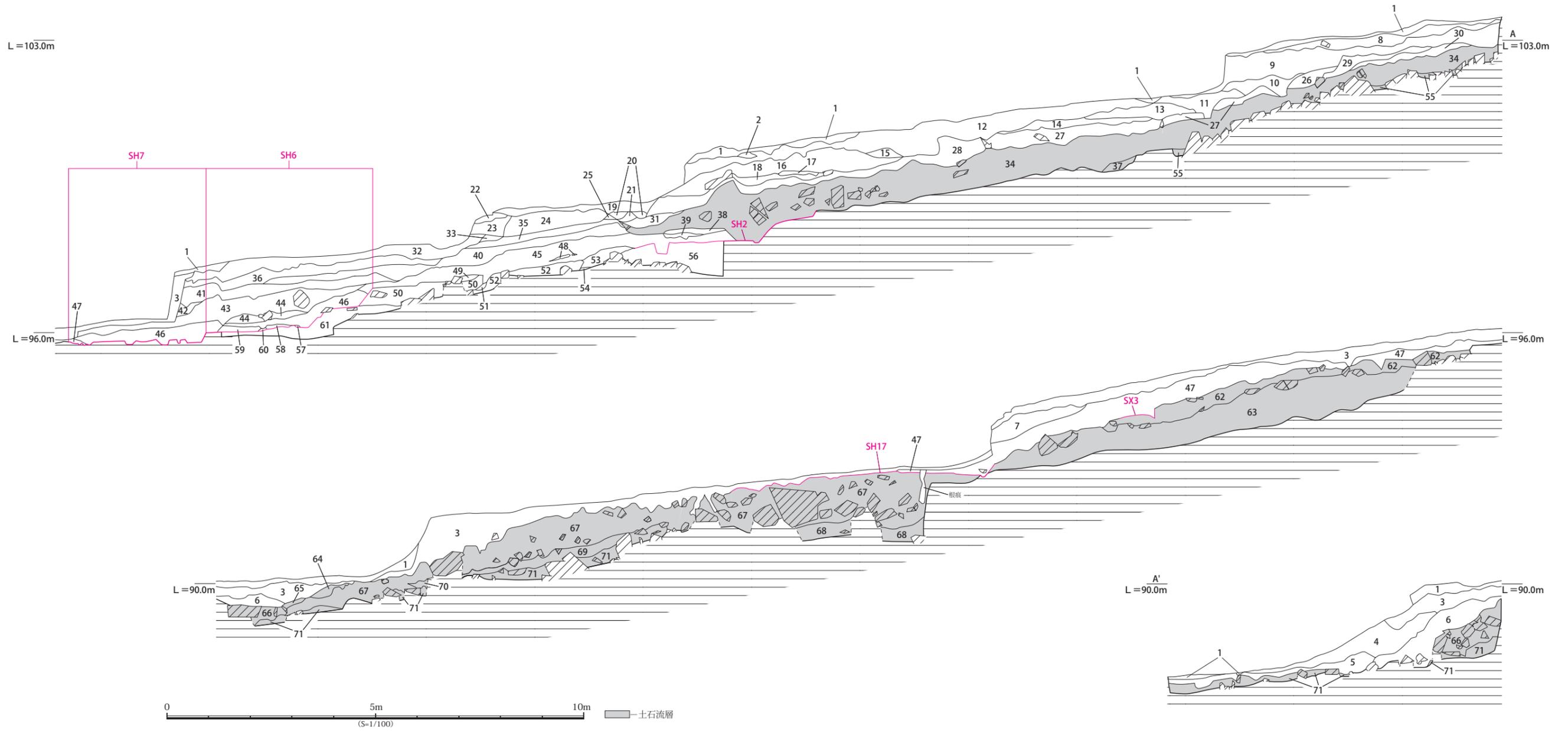
この他、SX14 の北東側の遺構面直上埋土から弥生時代中期の土器が、SH6 の北東側の遺構面構成土（遺構面の下約 60cm）から縄文土器が出土したが、遺構は確認できなかった。

なお、本調査の最終段階で、さらに下層の遺構の確認のため、遺構面から 3.5 m の深さまで試掘溝を掘り下げた結果、下層には遺構面が存在しないことを確認した。また、下層は土石流層がさら



第3図 遺構配置図 (S=1/200)

L = 103.0m



土層説明

- 1 表土層
- 2 暗褐色(10YR3/3)砂質土 1と2の混合層
- 3 耕作土層
- 4 黒褐色(10YR2/2)砂質土 石垣の裏込め土と考えられる
- 5 黒褐色(10YR2/3)砂質土
- 6 暗褐色(10YR3/3)砂質土
- 7 黒褐色(10YR3/2)土 礫多く含む 石垣の裏込め土と考えられる
- 8 黄褐色(10YR7/8)砂質土 9より濃く明るい
- 9 黄褐色(10YR7/8)砂質土 均質な土
- 10 10~25cmの角礫密に詰まる 土は11と同じ
- 11 黄褐色(10YR7/8より明るい色)砂質土
- 12 黄褐色(10YR7/8)砂質土 ~7mmの角礫5%
- 13 明黄褐色(10YR6/6のくすんだ色)砂質土 ~7mmの角礫5%
- 14 にぶい黄褐色(10YR4/3の暗くくすんだ色)砂質土 ~7mmの角礫5%
- 15 にぶい黄褐色(10YR5/4のやや暗い色)砂質土 12混じる
- 16 褐色(10YR4/4の暗い色)砂質土
- 17 黄褐色(7.5YR5/8の明るい色)ブロック70%に18が30%混じる
- 18 黒褐色(10YR3/2)砂質土 16と同層か?

- 19 褐色(10YR4/4)砂質土 12混じる
- 20 黄褐色(10YR7/8のやや明るい色)砂質土 12と同層か?
- 21 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 20混じる
- 22 黄褐色(10YR7/8)砂質土 根による腐葉土化が著しい
- 23 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 24よりややくすむ
- 24 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 28より淡い
- 25 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 20混じる
- 26 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 29より明るい 27と同層か?
- 27 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 西半部にこぶし大程の礫含む
- 28 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 27よりやや暗い 同層と考えられる
- 29 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 東半部に炭多く混じる
- 30 明黄褐色(10YR6/8のくすんだ色)砂質土
- 31 明黄褐色(10YR6/8よりやや赤い色)砂質土 1~7mmの角礫3%
- 32 黄褐色(10YR7/8より濃い色)砂質土
- 33 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 23と35の混入層
- 34 黒褐色(10YR3/2)砂質土 10~50cmの角礫・石所々にあり 遺物多く含む 土石流層
- 35 黒褐色(10YR3/2)砂質土 34と同層か?
- 36 黒褐色(10YR3/2)砂質土 35よりやや黒が強い 同層と考えられる

- 37 暗褐色(10YR3/3)砂質土 34と55の混入層と考えられる
- 38 黄褐色(10YR8/6)砂 水流の底部か?
- 39 にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト
- 40 黄褐色(10YR5/8)砂質土 45若干混じる
- 41 明黄褐色(10YR6/8)砂質土 40と同層か?
- 42 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 41と43の混入層 41より濃く43より淡い
- 43 にぶい黄褐色(10YR4/3のくすんだ色)砂質土
- 44 褐色(7.5YR4/4)土
- 45 黒褐色(10YR3/2よりやや暗い色)砂質土 水分多くきめ細かい
- 46 黒褐色(10YR3/1)砂質土 東半部に土器片と微細な炭含む 45と同層か?
- 47 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 包含層 46と同層と考えられる
- 48 褐色(10YR4/6)砂
- 49 褐色(10YR4/6)砂質土
- 50 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
- 51 褐色(7.5YR4/4)砂質土 炭若干混じる
- 52 黄褐色(10YR Y R 5/6)砂質土 20~50cmの角礫・石多く含む 56と同層か?
- 53 暗褐色(10YR3/3)砂質土 炭若干混じる
- 54 黄褐色(10YR5/8)砂土

- 55 明褐色(7.5YR5/8より明るい色)土 粘性大
- 56 褐色(8YR6/8)土 水分多く粘るが砂も多い 55と同層か?
- 57 明褐色(7.5YR5/6)砂質土
- 58 褐色(10YR4/6)土ににぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土混じる
- 59 にぶい黄褐色(10YR4/3)土に褐色(7.5YR4/4)土若干混じる
- 60 褐色(10YR4/4)砂質土
- 61 明黄褐色(9YR6/8) 風化した花崗岩
- 62 褐色(8YR6/8)土 7~8mmの角礫5% 30~70cmの石所々にあり 固くしまる 土石流層
- 63 褐色(7.5YR4/6)土 62の色が濃くなった層
- 64 褐色(7.5YR4/3)砂質土 7~10cmの角礫10% 土石流層
- 65 褐色(7.5YR4/4)砂質土 ~5mmの角礫1% 土石流層
- 66 暗褐色(7.3YR3/3)砂質土 ~70cmの角礫・石50% 土石流層
- 67 褐色(7.5YR4/6)土 ~1mの角礫・石50% 土石流層 66層と同層
- 68 褐色(7.5YR4/4)砂質土 ~5mmの角礫30% 10~30cmの角礫30% 土石流層
- 69 褐色(7.5YR4/6)シルト 土石流層
- 70 褐色(7.5YR4/6)土 69から続く層と考えられる
- 71 褐色(7.5YR4/4)砂質土 ~5mmの角礫50% 10~30cmの角礫所々にあり 土石流層

第4図 基本層序 (S=1/100)

に深くまで続いていた。花崗岩が風化したいわゆる地山は、調査範囲の東端において急傾斜で堆積層の下に続いており、その西側では確認できなかった。

3. 遺構

○SH1（第5図）

北側調査区の北東部、標高 100 m 付近に位置する竪穴住居跡である。本住居跡は掘り方内部から炭化材と焼土が出土し、焼失住居と考えられる。東壁と西壁の南側 1/2 及び南壁は流失しており、床面の規模は残存状態の良い東西で 408cm、平面形状は残存部から東西約 4 m、南北約 4.8 m の長円形と推定できる。床面最高所は標高 99.56 m、残存する壁高は最大 63cm である。壁溝は北壁と東壁の一部に残存しており、幅 5～10cm、残存する深さ約 3cm である。

支柱穴は壁面との位置関係から P1～P4 の 4 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 18 cm、短径 9cm の長円形で、底面標高 99.48 m である。P2 は底面形状が長径 10cm、短径 8cm の長円形で、底面標高 99.13 m である。P3 は底面形状が一辺約 11cm の方形で、底面標高約 99.28 m である。P4 は底面形状が径 5cm の円形で、底面標高 99.16 m である。床面最高所からの深さは P1 が 8cm、P2・P4 が約 40cm、P3 が約 28cm、柱間距離は P1－P2 間・P3－P4 間・P1－P4 間で約 170cm、P2－P3 間で約 180cm である。

床面の P1～P4 に囲まれた位置には約 90×100cm、深さ約 10cm の掘り込みを確認した。この掘り込みはその形状や床面での位置、また土層観察で埋土に炭を多く含んでいることから炉跡であると考えられる。

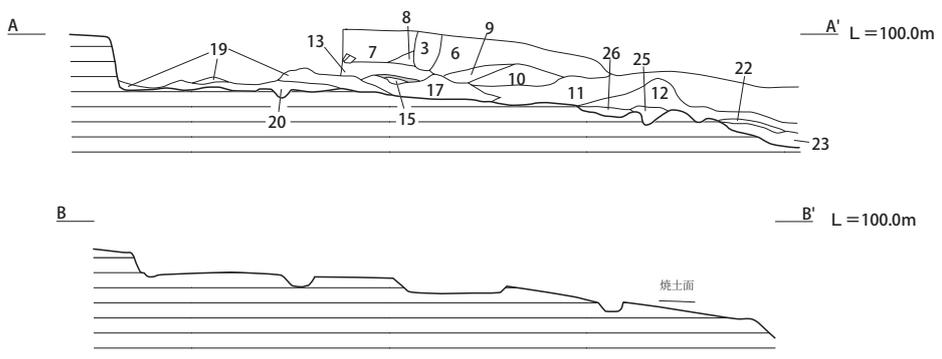
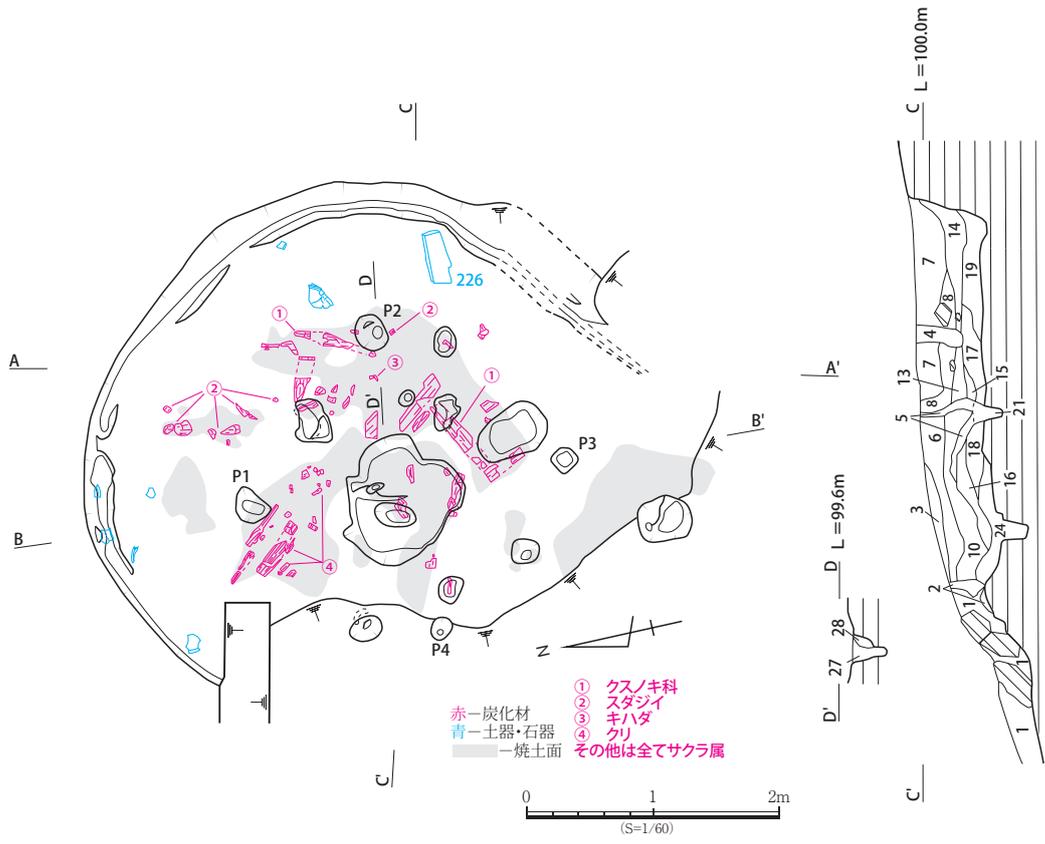
さて、本住居跡からは炭化材が出土した。これらの炭化材は床面から 20～30cm の高さに位置しており、その位置に規則性はあまり見られない。科学分析を行った結果、サクラ属を中心に、クスノキ科・クリ・スダジイ・キハダが認められた。本住居跡は、後述するようにほぼ完全に復元できる弥生土器、台石が出土していることから、失火が原因で焼失したと考えられる。

本住居跡の床面直上からは弥生土器（1～5）、台石（226）が、また、埋土中からは弥生土器（6～10）が出土している。床面出土の土器の形態から、本住居跡は若島一則氏によるⅡ－2－①期¹⁾に属すると考えられる。

○SH2（第6図）

SH1 の南側約 8 m、北側調査区の南東部、標高 98 m 付近に位置する竪穴住居跡で、西壁側は流失している。本住居跡は壁溝と炉跡及び土層の状況から、1 回の拡張が行われている。以下、拡張前を SH2a、拡張後を SH2b と呼称し、述べていくこととする。

SH2a の壁は西側が流失し、東側と南側は拡張されている。北側は SH2b と壁溝を共用する部分の壁のみが残存している。東壁と南壁は壁溝に沿って掘り込まれていたと想定され、平面形状を推定すると直径約 5 m のやや歪な円形となる。床面最高所は標高 98.22 m で、残存する壁高は最大

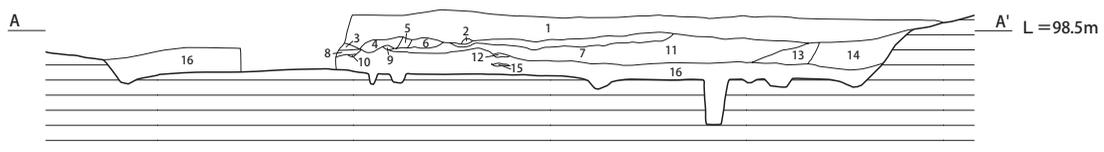


- 土層説明
- | | | |
|-----------------------------|----------------------------------|-----------------------------|
| 1 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 | 10 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 炭片わずかに混じる | 20 灰褐色(10YR4/1)砂 |
| 2 褐灰色(10YR4/1)砂 | 11 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂 | 21 黄褐色(10YR5/8)砂質土 |
| 3 灰黄褐色(10YR4/2)砂 | 12 赤褐色(2.5YR5/3)砂 焼土層 | 22 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 |
| 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂 | 13 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂 | 23 黒色(10YR2/1)砂質土 炭片多量に混じる |
| 5 褐灰色(10YR4/1)砂 根跡 下端は不明瞭 | 14 黒褐色(10YR3/1)砂質土 炭化材・炭片多量に混じる | 24 黄褐色(10YR5/6)砂質土 |
| 6 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂 | 15 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 炭片わずかに混じる | 25 明黄褐色(7.5YR5/6)砂質土 |
| 7 にぶい黄褐色(10YR7/3)砂 | 16 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 炭片わずかに混じる | 26 灰黄褐色(10YR5/3)砂質土 |
| 8 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂 炭片少量混じる | 17 褐色(10YR4/4)砂 | 27 灰黄褐色(10YR4/2)土 炭片多量に含む |
| 9 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 | 18 にぶい黄褐色(10YR6/3)砂 | 28 にぶい黄褐色(10YR5/4)土 |
| | 19 灰白色(10YR8/2)砂 | |

第5図 SH1 実測図 (S=1/60)

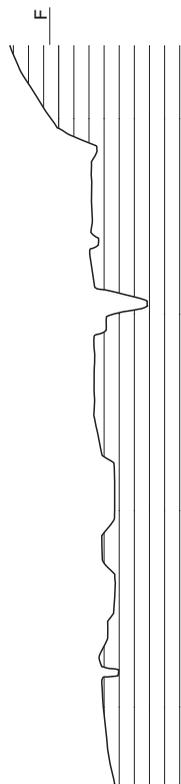
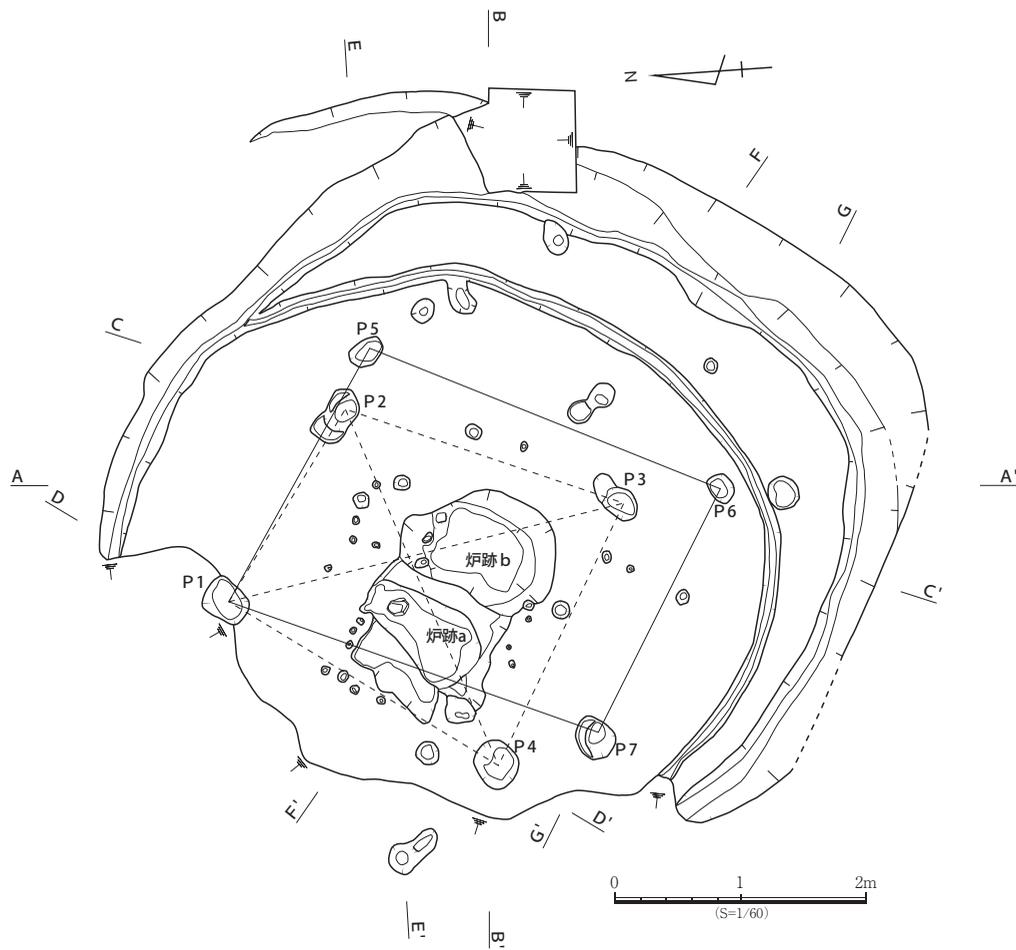
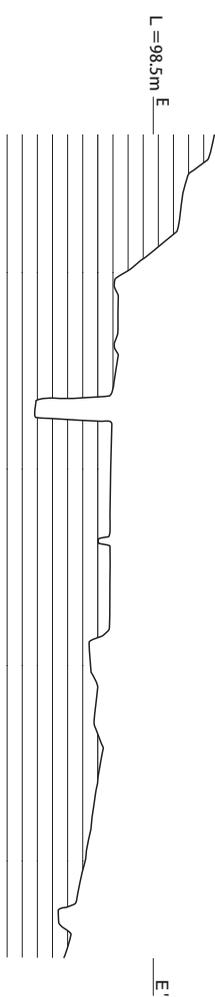
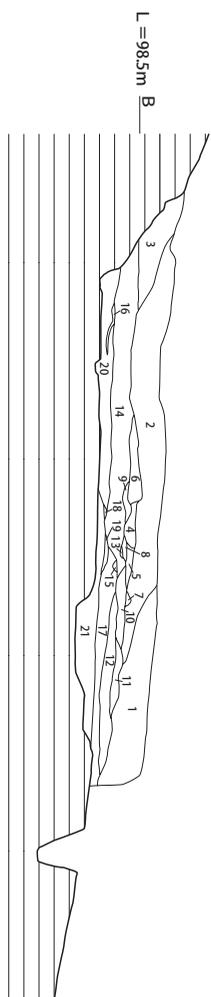
35cmである。壁溝は流失した西壁側以外は遺存しており、幅5～8cm、残存する深さ4～6cmである。

主柱穴は位置とその規模からP1～P4の4本が考えられる。P1は底面形状が長径32cm、短径19cmの長円形で、底面標高97.88mである。P2は底面形状が長径20cm、短径14cmの長円形で、底面標高97.62mである。P3は底面形状が長径23cm、短径14cmの長円形で、底面標高97.79mである。P4は底面形状が長径24cm、短径17cmの歪な長円形で、底面標高97.69mである。



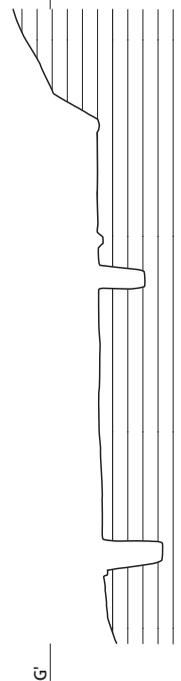
土層説明

- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1 暗褐色(10YR3/3)砂質土 炭片若干混じる | 9 明褐色(10YR3/3)砂質土 |
| 2 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 | 10 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 |
| 3 2に同じ | 11 褐色(7.5YR4/3)砂質土 炭片若干混じる |
| 4 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 | 12 黒褐色(10YR3/2)砂質土 |
| 5 暗褐色(10YR3/4)砂質土 | 13 褐色(10YR4/4)砂質土 |
| 6 4に同じ | 14 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 |
| 7 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土 炭片若干混じる | 15 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 |
| 8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂 | 16 暗褐色(10YR3/2)砂質土 炭片混じる |



F' L = 98.5m

G L = 98.5m



G

- B' 土層説明
- 1 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 炭片若干混じる
 - 2 暗褐色(10YR3/3)砂質土 炭片若干混じる
 - 3 褐色(7.5YR4/3)砂質土
 - 4 褐色(7.5YR4/4)砂
 - 5 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
 - 6 褐色(7.5YR4/3)砂質土
 - 7 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂
 - 8 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
 - 9 8に同じ
 - 10 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 炭片若干混じる
 - 11 暗褐色(10YR3/4)砂質土
 - 12 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
 - 13 4に同じ
 - 14 褐色(7.5YR4/3)砂質土 炭片若干混じる
 - 15 黒褐色(10YR3/2)砂質土
 - 16 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
 - 17 暗褐色(10YR3/3)砂質土 炭片混じる
 - 18 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土
 - 19 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土
 - 20 褐色(7.5YR4/3)砂質土 炭片若干混じる
 - 21 暗褐色(10YR3/3)砂質土 炭片多量混じる

B'

L = 98.5m

E'

L = 98.5m

第6図 SH2 実測図 (S=1/60)

柱間距離は P1 - P2 間で約 180cm, P2 - P3 間と P3 - P4 間で約 230cm, P1 - P4 間で約 250cm となる。ここで, P1 - P2 間が他の柱間距離と比較して短く, 4 本柱構造を想定しにくい面もあるため, P1 - P3 か P2 - P4 の組み合わせによる 2 本柱構造の可能性も想定できる。その場合の柱間距離は P1 - P3 間で約 320cm, P2 - P4 間で約 300cm となる。

SH2b は SH2a の東側と南側を最大 75cm 拡張している。西側は流失しているが, SH2a の北側壁溝を共用していることから, 西側での SH2b の拡張はなされていないと想定され, 残存部から推定すると平面形状は約 4.5 × 5.5 m の隅丸方形となる。床面最高所は標高 98.23 m である。

なお, 本住居跡北東隅の掘り方外側には, 東壁の掘り方を約 150cm 延長する形で平坦面を確認した。東壁は削平されているため, その平坦面に伴う壁が元の形状をよく残すものと考えられ, その壁の壁高 50cm が本住居跡の平均的な高さであると想定される。壁溝は流失した西壁側以外は遺存し, 幅 5 ~ 13cm, 残存する深さ 2 ~ 6cm である。

主柱穴は位置とその規模から P1 及び P5 ~ P7 の 4 本で, P1 のみを SH2a と共用し, それを基点に P5 ~ P7 を掘り込んだと想定される。P5 は底面形状が長径 22cm, 短径 13cm の長円形で, 底面標高 97.58 m である。P6 は底面形状が長径 16cm, 短径 10cm の長円形で, 底面標高 97.75 m である。P7 は底面形状が長径 17cm, 短径 12cm の長円形で, 底面標高 97.61 m である。柱間距離は P1 - P5 間で約 230cm, P5 - P6 間で約 300cm, P6 - P7 間で約 220cm, P1 - P7 間で約 310cm となる。

床面の P1 ~ P4 に囲まれた位置には約 110 × 190cm の範囲で掘り込みを確認した。この掘り込みはその形状や床面での位置, また土層観察で埋土に炭を多く含んでいることから炉跡であると考えられる。また, 炉跡は詳細に見ると北西側と南東側の 2 つの掘り込みで形成される。以下, 北西側の掘り込みを炉跡 a, 南西側の掘り込みを炉跡 b と呼称し, 述べていくこととする。炉跡 a の掘り方は, 約 100 × 80cm の方形の平面形状である。その掘り方の北西側に約 70 × 10 ~ 30cm の不整形な段を持ち, 残存する深さは約 6cm, 底面標高は約 98.04 m である。その段から約 6cm 掘り込んで形成される底面は約 85 × 15 ~ 30cm の不整形な平面形状で, 床面からの深さは最大 16cm, 底面標高は約 97.98 m である。この炉跡 a と炉跡 b の間には約 90 × 15cm の帯状の段が形成されており, 深さ約 7cm, 底面標高約 98.07 m である。この段が炉跡 a, 炉跡 b のどちらに伴うものかは明確にし得なかった。炉跡 b は掘り方の平面形状が長径 120cm, 短径 80cm の歪な長円形で, 底面の平面形状は約 60 × 45cm の長方形である。床面からの深さは最大 16cm で, 底面標高は約 97.98 m である。床面における位置から炉跡 a が SH2a に伴う炉, 炉跡 b が SH2b に伴う炉であると考えられる。また炉跡の周囲には底面径 2 ~ 10cm, 深さ 8 ~ 18cm 程度の小ピット群を確認した。炉に伴う何らかの施設と考えられるが, 用途については不明である。

本住居跡からは弥生土器 (11 ~ 14) が, 埋土からは (15) が出土している。その形態から II - 2 - ②期に属すると考えられる。

○ SH3 (第 7 図)

SH1 の西約 10 m, 北側調査区の標高 96 m 付近に位置する竪穴住居跡である。北東部は急峻な

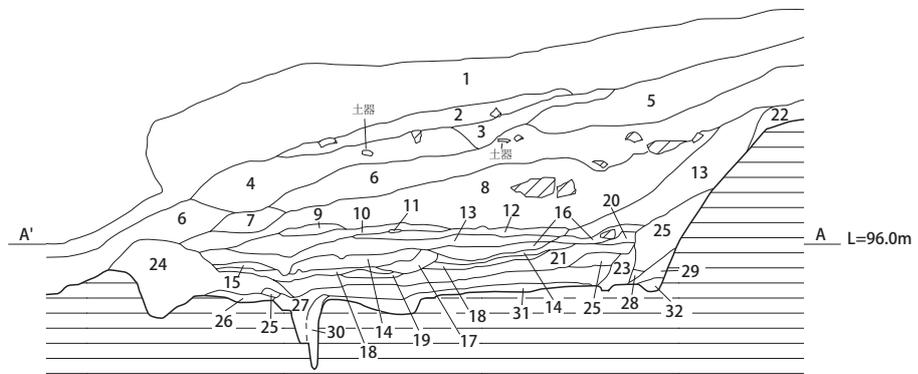
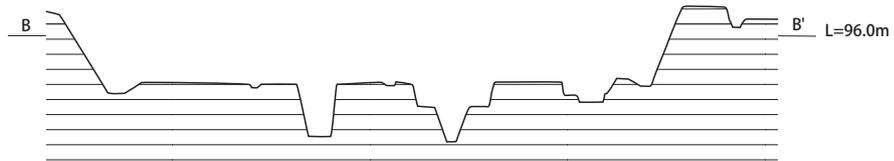
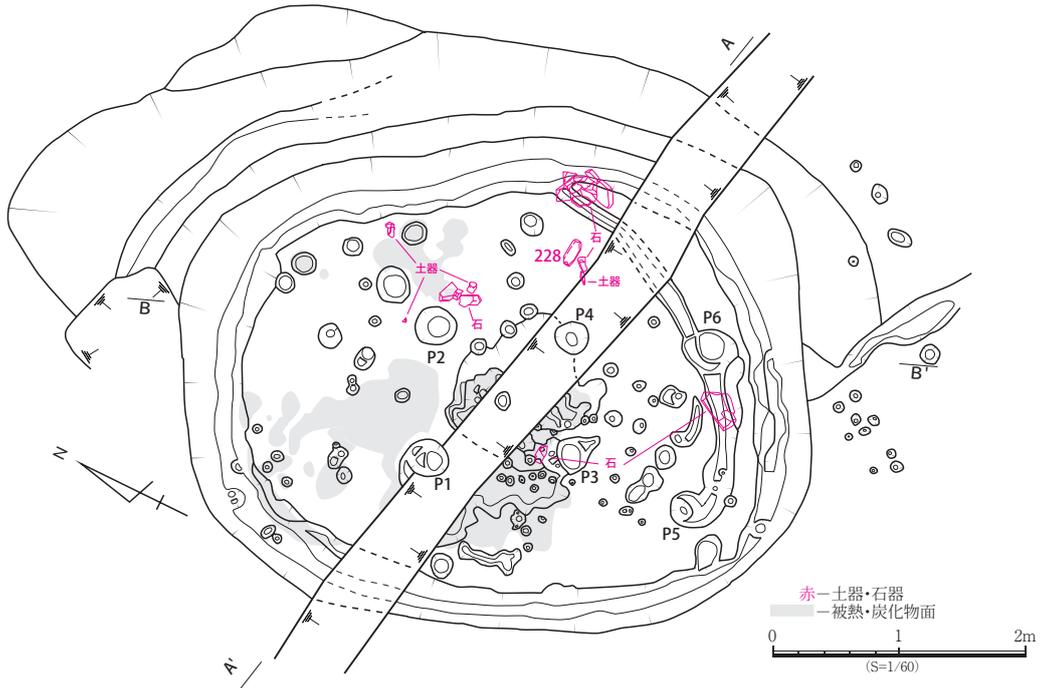
斜面を掘り込み、南側を SH6・7 の北壁と切り合う。東壁は急峻な斜面を掘り込んでおり、床面に至るまでに傾斜が数回変換している。これは、傾斜面に住居を造る際に、崩れを防止するための施設と考えられる。本住居跡は土層観察により、少なくとも 1 回の縮小が行われている。以下、縮小前を SH3a、縮小後を SH3b と呼称し、述べていくこととする。

SH3a は平面形状が長径約 450cm、短径 350cm の長円形である。床面最高所は標高 95.67 m、壁高は斜面上側を掘り込む東壁で約 87cm、斜面下側の西壁で約 30cm である。壁溝は全周で遺存し、幅 2～18cm、深さ 3～9cm である。支柱穴は位置とその規模から、P1～P4 の 4 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 15cm、短径 11cm の長円形で、残存する深さ 55cm、底面標高 95.02 m である。P2 は底面形状が直径 17cm の円形で、残存する深さ 41cm、底面標高約 95.20 m である。P3 は底面形状が長径 20cm、短径 14cm の長円形で、残存する深さ 30cm、底面標高約 95.28 m である。P4 は底面形状が長径 10cm、短径 8cm の長円形で、残存する深さ約 47cm、底面標高約 95.16 m である。柱間距離は P1－P2 間で約 106cm、P2－P4 間と P1－P3 間で約 107cm、P3－P4 間で約 92cm である。また、床面の南端に P5・P6 を確認した。P5 は底面形状が長径 7cm、短径 3cm の長円形で、深さ 13cm、P6 は底面形状が直径約 20cm の円形で、深さ 17cm、底面標高はいずれも約 95.47 m である。柱間距離は P4－P6 間で約 110cm、P3－P5 間で約 100cm となる。P5・P6 共に深さが浅いことから、補助柱穴と考えられる。

SH3b は東側と北側は SH3a と壁・壁溝を共用する。西壁は確認できなかったが、北側壁溝の西端に屈曲部の痕跡が、床面の西端中央付近にわずかに壁溝と考えられる溝の一部が残存している。縮小の規模は、南側を最大 34cm 縮小し、西側は SH3b の壁溝が不明であり、縮小幅は明らかではないが、西壁は SH3a 西壁より約 25cm 縮小していたことが推測できる。東・北壁溝は SH3a と共有し、SH3b 固有で遺存状態のよい南壁溝は幅 3～13cm、残存する深さ約 3cm である。残存部から平面形状を推定すると、長辺約 4.2 m で短辺約 3 m のやや歪な円形となる。支柱穴は位置とその規模から P1・P2 の 2 本と考えられる。なお、P1 には柱痕跡が残っており、使用された柱材の直径は 9cm 以上と考えられる。

床面の P1～P4 に囲まれた位置に、試掘溝のため大半を消失しているが、最大で南北 65cm、東西 57cm の範囲で深さ 5～10cm の不整形な掘り込みを確認した。この掘り込みは床面での位置、また土層観察でも埋土に炭を多く含んでいることから炉跡であると考えられる。炉跡の南側には、底面径 5～15cm、深さ 2～10cm 程度の小ピット群を確認した。炉に伴う何らかの施設と考えられるが、用途については不明である。また、床面には広範囲で被熱面・炭化面が広がる。本住居跡からは後述する石器の他に、床面に接して用途不明の石が出土した。本住居跡の性格は床面に被熱面・炭化面が広がること、加工に用いたと考えられる敲石などの石が出土することから、後述する SH7 同様に鍛冶工房として使用された可能性がある。このため、床面から約 20cm までの埋土をサンプリングし、鍛冶由来成分を検出するため科学分析を行ったが、鉄滓・鍛造剥片等は確認されなかった。以上のことから、本住居跡は鍛冶工房ではないが、通常の住居とは異なる性格を持っていたと考えられる。

本住居跡の床面直上からは弥生土器（16～19）、敲石（228）が、埋土から弥生土器（20）、磨



土層説明

- | | | |
|--|------------------------------|----------------------------|
| 1 褐色(7.5YR4/3)粘質土 | 11 明褐色(7.5YR5/6)砂 | 22 褐色(7.5YR4/6)土 |
| 2 褐色(7.5YR5/6)砂質土 固くしまる | 12 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土 | 23 褐色(7.5YR4/3)土 |
| 3 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土 固くしまる | 13 褐色(7.5YR4/3)粘質土 炭片混じる | 24 褐色(7.5YR4/4)土 炭少量混じる |
| 4 褐色(10YR4/4)砂質土 固くしまる | 14 褐色(7.5YR4/3)粘土 炭片わずかに混じる | 25 にぶい赤褐色(5YR4/4)土 |
| 5 褐色(10YR4/4)砂質土 | 15 明褐色(7.5YR5/6)砂質土 | 26 褐色(7.5YR4/3)土 炭混じる |
| 6 褐色(7.5YR4/3)砂質土 炭片わずかに混じる | 16 褐色(7.5YR4/4)砂質土 炭片少量混じる | 27 褐色(7.5YR4/4)粘質土 炭片少量に含む |
| 7 褐色(7.5YR4/3)砂質土 | 17 暗褐色(7.5YR3/4)粘質土 炭片多量に混じる | 28 褐色(7.5YR4/6)土 |
| 8 褐色(7.5YR4/4)砂質土と褐色(7.5YR4/3)が薄く交互に重なる クロスラミナ 炭片少量混じる | 18 褐色(7.5YR4/4)粘質土 炭片わずかに混じる | 29 明褐色(7.5YR5/6)土 |
| 9 にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土 | 19 褐色(7.5YR4/4)土 炭片少量混じる | 30 褐色(7.5YR4/3)粘質土 |
| 10 褐色(7.5YR4/4)粘質土 | 20 褐色(7.5YR4/3)粘質土 炭片混じる | 31 褐色(7.5YR3/4)粘質土 炭多量に混じる |
| | 21 褐色(7.5YR4/3)粘質土 炭片少量混じる | 32 褐色(7.5YR4/6)土 |

第7図 SH3 実測図 (S=1/60)

石(229)が出土している。弥生土器の形態からⅡ-2-②期に属すると考えられる。

○SH4・SH9・SH12・SX2・SX5・SX10(第8図)

SH4は北側調査区の北西側、標高94.5m付近、SX2の中央部西側に切り合って位置する竪穴住居跡である。東壁と北壁、南壁の一部とそれに伴い南北約300cm、東西約150cm程度の床面が残るが、西側はSH9によって削平されている。床面最高所は標高94.15mである。壁高は最も良好な状態で遺存する東壁で約90cmである。残存部から推定できる平面形状は方形である。また、南壁に沿って南北約70cm、東西約150cm、厚さ10～12cm程度の盛土で構築される高まりを検出した。これは形状・位置から、いわゆるベッド状遺構と想定されるが、盛土の下にP1の掘り方の一部が位置することから、柱を建てた後に盛土を行ったものと考えられる。

規模とその位置から主柱穴となり得るのはP1である。P1は底面形状が長径12cm、短径8cmの長円形で、底面標高93.80mである。P1に対応する柱穴は確認できなかった。

またP1の北西側に、残存部で約40×80cmの掘り込みを確認した。残存する深さは約19cm、底面標高93.91mである。また掘り方の東側約30×25cmの範囲と西側約12×3cmの範囲で炭片を検出しており、その位置や形状からも炉跡であると考えられる。炉跡の南側には、約25×30cmの石を検出した。検出状況から、炉に伴う石材であると考えられる。

ここで、この炉跡の位置を住居床面のほぼ中央と想定し、本住居跡を復元すると、本住居跡は主柱が2本で、東西2.4m、南北3mの長方形の床面を持つ住居と想定される。

SH4からは、弥生土器(21・22)が出土しており、その形態から弥生時代中期末に属すると考えられる。

SH9はSH4の西側に位置する竪穴住居跡である。東壁と北壁、南壁の一部とそれに伴う南北530cm、東西20～30cm程度の床面が残るが、他は流失している。床面最高所は標高93.82mである。残存する壁高は最大で28cmである。また、北端部を除く東壁から南壁に沿って、幅3～15cm、深さ最大8cmの壁溝を確認した。

西側の流失により、本住居に伴うと想定される柱穴は確認できなかったが、残存する壁の形状と壁溝を伴うことから住居跡とした。残存部から推定できる平面形状は南北約5.5mの隅丸方形もしくは長方形である。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SH12はSX5を挟み、SH9の西側約1mに位置する竪穴住居跡である。北壁が180cm、そこで角度を変じて東壁が365cm残存し、それに伴い、南北330cm、東西30～130cmの範囲で床面が遺存するが、西側・南側は流失している。床面最高所は標高93.28mで、残存する壁高は最大で21cmである。また、残存する壁に沿って、幅7～15cm、深さ約10cmの壁溝を確認した。

主柱穴はその位置と規模からP1～P4の4本と考えられる。P1は底面形状が径14cmの円形で、底面標高92.94mである。P2は底面形状が長径12cm、短径9cmの長円形で、底面標高92.99m



- 土層説明
- 1 暗褐色(10YR5/4)砂質土
 - 2 褐色(7.5YR4/3)砂質土 相跡
 - 3 灰褐色(7.5YR4/2)砂質土
 - 4 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土
 - 5 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 6 褐色(7.5YR4/4)砂質土
 - 7 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土
 - 8 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 9 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 相跡
 - 10 褐色(7.5YR4/3)砂質土 Sx10埋土
 - 11 暗褐色(10YR3/3)砂質土 わずかに赤味が混入
 - 12 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 13 褐色(7.5YR4/4)砂質土 Sx7埋土
 - 14 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
 - 15 褐色(7.5YR4/3)砂質土
 - 16 暗褐色(10YR3/4)砂質土
 - 17 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土
 - 18 褐色(7.5YR4/4)砂質土
 - 19 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 SH13埋土
 - 20 土色:褐色(7.5YR3/4)砂質土 SH12瓦葺成土
 - 21 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土 SH9埋土
 - 22 褐色(7.5YR4/6)砂質土 SH9床面成土-Sx5埋土
 - 23 褐色(10YR3/3)砂質土
 - 24 褐色(7.5YR4/3)砂質土

第8図 SH4・SH9・SH12・SX2・SX5・SX10 実測図 (S=1/60)

である。P3は底面形状が長径12cm、短径10cmの長円形で、底面標高92.68mである。P4は底面形状が径8cmの円形で、底面標高92.65mである。柱間距離はP1－P2間で約208cm、P2－P3間で約195cm、P3－P4間で約208cm、P1－P4間で約183cmとなる。P1－P4とP2－P3の約30cmの底面標高の差は、地盤の安定しない堆積層において、低標高側に盛土をして形成した床面では、標高の高い側の柱穴よりも低い側の柱穴をより深く掘り、安定させる必要が生じたためと考えられる。

床面のP1～P4に囲まれた範囲の中央北寄りに約40cm四方の範囲で厚さ約8cmの焼土を確認した。このことから、この位置に炉が存在していたと想定される。

ここで本住居の規模を想定してみたい。東壁の南端がSH13に切られている直前から若干内湾をしていることから東壁はほぼ遺存していると考えられることと、P1～P4の位置から一辺約4mの方形住居が想定できる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していないが、埋土中からは弥生土器(56・57)が出土している。

SX2は北側調査区の北側、標高95.5mの等高線にほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。遺構のほぼ中央で、掘り込みが調査範囲外に延びており、全体を確認し得なかった。西側は急傾斜になっており流失している可能性がある。

本遺構は南端から北方向に約690cmの範囲で掘り込まれ、そこから掘り込みは北側の調査範囲外に延びる。平坦面は奥行約60～150cmの範囲で遺存し、一部は調査範囲外へ続く。掘り込みの高さは最高73cmで、平坦面最高所は標高95.33mである。平坦面は北側に向けて緩やかに傾斜しており、最北端で標高94.73mとなる。本遺構の南端から約270cm北側の壁際から弥生土器(78～81)が出土した。本遺構は、平坦面の長さや形状から通路として使用していた可能性が想定される。ただ、弥生土器が出土したことから何らかの生活の場であった可能性も考えられる。

なお、本遺構からは、先述の弥生土器以外にも(82)が出土し、それらの形態からⅡ－2－③期の時期が下限と考えられる。

SX5はSH9の遺存部北半の西側に隣接するテラス状遺構である。残存部で、北西から南東方向に約80cm、そこで角度を変じ南北方向に約300cm掘り込まれて形成されている。残存する掘り込みの高さは最大で28cmである。平坦面は北側の掘り込みと東側の掘り込みの一部に沿って、奥行20～80cmの範囲で残存する。平坦面最高所は標高93.54mである。遺構の大半は削平されているため、本遺構の性格は想定しにくいだが、北側の掘り込みと東側の掘り込みのラインがほぼ直角に交わるという平面形状から住居跡の可能性も考えられる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SX10はSH12の西側に位置するテラス状遺構である。南側は試掘溝により削平されているが、残存部で、南北方向に約430cm掘り込まれて形成されている。残存する掘り込みの高さは最大で20cmである。平坦面は奥行50～70cmの範囲で残存する。平坦面最高所は標高92.44mである。

また、南端から平坦面中央部にかけては、長さ約 185cm にわたって掘り込まれ、奥行 15 ～ 55cm の範囲で平坦面が一段下がっている。掘り込みの高さは最大 8cm で、平坦面の最高所は標高 92.26 m である。

本遺構の平坦面の北半部からは、約 140 × 120cm の範囲で焼土・炭片を検出し、またその範囲内で 5 ～ 10cm 程度の粘土塊が 2 つ出土した。また、遺構面から弥生土器片 (92 ～ 95) が出土している。本遺構で土器を焼成した可能性も考えられないこともないが、出土した焼土が高い温度で被熱したように見受けられないことから、断定はし得ない。いずれにせよ、本遺構は火を使う何らかの作業に使用されたものと考えられる。

また、SX10 の遺構として検出できた平坦面は奥行 50 ～ 70cm であったが、第 17 図 C - C' 土層 (45 ページ) を観察すると 5 層・12 層上が本遺構の遺構面と想定され、本来は 200cm 程度の奥行があったものと考えられる。

本遺構からは、先述の弥生土器 (92 ～ 95) が出土している。弥生土器の形態から II - 2 - ③ 期あたりの時期に属すると考えられる。

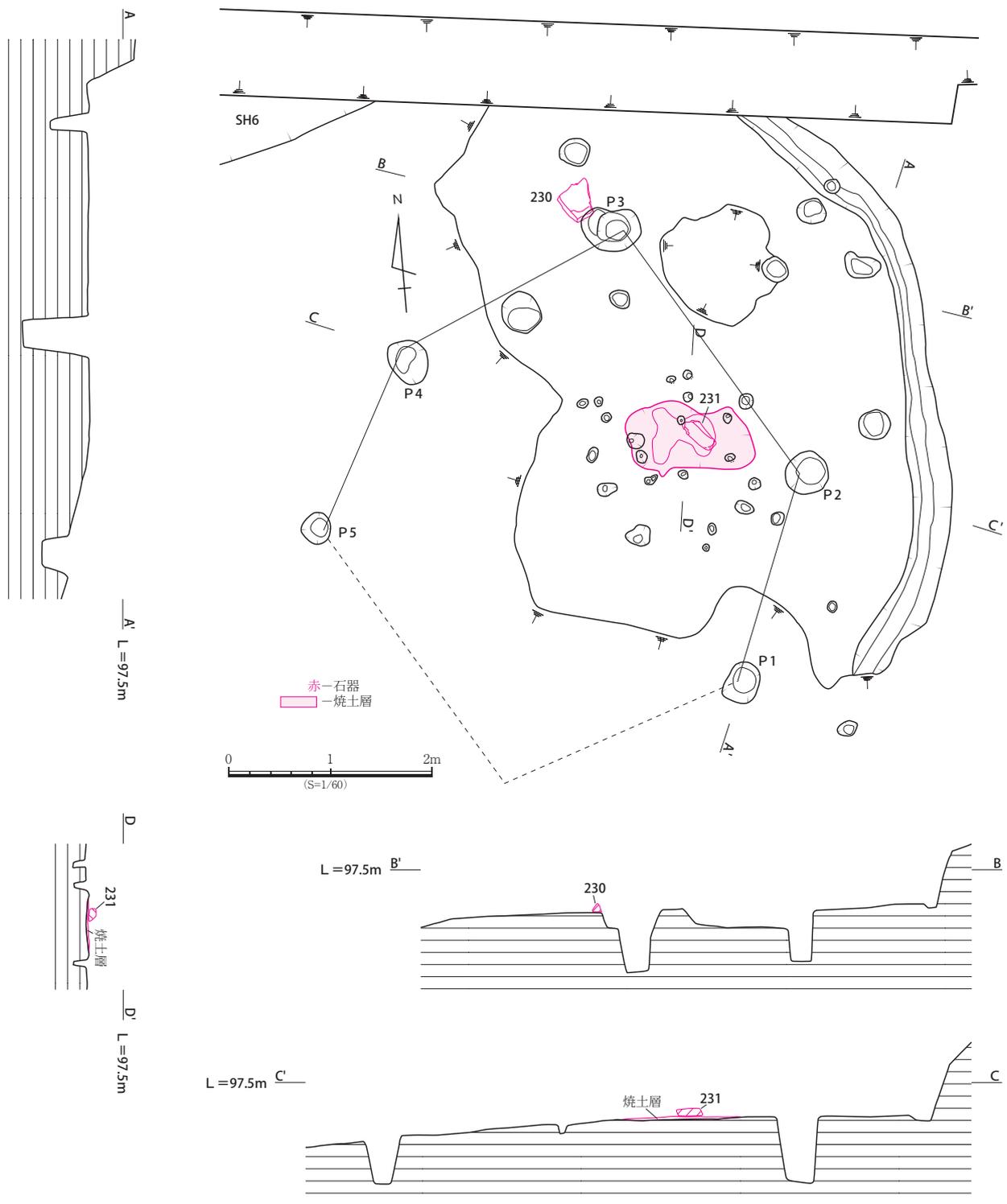
ここで、それぞれの遺構の先後関係について見てみると、A - A'・第 17 図 C - C' 土層 (45 ページ) の観察と遺構の切り合い関係、出土土器の時期から、SH4 → SX5 → SH9 → SH13 → SX10 → SH12・SX2 の順に営まれたことが想定できる。

○ SH5 (第 9 図)

SH2 の西側、標高 97.5 m 付近に位置する竪穴住居跡である。東壁と南北 550cm、東西 380cm 程度の範囲で床面が遺存するが、それ以外は流失している。床面最高所は標高 97.17 m で、遺存する東壁の壁高は、最大で 53cm である。また東壁に沿って、幅 6 ～ 15cm、残存する深さ 4 ～ 5cm の壁溝を確認した。

支柱穴はその規模と位置から、P1 ～ P5 及び P2 - P1 ラインと P4 - P5 ラインから方向を転換したラインの交点の流失部分に存在していたと想定される柱穴の 6 本と考えられる。P1 は底面形状が直径 22cm の円形で、底面標高 96.71 m である。P2 は底面形状が直径 26cm の円形で、底面標高 96.52 m である。P3 は底面形状が長径 22cm、短径 19cm の長円形で、底面標高 96.5 m である。P4 は底面形状が長径 26cm、短径 17cm の長円形で、底面標高 96.49 m である。P5 は底面形状が直径 19cm の円形で、底面標高 96.37 m である。柱間距離は P1 - P2 間で約 220cm、P2 - P3 間で約 300cm、P3 - P4 間で約 250cm、P4 - P5 間で約 200cm となる。

また、P2 から約 50cm 西側に焼土の広がりを確認した。焼土は平面では約 110 × 60cm の範囲に広がり、土層観察では中央付近でわずかに窪む。窪みの深さは最大 3cm、底面標高は約 97.13 m である。この焼土の広がりは、形状、床面での位置から炉跡のものと考えられる。焼土範囲の中央付近では、炉に伴って使用されたと考えられる台石 (231) が出土した。また、焼土範囲の内側も含めて周辺には底面径 2 ～ 8cm、深さ約 7 ～ 15cm 程度の小ピット群を確認した。炉に伴う何らかの施設と考えられるが、用途については不明である。



第9図 SH5 実測図 (S=1/60)

本住居跡の平面形状を遺存する東壁と支柱穴及び炉跡の位置から推定すると、南北方向が長径で7 m程度、東西方向が短径で6 m程度の長円形となる。

本住居跡からは、弥生土器（23～26）、台石（230・231）が、また住居跡埋土からは弥生土器（27～30）、石斧（232）が出土している。弥生土器の形態からⅡ－3期の時期に属すると考えられる。

○SH6・7・8・SK12・13・14（第10～14図）

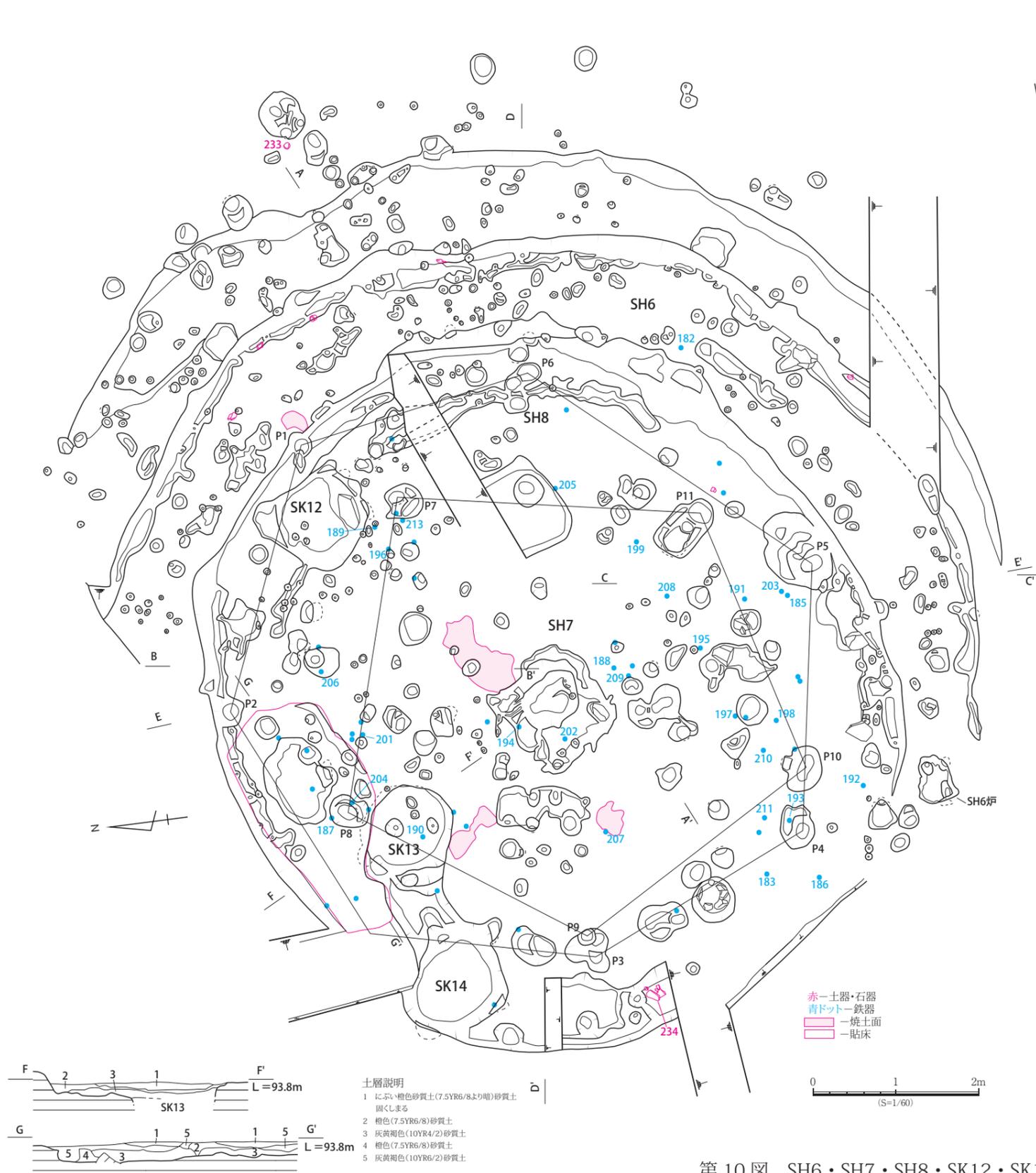
SH6は北側調査区の中央部、SH3及びSH5と重複して位置する竪穴住居跡である。床面は東側壁面に沿う形で幅約1 mの範囲で残存し、土層観察から西半分及び中央部は流失及びSH7に削平されている。床面最高所は標高96.26 mで、壁高は最大で57cmである。壁面に沿って、幅5～10cm、深さ2～4cmの壁溝が残存する。また、掘り方の外側に沿う形で幅80～100cmの平坦面を確認した。明確な掘り方を持たず、壁溝も無いことから、傾斜面に住居を造る際に、壁を造り出すための施設と考えられる。

本住居跡の平面形状を残存する部分から推定すると、最大径10.4 mの八角形と考えられる。前述したように、床面はSH7により大半を失っていること、また、複数の住居が重複し、柱穴と考えられるピットが多数あることから、支柱穴の組み合わせの特定は困難であるが、P1～P7及び北西側の想定位置（試掘溝内）の7本柱構造が想定できる。規模は、P1は底面形状が直径約20cmの円形で、底面標高95.63 m、P2は底面形状が直径約18cmの円形で、底面標高95.25 m、P3は底面形状が直径約16cmの半円形で、底面標高95.23 m、P4は底面形状が長径18cm、短径14cmの長円形で、底面標高95.52 m、P5は底面形状が長径26cm、短径16cmの長円形で、底面標高95.44 m、P6は底面形状が長径24cm、短径18cmの長円形で、底面標高95.62 mである。柱間距離はP1－P2間が約330cm、P3－P4間が約290cm、P4－P5間が約320cm、P5－P6間が約410cm、P6－P1間が約280cmである。また、東側平坦面の掘り方の外側に沿う形で、垂木などの上屋構造に関する柱穴と考えられるピットを確認した。

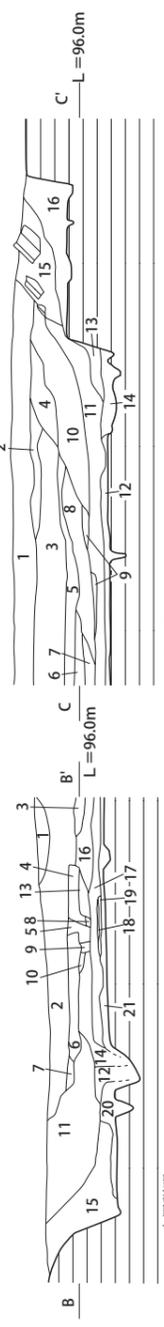
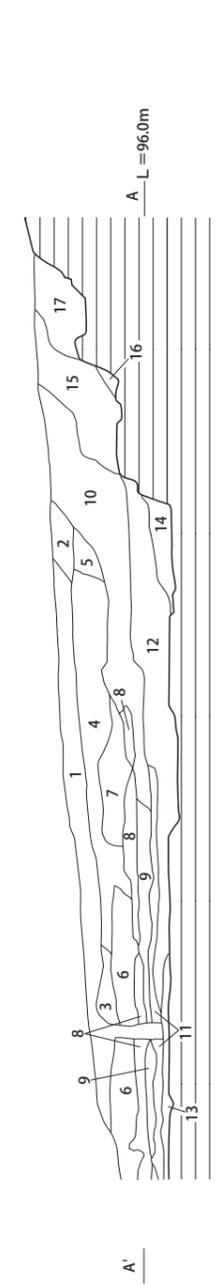
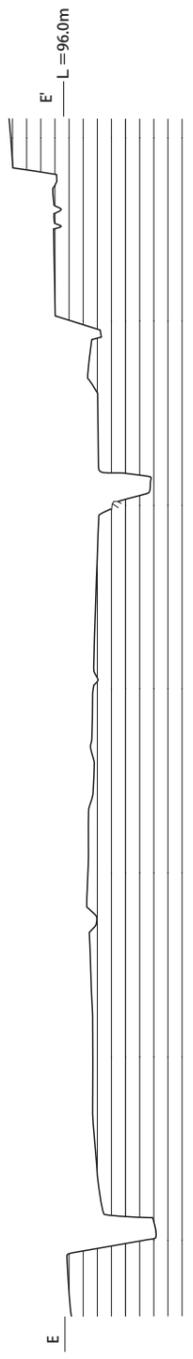
なお、床面の南西隅からは、長辺約40cm、短辺約50cmの歪なピットを確認した。埋土には焼土塊と炭化物を多く含んでおり、ピット内の遺構面自体も被熱している部分を確認できた。焼土塊の厚さは5～10cmと厚いことから、かなりの高温を受けつづけた炉跡と考えられる。本住居跡の壁面の延長上に位置することから、本住居跡より先行する可能性がある。

本住居跡からは、弥生土器（31～39）・鉄鏃（182）が、掘り方外側平坦面より磨石（233）が、埋土から板状土製品（251）が出土している。弥生土器の形態からⅡ－2－①期に属すると考えられる。

SH7はSH6の壁面より約1 m内側に位置する竪穴住居跡である。壁は南西部で一部流失するものの、ほぼ全周で残存する。平面形状は長径約840cm、短径約730cmの長円形である。床面の標高は遺存状態のよい東壁から北壁及び南壁下で95.80 m、壁高は最大45cmである。壁溝は壁面に沿って、幅4～10cm、残存する深さ3～8cmで北側及び南側で断続的に残存する。



第10図 SH6・SH7・SH8・SK12・SK13・SK14 実測図 (S=1/60)



- 土層説明
- 1 暗褐色(10YR3/3)砂質土 粗い
 - 2 褐色(10YR4/4)砂 極めて粗い
 - 3 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 シルト
 - 4 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 粗い
 - 5 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 極めて粗い
 - 6 暗褐色(7.5YR3/3)シルト 砂多く混じる
 - 7 暗褐色(7.5YR3/3)シルト 砂多く混じる
 - 8 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
 - 9 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 10 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 11 暗褐色(10YR3/3)シルト 極めて粗い
 - 12 黒褐色(10YR3/2)シルト 砂多く混じる
 - 13 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土 粘性高い
 - 14 黒褐色(7.5YR2/2)土 粘性高い
 - 15 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
 - 16 暗褐色(7.5YR4/3)砂質土

- 土層説明
- 1 暗褐色(10YR3/3)砂質土 粗い
 - 2 暗褐色(10YR3/3)砂質土 粗い
 - 3 褐色(10YR4/4)砂 粗い
 - 4 灰色・黄褐色(10YR4/3)砂質土 粗い
 - 5 暗褐色(7.5YR3/3)シルト
 - 6 褐色(7.5YR4/3)砂
 - 7 暗褐色(7.5YR3/3)シルト
 - 8 黒褐色(7.5YR3/2)シルト
 - 9 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 10 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 11 暗褐色(10YR3/3)シルト 砂多く混じる
 - 12 暗褐色(10YR3/3)砂質土
 - 13 暗褐色(7.5YR3/3)砂質土
 - 14 灰色・黄褐色(10YR5/4)砂質土 大雑多く含む
 - 15 黒褐色(7.5YR2/2)土

主柱穴はその規模と壁面との位置関係から、P7～P14の8本と考えられる。P7は底面形状が直径約18cmの円形で、底面標高95.19m、P8は底面形状が長径24cm、短径16cmの長円形で、底面標高94.92m、P9は底面形状が直径15cmの円形で、底面標高94.95m、P10は底面形状が長径30cm、短径14cmの長円形で、底面標高95.24m、P11は底面形状が長径28cm、短径21cmの長円形で、底面標高95.37mである。柱間距離はP7－P8・P7－P11間で約375cm、P8－P9・P9－P10・P10－P11間で約330cmである。

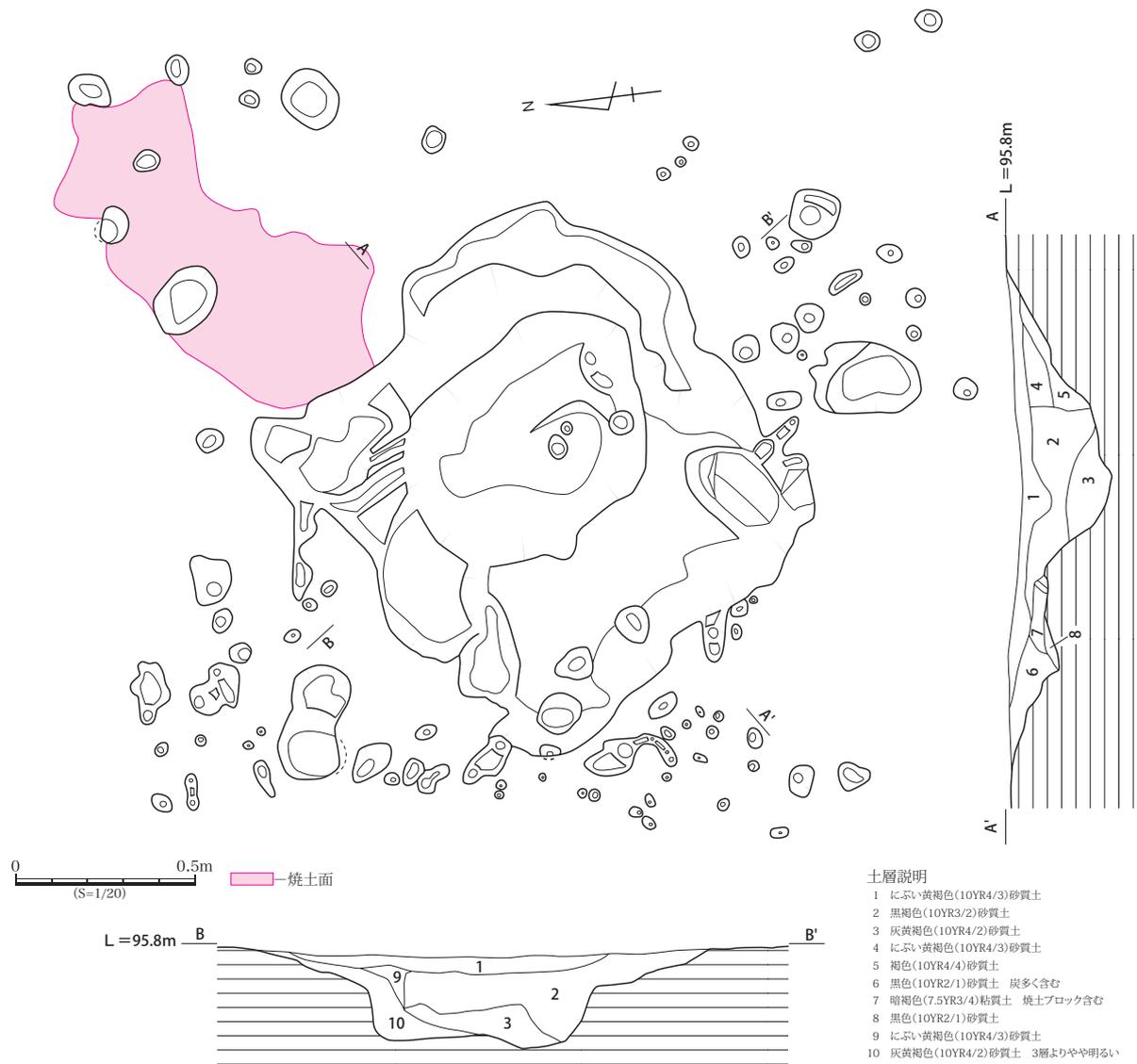
なお、床面中央付近で被熱により赤変した焼土面を3か所確認した。また、床面中央部で掘り込みを確認した。掘り込みはその内側にさらに底面を持つ。土層観察の結果、2つの掘り込みに分割でき、以下、外側の掘り込みを掘り方a、内側の掘り込みを掘り方bと呼称し述べていくこととする。掘り方aの規模は、一辺130×120cmの方形の掘り方内に一辺約110cmの方形の底面を持つ。底面標高は95.69m、深さは約10cmである。掘り方aは埋土に焼土と炭化物を多く含んでいたことから、炉跡と考えられる。掘り方bは掘り方aの底面をさらに掘り込んで造られ、長径70cm、短径50cmの長円形の掘り方内に、長径50cm、短径12～35cmの不整形な底面をもつ。底面標高は約95.50m、掘り方a底面からの深さは約20cmである。土層観察の結果、掘り方bは掘り方aより新しいこと、掘り方bの埋土（第11図土層断面図2層）にあまり炭化物が含まれていないことから炉として使用した可能性は低く、新たな炉跡を製作中もしくは製作後に放棄したか、住居中央部の柱穴の可能性が考えられる²⁾。また、炉跡の周囲、特に西側に集中して、底面径1～10cm、深さ2～11cmの小ピット群を確認した。小ピット群の埋土は炭化物を多く含み黒色化しており、炉に伴う何らかの施設と考えられるが、用途については不明である。

本住居跡の床面北西部からは、床面と同レベルで幅約140cm、長さ約300cmの範囲で堅緻な層を確認した。状況から貼床と考えられ、15～20cm下面に掘り窪んだ状況で旧床面を確認した。土層では張床部はSK13埋土の上部まで広がっていたことが確認できた。なお、貼床面より管玉未製品(250)が出土した。

なお、本住居跡の床面及び埋土中から鉄鏃・錐状鉄製品・鉄片など58点の鉄器を確認した(183～213)。一軒の住居跡からの出土量としては多数であるため、本住居跡は鍛冶工房として使用された可能性がある。このため、床面から約20cmまでの埋土を全てサンプリングし、鍛冶由来成分を検出するため科学分析を行ったが、鉄滓・鍛造剥片等は確認されなかった。以上のことから、本住居跡は、鍛冶工房ではなく素材を二次加工する加工場の性格を持っていた可能性がある。

本住居跡からは、弥生土器(40・41・47)・磨石(234)が、埋土から弥生土器(48・49)が出土している。弥生土器の形態からⅡ-2-③期に属すると考えられる。

SH8はSH7の北東部壁面に沿って位置する竪穴住居跡である。土層断面及び掘り方では確認できず、平面検出の段階で壁溝、及びP4－P5間の南側約60cmで南壁の一部を確認した。壁溝は、幅4～20cm、残存する深さは3～5cmである。また、SH7の貼床の下から、SH8の壁溝の床面側の掘り方の痕跡を確認した。床面の標高は壁溝のある東側で95.80m、南壁側で95.73mである。

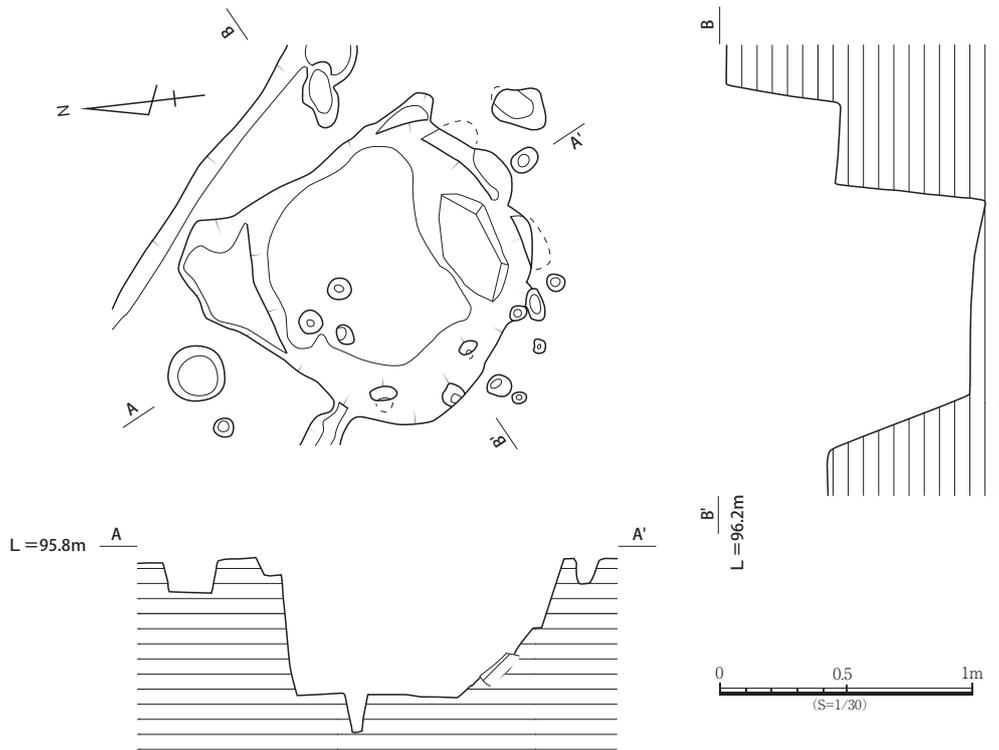


第 11 図 SH7 炉跡実測図 (S=1/20)

本住居跡の平面形状を壁溝及び壁面から推測すると、北東から南西方向が長径で約 7 m、北西から南東方向が短径で約 6 m の長円形となる。床面には多数のピットがあるものの、適度な規模・想定形状との位置関係を持つ柱穴の組み合わせがなく、柱穴を特定するに至らなかった。

なお、SH6・7・8 の床面からは直径 3～15cm のピットが多数確認できた。本遺跡の他の住居には見られず、本住居群の床面のみに見られ、埋土に土器片等を含むものも多数ある。ピットの性格は明らかにできなかったが、本住居群の特殊な性格に伴うピットであると思われる。

SK12 は SH7 の床面北東部に位置する土坑である。平面形状は方形で、底面の規模は長辺 80cm、短辺 60cm、SH7 床面からの深さは約 55cm、底面標高約 95.00 m である。本遺構の埋土中の掘り方上面から底面まで 10～20cm 程度の角礫が確認された。本土坑はその規模・形状から



第 12 図 SK12 実測図 (S=1/30)

本来貯蔵用であると想定されるが、その用途を終えて埋める際に、本遺跡の地盤が土石流層であるために多量に出土していた礫を廃棄したものと考えられる。

本土坑の埋土からは、弥生土器（42～46）が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、本遺構の廃棄時の下限は、弥生土器の形態からⅡ－3期に属すると考えられる。

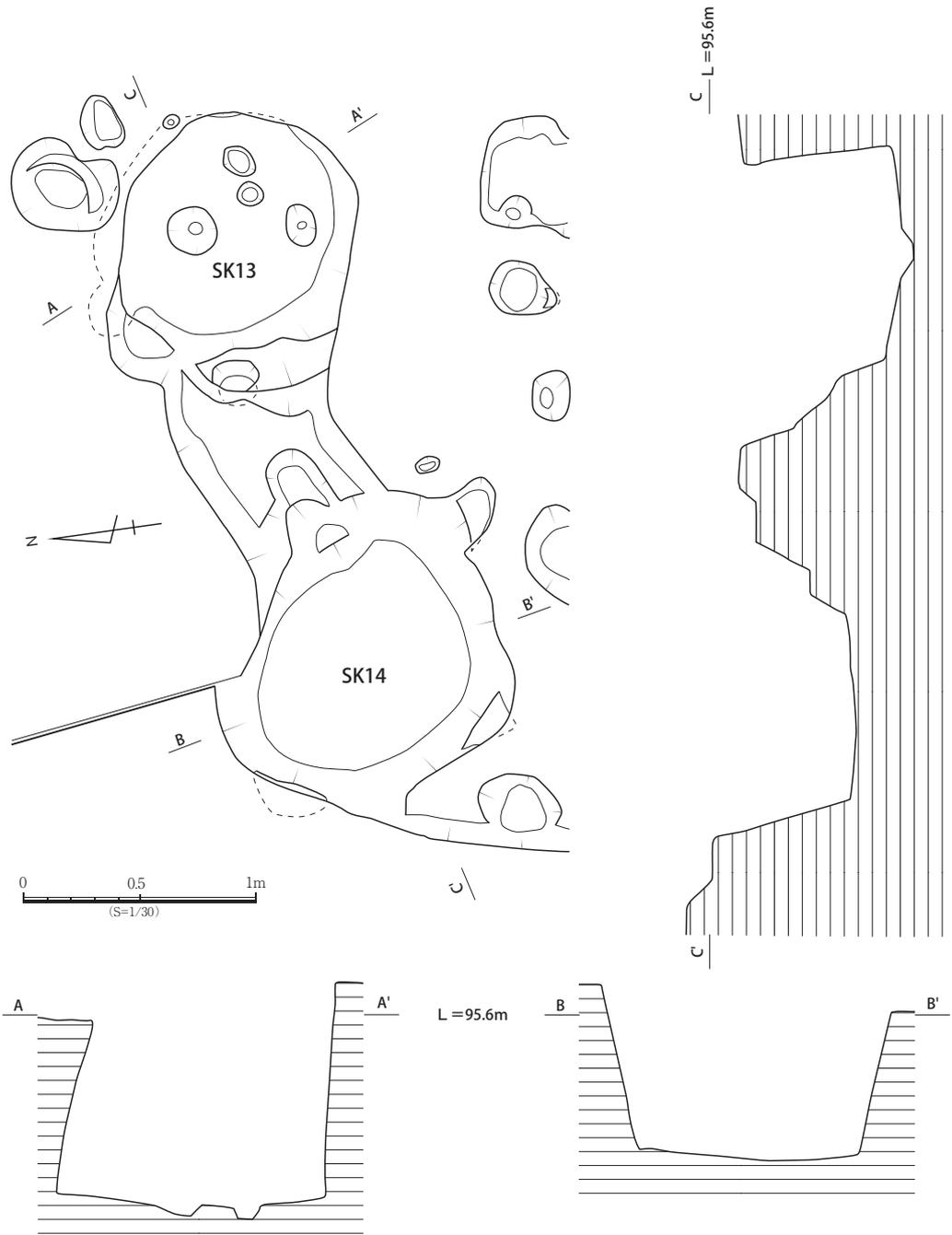
SK13はSH7の床面北西部に位置する土坑である。平面形状は円形で、底面の規模は約100cm、SH7床面からの深さは約95cm、底面標高約94.80mである。土坑の規模・形状から貯蔵用と考えられる。なお、本遺構の底面付近の埋土から、一辺30～50cm程度の角礫を確認した。埋土に礫を含む他の土坑と異なり、小さな礫をほとんど含まないことから、土坑の廃棄に伴う何らかの祭祀が行なわれた可能性もある。

また、埋土中より鉄鏃（190）が出土している。

SK14はSH7の床面北西部、SK13の西約50cmに位置する。平面形状は歪な長円形で、底面の規模は長径100cm、短径80cm、SH7床面からの深さは約65cm、底面標高約95.00mである。土坑の規模・形状から貯蔵穴と考えられる。

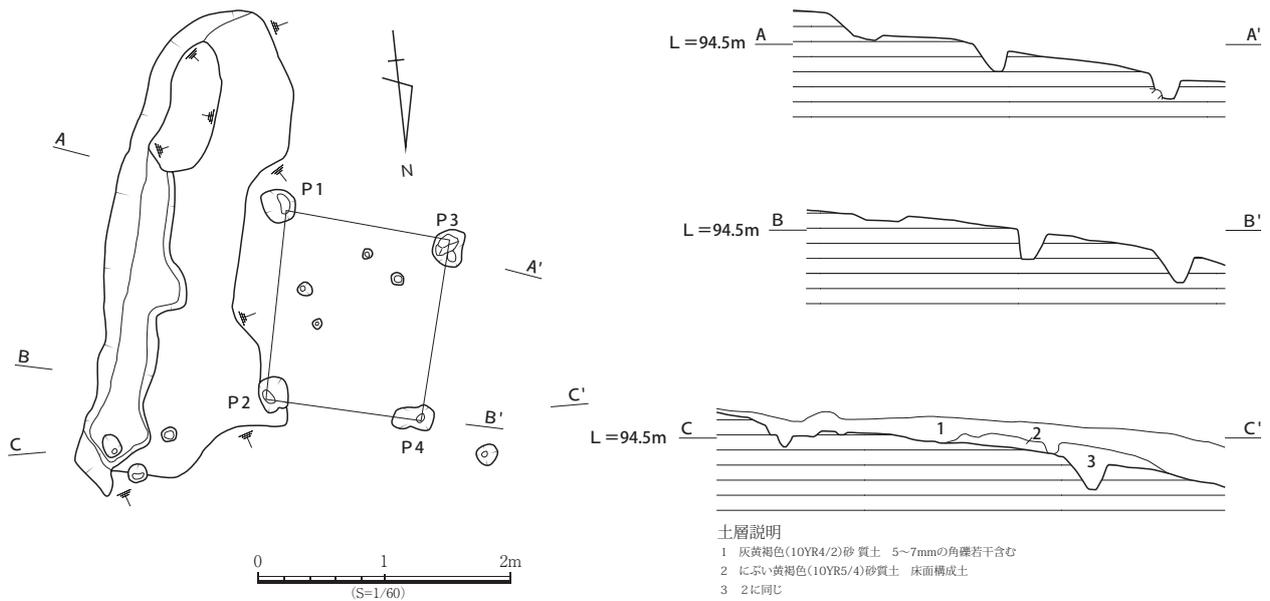
本遺構の埋土からは鉄片が出土しているが、細片のため図示するに至らなかった。

ここでそれぞれの遺構の先後関係についてみると、A－A'間の土層断面の観察及び出土土器の時期から、SH6→SH7の順に営まれたと考えられる。また、SH8については土層断面において観察



第 13 図 SK13・SK14 実測図 (S=1/30)

できなかったこと、SH7 の貼床の下に壁溝と考えられる痕跡があることから、SH7 に先行する。SK12 は出土遺物から SH7 に後出する。SK13 は F - F' 間の土層観察により、SH7 の貼床より先行するが、SH8 との先後関係は明らかにできなかった。SK14 は平面検出時に SH7 埋土から SK14 埋土を確認したことから、SH7 に後出する。以上から、SH6 → SH8・SK13 → SH7 → SK12・SK14 の順に営まれたことが想定できる。



第 14 図 SH10 実測図 (S=1/60)

○ SH10 (第 14 図)

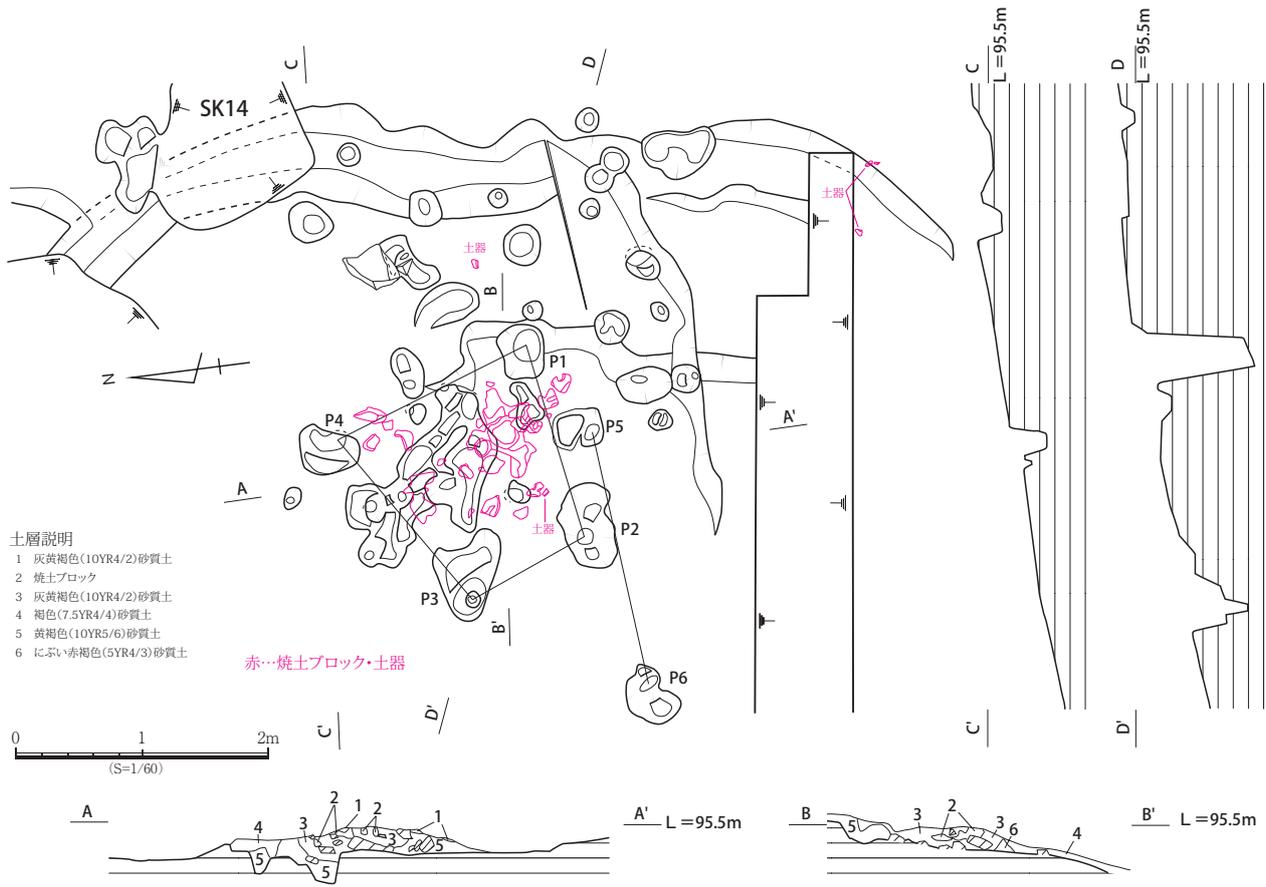
SH10 は SH7 から北西へ約 4 m, SH3 から西へ約 5 m に位置する竪穴住居跡である。東壁とそれに伴う床面が南北約 370cm, 東西約 100cm の範囲で残存するが, その他の部分は流失している。床面最高所は標高 94.6 m で, 残存する東壁の壁高は最大で 15cm である。また東壁に沿って幅 20 ~ 40cm, 残存する深さ 4cm の壁溝を確認した。

主柱穴は位置とその規模から P1 ~ P4 の 4 本と考えられる。P1 は底面形状が長径 16cm, 短径 7cm のやや歪な長円形で, 底面標高 94.28 m である。P2 は底面形状が長径 13cm, 短径 7cm の長円形で, 底面標高 94.26 m である。P3 は底面形状が長径 8cm, 短径 6cm の長円形で, 底面標高 94.06 m である。P4 は底面形状が長径 7cm, 短径 5cm の長円形で, 底面標高 94.08 m である。柱間距離は P1 - P2 間で約 155cm, P2 - P4 間で約 125cm, P3 - P4 間で約 130cm, P1 - P3 間で約 138cm となる。ここで P1・P2 と P3・P4 の底面標高に約 20cm の差があることに注目したい。このことは, 本遺跡が尾根中腹に位置することと, いわゆる地山層に形成された遺跡ではないことに起因すると想定される。地盤の安定しない堆積層において, 傾斜面を削平し, 低標高側に盛土をして形成した床面においては, 標高の高い側の P1・P2 よりも P3・P4 をより深く掘り, 安定させる必要が生じたものと考えられる。

床面の P1 ~ P4 に囲まれた範囲に底面径 2 ~ 5cm, 深さ約 7 ~ 20cm 程度の 4 基の小ピットを確認した。主柱に囲まれた範囲には炉があったと想定できるため, 小ピットは炉に伴う何らかの施設と考えられるが, 用途については不明である。

ここで本住居の規模を想定してみたい。東壁の南北端が内湾をしていることから東壁はほぼ遺存していると考えられることと, P1 ~ P4 の位置から一辺約 3.7 m の方形住居が想定できる。

本住居跡からは, 弥生土器 (50 ~ 53) が出土している。弥生土器の形態から II - 3 期あたりに属すると考えられる。



第 15 図 SH11 実測図 (S=1/60)

○SH11 (第 15 図)

SH11はSH7の西端に接して位置する竪穴住居跡である。本遺構の位置する遺構面の埋土は浅く、畑により削平され残存状態は悪く、東側の壁溝と掘り方がわずかに残存し、西側は流失している。

本住居跡には少なくとも3軒の住居跡、もしくは住居跡状遺構が存在したと考えられるが、詳細は不明のため、以下、切り合いから見られる順にSH11a・SH11b・SH11cと呼称し、述べていくこととする。

SH11aはSH7に接して位置する。壁溝のみが残存し、これに伴うピットは不明である。壁溝は16～40cmと広く、残存する深さは4～9cmである。床面側の掘り方上面は、床面の状況をかろうじて残している可能性があり、最高所は標高95.60mである。壁溝の北側はSK14に削平され、南側も流失しているが、その両端で壁溝は約130°で屈曲している。

SH11bは、掘り方の痕跡がSH11aの壁溝を切り込み、中央をSH11cの掘り方に切られる形で、東西約310cmの範囲で残存する。壁溝は確認できなかった。SH11から検出されたピットのうち、底面標高が94.60mとなるP1～P3及びSH11bの掘り方との位置関係と規模から、支柱穴はP1～P4の4本と考えられる。P1は底面形状が直径約20cmの円形で、P2は底面形状が直径14cmの円形で、P3は底面形状が直径7cmの円形である。P1～P3はいずれも底面標高94.60mである。P4は底面形状が長辺26cm、短辺約15cmの長円形で、底面標高は95.04mである。柱間距離は

P1 - P2 間で約 160cm, P2 - P3 間で約 102cm, P3 - P4 間で約 155cm, P4 - P5 間で約 170cm となる。また, P1 ~ P4 に囲まれた範囲で焼土塊と焼土塊で形成された掘り込みを確認した。掘り込み上面は約 22 × 25cm で, 標高約 95.48 m, 底面が一辺約 16cm の方形で, 標高 95.32 m, 深さが約 16cm である。掘り込みは形状・床面での位置から炉跡と考えられ, 焼土塊は標高 95.10 m と炉跡より上面に位置することから, 炉跡で形成されたものが流れたものと考えられる。

SH11c は, SH11a の壁溝の西約 120cm に位置し, SH11b の掘り方を切り込み, 南北約 230cm の範囲で掘り方が残存する。掘り方より西側は流失し, 土石流層が露出しており, 遺存状態は極めて悪い。SH11 から検出されたピットのうち, SH11c の掘り方との位置関係と規模及び底面標高が近いことから, P5・P6 が柱穴に用いられたと考えられる。P5 は底面形状が長径 15cm, 短径 9cm の長円形で, 底面標高 94.99 m である。P6 は底面形状が長径 18cm, 短径 7cm の長円形で, 底面標高 94.87 m である。柱間距離は約 200cm である。なお, P5 の北に接して, 一辺 20 × 30cm の範囲で堅緻な高まりを確認した。標高は 95.38 m で, 床面が部分的に遺存したものと考えられる。

本遺構の新旧関係は, 土層では明確な差は確認できず, 出土した土器にも時期的な差は確認できなかった。しかし, 遺構の切り合い関係から, SH11a → SH11c → SH11b の順に営まれた可能性がある。本住居跡 P2 内埋土からは, 弥生土器 (55) が出土している。弥生土器の形態から I 期に属すると考えられる。

○ SH13・SX6・7・8・9 (第 16 図)

SH13 は SH12 の南側に切り合って位置する竪穴住居跡である。後述する SX6 との境目は明らかではなかったが, 炭化材の出土範囲, 及び壁溝の南端部分がわずかに西へと屈曲することから, 東壁約 260cm 及び北壁約 180cm とそれに伴う床面が残存範囲と考えられる。床面最高所は 93.00 m で, 残存する壁高は最高 35cm である。壁溝は東壁及び北壁の一部に沿って残存しており, 幅 3 ~ 12cm, 深さ 2 ~ 9cm である。本住居跡の平面形状を残存する壁及び壁溝から推定すると, 方形もしくは長方形である。

本住居跡床面の残存部から支柱穴となり得る規模を持つピット P1 を確認した。規模は底面形状が直径約 15cm の円形で, 底面標高 92.39 m である。

ところで本住居跡の床面からは多量の炭化材が出土した。これらの炭化材のほとんどは, 壁面上部または下部から床面中心へ向かい放射状に落ち込む径約 10cm の材である。これらの材は, 位置・規模から, 垂木材と考えられる。炭化材は科学分析を行った結果, スダジイを中心にコナラ属アカガシ亜属・クスノキ・サカキ・アオキ・広葉樹が認められた。

遺物は床面上から弥生土器 (58・59)・台石 (236) が, 埋土中から弥生土器 (60・61) が出土した。弥生土器の形態から II - 3 期に属すると考えられる。

SX6 は SH13 の南側に切り合って位置するテラス状遺構である。東壁約 350cm 及びそれに伴う平坦面が幅約 60cm で残存するが, その他の部分は流失している。平坦面の最高所は標高 93.24 m で, 掘り込みの深さは最大 31cm である。平坦面からは SX6 に伴うピットとして, P3 が確認で

きた。底面形状は長径 15cm, 短径 10cm の長円形で, 残存する深さ 23cm, 底面標高 92.91 m である。壁溝は確認できず, 壁面や床面南側に土石流層の巨石が露出していることから, 住居の可能性は低く, テラス状遺構とした。

遺物は床面上から弥生土器 (87・88) が出土した。弥生土器の形態からⅡ-3 期に属すると考えられる。

SX7 は SH13 の内側南西部に切り合って位置するテラス状遺構である。東壁は約 240cm, 東壁北端から約 90° 西に方向を転換して北壁が約 50cm 遺存する。残存する壁高は最高 14cm である。東壁に沿って, 幅約 40cm ~ 60cm で平坦面が残存し, 平坦面の最高所は標高 92.90 m である。平坦面のほとんどを SH13・SX8 と重複し, かつ流失しているため, 本遺構の性格の想定は困難であるが, 住居跡の可能性も想定できる。しかしながら残存部には壁溝が存在せず, 平面プランにあう位置・規模の柱穴も想定できないためテラス状遺構とした。

遺物は床面上から弥生土器 (89・90) が出土した。弥生土器の形態からⅡ-2-③期に属すると考えられる。

SX8 は SX6 の西側に切り合って位置するテラス状遺構である。南側は流失しており, 東壁は約 300cm 残存し, 北端は西へと変換していることから, 西壁へと伸びていた可能性がある。また, 東壁南端は SX9 に切り合うため流失しているが, さらに南へ伸びるものと考えられる。残存する壁高は最大で 13cm である。平坦面は南北を SX7・SX8 と切り合うため, SX8 に伴う遺存範囲は不明瞭であるが, 西側は幅 200 ~ 250cm の範囲で遺存する。平坦面の最高所は 93.02 m である。本遺構は, 壁面の遺存している部分が少ないこと, 壁溝が存在しないことなど不確定な要素が多いため, テラス状遺構とした。

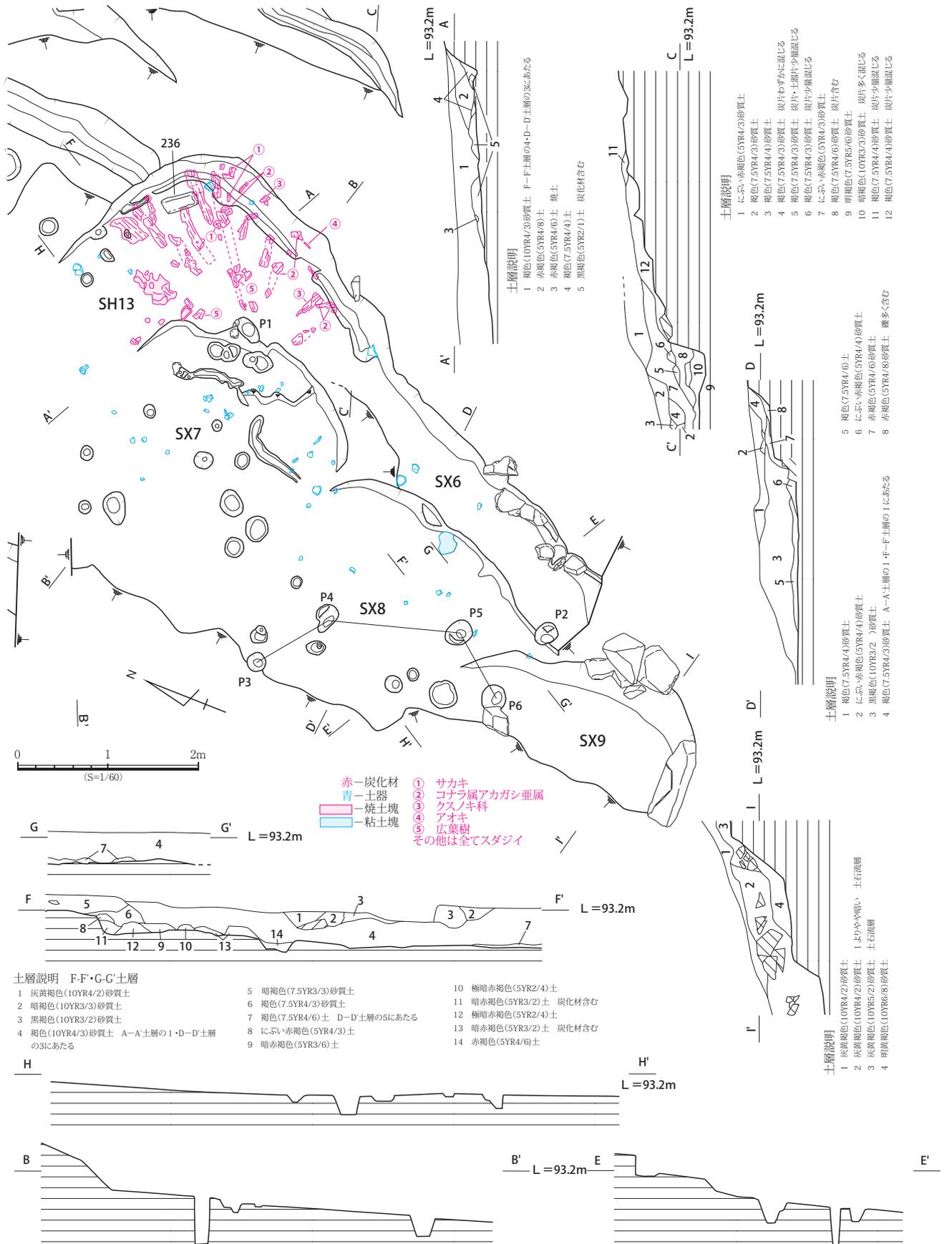
なお, 平坦面に接して, 直径約 20cm, 厚さ約 5cm の範囲で粘土塊を確認した。床面からは土器片が確認できたが, いずれも細片のため, 時期を明らかにすることはできなかった。

SX9 は SX6・SX8 の南側に切り合って位置するテラス状遺構である。東壁の一部約 270cm 及びそれに伴う平坦面が幅 30 ~ 70cm の範囲で遺存し, 平坦面の標高は 93.07 m, 残存する壁高は最大 36cm である。本遺構に伴う壁溝及び柱穴は確認できなかった。

なお, 本遺構から遺物は出土しなかった。

なお, SX8 から SX9 にかけて連続する平坦面からは, P3 ~ P6 を確認した。位置関係及び規模から住居跡等の支柱穴の可能性もある。その場合, SX8・9 との位置関係から, これらに伴うものではなく, 他にも遺構が存在した可能性もある。規模は, 底面直径がいずれも約 10 cm, 底面標高は P3 が 92.26 m, P4・5 が 92.62 m, P6 が 92.67 m である。柱間距離は P3 - P4 間が 90cm, P4 - P5 間が 145cm, P5 - P6 間が 80cm である。

ここでそれぞれの遺構の先後関係についてみると, D - D'・F - F'・G - G' の土層断面の観察,



第 16 図 SH13・SX6・SX7・SX8・SX9 実測図 (S=1/60)

出土土器の時期、遺構検出時の切り合い関係から、SX6 → SH13 → SX8 → SX7・9の順に営まれたことが想定できる。なお、連続する近隣遺構との土層観察から、SH9 → SH13, SX9 → SH10の順に営まれたことが想定できる。

○SH14・15・16・SX11・SK7（第17図）

SH14は北側調査区の北西側、SH12の北西約4mに位置する竪穴住居跡である。東壁及び北壁の一部とそれに伴う南北約410cm、東西約80cmの床面が残るが、他は流失している。床面最高所は標高92.60mである。残存する東壁も南半部は削平が激しく、最もよく残存する北半部の壁高は最高で20cmである。残存部から推定できる平面形状は、方形もしくは長方形である。

規模とその位置から支柱穴となり得るのはP1である。P1は底面形状が長径7cm、短径5cmの長円形で、底面標高が92.04mである。

遺存する床面の中央付近、P1の南東には残存部で約80×60cmの掘り込みを確認した。残存する深さは約10cm、底面標高92.43mである。この掘り込みの底面には、底面形状が長径23cm、短径14cmの長円形で、深さ5cmの掘り込みを確認した。また、底面及び掘り方に底面形状が3～4cmの円形、深さ8～20cmの3つの小ピットを確認した。これらは何らかの施設と考えられるが、遺存状況からは、その用途について想定し得なかった。

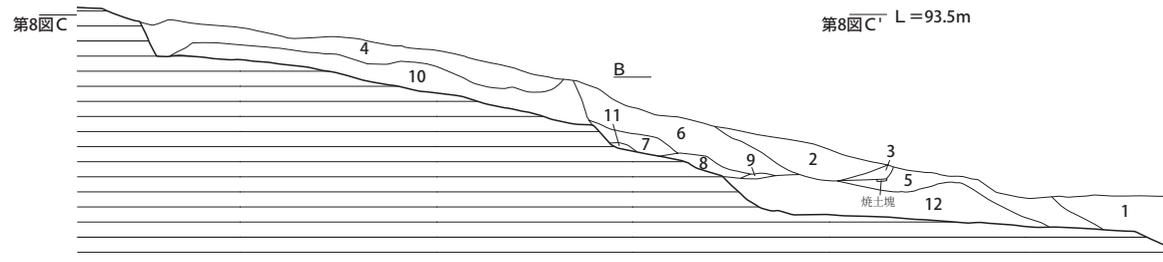
SH14からは、弥生土器（62～64）が出土している。弥生土器の形態からI期の時期に属すると考えられる。

SH15はSH14の南西約2mに位置する竪穴住居跡である。東壁が約370cm及び南壁が約150cmとそれに伴う床面が三角形状に遺存するが、それ以外は流失している。床面最高所は標高91.67mである。残存する壁高は最高で38cmである。残存部から推定できる平面形状は方形であるが、東壁の北端ラインは南半部から続くラインと比較すると約30°北西に屈曲している。これは、東壁ライン上に確認された約60×40×20cm程度の石により、規制を受けた可能性がある。また東壁と南壁に沿って、長さ90cm、幅4～14cm、残存する深さ4～5cmの壁溝を確認した。さらに残存する壁溝の北端部の約45cm西側に、壁溝ラインに沿った形で残存部の長さ70cm、幅6～13cm、深さ約8cmの溝状遺構を確認したが、用途については想定し得なかった。

さて、本住居跡の支柱穴であるが、規模とその位置からP2が想定される。P2の底面形状は長径16cm、短径12cmの長円形で、底面標高90.97mである。P2に対応する支柱穴として想定できるのは、その規模と位置からP3である。P3の底面形状は長径15cm、短径12cmの長円形で、底面標高91.08mである。P2－P3の柱間距離は約220cmである。

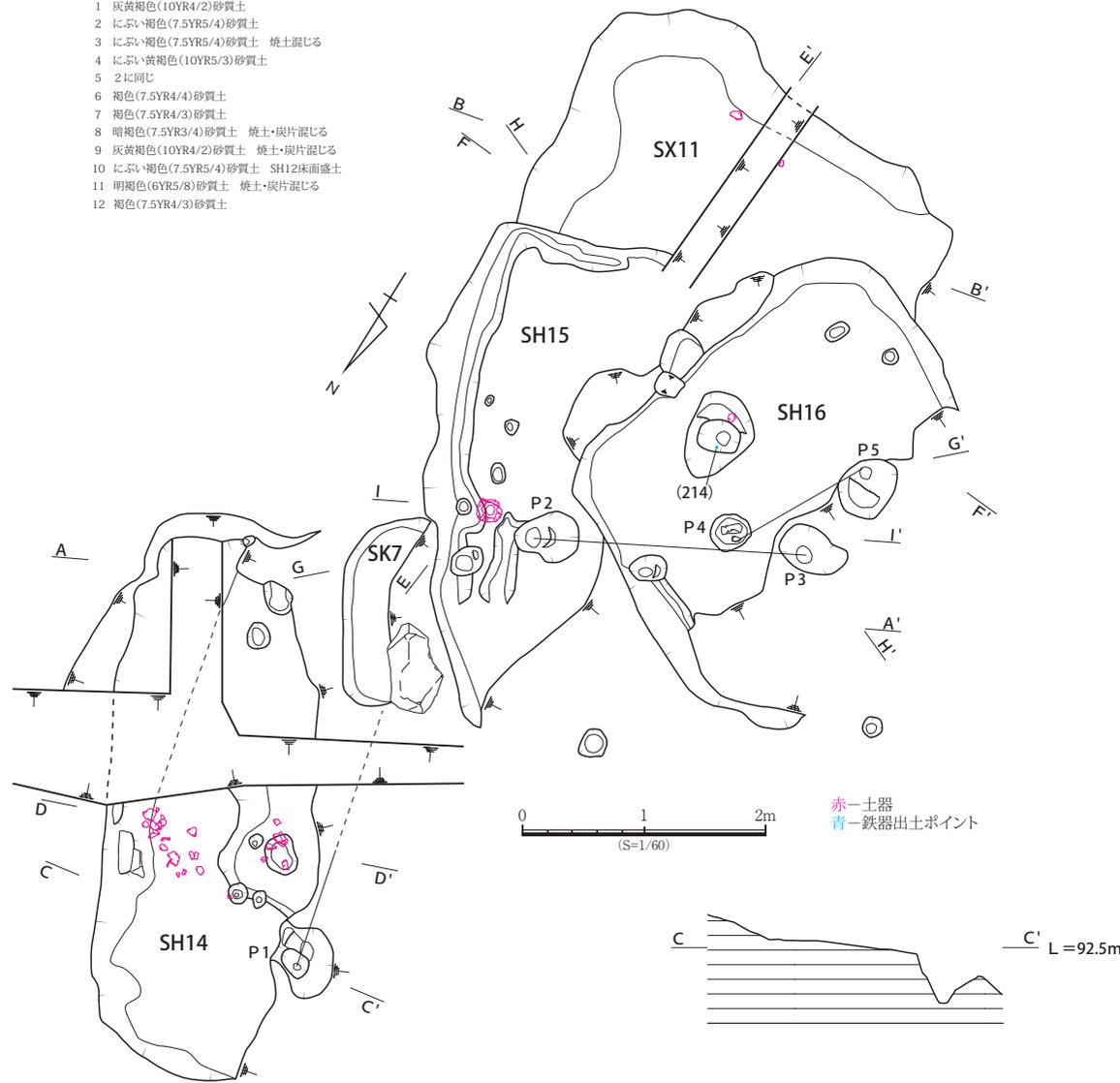
ここで、本住居をP2－P3の組み合わせの2本の支柱を持つ住居と想定すると、東壁からP2への間隔が65cmであり、対応するP3もほぼその間隔を持つと考えられる。その場合、東壁の長さである3.7mを一辺の長さとするほぼ正方形の住居が想定できる。

SH15からは、弥生土器（65）が出土している。その形態からⅡ－2－③期に属すると考えられる。



土層説明

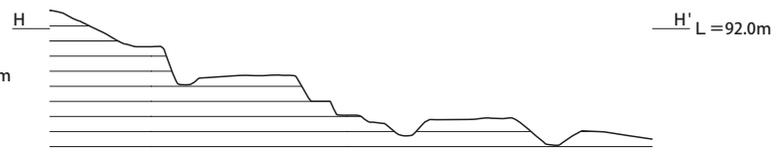
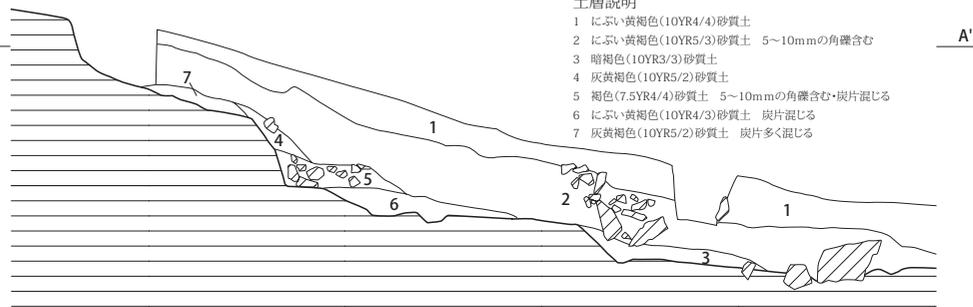
- 1 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土
- 2 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土
- 3 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土 焼土混じる
- 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
- 5 2に同じ
- 6 褐色(7.5YR4/4)砂質土
- 7 褐色(7.5YR4/3)砂質土
- 8 暗褐色(7.5YR3/4)砂質土 焼土・炭片混じる
- 9 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 焼土・炭片混じる
- 10 にぶい褐色(7.5YR5/4)砂質土 SH12床面盛土
- 11 明褐色(6YR5/8)砂質土 焼土・炭片混じる
- 12 褐色(7.5YR4/3)砂質土



土層説明

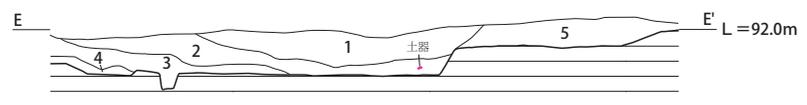
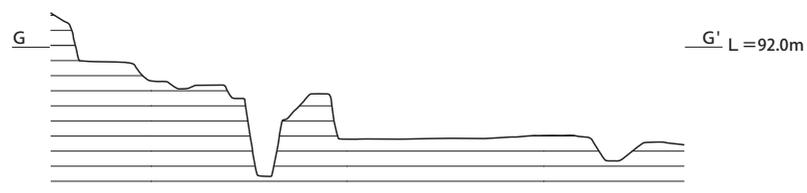
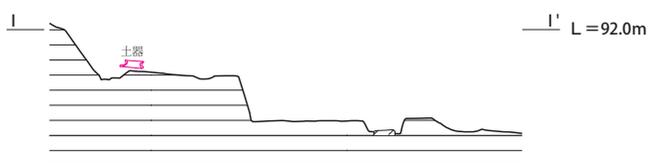
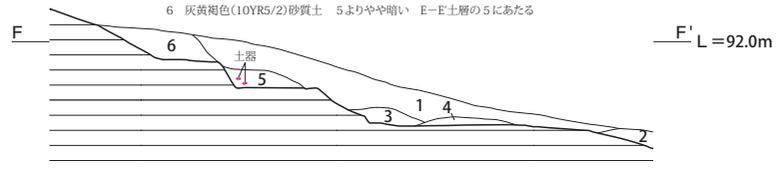
- 1 にぶい黄褐色(10YR4/4)砂質土
- 2 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 5~10mmの角礫含む
- 3 暗褐色(10YR3/3)砂質土
- 4 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土
- 5 褐色(7.5YR4/4)砂質土 5~10mmの角礫含む・炭片混じる
- 6 にぶい黄褐色(10YR4/3)砂質土 炭片混じる
- 7 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 炭片多く混じる

L=93.0m



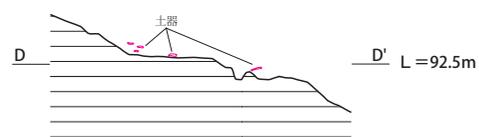
土層説明

- 1 灰黄褐色(10YR4/2)砂質土 3~5mmの角礫若干含む E-E'土層の1にあたる
- 2 黄褐色(10YR5/6)砂質土
- 3 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土
- 4 にぶい黄褐色(10YR5/3)砂質土 炭片混じる
- 5 黒褐色(10YR3/2)砂質土 E-E'土層の2にあたる
- 6 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 5よりやや暗い E-E'土層の5にあたる



土層説明

- 1 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 3~5mmの角礫若干含む
- 2 黒褐色(10YR3/2)砂質土
- 3 黒褐色(10YR3/1)砂質土 2mm程度の角礫含む
- 4 褐色(10YR4/4)砂質土 やや粘質
- 5 灰黄褐色(10YR5/2)砂質土 1よりやや暗い



第17図 SH14・SH15・SH16・SX11・SK7 実測図 (S=1/60)

SH16はSH15の西側に切り合って位置する竪穴住居跡である。北壁及び東壁、南壁の一部とそれに伴い、南北約280cm、東西約150cmの床面が残存するが、他は流失している。床面最高所は標高91.35mである。残存する壁高は最高で35cmである。残存部から推定できる平面形状は南北2.8m、東西2.6mの隅丸方形である。北壁のほぼ中央に沿って長さ47cm、幅3～5cm、残存する深さ3cmの壁溝を確認した。この壁溝は底面標高91.27mで、北東部壁際の床面標高とほぼ同じレベルであるため、少なくとも北壁沿いには壁溝が存在した可能性がある。

主柱穴は位置とその規模からP4－P5の組み合わせが考えられる。P4の底面形状は長径26cm、短径22cmの長円形で、底面標高91.18mである。P4の底面には20×12cmの礫が露頭しているが、P4の遺構面下にも礫本体が続くため、礫上面の標高91.19mが柱底面の高さと考えられる。P5の底面形状は直径10cmの円形で、底面標高91.09mである。P4－P5の柱間距離は約120cmである。床面での位置とP3がSH15に伴うもので、本遺構との時期差からP3を共用したとは考えにくいことから、P4－P5が主柱として妥当であり、本遺構は主柱が2本の住居跡と想定できる。

SH16からは、弥生土器(66・67)と鉄鏃(214)が出土している。弥生土器の形態からⅡ－2－①期に属すると考えられる。

SX11はSH15・16の南側に切り合って位置するテラス状遺構である。SH15と切りあう東側の掘り込みは約170cm、東壁南端から約90°西に方向を変じて延びる南側の掘り込みは約250cm遺存する。残存する掘り込みの高さは最高で27cmである。平坦面は南東隅で丸味を帯びるものの、南北方向に約70～170cm、東西方向に約280cm程度の範囲で遺存している。平坦面最高所は標高91.90mである。北側はSH15・16に削平され、西側は流失しているため、本遺構の性格は想定しにくい。遺構の平面形状からは住居跡の可能性も考えられる。しかしながら、残存する遺構では壁溝が存在せず、柱穴も想定できないためテラス状遺構とした。

SX11からは、弥生土器(96・97)が出土している。弥生土器の形態からⅡ－2－①期の時期に属すると考えられる。

SK7はSH15の北東側に切り合って位置する土坑である。東壁は約140cm、北壁及び南壁がそれぞれ約25cm遺存する。底面形状は残存部から北東側の辺が約140cmの隅丸方形と推定できる。また、A－A'土層断面の観察から第4・5層がSK7の埋土と考えられるため、5層下部の標高91.87mラインが遺存する底面ラインと想定できる。このことから、確認し得なかったものの、北西側・南東側の辺は少なくとも70cm以上となる。また、残存する深さは最大67cmである。本土坑の北西には、SH15の東壁のラインを規制する約60×40×20cm程度の石が隣接している。この石の下場は、土坑底面より約10cm深くもぐるため、元々の地盤に伴うものと考えられる。一方、土坑内には約8～20cm程度の多量の石を確認した。この土坑はその規模・形状及び位置から本来貯蔵用であると想定されるが、その用途を終えて埋める際に、本遺跡の地盤が土石流層であ

るために多量に出土していた礫を廃棄したものと考えられる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

ここで、それぞれの遺構の先後関係について見てみると、A－A'・E－E'・F－F' 土層断面の観察と出土土器の時期から SH14 → SH16・SX11 → SH15 → SK7 の順に営まれたことが想定できる。また、B－B' 土層断面の観察から SX11 は SX10 より先行すること、また平面上の重複関係から SH15 は SX10 より先行することが想定できる。

○SH17 (第 18 図)

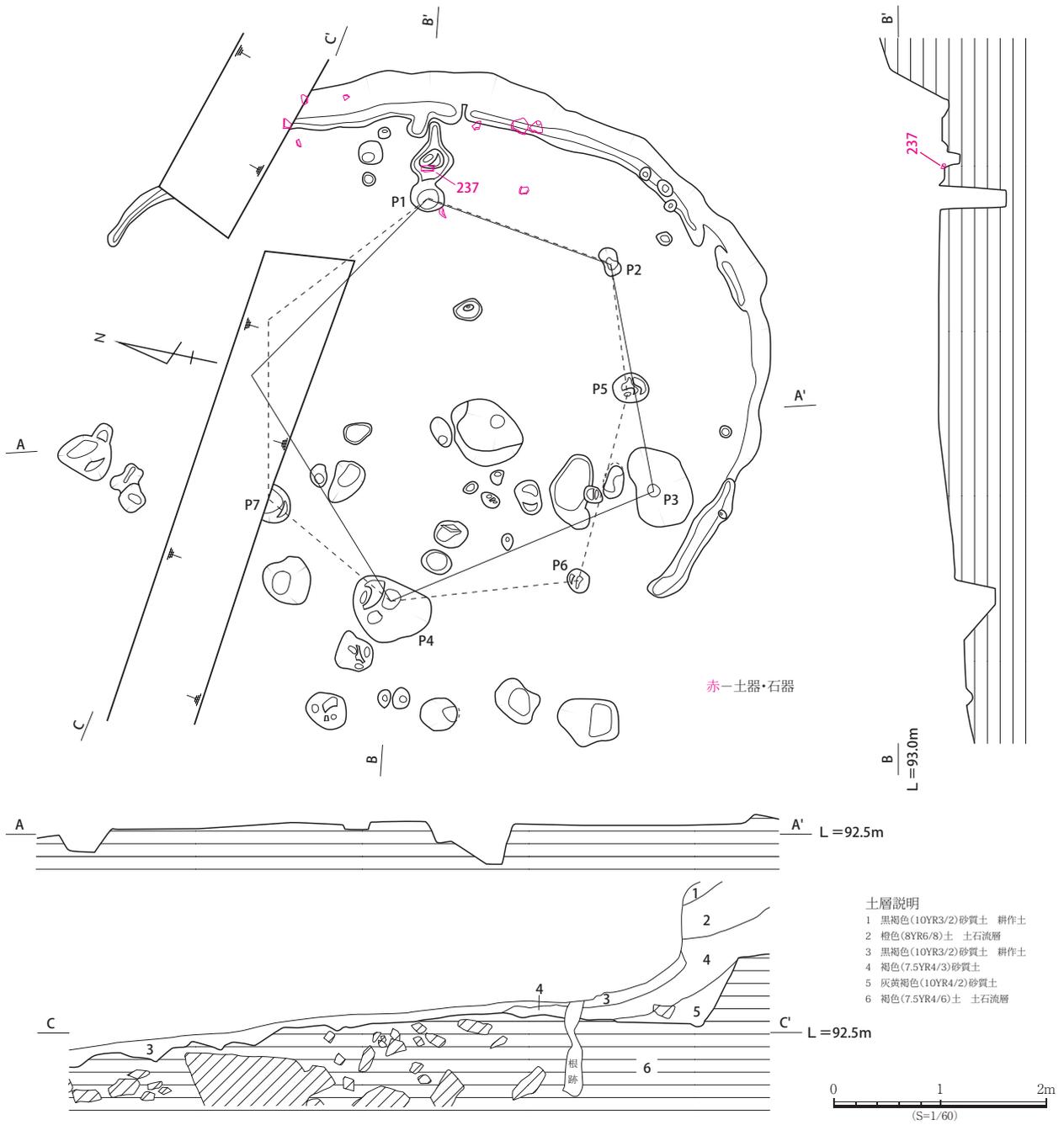
SH17 は SH11 の南西約 7 m に位置する竪穴住居跡である。本住居跡の位置する遺構面の埋土は浅く、畑により西半分は攪乱・消失し、東壁及び南壁の一部が残存する。床面最高所は標高 92.67 m で、壁高は最大 48cm である。壁溝は東壁及び南壁の一部に沿って遺存し、幅 3～12cm、深さ 2～6cm である。本住居跡の平面形状を残存する東・南壁と壁溝から推定すると、直径 5.5～6 m の歪な円形と考えられる。

床面は土石流層の直上に造られ、畑により攪乱を受けてピットの検出が困難であり、柱穴・攪乱痕・作物痕との判断が困難であった。住居の外形も歪であり、柱穴の組み合わせの特定は困難であるが、床面からの深さが 40～66cm の P1～P4 及び北側の想定位置(試掘溝内)の 5 本柱構造(実線)、または壁面との位置関係及び配置状況から P1・P2・P4～P7 及び北側の想定位置の 7 本柱構造(破線)が想定できる。P1 は底面形状が直径約 20cm の円形で、底面標高 91.99 m、P2 は底面形状が直径 10cm の歪な円形で、底面標高 92.15 m、P3 は底面形状が直径 12cm の円形で、底面標高 92.24 m、P4 は底面形状が長径 18cm、短径 15cm の長円形で、底面標高 92.02 m、P5 は底面形状が長径約 7cm、短径 4cm の長円形で、底面標高 92.41 m、P6 は底面形状が長径 12cm、短径 5cm の長円形で、底面標高 92.37 m、P7 は底面形状が残存部分で直径約 22cm の円形で、底面標高 92.38 m である。柱間距離は 5 本柱構造の場合 180～260cm、7 本柱構造の場合 120～180cm である。本住居跡の柱穴が位置・形状・規模にばらつきがあり、歪な住居である感があるのは否めないが、岩石を隙間なく含む掘り込みが困難な土石流層の直上に住居が造られていることに起因するならば、この場所に住居を造る必然性に一考を要するだろう。

本住居跡からは、弥生土器(68～71)及び砥石(237)が出土している。弥生土器の形態から II－1 期に属すると考えられる。

○SH18 (第 19 図)

SH18 は SH17 の南約 3 m に位置する竪穴住居跡である。畑及び水路により大半を消失し、北東側の床面及び壁がわずかに残存する。床面の標高は 92.26 m、平面形状・規模は不明である。壁高は最大 30cm で、壁溝は確認できなかった。床面から、その規模から柱穴に使用されたと考えられるピット P1・P2 を確認した。P1 は底面形状が直径約 12cm の円形で、底面標高 91.95 m である。P2 は底面形状が長径 38cm、短径 32cm、底面標高 92.08 m の歪な円形のピットの中に、底面形



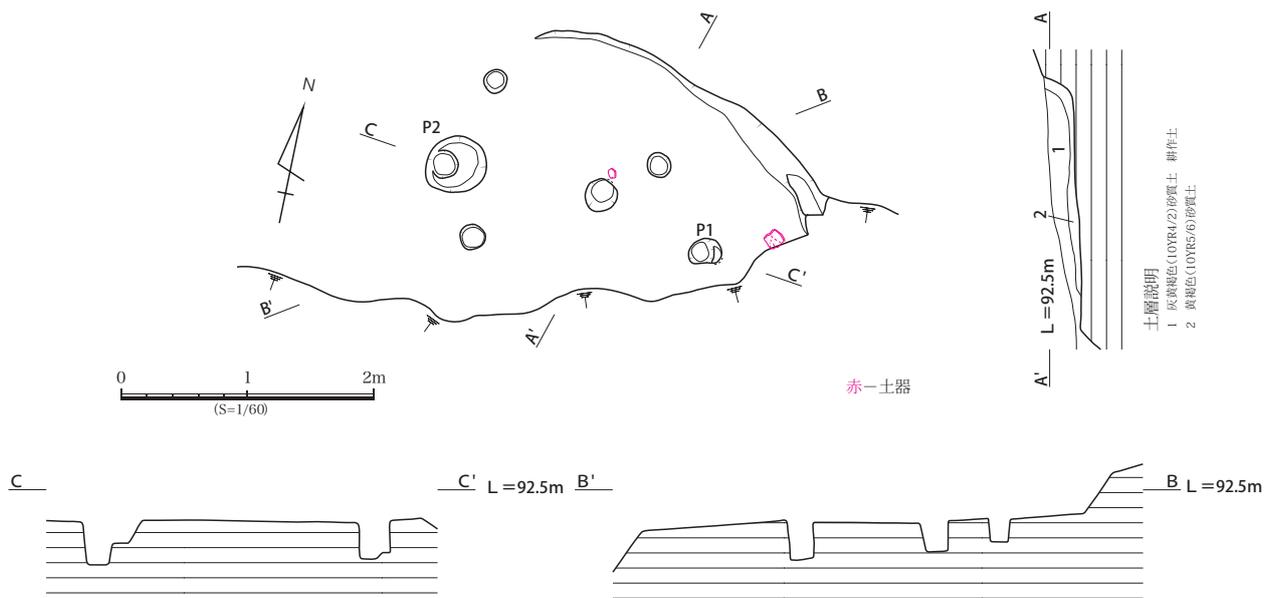
第 18 図 SH17 実測図 (S=1/60)

状が直径 15cm の円形で、底面標高 91.91 m のピットを持つ。遺構の大半は流失しており、残存している遺構では壁溝が確認できないため、柱穴をもつテラス状遺構の可能性もある。

本住居跡からは、弥生土器 (72) が出土している。弥生土器の形態から II - 3 期に属すると考えられる。

○ SH19・20・SX12 (第 20 図)

SH19 は北側調査区南西部、標高 91 m 付近に位置する竪穴住居跡である。東壁と北壁、南壁の



第 19 図 SH18 実測図 (S=1/60)

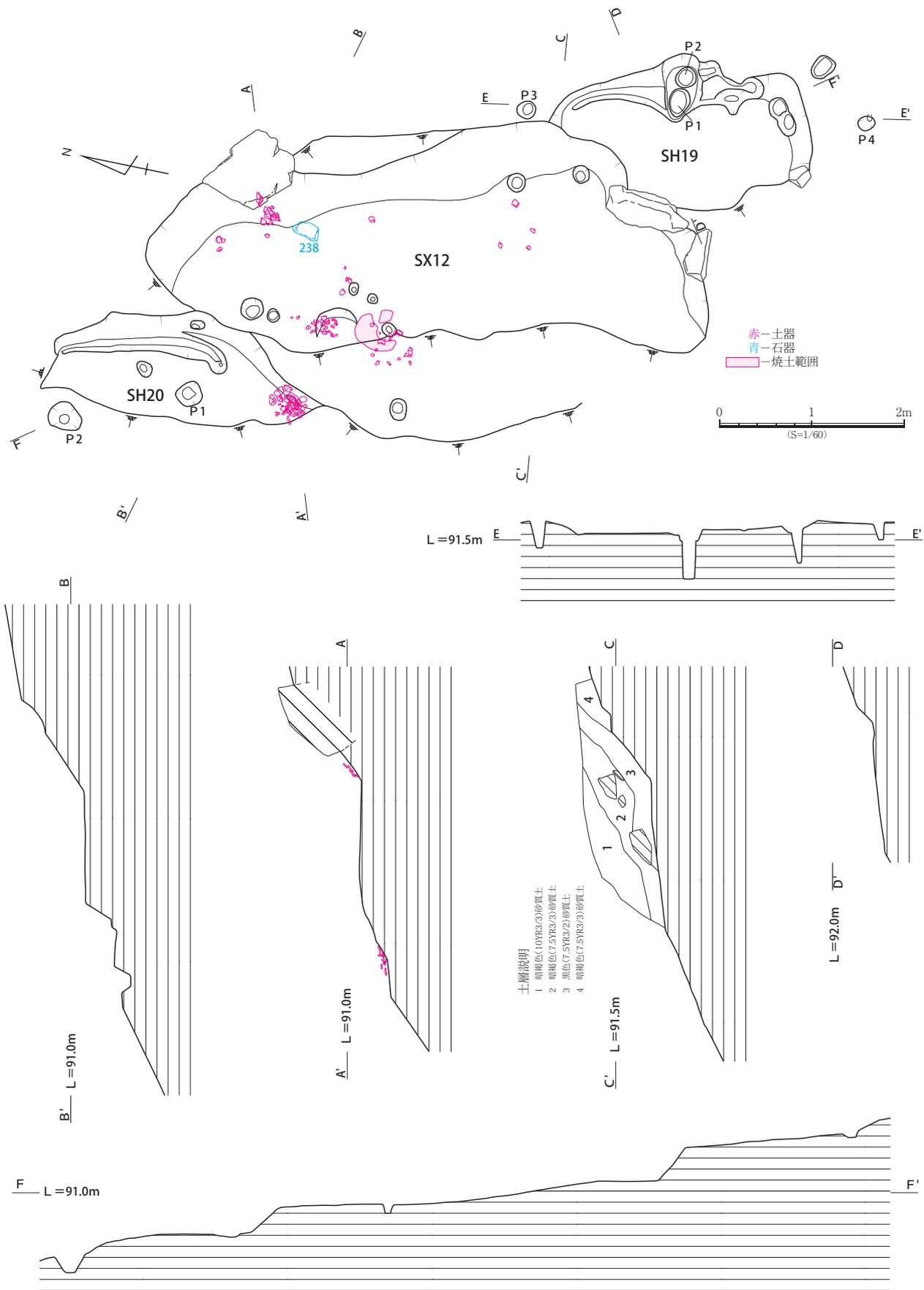
一部とそれに伴う床面が南北 230cm，東西 50～130cm の範囲で遺存するが，その他の部分は流失している。床面最高所は標高 91.63 m，壁高は最大で 18cm である。また東壁に沿って，幅 4～22cm，残存する深さ約 2～5cm の壁溝を確認した。残存部から推定できる平面形状は方形もしくは長方形である。

支柱穴は位置とその規模から P1 が想定される。P1 は底面形状が長径 60cm，短径 30cm の長円形で底面標高平均 91.49 m の掘り込みから，さらに約 41cm 掘り込まれて形成される。P1 の底面形状は長径 25cm，短径 16cm の長円形で，床面からの深さは 54cm，底面標高は約 91.07 m である。P1 が掘り込まれたピット内で P1 の西に接して P2 を確認した。P2 は底面形状が直径約 15cm の円形で，底面標高約 91.40 m である。P2 はその位置と規模から，P1 を補強する補助柱穴であると考えられる。また，掘り方外側の北側に P3，南側に P4 を確認した。P3 は底面形状が直径約 11cm の円形で，底面標高 91.42 m である。P4 は底面形状が直径約 5cm の円形で，底面標高 91.50 m である。P3・P4 は，その規模から補助柱穴であると考えられる。

なお，本遺構に伴う遺物は出土していない。

SH20 は SH19 の北西側に切り合って位置する竪穴住居跡である。東壁の一部とそれに伴う床面が奥行 30～80cm 程度遺存するが，その他の部分は流失している。東壁は残存部で北西－南東方向に約 175cm，そこで角度を変じて北東－南西方向に約 125cm の長さにわたり掘り込まれている。残存する壁高は最大で 28cm，床面最高所は標高 90.56 m である。また東壁に沿って，長さ約 170cm，幅 3～8cm，深さ約 2～6cm の壁溝を確認した。

支柱穴は，位置とその規模から P5～P6 の 2 本と想定される。P5 は，底面形状が直径 11cm の歪な円形で，底面標高 90.35 m である。P6 は，底面形状が直径 11cm の円形で，底面標高 90.12 m である。P1－P2 の柱間距離は 135cm である。



第20図 SH19・SH20・SX12 実測図 (S=1/60)

の円形で、底面標高 90.35 m である。ここで、P1～P3 の位置から、P1－P3 ラインと直交するように P2 から伸ばしたライン上の流失部分にもう 1 つの支柱穴が想定でき、本住居跡は支柱が 4 本の住居と想定される。

また P1－P3 ライン上、P1 から約 55cm 南西には、掘り方の長径が約 55cm、短径が約 30～40cm の歪な長円形を呈する掘り込みを確認した。底面形状は長径約 35cm、短径約 20cm の歪な長円形を呈し、底面標高は 90.42 m である。この掘り込みは床面での位置やその形状から炉跡であると考えられる。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

SH22 は SH21 の北西側に位置する竪穴住居跡である。東壁約 265cm と南壁の一部約 25cm 及びそれに伴う床面が壁面から約 20～30cm の範囲で遺存する。床面最高所は標高 90.39 m である。遺存する壁高は最高で 12cm である。東壁から南壁への屈曲点を中心に東壁沿いに 30cm、南壁沿いに 25cm、幅約 5～8cm、残存する深さ約 2cm の壁溝を確認した。残存部から推定できる平面形状は方形もしくは長方形である。

支柱は流失範囲が広いために確認し得なかったが、規模とその位置から可能性があるのは P4 である。P4 は底面形状が長径 15cm、短径 11cm の長円形で、底面標高が 90.04 m である。P5 は底面形状が長径 10cm、短径 7cm の長円形で、底面標高 90.23 m であり、規模が小さいために補助柱穴と想定される。

なお、本遺構に伴う遺物は出土していない。

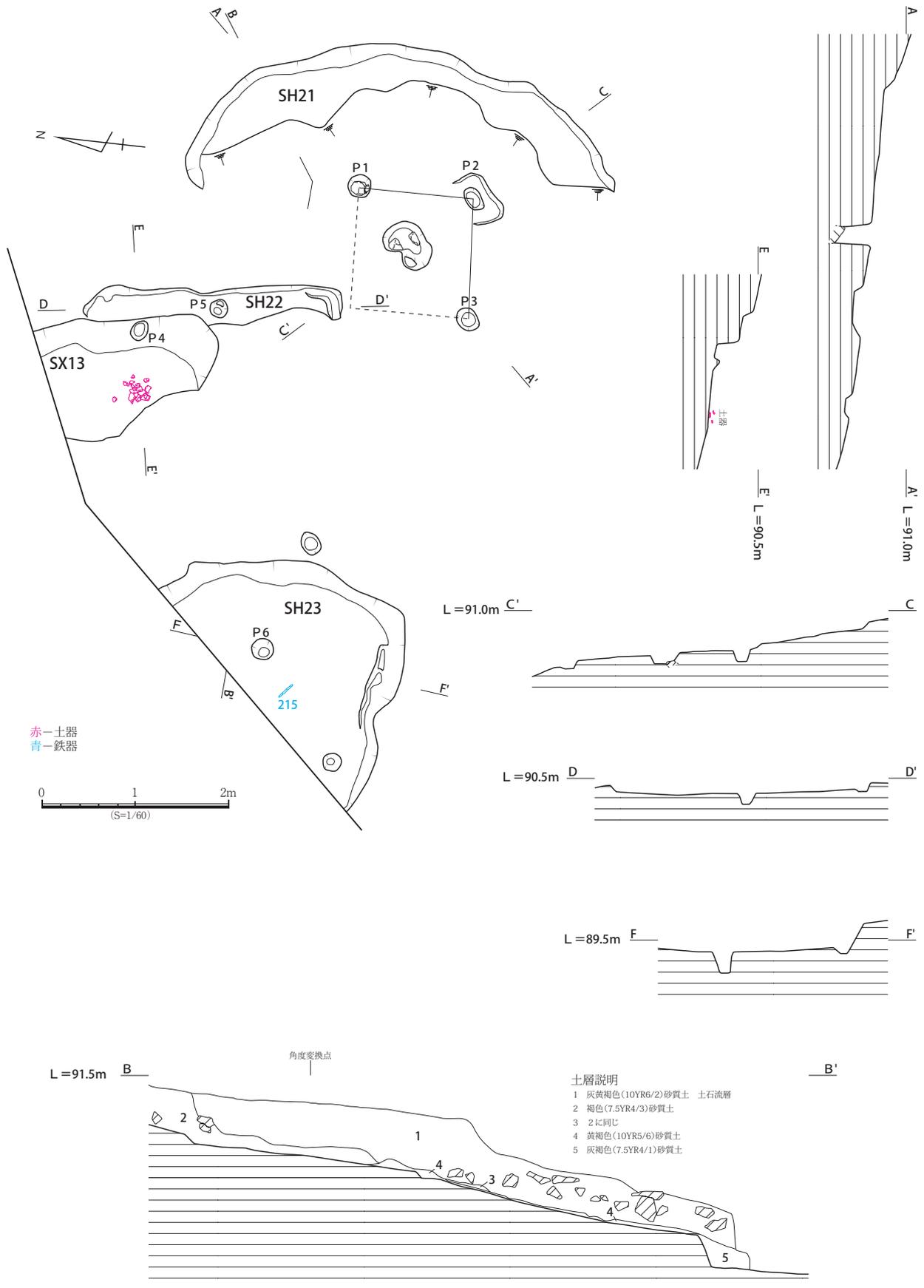
SH23 は SH22 の残存部から西約 2.5 m に位置する竪穴住居跡である。東壁及び南壁の一部とそれに伴う床面を確認したが、調査区外に遺構が延びていたため遺構全体を確認し得なかった。壁は東壁約 230cm、南壁約 200cm までの範囲を確認した。床面最高所は標高 89.43 m で、残存する壁高は最高 35cm である。また南壁の東側に沿って、約 90cm の範囲で幅 3～8cm、残存する深さ 6cm の壁溝を確認した。残存部から推定できる平面形状は方形である。

規模とその位置から支柱穴は P6 である可能性があるが、遺構全体を確認していないため断定はできない。P6 は底面形状が長径 13cm、短径 10cm の長円形で、底面標高 89.14 m である。

ここで、東壁及び南壁が調査範囲外へ延びる辺りで角度を変じつつあることから、本住居跡を一辺約 200cm 程度の方形住居と想定すれば、P6 に対応する支柱が西壁側に想定でき、本住居跡は支柱が 2 本の住居と想定できる。

なお、本遺構からは刀子 (215) が出土している。

SX13 は SH22 の西側に切り合う形で位置するテラス状遺構で、北側は調査範囲外へ延びる。SH22 と切り合う東側の掘り込みは調査範囲内で約 160cm、その掘り込みの南端からほぼ直角に方向を変じて延びる南側の掘り込みは約 30cm 遺存する。残存する掘り込みの高さは最高で 28cm である。平坦面は東壁に沿って、奥行 30～105cm の範囲で残存する。平坦面最高所は標高



第 21 図 SH21・SH22・SH23・SX13 実測図 (S=1/60)

ここで、東壁北端が僅かに角度を変じていることから、東壁北半の長さ 175cm を一辺と考え、東壁北半から南半への角度及び P1 - P2 の位置と柱間距離もふまえて本住居を復元すると、多角形の床面を持つ住居が想定できる。

なお、本遺構からは弥生土器（73）が出土している。弥生土器の形態からⅡ - 1 期に属すると考えられる。

SX12 は SH19 の北西側に切り合って位置するテラス状遺構である。残存部で北西 - 南東方向に約 100cm、角度を変じて南北方向に約 400cm、さらに角度を変じて北東 - 南西方向に約 225cm 掘り込まれて形成されている。残存する掘り込みの高さは最大で 45cm である。平坦面は奥行 100 ~ 170cm の範囲で遺存する。西側は傾斜が急になっており流失していると考えられる。平坦面最高所は標高 91.22 m であるが、北に向けて緩やかにレベルを下げ、中央部付近では標高 90.86 m 前後となる。

また、平坦面北西側で約 40cm 四方の範囲で焼土を検出した。焼土周辺には底面形状が直径 5cm、深さ 10cm 程度の小ピットを 3 基と、長さ約 40cm、高低差約 3cm の弧状になった段差を確認した。この段差は、火を使用する際の施設に伴うものと考えられるが、構造については残存する遺構では想定し得ない。段差上や焼土上周辺からは弥生土器片が出土し、また、平坦面の北東部隅から弥生土器（99・100）と台石（237）が出土した。以上のことから本遺構は何らかの生活の場であったと考えられる。

なお、本遺構からは弥生土器（98 ~ 101）が出土している。弥生土器の形態からⅡ - 1 期に属すると考えられる。

ここで遺構の先後関係についてみると、C - C' 土層の観察により SH19 が SX12 に先行する。SX12 と SH20 については、出土土器の形態は同時期であるが、SX12 の床面検出後に SH20 の掘り方を確認したことから、SH20 が先行すると考えられる。

○ SH21・22・23・SX13（第 21 図）

SH21 は北側調査区の北西部、SH15 の北西約 4 m に位置する竪穴住居跡である。東壁は径約 430cm の弧状を呈し、壁際から幅 20 ~ 50cm 程度の範囲で床面が残存する。床面最高所は標高 90.79 m である。残存する壁高は最高 10cm である。残存部から推定できる平面形状は円形である。

規模とその位置から支柱穴となり得るのは P1 ~ P3 である。P1 は底面に平面形状が約 14 × 13cm の方形の礫が表出している。この礫は北東から南西方向に傾斜している上に、柱穴の掘り方よりも広がりを持つため、意図的に置いたものではなく、柱穴を掘る際に表れたものと考えられる。そのため、標高の高い北東側が柱穴の底面であると想定でき、底面標高 90.34 m である。P2 は 2 段階に掘り込まれた柱穴と想定できる。外側の掘り込みは北西側が流失しているが、底面形状が約 30 × 50cm の隅丸長方形で、底面標高 90.58 m である。内側の掘り込みは底面形状が長径 18cm、短径 12cm の長円形で、深さ約 13cm、底面標高 90.44 m である。P3 は底面形状が直径約 14cm

90.02 mである。北側は調査範囲外であり、西側は流失しているため、本遺構の性格は想定しにくい。掘り込みの東部から南部へは、ほぼ直角に角度を変える平面形状から住居跡の可能性も考えられる。

SH22 との先後関係は土層断面からは確認し得なかったが、SH22 の床面検出後に SX13 の掘り方を確認したことから、SH22 より先行する可能性がある。

SX13 からは、弥生土器（102）が出土している。弥生土器の形態からⅡ－2－③期の時期に属すると考えられる。

ここで、それぞれの遺構の先後関係について見てみると、B－B' 土層断面の観察から SH23 → SH22 → SH21 の順に営まれたことが想定できる。SX13 は先述したように SH22 より先行する可能性があるが、SH23 との先後関係は確認し得なかった。

○ SH24（第 22 図）

SH24 は SH23 の南約 10 m に位置する。掘り方埋土は耕作土で浅く、西側は石垣により削られ、東壁と北壁の一部及びそれに伴う床面が遺存する。床面の最高所は標高 90.64 m、残存する壁高は最大 26cm、壁溝は確認できなかった。残存する東壁南端下の床面が北端同様のカーブを残していることから、東壁南端で壁面は西へ屈曲すると考えられ、このことから平面形状は隅丸方形又は隅丸長方形と想定できる。

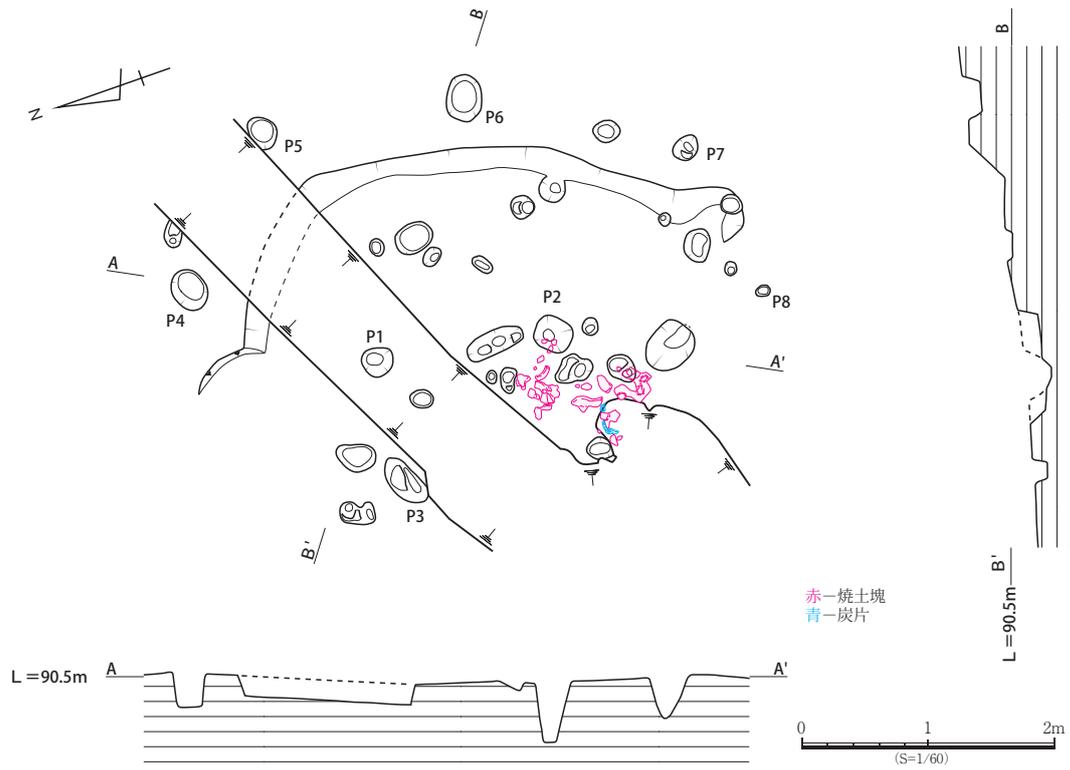
壁面及び想定壁面との位置関係及び規模から、支柱穴となり得るのは P1 ～ P3 及び西側の想定位置である。P1 は底面形状が長径 12cm、短径 9cm の長円形で、底面標高 90.18 m である。P2 は底面形状が直径 10cm の円形で、底面標高 89.98 m である。P3 は 2 段に掘り込まれた柱穴であり、1 段目は直径 20cm の半円形で底面標高 90.24 m である。2 段目は 1 段目の南側に接し、底面形状は長径 22cm、短径 3 ～ 5cm の長円形で底面標高 90.16 m である。柱間距離は P1 － P2 間で 140cm、P1 － P3 間で 100cm である。P2 の西側には、床面から 20cm の高さで焼土ブロックを確認した。状況から炉跡が流れたものと考えられる。

また、本住居の掘り方外側には P4 ～ P8 を確認した。P4 は底面形状が長径 24cm、短径 17cm の長円形で、底面標高 90.30 m である。P5 は底面形状が直径 16cm の円形で、底面標高 90.52 m である。P6 は底面形状が直径約 20cm の円形で、底面標高 90.73 m である。P7 は底面形状が長径 8cm、短径 5cm の長円形で、底面標高 90.60 m である。P8 は底面形状が直径約 10cm の円形で、底面標高 90.57 m である。掘り方を囲むように位置することから、上屋構造の先端部を固定する施設に関するものと考えられる。

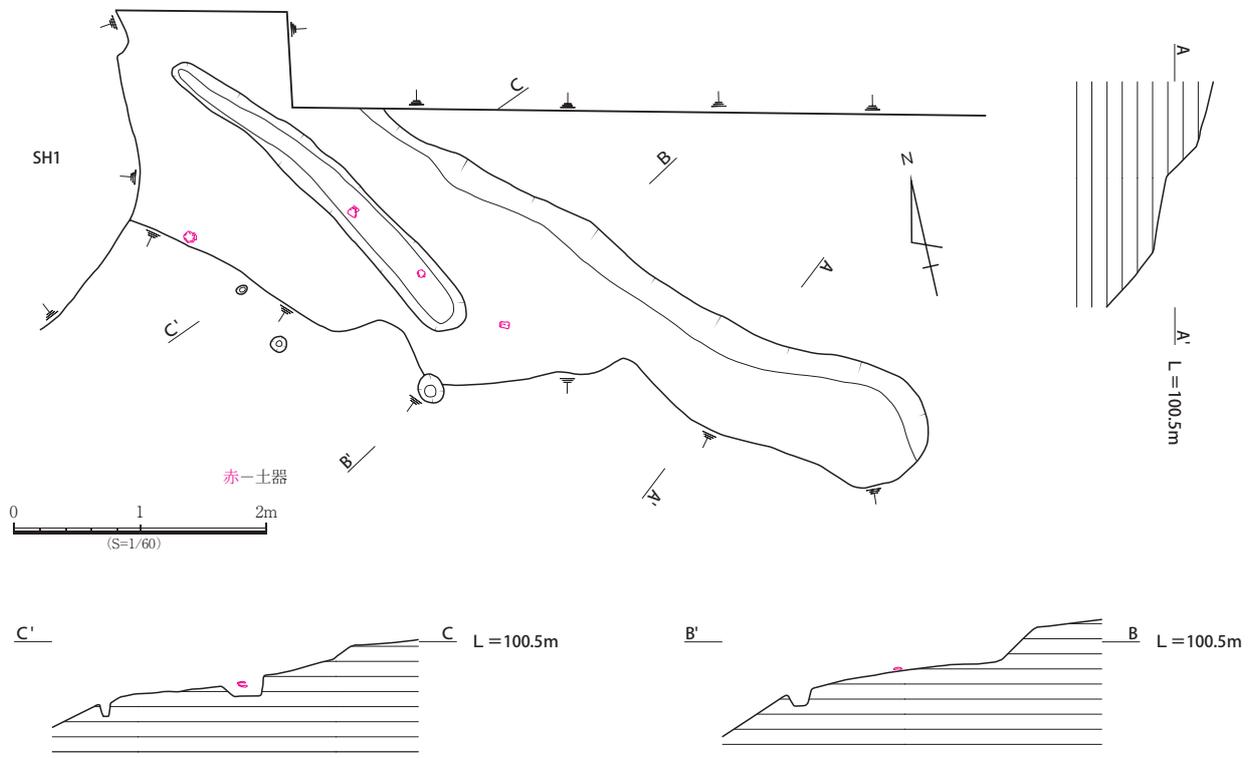
本遺構に伴う遺物は出土していない。

○ SX1（第 23 図）

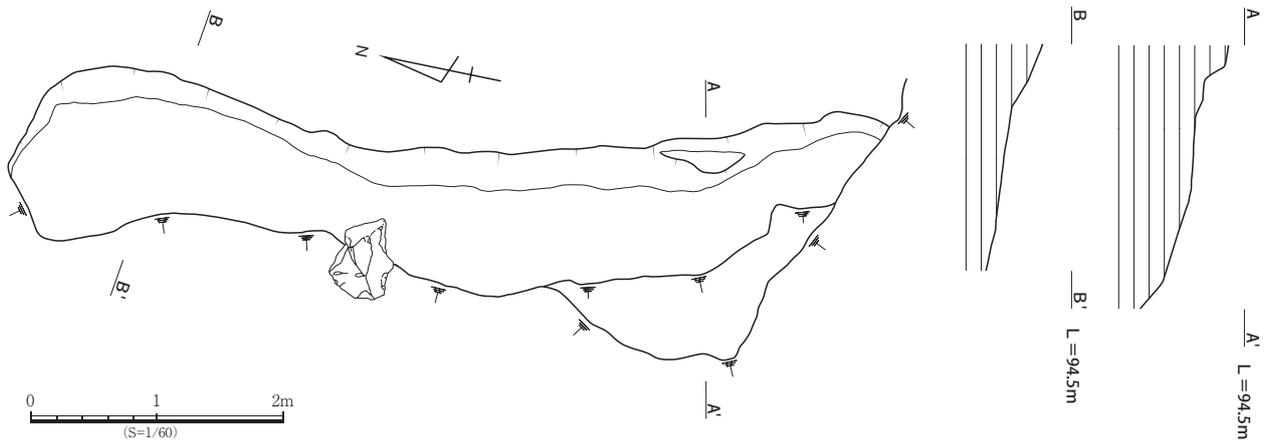
SX1 は北側調査区の北東部、SH1 の東側に隣接するテラス状遺構である。北側は調査範囲外に伸びており、南側は急傾斜であるため土石流等により流失している可能性がある。



第 22 図 SH24 実測図 (S=1/60)



第 23 図 SX1 実測図 (S=1/60)



第 24 図 SX3 実測図 (S=1/60)

本遺構は確認範囲で、北西—南東方向に約 520cm の範囲を掘り込んで平坦面を形成している。平坦面は、奥行約 25 ～ 160cm の範囲で遺存している。掘り込みの高さは最高 26cm で、平坦面最高所は標高 100.43 m である。平坦面の北西部では、掘り込み部から 40 ～ 70cm 程度離れて、長さ約 300cm、幅 6 ～ 14cm、残存する深さ 7 ～ 15cm の溝状遺構を確認した。また、平坦面の西側には、底面形状が直径 3 ～ 9cm の円形の小ピットを 3 基確認した。ここで、本遺構の性格を考察してみたい。平坦面に溝状遺構があることから通路とは考えにくい。また、隣接する SH1 との先後関係は土層観察では確認し得なかったが、出土遺物からは SH1 が先行している。これらのことをふまえると何らかの作業場であった可能性がある。

本遺構からは弥生土器 (74 ～ 77) が出土し、その形態から II - 2 - ③ 期に属すると考えられる。

○ SX3 (第 24 図)

SX3 は、SH17 の約 2.5 m 西側、標高 94 m の等高線にほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。南側は里道により削平を受けている。

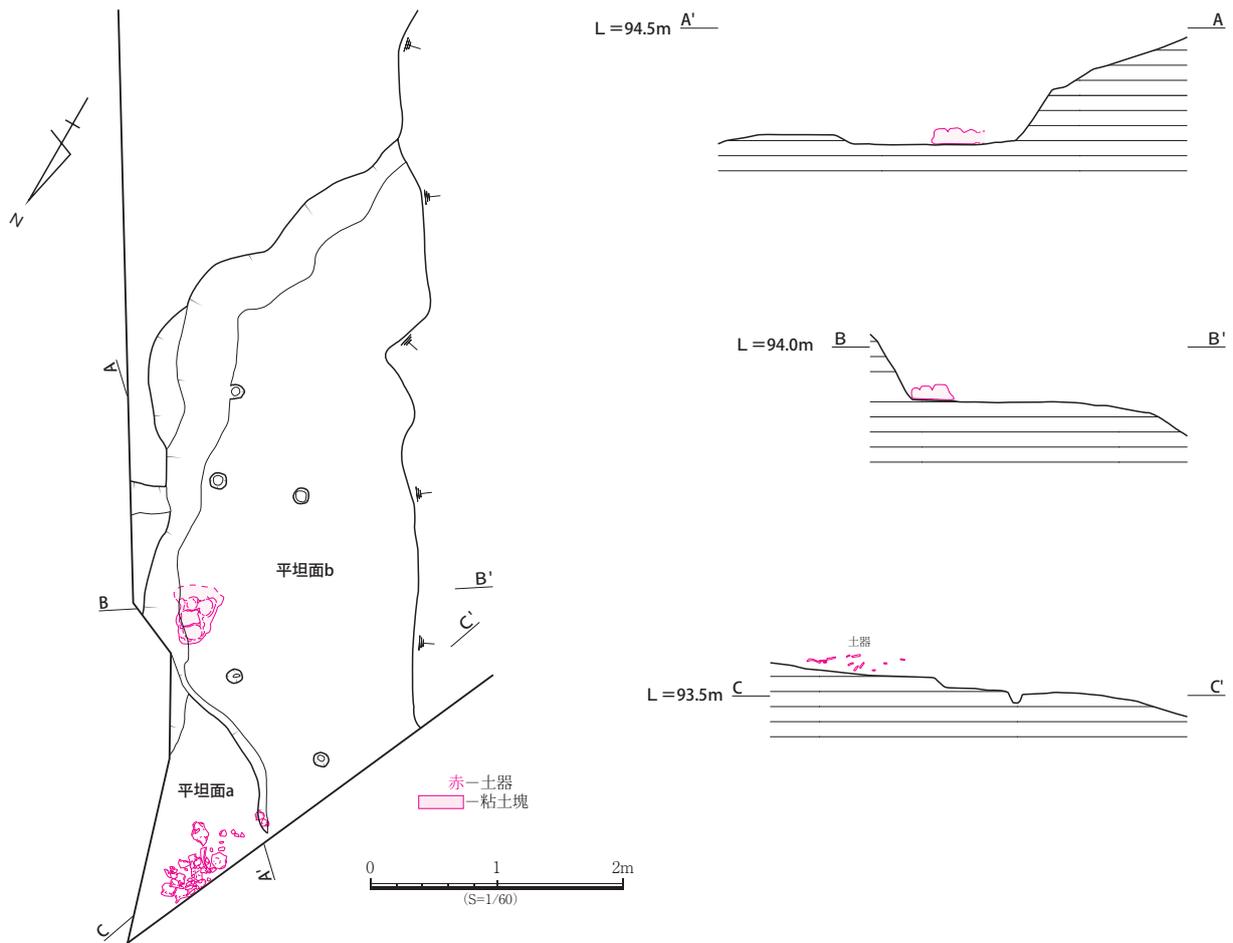
本遺構は確認範囲で、北端が北西—南東方向に約 60cm、そこで角度を変じて、南北方向に約 650cm の範囲で掘り込まれており、平坦面は奥行約 40 ～ 110cm の範囲で遺存している。掘り込みの高さは最高 24cm で、平坦面最高所は標高 94.10 m である。

本遺構と SH17 の遺構面直上の埋土は同一のものであること、SH17 の東壁とほぼ平行に平坦面が延びることから、本遺構は SH17 に伴い、整地の目的で築造された可能性がある。本遺構に伴う遺物は出土しておらず、時期は特定できなかった。

○ SX4 (第 25 図)

SX4 は北側調査区の最北端に位置するテラス状遺構である。北側及び東側が調査範囲外に延びており、遺構全体は確認し得なかった。また、平坦面の西側は急傾斜になっており、土石流等により流失している可能性がある。

本遺構は等高線にほぼ平行して掘り込んで平坦面が形成されている。平坦面は、調査範囲外にも

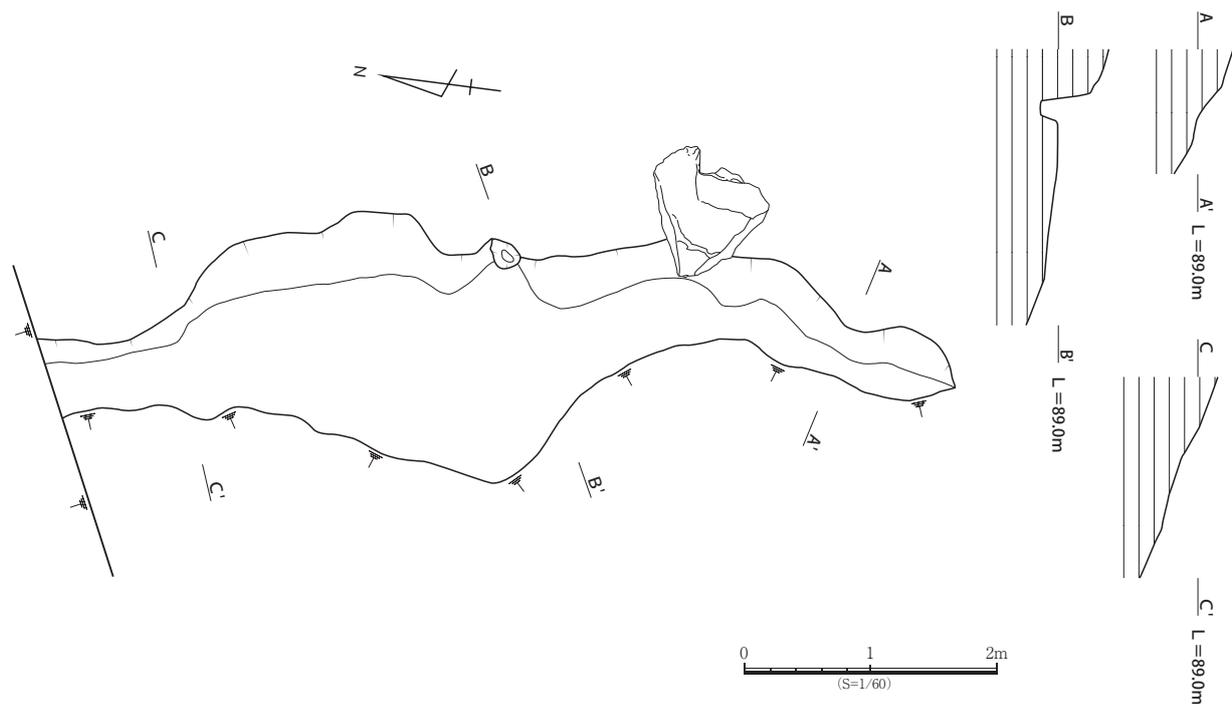


第 25 図 SX4 実測図 (S=1/60)

広がるが、北側の三角形の平坦面と、その平坦面から南側へ一段下がる広い平坦面の 2 か所に分かれる。ここで北側を平坦面 a、南側を平坦面 b と呼称したい。

平坦面 a は平坦面 b と重複しており、本来は南側にも広がっていた可能性がある。平面形状は確認部分で底辺約 100cm、高さ約 170cm の三角形形状で、平坦面最高所は標高 93.76 m である。出土した弥生土器 (83・84) は、ほぼ原位置を保っていると考えられ、その形態から II-1 期の時期に属すると想定される。

平坦面 b は確認部分では、北西-南東方向に約 420cm、そこで角度を変じて北東-南西方向に約 170cm の範囲で湾曲しながら掘り込まれ、その高さは最高 48cm である。平坦面は奥行 150 ~ 180cm 程度遺存する。平坦面最高所は標高 93.66 m である。平坦面には底面直径 2 ~ 8cm 程度の小ピットを 5 基確認した。また、平坦面の奥行が約 180cm と最も大きくなる位置の掘り込み際から平面約 45 × 30cm、高さ 8 ~ 12cm 程度の範囲で粘土塊を確認した。この粘土塊は直径約 10cm の円形、もしくは一辺約 10cm の方形の大きさで 4 つの塊に分かれている。南側は試掘溝で削平されているため、本来は 4 つ以上の塊であったと推定される。この粘土塊は遺構面直上に位置し、意図的に置かれた状態で検出したことから、原位置を保っているものと考えられる。平坦面 b からは弥生土器 (85) が出土し、その形態から II-2-③期あたりに属すると考えられる。



第 26 図 SX14 実測図 (S=1/60)

○ SX14 (第 26 図)

SX14 は北側調査区の西側、標高 89 m の等高線に、ほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。西側は急傾斜になっており流失している可能性がある。

本遺構は確認範囲で、ほぼ南北方向に約 720cm の範囲で掘り込まれており、平坦面は奥行約 25 ~ 170cm の範囲で遺存している。残存する掘り込みの高さは最高 25cm で、平坦面最高所は標高 89.00 m である。掘り込み際のほぼ中央付近に、底面形状が長径 12cm、短径 6cm の長円形で、底面標高 88.86 m のピットを確認した。残存部が少ないため、本遺構の性格は想定し得なかった。

なお、本遺構に伴う遺物は出土しておらず、時期は特定できなかった。

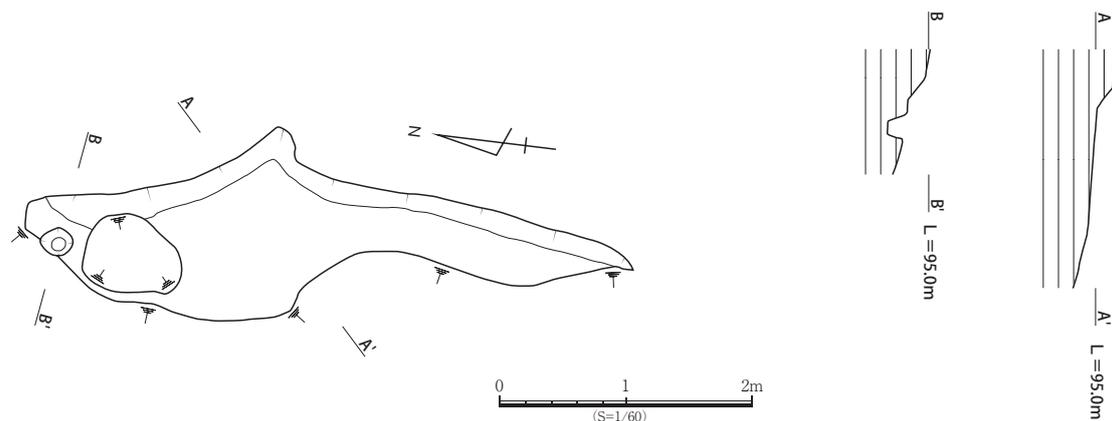
○ SX15 (第 27 図)

SX15 は北側調査区の南西部、SH20 の西約 5 m に位置し、西へ緩やかに下る斜面上の標高 89 m の等高線にほぼ平行して 20 ~ 30cm 程度掘り込まれ、平坦面が形成されるテラス状遺構である。西側は土石流によって流出し、また、南側は里道で削られているが、本来は調査範囲外にも延びていたと考えられる。また、本遺構を東西に横切る試掘溝より北側の壁は、土石流によるかく乱のため確認できなかったが、存在していたと考えられる。

平坦面は確認部分で幅は南北約 820cm、奥行きは東西 70 ~ 200 cm の規模で残存し、最高所は標高 88.79 m である。ただし、A - A' 土層の観察から、第 5 層が本来の床に当たる可能性があり、その場合、平坦面は現状より西側へ約 40cm 広がっていたことが想定できる。この平坦面では、試掘溝を挟んで南北に延びる溝状遺構を 2 列確認した。これらの溝状遺構は、試掘溝を挟んで位置



第 27 図 SX15 実測図 (S=1/60)



第 28 図 SX16 実測図 (S=1/60)

が東西に約 1 m ずれており、試掘溝の幅から見て一連のものである可能性は低い。このうち、北側の溝状遺構は、確認部分の長さ約 90cm、幅 10～18cm、深さ 4～6cm である。また、南側の溝状遺構は、確認部分の長さ約 550cm、幅 1～48cm、深さ 1～10cm で、北側から約 1.7 m の範囲では形状が歪であり、また、南側から約 80cm のところで断続する。平坦面の南半部では、溝の西側に接して確認部分で幅は南北約 400cm、東西に最大で奥行き約 80cm、厚さ 8～9cm の黄橙色のきめ細かい土が広がり、貼床と考えられる。平坦面の南端部では、柱穴に匹敵する規模と形状を持つピット 1 基を確認した。このピットの性格については、他に対応する柱穴が確認できなかったため不明である。この他、底面形状が直径 4～7cm の円形で、深さ 10～20cm の小ピット 6 基を確認したが、それらの性格についても不明である。

本遺構からは弥生土器 (103～108) が出土した。その形態から、本遺構の廃棄の下限はⅡ-2-③期と考えられる。

○SX16 (第 28 図)

SX16 は南側調査区の北西側、標高 95 m の等高線にほぼ平行して掘り込まれ平坦面が形成されるテラス状遺構である。西側は棚田造成に伴い削平されている。

本遺構は確認部分で、南北方向に約 490cm の範囲を掘り込んで形成される。平坦面は幅約 25～125cm の範囲で遺存している。残存する掘り込みの高さは最高 14cm で、平坦面最高所は標高 95.01 m である。本遺構の遺存範囲のみではその性格は明らかではないが、掘り込みの平面形状を見ると、等高線に沿って外湾することから、確認範囲周辺のみで用途を持たせることを意図したものではなく、さらに連続して形成されていた通路である可能性が考えられる。また、確認範囲の北端付近に、底面形状が直径 10cm の円形で、底面標高が 94.67 m のピットを確認したが、残存部分のみではその性格を想定し得なかった。

本遺構からは弥生土器 (109・110) が出土し、その形態からⅡ-3 期に属すると考えられる。

○柱穴群・SK 1（第 29・30 図）

柱穴群は北側調査区の東端部、標高 100 m 付近に位置する。南側は調査区を南北に分断する流路により流失している。位置関係から、軸方向を南北にもつ柱穴群を柱穴群 a・b、東西にもつものを柱穴群 c と呼称し、述べていくこととする。

柱穴群 a は、ほぼ南北に軸をもつ P1～P4 からなる柱穴群で、状況から、4 本柱構造の建物と考えられるが、東側に残存状態が不整形ながらも掘り方があることから、竪穴住居跡の可能性もある。P1 は底面形状が直径約 30cm の円形で、底面標高 99.79 m、P2 は底面形状が長径 50cm、短径 30cm の長方形で、底面標高 99.76 m、P3 は底面形状が直径 30cm の円形で、底面標高 99.61 m、P4 は底面形状が長径約 18cm、短径約 11cm の長円形で、底面標高 99.40 m である。柱間距離は東西が約 230cm、南北が約 280cm である。

柱穴群 b は、南北方向からわずかに西へ傾いて軸をもつ P2・P4～P9 からなる柱穴群である。調査範囲外のため確認することができなかったが、本来は P9 の東側の想定柱穴を含めた 8 本柱構造の建物と想定できる。P5 は底面形状が長径 38cm、短径 21cm の歪な長円形で、底面標高 99.66 m、P6 は底面形状が直径 20cm の円形で、底面標高 99.63 m、P7 は底面形状が長径 34cm、短径 24cm の長円形で、底面標高 99.57 m、P8 は底面形状が直径 11cm の円形で、底面標高 99.50 m、P9 は底面形状が一辺約 16cm の方形で、底面標高 99.45 m である。柱間距離は東西が 190cm、南北が約 260cm である。

柱穴群 c は、柱穴群 a の軸方向より約 90° 西へ軸方向をもつ柱穴群である。本来は南側に対となる柱穴群が存在したと思われるが、流路により流失しており、柱穴の組み合わせは明らかにできなかった。

本遺構の P10 からは弥生土器（111）が出土し、その形態からⅡ-2-③～Ⅱ-3 期に属すると考えられる。また、P7 埋土からは炭化した桃の種子が出土した。

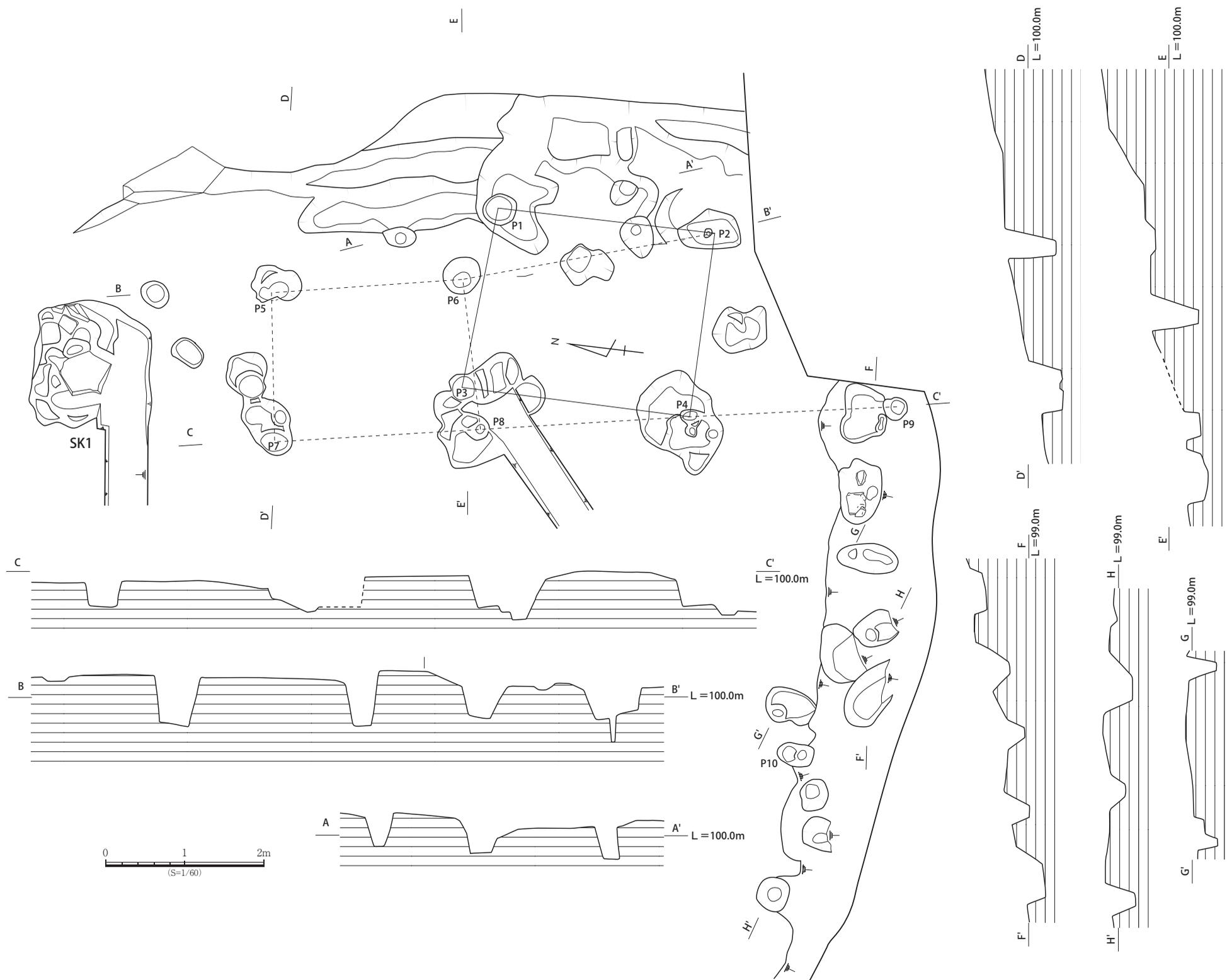
SK1 は柱穴群 b の北側に接して位置する。南壁がトレンチにより削平されている。平面形状は長方形である。本土坑の北東から南西に向けて土石流が流れたことが確認でき、掘り方内のかく乱が激しく底面は歪であるが東西約 80cm、南北約 50cm、深さは最高 70cm で底面の平均標高は 99.70 m である。本来は掘り方内に 1 段、段をもった土坑（想定底面）を意識して造られたものと思われる。

ところで、本土坑は通常の貯蔵穴用の土坑に比べ浅いが、これは本土坑の上を土石流が流れており、上部を流失したためと考えられる。

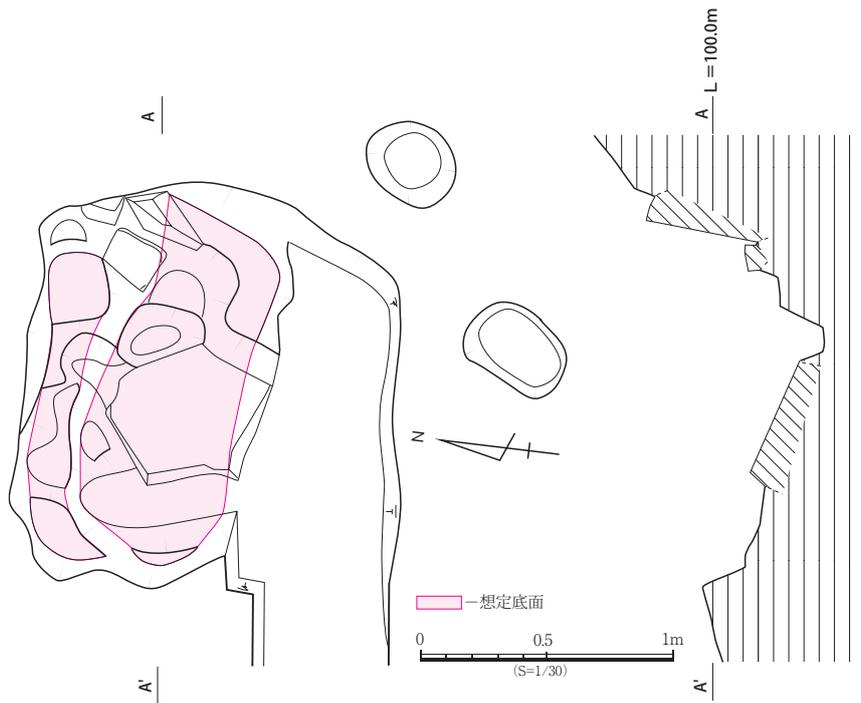
本遺構からは弥生土器（112～116）が出土し、その形態からⅡ-1 期の時期に属すると思われる。

○SD1・SK5（第 31 図）

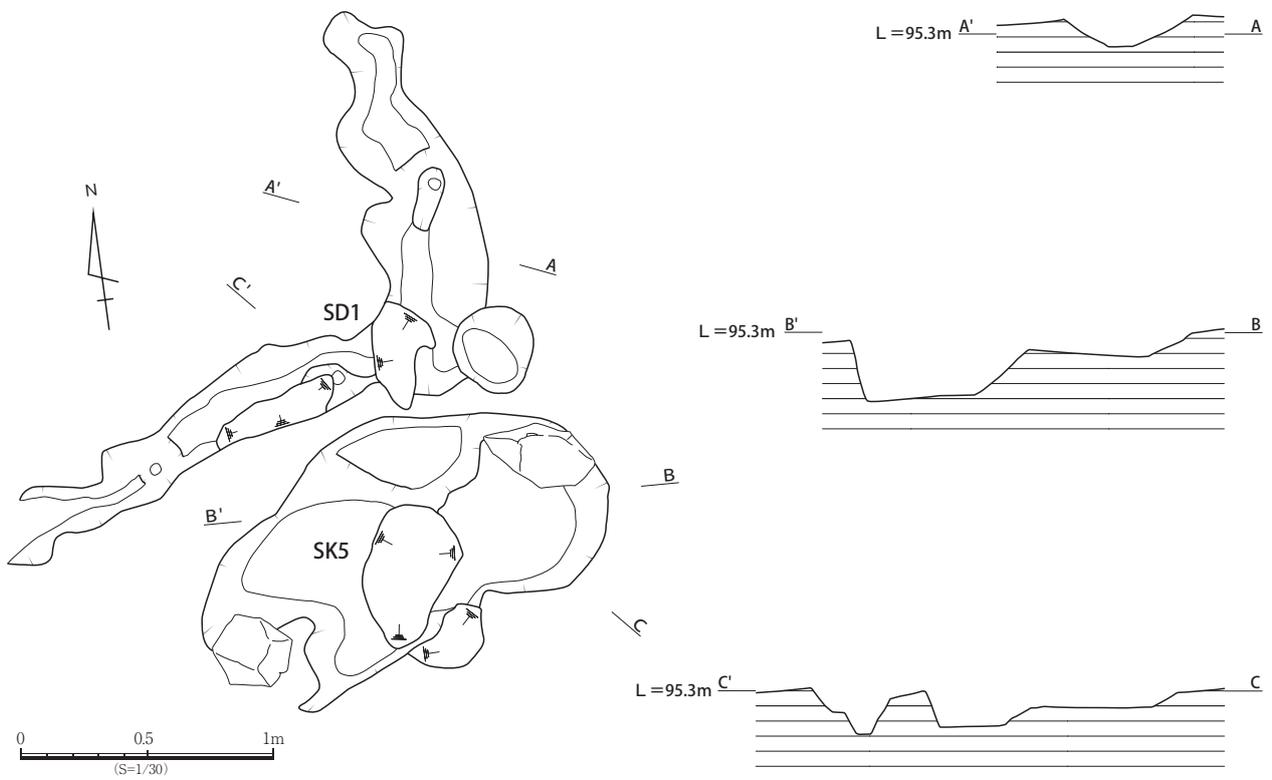
SD1 は SH11 の南側に接して位置する溝状遺構である。南北方向に約 150cm、そこで角度を変じて東北東-西南西方向に約 200cm 掘り込まれているが、その先は流失している。底面は幅 9～



第29图 柱穴群・SK1 实测图 (S=1/60)



第 30 図 SK1 実測図 (S=1/30)



第 31 図 SD1・SK5 実測図 (S=1/30)

15cm, 残存する深さ約 5 ~ 12cm である。底面北端部の標高は 95.31 m で, 小ピットを挟んでレベルを下げつつ, 西南西端では標高 95.02 m となる。溝内に底面形状が約 5cm の円形の小ピットを 3 基確認した。本遺構は, その形状から方形住居の南東隅の壁溝である可能性がある。

本遺構に伴う遺物は出土していないが, 土層観察により SH11 より先行する。

SK5 は SD1 の南側に接する土坑である。平面形状は長円形を企図していると想定されるが歪である。底面は歪な形状の 3 つの平坦面からなっている。50 × 40cm の歪な形状の東側の平坦面は最もレベルが高く標高 95.22 m, そこから北西側に一段下がった径 50cm の半円形の平坦面は標高 95.16 m, さらに一段下がった西側の平坦面は南北 65cm, 東西 10 ~ 60cm の歪な形状で, 標高 95.04 m である。最も高い平坦面と最も低い平坦面の間には礫が風化してできた窪みがあり, 土坑の使用時には礫が存在し, 底面に表れていたものと想定される。また, 土坑の東端と西端には遺構面下より露出する石を検出した。これらのことから, 底面の 3 つの平坦面はそれぞれが築造されたものではなく, 底面に表れた石により規制を受けたものであると考えられる。本土坑の性格については流失部分が多いため, 想定し得なかった。

なお, 本遺構に伴う遺物は出土していない。

遺構間の先後関係については, 土層観察から SD1 が SK5 に先行すると想定される。

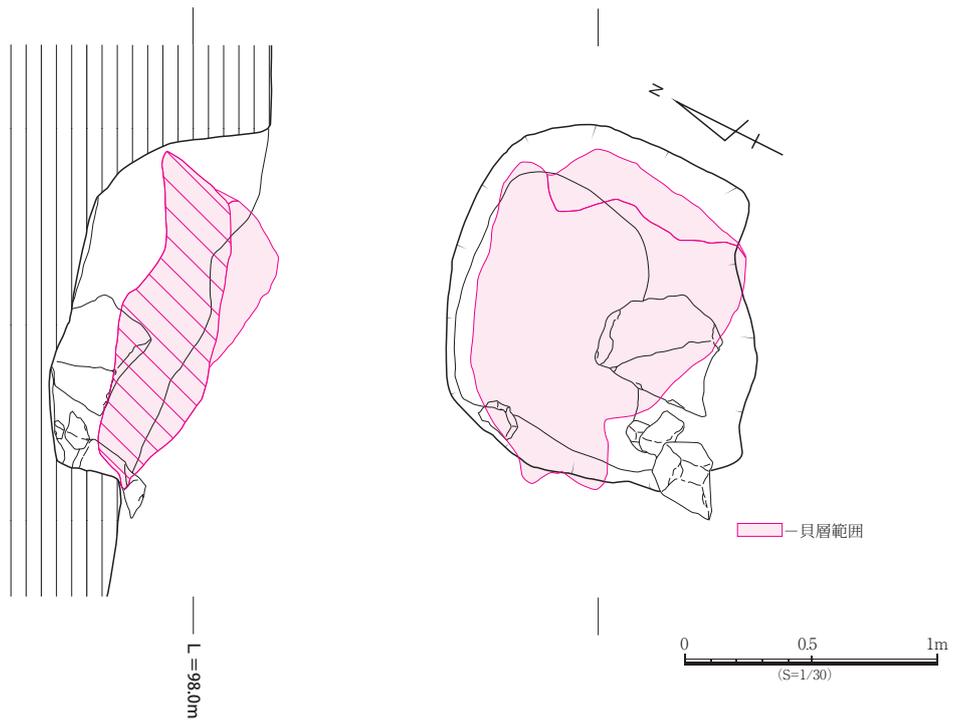
○ SK2 (第 32 図)

SK2 は, SH5 遺構面上の埋土に掘り込まれた土坑である。土坑埋土から弥生土器片が出土し, 掘り方が SH5 直上埋土から掘り込まれていたため, 弥生時代の遺構と想定した。平面形状は長方形で, 底面の規模は約 45 × 35cm である。深さは現状で約 30cm, 底面標高は約 97.75 m である。土坑南西隅を中心に礫が露出している。その規模・形状から本土坑は貯蔵用であると想定される。また, 土坑内には約 60 × 40cm の範囲で, カキ・アサリを中心とし, カガミガイなどを含んだ沿岸部に生息する種類の貝殻による層が検出された。貝層は, 土坑底面より約 10cm 上層に 15 ~ 20cm 程度の厚さで堆積していた。このことから, 本土坑が貯蔵穴としての用途を終えた後に貝を廃棄したものと考えられる。

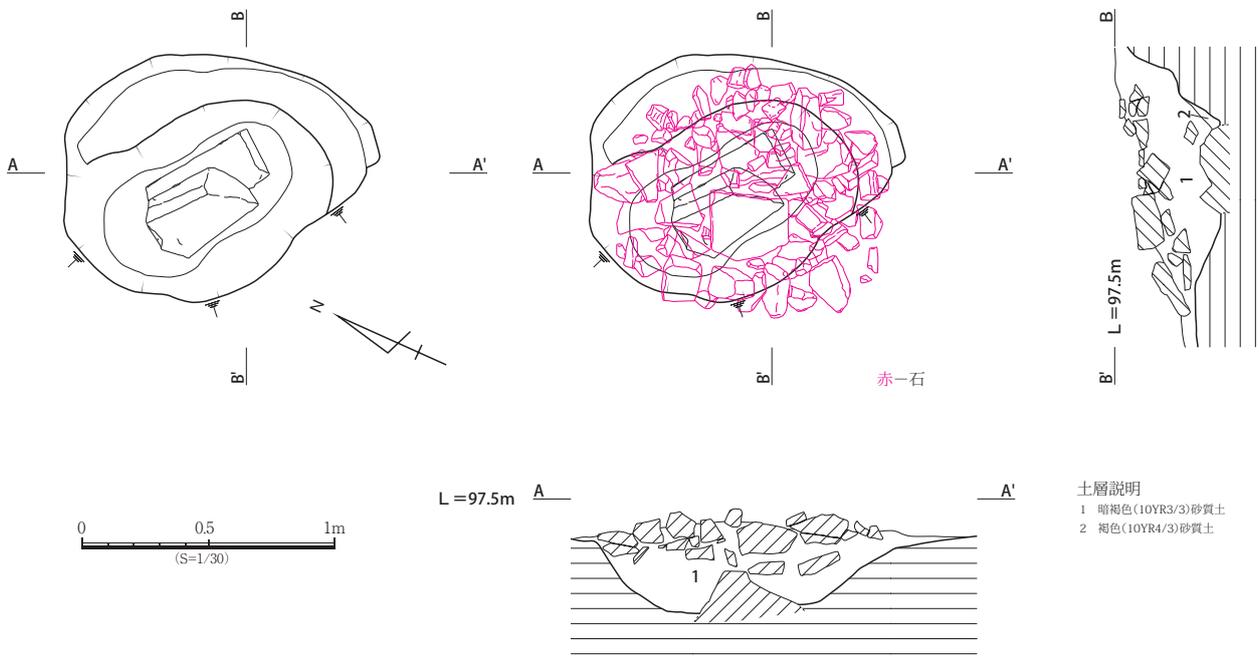
本遺構に伴う時期を想定し得る遺物は出土していないが, SH5 埋土に築造されているため, 少なくとも SH5 の想定時期である II - 3 期以降に属する土坑と考えられる。

○ SK3 (第 33 図)

SK3 は SH6 の東約 1 m に位置する。平面形状は長円形で, 掘り方内に 1 段平坦面を有する。平坦面の西側半分は斜面のため流失しているが, 南東端は西側へと続く痕跡をみせ, 北東端は明確に終了するため, 平坦面は馬蹄形状であった可能性がある。平坦面は南北約 110cm, 幅 10 ~ 20cm で遺存し, 深さは最高で 19cm である。底面は長径 80cm, 短径約 40cm の長円形で, 底面には 50 × 30cm の範囲で土石流層から石が露出し, 石の頂点の標高は一段目の平坦面より高い。また,



第 32 図 SK2 実測図 (S=1/30)



第 33 図 SK3 実測図 (S=1/30)



第 34 図 SK4 実測図 (S=1/30)

掘り方内上面から底面の石の頂点との間で角礫を確認した。角礫の大きさは 10～30cm で、土層はほぼ単一の層から構成される。

さて、本土坑の性格であるが、本土坑は通常の貯蔵穴用の土坑に比べ掘り込みが浅く、貯蔵穴以外の用途に用いられたと考えられる。作成途中に大きな石がでてきたため放棄、もしくはその用途を終えて埋める際に、本遺跡の地盤が土石流層であるために多量に出土していた礫を廃棄したものと考えられる。

本土坑の礫及び埋土からは、弥生土器 (117・118) が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、本遺構の廃棄時の下限は、弥生土器の形態からⅡ-2-①期あたりに属すると考えられる。近接する SH6 と同時期のものであり、SH6 の付属施設の可能性もある。

○SK4 (第 34 図)

SK4 は SX2 の南側約 2m に位置する土坑である。平面形状は円形を意識していると考えられるが、底面形状は長方形になっている。底面の規模は南北 70cm、東西 40cm である。深さは現状で約 25cm、底面標高は約 94.08 m である。また、底面で最もレベルの低い西側隅に長さ 33cm、底面

の幅3～4cm、深さ約4cmの溝状遺構を確認した。形状・規模から本土坑は貯蔵用であると想定される。

また、土坑内及び上面には多量の礫を検出した。礫はレベルの高い東側では土坑の範囲内に留まるが、レベルが低くなる西側では土坑外に検出範囲が広がる。これは、本来土坑内に位置していた礫が土石流等による土坑上部の流失とともに移動したものと考えられる。ただ礫のレベルは大きく動いているとは考えにくく、少なくとも検出した礫の最上面、標高94.65mまでは土坑が存在していたと想定し得る。ここで、この礫群の性格について考察したい。本遺跡は土石流層上に構築されているため、掘削を行うことで多量の礫が検出される。このことから、これらの礫を廃棄する場所として、廃絶された本土坑を利用したものと考えられる。

本遺構からは弥生土器(119・120)が出土し、その形態からⅡ-1期に属すると考えられる。

○SK6(第35図)

SK6はSH12の東約1.5mに位置する。平面形状は長円形で、底面の規模は長辺175cm、短辺約135cm、深さ60cmである。西壁側には1mを超える巨石が露出し、北西部掘り方上面は巨石をまたぎ西へ広がることから、本来は東西約140cm、南北170cmの長方形のプランを意識して造り始めたが、土石流層を掘り込んでいるため巨石が表れ、これ以上の掘り込みが困難となり、現状の形になったと考えられる。

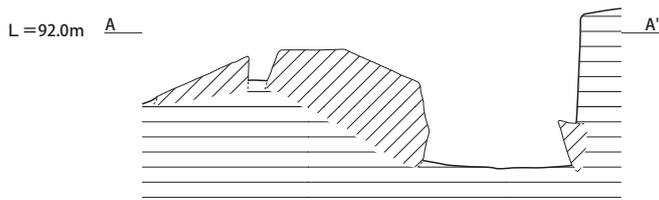
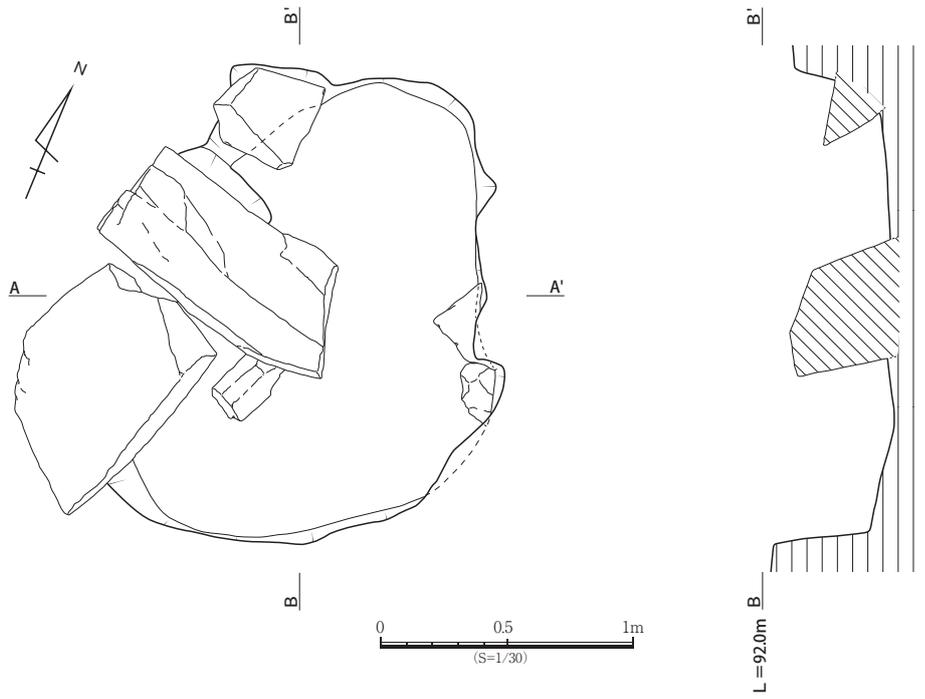
SK6の掘り方内南半分には、掘り方上面から底面まで角礫が確認された。角礫の大きさは10～20cmを中心に大きなものは50cmのものまで様々である。土層も単一の層から構成される。この土坑はその規模・形状から本来貯蔵用であると想定されるが、作成途中で放棄、もしくはその用途を終えて埋める際に、本遺跡の地盤が土石流層であるために多量に出土していた礫を廃棄したものと考えられる。

本土坑の埋土からは、弥生土器(121～124)が出土している。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、本遺構の廃棄時の下限は、弥生土器の形態からⅡ-2-③期に属すると考えられる。

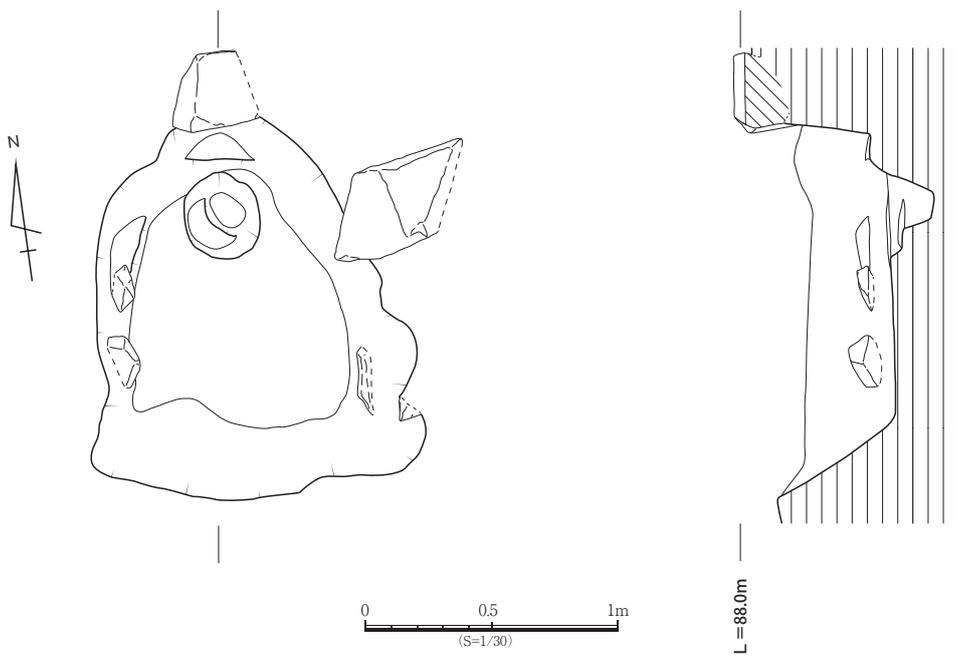
○SK8(第36図)

SK8は北側調査区の西端、SX15の北約5mに位置する。平面形状は歪な台形で、底面の規模は南北約100cm、北辺約45cm、南辺約80cm、深さは東側の最深部で60cm、底面標高約87.40mである。掘り方上面の東側並びに北側に石が露出していることから、本来は方形プランを意図して造り始めたが、SK6と同じく土石流層を掘り込んでいるため、掘り込む途中で現れたこれらの石に規制され、現状の形になったと考えられる。底面北隅には底面形状が長径約15cm、短径約10cmの長円形で、底面標高87.24mのピット1基を確認した。

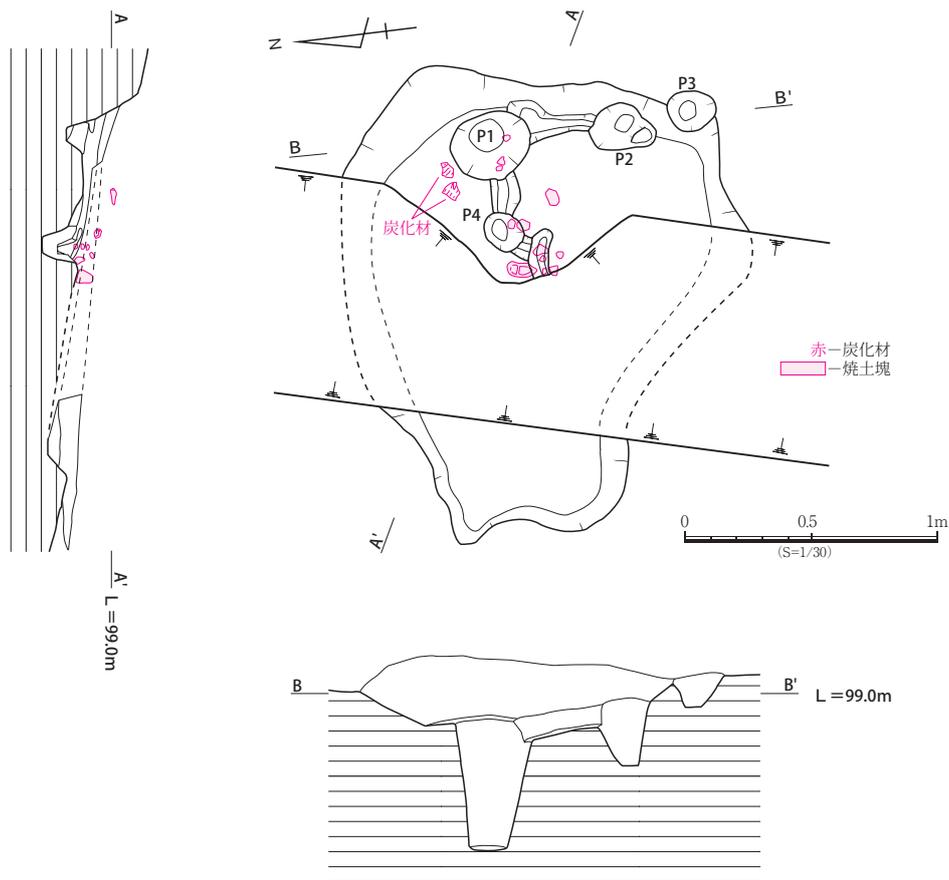
本遺構の性格については、上部を土石流で削られていることから、本来はさらに深かったと想定でき、その規模と形状から貯蔵穴と考えられる。その場合、先述のピットには昇降用階段の基部または簡単な屋根を支える柱が差し込まれていたことが考えられる。



第 35 図 SK6 実測図 (S=1/30)



第 36 図 SK8 実測図 (S=1/30)



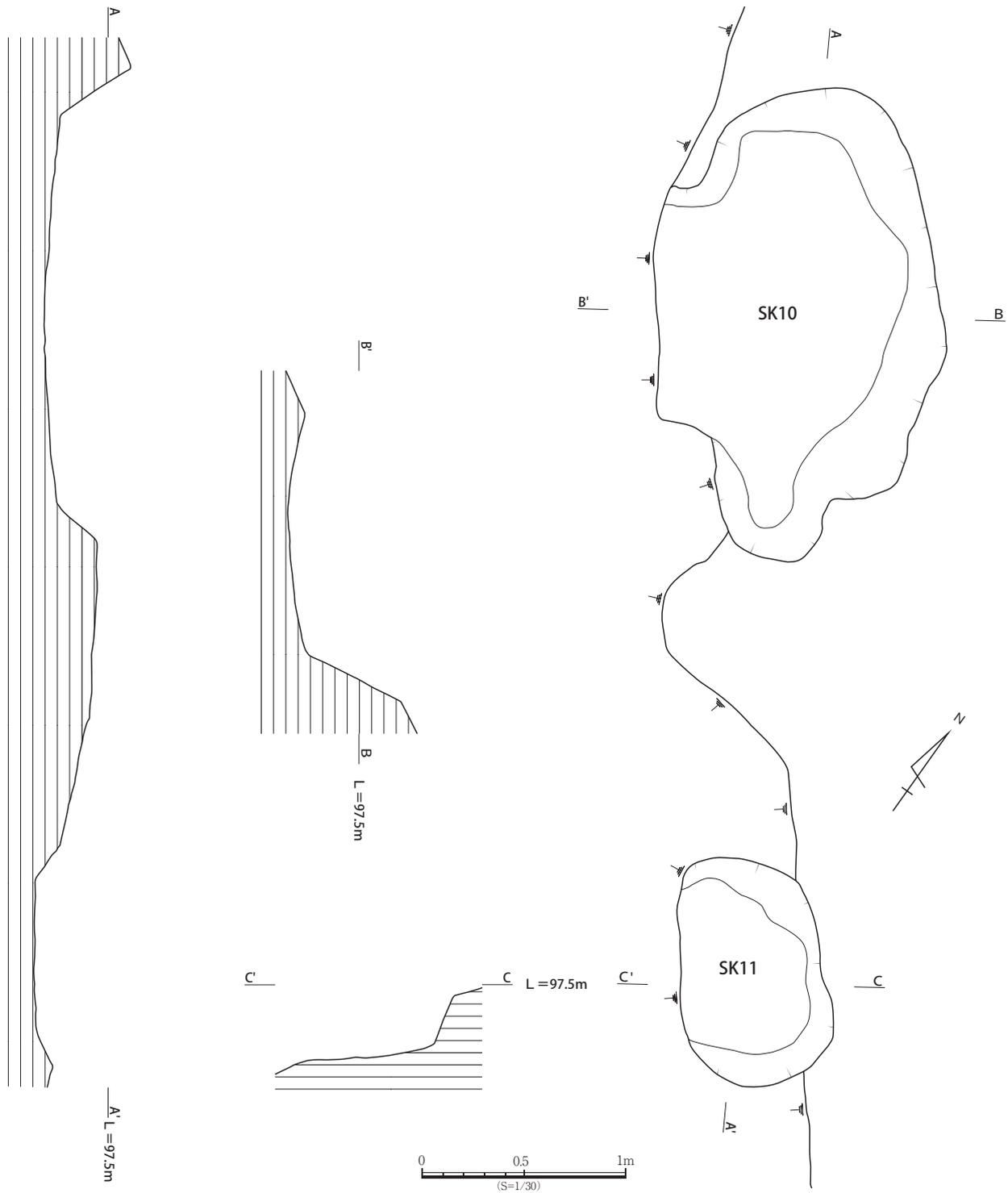
第 37 図 SK9 実測図 (S=1/30)

本土坑の埋土中からは、弥生土器（125～137）が出土した。遺構の年代を直接決定付けるものではないが、その形態から本遺構の廃棄の下限はⅡ-2-③の時期と考えられる。

○SK9（第 37 図）

SK9はSH2の北東側約6mに位置する土坑である。中央部は試掘溝により削平されている。平面形状は隅丸の台形状で、底面の規模は東辺約120cm、北辺約150cm、西辺約50cm、南辺約145cmである。深さは現状で約25cm、底面標高は約98.82mである。遺構東側には底面形状が直径約11cmの円形で、深さ約50cm、底面標高98.38mのP1と、底面形状が直径5～7cm程度の長円形で、深さ13～25cmのP2～P4を確認した。またP1とP2・P4を結ぶように、幅2～10cm、深さ6～7cmの溝状遺構を確認した。さらにP1・P2と溝状遺構の上面を中心に炭と焼土塊を検出した。このことから、本土坑は何らかの構造物を伴い、火を使用する施設と考えられるが、その性格については確認し得なかった。

本遺構に伴う遺物は出土していないが、SH2や柱穴群の遺構面を構成する土層より下層から遺構が掘り込まれていることから、SH2や柱穴群よりは先行する。



第 38 図 SK10・SK11 実測図 (S=1/30)

○SK10・11（第38図）

SK10はSH1の北東側約6mに位置する土坑である。南西側は流失している。また傾斜の急な斜面に位置しており、土坑上面もかなり削平されたものと想定できる。平面形状は長円形を意識していると考えられるが、底面形状は歪になっている。底面の規模は長径約190cm、短径は確認部分で約125cmである。深さは現状で約50cm、底面標高は約97.18mである。土坑の規模・形状から貯蔵用と考えられる。

SK11はSK10の南東側約1.5mに位置する土坑で、南西側は流失している。平面形状は長円形で、底面の規模は長径約90cm、短径約70cmである。深さは現状で約30cm、底面標高約97.14mである。土坑の規模・形状から貯蔵用と考えられる。

SK10・11とも遺構に伴う遺物は出土していない。しかしながら、SH3やSH6の遺構面を構成する土層より下層から遺構が掘り込まれていることから、SH3やSH6よりは先行するものと想定される。

4. 出土遺物

本遺跡の出土遺物としては、弥生土器・石器・鉄器・土製品等があるが、遺構面が土石流の影響などで流失した部分も多く、出土遺物量に比べて遺構に伴う遺物が少ない。ただし、遺構に伴わない遺物でも、本遺跡の存続時期外のものも含め、特徴的なものを報告する。以下、各遺物について述べるが、個々の土器及び鉄器・石器等の詳細については、後掲する観察表を参照されたい。

○弥生土器（第39～49図）

本遺跡から出土した弥生土器について、時期を追って特徴的なものについて概観してみたい。

・弥生時代中期

甕形土器（91）は外反する口縁部を持ち、口縁端部に刻目を施している。また、口縁部屈曲点直下には6条の平行沈線文をめぐらしている。この特徴は中期前葉のものと考えられる（妹尾周三氏による安芸Ⅰ－3様式³⁾）。

甕形土器（138）は外反する口縁部を持ち、頸部は締まり胴部は張っている。また口縁端部は上方に湾曲している。これらの特徴は中期中葉のものと考えられる（安芸Ⅲ－1様式）。

高坏（143）は円筒状にした粘土を坏部を脚部の境目で絞り、坏底部を円盤で塞ぐ円盤充填法で成形し、脚柱部内面にはシボリ目が残る。また脚部の透かし穴は二等辺三角形である。高坏（142）は坏部と脚柱部の境に凹線を伴う突帯がつく。これらの特徴は中期後葉のものと考えられる（安芸Ⅲ－2様式）。

甕形土器（139）は外反する口縁部を持ち、端部は肥厚し2条の凹線を施している。頸部には幅広の刻目を施した粘土帯を貼り付けている。これらの特徴は中期末葉のものと考えられる（安芸Ⅳ－1様式）。

(22) は口縁端部が強い横ナデによって大きく上方に肥厚している。この特徴は中期終末のものと考えられる(安芸Ⅳ-2 様式)。また、(21) は高坏と考えられるが、外面口縁上部に3条の凹線を施しており、脚部の低いものが想定できる。この特徴を有するものは中期終末のものと考えられる(安芸Ⅳ-2 様式)。

・弥生時代後期

甕形土器(1・7・8)は、口縁端部が口縁部屈曲点に比べて明らかに肥厚する。また、(1・7)に顕著であるが、肩部の低い位置から口縁部にかけて外湾を始め、口縁部屈曲点より若干下の位置で厚みが大きくなるなど、口縁部の接合が屈曲点より下部で行われていることを示している。底部は平底で外上方に向かって外面でやや外湾気味に立ち上がる。内面のヘラ削りは底部までは至らず、底部の成形・調整を行った後に胴部を積み上げたことを示している。これらの特徴を有するものは後期初頭のものと考えられる(若島一則氏によるⅠ期⁴⁾)。

甕形土器(73・83)の口縁部の接合は屈曲点近くで行われており、接合の際に余った屈曲点直下の粘土をヘラ削りした痕跡が確認できる。(83)の口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化せず、端部付近を強くつまんで肥厚しているように見せている。端部には2条の凹線を施す。また、肩部には口縁部屈曲点から若干下がった位置に刺突文をめぐらしている。(73)は、底部は窪み底で外上方に向かって直線的に立ち上がり、内面のヘラ削りは底部に至る。これらの特徴を有するものは後期前葉のものと考えられる(Ⅱ-1期)。

甕形土器(149)や鉢形土器(3)は口縁部屈曲点から口縁端部に至る器厚はそれほど変化せず、端部付近をつまみ若干肥厚しているように見せており、端部は無文である。また、(3)は平底で外上方に向かって直線的に立ち上がる。(149)についても、底部から胴部に向け、内湾気味ではあるものの直線的に立ち上がる傾向を見せている。これらの特徴を有するものは後期中葉のものと考えられる(Ⅱ-2-①期)。

鉢形土器(74)は、口縁部屈曲点から口縁端部に至るまでに厚みを若干減じており、僅かに平らにおさめている。また、胴部から底部にかけては一体的なカーブを描く。これらの特徴を有するものはⅡ-2-①期より時期の下る後期中葉のものと考えられる(Ⅱ-2-②期)。

甕形土器(121)は、口縁部屈曲点から胴部にかけて緩やかにカーブを描き、胴部最大径を中位に持つ。底部は平底で、底部から胴部にかけて緩やかなカーブを描き、全体的なプロポーションが丸みをもつ。これらの特徴を有するものは後期後葉のものと考えられる(Ⅱ-2-③期)。

甕形土器(78)、鉢形土器(172)は、口縁部屈曲点から胴部にかけて緩やかにカーブを描き、胴部最大径を中位に持つ。底部から胴部にかけても緩やかなカーブを描き、プロポーションが丸みをもつ。底部は平底ではあるが丸みを帯びている。(172)は、口縁部屈曲点から端部にかけて薄くなる。これらの特徴を有するものは後期末葉のものと考えられる(Ⅱ-3期)。

複合口縁壺(159)と(171)は口縁端部から上方に拡張部が立ち上がっており、若島氏による編年のⅡ-3期以前のものである。ここで(159)と(171)の口縁部屈曲点を見ると、内面に共に稜を持つものの、(171)の方が鋭い。また、底部から胴部にかけて共に直線的に立ち上がるものの、全体のプロポーションを見ると(159)は胴部に向けて急角度で立ち上がり、(171)の方

がなめらかなカーブを描いている。これらのことから、(159)は後期後葉(若島氏によるⅡ-2-③期⁵⁾)のもの、(171)は後期末葉のものと考えられる(Ⅱ-3期)。

高坏(175)は坏部の中位に稜を持ち、そこから口縁部へかけて強く外湾し、端部は丸みを帯びる。高坏(174)は脚部が「ハ」の字状に拡がり、円形の透かし穴を持つ。これらの特徴を有するものは後期末葉のものと考えられる(Ⅱ-3期)。また若島氏の分類による太田川流域を中心に分布するタイプの高坏である。

(178)は屈曲点から外湾する口縁部の端部に、外湾気味に立ち上がる口縁が付く複合口縁を持つ。口縁端部は尖り気味に伸び、端部は丸く収める。これらの特徴を持つものは山陰系のもので、後期末葉のものと考えられる(松本岩雄氏による出雲・隠岐V-4様式⁶⁾)

壠形高坏(177)は「ハ」の字状に外湾しながら拡がる脚部に壠形の坏部が付く。庄内式の壠形高坏に見られる器形をしており、時期は後期末葉のものと考えられる。

なお、土器の時期を見ると弥生時代中期から後期末葉のものまでが、継続的に出土しているが、後期末葉以降に継続して本遺跡で使用されたと考えられる土器は出土していない。

○縄文土器(第49図)

調査区内の遺構の形成された層の下層からは、遺構には伴わないが縄文土器片が出土した。

(179)は口縁端部を尖り気味に収めている。外面・内面とも端部下方から下部に押型文(ネガ楕円文)を、内面の口縁端部には刻目文を施している。(180)は口縁端部を丸く収め、外面端部下方から下部に押型文(ネガ楕円文)を施している。(181)は外面に押型文(山形文)を施している。これらの特徴を持つものは縄文時代早期中葉のものと考えられる(黄島式土器⁷⁾)。

○鉄器(第50図～51図)

本遺跡からは多数の鉄器が出土しているが、特にSH7からは58点もの鉄器が出土している。細片で種類が不明の鉄片が多くを占め、素材の鉄板を切り離した際の鉄片のような印象を受けるものもあり、種類のわかるもの、特徴的なものについて掲載することとした。以下特徴的なものについて概観してみたい。

・鍬

本遺跡から出土したほとんどの鍬は有茎柳葉式鉄鍬もしくは柳葉式鉄鍬である。

SH6から出土した(182)は無茎五角形凹基式鍬で、刃部は全長のほぼ半分で明確な変換点を持つ。先端側はほぼ直線状に外反し、基部側は中軸線にほぼ並行する。基部はV字状に切れ込む。

(224)は雁股式の鉄鍬で中世のものと考えられる。

・斧(192)

有肩の袋状鉄斧である。袋部の横断面形は楕円形で折り返しの両端は接しない。川越哲志氏の分類のⅡc型⁸⁾に相当し、弥生時代後期のものと考えられる。

・鎌（193）

切先のみ出土で、先端部分は欠損している。残存部の形状から幅を減じてゆく先細りのものであった可能性が高い。

・刀子

（215）は刃関のなで肩関で、川越氏の分類の I b 型⁹⁾ に相当するものである。（194）は刃部の、（217）は柄部から刃部の関にかけての破片である。

・鑿（216）

刃部幅と身部幅はほぼ同じ幅であり、基部幅がわずかに狭くなる。

・その他

SH7 から出土した（196～200）は、幅 2～3mm 程度の細い棒状の形をしている。形状、及び本住居跡から穿孔途中で破損した管玉未製品（250）が出土していることから、本製品は玉類などの穿孔に使用する錐状鉄製品と考えられる。

○石器（第 51～54 図）

本遺跡の遺構に伴うものとしては、台石や敲石・磨石等の加工具が出土している。また、遺構に伴わないものとして、石鏃・石匙などが出土している。詳細は後掲する観察表を参照されたい。

○玉類・土製品

・管玉（250）

SH7 の貼床部に接して出土した。荒割後に方形に調整し、さらに多角形調整を施し、穿孔に移る段階で失敗し、放棄したものと考えられる。材質は緑色チャートであり、日本海側からの移入品を本住居跡で加工したものと考えられる。

・板状土製品（251）

全体が残存していないため、種類・用途は不明である。穿孔が 3ヶ所に施され、穴の間隔はそれぞれ 15mm である。残存部から方形もしくは長方形と考えられ、計 6ヶ所の穿孔があったと思われる。穿孔は片面のみから施され、表面には草木の繊維痕がある。

・土製勾玉（252～254）

（252）は全体に磨きが施され、穿孔は両面から斜めに施される。（254）はひれ付勾玉でひれを 2つもつ。上部の側面には 7 条の沈線が施されている。

注

1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌 I』財団法人広島市文化財団

以下、後期土器編年は若島氏の編年による。

2) 宮本長二郎氏は住居中央部のピットの性格の一つとして、明らかに柱穴痕と思われるものもあるとしており、本遺構の性格も状況からこれに相当すると考えられる。

宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996年

3) 妹尾周三「安芸地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年

以下、安芸編年は妹尾氏の様式編年による。

4) 1に同じ。

5) 1に同じ。

6) 松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編 木耳社 1992年

7) 川越哲志「黄島式土器」『日本土器事典』雄山閣 1996年

8) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣 1993年

9) 8に同じ。

第1表 三谷遺跡出土土器観察表

([]:復元値)

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
1	甕形土器	SH1	口径 12.3 胴部最大径 12.4 底径 [4.1] 器高 12.1	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては外湾気味に立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き，胴部下位ヘラ削り後ナデ一部オサエ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部オサエ，頸部下半ヘラ削り，胴部ヘラ削り後ヘラ磨き，底部ナデ	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：明黄褐色・にぶい橙色 内外面一部に黒斑残る。
2	甕形土器	SH1	口径 [15.2]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに肥厚し，平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部下半ヘラ削り後ナデ 頸部上位に不規則な2条の沈線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄橙色 外面一部に黒斑残る。
3	鉢形土器	SH1	口径 16.0 底径 4.5 器高 12.0	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底である。	外面：口縁端部一部ヘラにより平坦にした後ナデ，体部ハケ目後ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄橙色・橙色 内外面一部に黒斑残る。外面一部にスス付着。
4	不明	SH1		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに肥厚し，平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部下半ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面—にぶい黄橙色 内面—灰黄褐色・浅黄橙色 外面頸部にスス付着。
5	不明	SH1		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚し，平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に4条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面—にぶい黄褐色 内面—褐灰色 内外面一部に黒斑残る。
6	甕形土器	SH1 埋土	口径 [12.8] 胴部最大径 [13.6]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部から頸部ナデ，胴部ハケ目後へ一部ヘラ磨き及びナデ 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色 外面頸部から胴部にかけて一部にスス付着。
7	甕形土器	SH1 埋土	口径 12.7 胴部最大径 13.7 底径 3.4 器高 13.6	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては外面でやや外湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ハケ目後ヘラ磨き及びナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り，底部ナデ 外面胴部上位に波状紋をめぐらす。	胎土：2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面—赤褐色 内面—明赤褐色 外面スス付着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
8	甕形土器	SH1 埋土	口径 12.6 胴部最大径 [14.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、 端部は上下に肥厚しつつ平らに 収める。胴部は内湾しつつ立ち 上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 後ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削 り後ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部に貝殻腹縁による刺突 文を羽状に2段めぐらす。	胎土：1～2mm大の砂粒 含む 焼成：やや軟調 色調：外面－褐色・橙色 内面－にぶい黄橙 色・にぶい黄褐色 外面胴部から口縁部の一部 にスス附着。
9	甕形土器？	SH1 埋土	口径 6.1 胴部最大径 6.1 底径 2.2 器高 5.6	口縁部は「く」の字状に外湾し、 端部は丸く収める。胴部は直線 的に外上方に立ち上がる。底部 は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部一部ヘ ラ削り後ナデ 内面：ナデ，底部オサエ，頸部 の一部に粘土接合痕跡残る。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
10	鉢形土器	SH1 埋土	口径 [41.2] 胴部最大径 [41.7]	口縁部は「く」の字状に外湾し、 端部は下方にやや肥厚し，平ら に収める。	外面：口縁部・端部の一部ハケ 目後ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴 部ヘラ削り後ヘラ磨き及びナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色・浅黄 橙色 外面口縁部・胴部の一部に 黒斑残る。
11	壺形土器	SH2		頸部から口縁部にかけて「く」 の字状に外湾し，その端部に口 縁部が内傾してつく複合口縁。	外面：口縁部ナデ，頸部ハケ目 一部ナデ 内面：ナデ，頸部に複合口縁接 合時の粘土痕跡残る。 外面口縁部に波状文をめぐら す。	胎土：0.5～1mm大の砂 粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色
12	不明	SH2		口縁部は「く」の字状に外湾し、 端部にかけて次第に器厚を減 じ，端部は丸く収める。胴部は 内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り 外面頸部に貝殻腹縁による刺突 文をめぐらす。	胎土：0.5mm大の砂粒多 く含む 焼成：良好 色調：明褐色 外面一部にスス附着。
13	不明	SH2		体部から口縁部にかけて内湾し つつ立ち上がり，端部手前で器 厚が薄くなる。端部は丸く収め る。	外面：口縁部ナデ，体部ヘラ削 り後ナデ 内面：口縁部ナデ，口縁部か ら体部ヘラ削り 外面口縁部直下にヘラ状工具 により刺突を繰り返して沈線を めぐらす。	胎土：1mm大の砂粒多く 含む 焼成：良好 色調：黄橙色 内外面とも大半に黒斑残 る。
14	不明	SH2	底径 [4.0]	胴部は直線的に外上方に立ち上 がる。底部は平底。	外面：胴部ヘラ削り後ナデ，底 部ナデ 内面：ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色・黄橙色 内面－灰褐色 内面に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
15	碗形土器	SH2 埋土	口径 11.3 底径 4.7 器高 7.3	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がり、端部は丸く収める。底部は丸みを帯びるものの平底。	外面：口縁部ナデ，以下磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，以下磨耗著しく不明	胎土：1～3mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：黄橙色 内面底部に黒斑残る。
16	碗形土器	SH3	口径 [9.0] 底径 [4.2] 器高 7.7	体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり、端部にかけて内傾し、端部は平らに収める。底部から体部にかけて外湾しながら立ち上がる。底部は平底。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－にぶい橙色 外面底部の一部に黒斑残る。
17	高環	SH3		体部は外上方に直線的にのび、その端部に内傾する口縁部を「く」の字状に接合する。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ，口縁部接合時の粘土はみ出し痕跡残る。 内面：磨耗著しく不明	胎土：1mm 大の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：黄橙色
18	不明	SH3		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に肥厚し平らに収める。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：赤褐色
19	不明	SH3		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
20	鉢形土器	SH3 埋土	口径 [13.6] 胴部最大径 [12.6] 底径 5.0 器高 7.8	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚し、平らに収める。底部から胴部にかけて外湾し、胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は窪み底。	外面：口縁部から胴部上半ナデ，胴部下半ヘラ磨及びていねいなナデ，底部はナデ 内面：口縁部から胴部上半ナデ，胴部下半から底部ヘラ削り口縁端部に2条の凹線，胴部上位に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色 内外面底部の一部に黒斑残る。
21	高環？	SH4		体部から口縁部にかけて「く」の字状に内反し、口縁部は僅かに外傾し、直立気味に立ち上がる。端部は平らに収める。	外面：口縁部ナデ，体部ナデ後一部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ磨き 外面口縁部に3条の凹線をめぐらす。	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：赤褐色
22	不明	SH4		口縁部は外湾し、口縁端部は上方に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい褐色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
23	壺形土器	SH5	口径 [11.0]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し、外上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ナデ及びオサエ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－橙色・明赤褐色
24	壺形土器	SH5		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し、その端部に直線的に立ち上がる口縁部が内傾してつく複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部磨耗著しく不明	胎土：2～3mm 大の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：外面－明褐色 内面－明赤褐色 外面一部に黒斑残る。
25	不明	SH5		頸部から口縁部にかけて外湾し、その端部に外湾気味に立ち上がる口縁部が外傾してつく複合口縁。	外面：口縁部ナデ一部ハケ目，頸部ハケ目 内面：ナデ	胎土：精緻 焼成：やや軟調 色調：外面－黄橙色 内面－黄褐色・黄褐色
26	不明	S H 5 P6		口縁部は外湾し、端部は僅かに平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：黄褐色
27	不明	SH5 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに上下に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明	胎土：1～2mm 大の砂粒若干含む 焼成：やや軟調 色調：外面－橙色 内面－黄褐色
28	不明	SH5 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ，頸部一部オサエ	胎土：精緻 焼成：軟調 色調：浅黄褐色
29	不明	SH5 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は下方に肥厚し、丸みを帯びるものに平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ割り 頸部をツメでオサエ屈曲を強調する。	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
30	不明	SH5 埋土		体部から口縁部にかけて外上方に直線的に立ち上がる。口縁部は外湾し、端部は丸く収める。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ割り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄褐色 内外面とも一部に黒斑残る。
31	甕形土器	SH6		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ割り後ナデ，胴部ヘラ割り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－褐灰色 内面－にぶい黄褐色 外面口縁部・胴部の一部にスス附着

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
32	甕形土器	SH6		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は下方に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面胴部上位に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色 外面胴部の一部にスス付着。
33	甕形土器	SH6		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は僅かに下方に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部一部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。頸部に貝殻腹縁による刺突文を羽状に2段めぐらす。	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－浅黄橙色 外面胴部の一部に黒斑残る。外面口縁部の一部にスス付着。
34	不明	SH6		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－黄橙色
35	不明	SH6	底径 2.7	胴部は外上方に直線的に立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ヘラ削り後ナデ，底部ナデ 内面：胴部ヘラ削り，底部ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 内面底部に黒斑残る。
36	不明	SH6	底径 [8.6]	胴部は外上方に直線的に立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：胴部ヘラ削り	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－黄橙色 内面－黄褐色 外面一部に黒斑残る。
37	不明	SH6		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は僅かに肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ 口縁端部に1条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい橙色
38	甕形土器	SH6 壁面		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部・頸部ナデ，頸部ナデ時の指頭圧痕残る，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色
39	不明	SH6 壁面		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は下方に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい橙色 内面－浅黄橙色 外面一部にスス付着

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
40	不明	SH7		口縁部は「く」の字状にゆるやかに外湾し、端部は僅かに平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色 口縁端部に黒斑残る。
41	不明	SH7		口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は僅かに肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・にぶい橙色 内面－橙色・にぶい黄橙色 外面口縁部・胴部の一部にスス付着。
42	不明	SH7内 SK12 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに平らな面をもたせて収める。胴部は僅かに内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部にハケ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－にぶい黄橙色・にぶい褐色 外面全面，内面胴部一部に黒斑残る。
43	不明	SH7内 SK12 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－明赤褐色 内面－にぶい黄褐色 内面口縁部の一部に黒斑残る。
44	不明	SH7内 SK12 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
45	不明	SH7内 SK12 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は丸く収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，体部ハケ目 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成 良好 色調：外面－にぶい黄褐色・橙色 内面－にぶい黄褐色 内面一部に黒斑残る。
46	不明	SH7内 SK12 埋土	底径 [4.4]	胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部の一部と内面底部の一部に黒斑残る。
47	不明	SH7 中央炉		口縁部は外上方に直線的にのび、端部手前で「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 内面一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
48	壺形土器	SH7 埋土	口径 [9.2]	口縁部は「く」の字状に外湾し つつ立ち上がり、端部は丸く収 める。胴部は内湾しつつ立ち上 がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハ ケ目後ナデ，胴部上位ハケ目， 胴部中位磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り 頸部に波状文を2段めぐらすも のどちらの段も雑で波状を形 成しない箇所がある。	胎土：1～2mm 大の砂粒 含む 焼成：やや軟調 色調：外面－明褐色・橙色 内面－橙色
49	不明	SH7 埋土	底径 [3.8]	底部から胴部にかけて内湾しつ つ立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部 ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含 む 焼成：良好 色調：橙色
50	不明	SH10		口縁部は外湾しつつ外上方に立 ち上がり，端部は丸く収める。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハ ケ目後ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部ハ ケ目後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色
51	不明	SH10		口縁部は僅かに内湾しつつ外上 方に立ち上がり，端部は丸みを 持つものの平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部上位ナデ，口縁部 下位ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
52	不明	SH10		口縁部は外上方に立ち上がり， 端部は僅かに肥厚しつつ，平ら に収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面口縁部に縦方向の櫛描直線 文を間隔を空けて施す。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色
53	不明	SH10	底径 5.0	底部から胴部にかけて僅かに内 湾しつつ立ち上がる。底部は平 底。	外面：胴部ハケ目，底部一部ハ ケ目 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干 含む 焼成：良好 色調：外面－浅黄橙色 内面－にぶい黄橙 色・灰黄褐色 外面胴部の一部に黒斑残る
54	不明	SH10 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し， 端部は上下に肥厚しつつ平らに 収める。胴部は内湾しつつ立ち 上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削 り 外面頸部にヘラ状工具による刺 突文を羽状に2段めぐらす。	胎土：0.5～1mm 大の砂 粒含む 焼成：やや軟調 色調：にぶい黄橙色 外面胴部の一部に黒斑残 る。外面頸部の一部にスス 附着。
55	不明	SH11 P2 内	底径 4.4	底部から胴部にかけて外湾し， 胴部は内湾気味に立ち上がる。 底部は僅かに窪み底。	外面：胴部ハケ目後ていねいな ナデ，底部ナデ 内面：ていねいなナデ，ナデ時 の指頭圧痕残る	胎土：1mm 大の砂粒若干 含む 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－にぶい褐色・ にぶい橙色 外面胴部の一部に黒斑残 る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
56	不明	SH12		口縁部は外湾しつつ立ち上がり、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
57	不明	SH12		口縁部は内湾しつつ立ち上がり、端部に向けて内傾する。端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁部外面に 8 条の凹線、口縁部端部に 1 条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
58	不明	SH13	口径 [12.5] 胴部最大径 [13.9]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、体部ヘラ削り 外面頸部下半にヘラ状工具による刺突文を二段施す。	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面大半に黒斑残る。
59	不明	SH13	底径 1.6	底部は丸底に近いが若干の窪み底を残す。	外面：ハケ目後ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
60	碗形土器	SH13 埋土	口径 [15.0] 底径 [5.1] 器高 [6.6]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。体部は内湾しつつ外上方に立ち上がる。底部は高台状で平底。	外面：口縁部ナデ、体部から底部ていねいなナデ 内面：口縁部ナデ、体部から底部ていねいなナデ 体部上位に貝殻腹縁による刺突文を 2 段にめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－橙色 内面－橙色・明褐色 外面底部から体部の一部に黒斑残る。
61	不明	SH13 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は丸みを帯びるものの平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り後ナデ	胎土：精緻 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
62	不明	SH14	口径 [15.0] 胴部最大径 [16.5]	底部から胴部にかけて外湾し、胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は窪み底。	外面：胴部ハケ目後ナデ、底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色 外面胴部の一部にスス付着。
63	不明	SH14		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に僅かに肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り 外面口縁部に 2 条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色・にぶい黄褐色 内面－にぶい黄褐色 外面口縁部に黒斑残る。
64	不明	SH14	底径 4.5	底部から胴部にかけて僅かに外湾しつつ立ち上がる。底部は窪み底。	外面：胴部ヘラ磨き、底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：外面－明赤褐色・にぶい黄褐色 内面－黒褐色 内面に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
65	壺形土器	SH15	口径 [18.3]	頸部は「く」の字状に外反し、さらに口縁部にかけて外湾し、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。口縁端部には間隔を持つ2個1組の棒状浮文を4箇所貼り付ける。	外面：ナデ 内面：口縁部、頸部磨耗著しく不明、胴部ヘラ削り 外面頸部に貼り付け突帯をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：浅黄橙色 内面口縁部の一部に黒斑残る。
66	不明	SH16		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ、胴部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り	胎土：0.5mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－明赤褐色 内面－橙色 外面一部に黒斑残る。
67	不明	SH16		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：口縁部ナデ、胴部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：にぶい黄橙色 外面口縁部の一部にスス付着。
68	甕形土器	SH17		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は下方に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り後一部ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。胴部上位にヘラ状工具による刺突文を羽状に2段めぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄橙色 胴部の一部にスス付着。
69	不明	SH17		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は下方に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に3条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：にぶい橙色
70	不明	SH17	底径 4.6	底部から胴部にかけて僅かに外湾し、胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：胴部ハケ目後ナデ、底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－にぶい橙色 内面底部に黒斑残る。外面胴部の一部にスス付着。
71	不明	SH17 P3		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削り 頸部にハケ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
72	不明	SH18	底径 [4.4]	胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目後ナデ、底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 内面底部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
73	甕形土器	SH20	口径 20.0 胴部最大径 [24.8] 底径 [4.4] 器高 31.4	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部は直線的に外上方に立ち上がる。底部は僅かに窪み底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き，一部ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部から底部ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。頸部にハケ状工具による刺突文を2段にめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面—にぶい黄橙色 内面—灰黄褐色 内外面とも一部に黒斑残る。173と同一個体。
74	鉢形土器	SX1	口径 [10.6] 胴部最大径 [11.1] 底径 5.5 器高 10.9	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は高台状で平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ，底部ナデ，底部と胴部の境に接合時のナデによる指頭圧痕残る。 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面—浅黄橙色・淡橙色 内面—にぶい黄橙色 内面一部に黒斑残る。外面頸部の一部にスス付着。
75	不明	SX1	底径 3.8	底部から胴部にかけて外上方に立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ナデ後一部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：胴部ヘラ削り，底部ナデ	胎土：1mm大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面—にぶい黄橙色・にぶい橙色 内面—橙色
76	不明	SX1		口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は平らに収める。胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面—浅黄橙色 内面—にぶい黄橙色 外面口縁部に黒斑残る。
77	不明	SX1 溝		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾気味に立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部，胴部ハケ目後ナデ，口縁端部ナデ時の粘土のはみ出し痕跡一部に残る。 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面—灰黄褐色 内面—橙色
78	甕形土器	SX2	口径 12.1 胴部最大径 14.2 底径 [4.6] 器高 [14.2]	口縁部は「く」の字状に外湾しながら立ち上がり，口縁端部は外方に僅かに肥厚し平らに収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5～1mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面—橙色・にぶい橙色 内面—にぶい黄褐色 内外面胴部一部に黒斑残る。外面胴部下半の一部にスス付着。
79	甕形土器	SX2	口径 [18.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ，口縁部接合時の粘土痕跡残る。 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：浅黄褐色 外面胴部の一部にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
80	甕形土器	SX2	口径 [13.0]	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
81	不明	SX2	口径 [13.0] 胴部最大径 [12.2]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部手前で若干肥厚し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部にヘラ状工具による刺突文を一部めぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：明赤褐色 外面一部に黒斑残る。
82	不明	SX2	底径 3.3	底部から胴部へかけ外反し、胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－にぶい橙色 内面に黒斑残る。
83	甕形土器	SX4 平坦面 a	口径 [17.4]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。外面頸部に貝殻腹縁による刺突紋を羽状に2段めぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部一部にスス附着。
84	甕形土器	SX4 平坦面 a	口径 [13.8]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り 内外面とも口縁端部にナデ時の粘土はみ出し痕跡残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－黄褐色 内面－灰褐色 外面口縁端部と胴部一部にスス附着。
85	不明	SX4 平坦面 b		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色 内面一部に黒斑残る。
86	不明	SX4 埋土		底部から胴部下位にかけて内湾気味に外上方に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：外面－橙色 内面－黄褐色 外面一部に黒斑残る。
87	不明	SX6		口縁部は外湾しつつ立ち上がり、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面頸部に刺突文をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色
88	不明	SX6		口縁部は外湾しつつ立ち上がり、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：外面－褐色 内面－にぶい黄褐色・褐灰色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
89	不明	SX7		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 頸部に刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：軟調 色調：外面－褐色・黒褐色 内面－黒褐色 98 と同一個体の可能性あり。
90	不明	SX7		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1～2mm 大の砂粒若干含む 焼成：やや軟調 色調：外面－赤褐色・黒褐色 内面－黒褐色 97 と同一個体の可能性あり。
91	不明	SX8 埋土		口縁部は直立した後，端部にかけて「く」の字状に外反し，端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に縦方向の刻目を等間隔に施す。口縁部下位にヘラ状工具による6条の沈線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色
92	不明	SX10		胴部は内湾しつつ立ち上がる。口縁部は外湾し，口縁端部は僅かに下方に肥厚し，平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 胴部上位に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－黄橙色 内面－明黄褐色 外面一部に黒斑残る。
93	不明	SX10		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒多く含む 焼成：軟調 色調：外面－にぶい黄橙色・褐灰色 内面－明黄褐色 外面胴部の一部に黒斑残る。外面口縁部の一部にスス付着。
94	不明	SX10		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：0.5～1mm 大の砂粒多く含む 焼成：良好 色調：明赤褐色 外面胴部の一部に黒斑残る。
95	不明	SX10		口縁部は僅かに内湾し，その端部に直立して立ち上がる口縁部が内傾してつく複合口縁。口縁端部は僅かに外方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面口縁部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・明黄褐色 内面－明黄褐色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
96	鉢形土器?	SX11		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に肥厚し、平らに収める。体部は内湾気味に立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：明赤褐色 外面体部にスス付着。
97	不明	SX11		口縁端部は上下に肥厚し、平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に3条の凹線をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
98	壺形土器	SX12	口径 [18.9]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部上位ハケ目後ナデ，頸部下半ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部にハケ状工具による波状文をめぐらす。	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
99	不明	SX12		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚し、平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き，一部ナデ 内面：口縁部・頸部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色 外面胴部上位の一部に黒斑残る。
100	不明	SX12		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に肥厚し、平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部・頸部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部下にハケ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面-にぶい橙色 内面-にぶい黄橙色
101	不明	SX12 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に僅かに肥厚し、平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部・頸部ナデ，頸部にナデ時の指頭圧痕残る，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：橙色 外面頸部の一部にスス付着。
102	甕形土器	SX13	口径 [15.1]	口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は下方に肥厚し平らに収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ていねいなナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面-にぶい褐色・にぶい黄橙色 内面-にぶい黄橙色 外面胴部の一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
103	甕形土器	SX15	口径 [15.0] 胴部最大径 [16.5]	口縁部は「く」の字状に外湾し、口縁端部は上下に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部下位に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部の一部にスス付着。
104	鉢形土器	SX15	口径 [17.8] 胴部最大径 [16.5] 底径 4.8 器高 11.4	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけて僅かに外湾しつつ立ち上がる。底部は窪み底。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－橙色 内面－にぶい黄橙色
105	不明	SX15		口縁部は外湾し、口縁端部は上下に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に4条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－にぶい黄橙色
106	不明	SX15	底径 3.5	底部から胴部にかけて外湾し、胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：ナデ 内面：ナデ 内外面ともナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－橙色 外面一部に黒斑残る。内面底部にスス付着。
107	不明	SX15 埋土	口径 [13.8]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部・胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，頸部・胴部上半ヘラ磨き，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色 外面口縁部・胴部の一部にスス付着。
108	不明	SX15 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄褐色
109	不明	SX16		口縁部は内湾し、口縁端部は丸く収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り後ナデ，ナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：橙色
110	不明	SX16		口縁部は外湾し、口縁端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
111	不明	柱穴群 P10	底径 [4.5]	底部から胴部へかけ外湾し、胴部は内湾し立ち上がる。底部は窪み底。	外面：ナデ，底部にナデ時の指頭圧痕残る。 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
112	壺形土器	SK1	口径 [11.9]	口縁部は「く」の字状に外反し、口縁端部は下方に肥厚し平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部へラ磨き 内面：口縁部ナデ，胴部へラ削り 口縁端部に3条の凹線をめぐらす。外面頸部に櫛歯状工具による4条の凹線をめぐらす。頸部下位から胴部上位にへら状工具による刺突文を5段めぐらす。そのうち下の4段は2対の羽状に施す。	胎土：0.5mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－黄橙色 内面－浅黄橙色・灰黄色 外面胴部の一部にスス付着。
113	高環 ?	SK1	口径 [17.8]	体部から口縁部にかけて「く」の字状に内反し，端部は平らに収める。	外面：口縁部ナデ，体部へラ磨き後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部はへら削り後へら磨き 外面口縁部に2条の凹線をめぐらす。内面体部に粘土接合痕残る。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－にぶい黄橙色・浅黄橙色 内外面一部に黒斑残る。
114	不明	SK1	底径 3.3	底部から胴部にかけて外湾気味に立ち上がる。胴部は外上方に内湾気味に立ち上がる。底部は窪み底。	外面：胴部へラ磨き，底部ナデ 内面：へら削り	胎土：1mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい赤褐色 内面－明赤褐色 外面一部に黒斑残る。
115	不明	SK1	底径 4.7	底部から胴部にかけて内湾気味に外上方に立ち上がる。底部は平底。	外面：磨耗著しく不明 内面：胴部へら削り，底部ナデ	胎土：1～2mm大の砂粒多く含む 焼成：やや軟調 色調：橙色 内面一部に黒斑残る。外面一部にスス付着。
116	不明	SK1 外		口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部へら削り 外面頸部にへら状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：1～2mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－浅黄橙色 内面－黄橙色 内外面とも口縁部の一部に黒斑残る。
117	不明	SK3		口縁端部は僅かに下方に肥厚し平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－黄橙色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
118	不明	SK3		底部は平底。	外面：ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・にぶい 黄橙色 内面－灰褐色 内面黒斑残る。
119	鉢形土器	SK4	口径 [20.2] 胴部最大径 [21.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、 端部は下方にやや肥厚し、平ら に収める。胴部は内湾しつつ立 ち上がる。	外面：口縁部ナデ、頸部・胴部 ハケ目後ナデ、頸部一部にナデ 時の指頭圧痕残る。 内面：口縁部ハケ目後ナデ、胴 部ヘラ削り	胎土：1～2mm 大の砂粒 含む 焼成：良好 色調：外面－明赤褐色 内面－明赤褐色・橙 色 内外面とも胴部下位の一部 にスス付着。
120	不明	SK4		口縁部は外湾し、端部は下方に 肥厚しつつ平らに収める。	外面：口縁部ナデ、口縁部ハ ケ目後ナデ 内面：ナデ 口縁部に 3 条の凹線をめぐら す。	胎土：0.5mm 大の砂粒含 む 焼成：軟調 色調：浅黄橙色
121	甕形土器	SK6 埋土	口径 13.0 胴部最大径 13.3 底径 [3.3] 器高 [12.7]	口縁部は「く」の字状に外反し ながら立ち上がり、口縁部は 上下に肥厚し平らに収める。胴 部は内湾しつつ立ち上がる。底 部は平底。	外面：口縁部ナデ、胴部上半ハ ケ目後ナデ、胴部下半ハケ目後 一部ヘラ磨き、底部ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削 り 外面頸部にヘラ状工具による刺 突文を羽状に 2 段めぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－明赤褐色・赤 褐色 内面－橙色 外面口縁部から胴部の一部 にスス付着。
122	甕形土器	SK6 埋土	口径 [22.8] 胴部最大径 [25.0]	胴部から口縁部にかけて「く」 の字状に外反しながら立ち上 がり、口縁部は下方に肥厚し平 らに収める。胴部は内湾しつ つ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目 後ナデ 内面：口縁部ナデ、胴部ヘラ削 り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面胴部最大径付近の一部 に黒斑残り、スス付着。
123	甕形土器	SK6 埋土	口径 [13.2]	体部から口縁部にかけて内湾し ながら立ち上がり、口縁部は 下方に肥厚し平らに収める。体 部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ、胴部ハケ目 後ナデ 内面：口縁部ハケ目後ナデ、頸 部ナデ、胴部上位ヘラ削り後ナ デ、胴部ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
124	不明	SK6 埋土	底径 3.5	底部から胴部にかけて内湾しな がら立ち上がる。底部は平底。	外面 胴部ハケ目後一部ヘラ磨 き及びナデ、底部ナデ 内面 ヘラ削り	胎土 1mm 大の砂粒若干 含む 焼成 良好 色調 橙色 内面一部黒斑残る。外面胴 部の一部にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
125	甕形土器	SK8 埋土	口径 [8.2] 胴部最大径 8.3 底径 2.4 器高 7.6	口縁部は「く」の字状に外反し立ち上がる。胴部は内湾し立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部から底部ハケ目後一部ヘラ磨き 内面：口縁部ハケ目後ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・にぶい褐色・褐灰色 内面－明褐色・灰黄褐色 外面一部に黒斑残る。
126	甕形土器	SK8 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は下方に僅かに肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾し立ち上がる。	外面：口縁端部強いナデ，口縁部から胴部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後ナデ 外面頸部に刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒多く含む 焼成：やや軟調 色調：外面－明黄褐色・橙色 内面－にぶい黄褐色
127	鉢形土器	SK8 埋土	胴部最大径 12.6 底径 5.0	口縁部は「く」の字状に外湾し立ち上がる。胴部は内湾気味に立ち上がる。底部から胴部にかけて外湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部から底部ハケ目後ナデ 内面：ナデ，頸部に口縁接合時の粘土痕残る。胴部一部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：外面－にぶい黄褐色・褐灰色・明褐色 内面－橙色・明赤褐色 外面胴部から底部の一部に黒斑残る。
128	不明	SK8 埋土	口径 [16.2]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部磨耗著しく不明 内面：口縁部上位ナデ，口縁部下位から頸部ヘラ磨き，胴部ヘラ削り後一部ナデ及びヘラ磨き口縁端部に強いヨコナデによる不規則な3条の凹線が生じる。外面頸部にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－黄褐色 内面－にぶい黄褐色・黄褐色
129	不明	SK8 埋土	胴部最大径 [8.8]	胴部は球形を呈する。	外面：ていねいなナデ，底部にナデ時の指頭圧痕残る。 内面：ていねいなナデ，胴部成形時と口縁部接合時の粘土痕跡残る。	胎土：精緻 焼成：やや軟調 色調：明褐色 外面一部に黒斑残る。
130	不明	SK8 埋土	胴部最大径 [13.4] 底径 [2.5]	胴部は内湾しながら立ち上がる。底部は僅かに平底を残す。	外面：磨耗著しく不明 内面：上位ナデ，以下ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：軟調 色調：橙色
131	不明	SK8 埋土		口縁部は外湾し，端部は平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 外面頸部にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－にぶい橙色 内面－浅黄褐色 内面一部に黒斑残る。外面口縁部上位と下位の一部にスス付着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
132	不明	SK8 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は下方に僅かに肥厚しつつ平らに収める。体部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り後一部ナデ	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
133	不明	SK8 埋土	底径 [2.4]	胴部は内湾しながら立ち上がる。底部は平底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：ヘラ削り	胎土：1mm 大の砂粒多く含む 焼成：良好 色調：外面－灰黄褐色 内面－にぶい橙色 外面一部に黒斑残る。
134	不明	SK8 埋土	底径 1.8	底部から胴部にかけて内湾気味に立ち上がる。底部は僅かに窪み底。	外面：胴部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－橙色 外面一部に黒斑残る。
135	不明	SK8 埋土		口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－にぶい赤褐色 内面－明赤褐色・にぶい黄橙色 外面胴部の一部に黒斑残る。
136	不明	SK8 埋土		口縁部は外湾し、端部は僅かに下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に斜め方向の刻目文をめぐらす。	胎土：0.5～1mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色 内面一部に黒斑残る。
137	不明	SK8 埋土		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は下方に肥厚しつつ平らに収める。	外面：ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り後一部ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－橙色 内面－にぶい黄橙色
138	甕形土器	調査区内	口径 [15.8]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部にかけて僅かに内湾する。端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ていねいなナデ，一部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ていねいなナデ，一部ヘラ磨き，頸部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色・にぶい黄褐色 内面－浅黄褐色・にぶい黄褐色 外面一部にスス附着。
139	甕形土器	調査区内		口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに上下に肥厚し平らに収める。頸部には粘土帯を貼り付ける。	外面：ナデ 内面：ナデ 口縁端部に2条の凹線をめぐらす。粘土帯には斜めに刻目文を施す。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－にぶい黄褐色 外面頸部にスス附着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
140	壺形土器	調査区内	口径 [11.2]	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：ナデ 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄橙色 外面口縁端部に黒斑残る。
141	鉢形土器	調査区内	口径 9.9 底径 3.3 器高 5.6	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり，端部手前で深い凹線を施すため「コ」の字状に外反する。端部は平らに収める。底部は低い脚状を呈し，平底である。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：口縁端部ナデ，口縁部から体部ヘラ削り後ナデ 外面口縁端部直下に強い凹線をめぐらす。その凹線に2段の上位がかかると羽状の刺突文をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：黄橙色
142	高環	調査区内		環部の底部から体部にかけて外上方に直線的にのびる。環部から脚柱部にかけては「く」の字状に外湾し，脚柱部は「ハ」の字状に広がる。外面脚柱部上位に粘土帯を貼り付ける。	外面：環部ヘラ磨き，脚部ナデ 内面：環部ヘラ磨き，脚部はナデ 粘土帯に4条の強い凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－浅黄橙色 環部内面－黄褐色 脚部内面－橙色
143	高環	調査区内	口径 [10.4] 底径 [7.6] 器高 [15.4]	環部の体部から口縁部にかけては内湾しながら立ち上がる。端部にかけて内傾し，端部は丸く収める。環部底部から脚柱部にかけて「く」の字状に外反し，脚柱部は外湾し脚裾部に至る。脚裾部端部は僅かに内方に肥厚しつつ平らに収める。脚柱部3箇所三角形の透かし穴を穿つ。	外面：口縁部ナデ，環部体部ナデ後ヘラ磨き，脚柱部ていねいなヘラ磨き，脚裾部ナデ 内面：口縁部ナデ，環部体部ていねいなナデ，円盤充填により環底部を成形し，底部にはナデ時の指頭圧痕残る。脚部はナデ，脚柱部内面にシボリ目が残る。 外面脚柱部上位に8条の沈線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－黄褐色
144	甕形土器	調査区内	口径 [19.0] 胴部最大径 [22.4]	口縁部は「く」の字状に外反し，端部は僅かに上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しながら立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部ナデ 胴部最大径付近に貝殻腹縁による刺突紋をめぐらす。口縁端部に2条の凹線をめぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－明赤褐色・にぶい橙色 内面－にぶい黄褐色 内面胴部に黒斑残る。外面頸部下半にスス附着。
145	甕形土器	調査区内	口径 17.3 胴部最大径 [22.1]	口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は僅かに下方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部ハケ目後ヘラ磨き 内面：口縁端部ナデ，口縁部中位ハケ目後ナデ，口縁部下位ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部に刺突文を2段めぐらす。	胎土：1～2mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・黄褐色・黄褐色 内面－黄褐色 内面一部に黒斑残る。外面にスス附着。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
146	甕形土器	調査区内	口径 16.9 胴部最大径 20.9 底径 5.7 器高 27.1	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：やや軟調 色調：黄橙色 外面にスス付着。
147	甕形土器	調査区内	口径 21.0 胴部最大径 29.2	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部から胴部にかけては直線的に外上方にのびる。	外面：口縁部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部ハケ目 内面：口縁部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：1～3mm 大の砂粒多く含む 焼成：良好 色調：赤褐色・橙色 外面胴部の一部に黒斑残る。
148	甕形土器	調査区内	口径 12.4 胴部最大径 13.0	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，頸部ヘラ削り後ナデ，一部，胴部ヘラ削り	胎土：1～2mm 大の砂粒多く含む 焼成：良好 色調：黄橙色 外面胴部の下位大半にスス付着。
149	甕形土器	調査区内	口径 16.9 胴部最大径 22.5	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は上下に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，胴部ハケ目後ていねいなナデ 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面頸部に貝殻腹縁による刺突文をめぐらす。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色・黄橙色 内面－橙色 外面一部に黒斑残り，スス付着。
150	甕形土器？	調査区内	口径 7.5 胴部最大径 8.4 底径 2.3 器高 7.8	口縁部は外湾し，端部は丸く収める。胴部は内湾気味に立ち上がる。底部は平底。	外面：口縁部ナデ，胴部強いナデ，胴部ナデ，胴部下位に粘土接合時の痕跡残る。 内面：口縁部ナデ，胴部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：明褐色・黄褐色 外面一部に黒斑残る。
151	壺形土器	調査区内	胴部最大径 13.6 底径 3.1	胴部は扁平な球形を呈する。底部は高台式で平底である。	外面：ていねいなナデ 内面：ナデ，胴部最大径付近はオサエ及びナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：浅黄橙色 外面胴部上半及び内面に黒斑残る。外面胴部上半一部に赤褐色化粧土が残る。
152	鉢形土器	調査区内	口径 37.1 胴部最大径 [35.5]	口縁部は「く」の字状に外反し、端部は僅かに下方に肥厚しつつ平らに収める。体部は内湾しながら立ち上がる。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ，体部下半は一部ヘラ磨き 内面：口縁部ナデ，一部ヘラ磨き，体部ヘラ削り後一部ナデ	胎土：1～2mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色 外面体部下半一部及び内面一部に黒斑残る。
153	甕形土器	調査区内	口径 [7.6] 胴部最大径 [9.1] 器高 8.9	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面 口縁部ナデ，胴部ハケ目後ヘラ磨き，底部ナデ 内面 口縁部ナデ，胴部ヘラ削り 外面胴部上位に不完全な波状文をめぐらす。	胎土 精緻 焼成 良好 色調 外面－黄橙色・橙色 内面－橙色 外面及び内面底部の一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
154	甕形土器	調査区内	口径 [14.4] 胴部最大径 [14.3] 底径 3.0 器高 16.9	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し立ち上がる。端部は僅かに上方に肥厚しつつ平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は窪み底である。	外面 口縁部ナデ, 体部ヘラ磨き, 底部磨耗著しく不明 内面 口縁部から頸部にかけてナデ, 胴部ヘラ削り	胎土 1mm 大の砂粒含む 焼成 良好 色調 赤褐色 外面大半及び内面口縁部の一部にスス付着。
155	鉢形土器	調査区内	口径 [12.0] 底径 [4.6] 器高 8.1	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり, 端部は丸く収める。底部は低い脚状を呈し, 窪み底である。	外面 口縁部ナデ, 体部磨耗著しく不明, 体部下位から底部ナデ, 体部下位にナデ時の指頭圧痕残る。 内面 口縁部ナデ, 体部ヘラ削り後ナデ	胎土 1mm 大の砂粒含む 焼成 やや軟調 色調 にぶい黄橙色・褐灰色
156	碗形土器	調査区内	口径 7.4 底径 1.7 器高 6.0	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり, 端部にかけて内傾する。端部は丸みを帯びつつ平らに収める。底部は平底を意図しつつ窪みがある。	外面 口縁部ナデ, 体部ハケ目, 底部ナデ 内面 口縁部ナデ, 口縁部オサエ, 体部ナデ	胎土 2mm 大の砂粒含む 焼成 良好 色調 外面一橙色 内面一明赤褐色 外面一部黒斑残る。
157	甕形土器	調査区内	口径 19.2 胴部最大径 18.2 底径 2.5 器高 13.8	口縁部は「く」の字状に外反し, 端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は丸みを持つものの, 僅かに平底を呈する。	外面 口縁部ナデ, 胴部ヘラ磨き, 底部ナデ 内面 口縁部ナデ, 胴部ヘラ削り 外面頸部にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土 1~2mm 大の砂粒含む 焼成 良好 色調 黄褐色 内面底部に黒斑残る。外面にスス付着。
158	甕形土器	調査区内	口径 [14.1] 胴部最大径 12.1 底径 2.5 器高 11.1	口縁部は「く」の字状に外反し, 端部は丸みを帯びるものの平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面 口縁部ナデ, 胴部ヘラ削り後ていねいなナデ, 底部ナデ 内面 口縁部ナデ, 胴部ヘラ削り後ナデ 外面頸部にヘラ状工具による刺突文を羽状に2段めぐらす。	胎土 1mm 大の砂粒含む 焼成 良好 色調 外面一黄褐色 内面一橙色
159	壺形土器	調査区内	口径 [15.0] 胴部最大径 [27.3] 底径 [8.4] 器高 [36.0]	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し, その端部に内湾気味に立ち上がる口縁部が内傾してつく複合口縁。口縁端部は平らに収める。胴部は長径が短い扁平な倒卵形で, 底部は平底。	外面 口縁部ナデ, 頸部ハケ目, 胴部ハケ目後一部ナデ, 底部ナデ 内面 口縁部ナデ, 頸部ハケ目後ナデ, 胴部上部ハケ目, 胴部中~下部ヘラ削り後一部ナデ 外面口縁部に4条の凹線をめぐらし, 櫛歯状工具によるはねあげ紋を等間隔に施す。外面頸部下半に櫛歯状工具による不規則な流水文を施す。	胎土 1mm 大の砂粒若干含む 焼成 良好 色調 外面一浅黄褐色 内面一にぶい黄褐色 外面頸部の一部に明赤褐色の化粧土が残る。外面底部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
160	壺形土器	調査区内	口径 8.8 胴部最大径 16.3 底径 5.7 器高 24.1	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し立ち上がる。端部は丸く収める。胴部は扁平な球形を呈する。底部は高台状で窪み底である。	外面：口縁部ナデ，頸部ハケ目後ナデ，胴部下半のみハケ目後ナデ 全体をていねいなナデ，底部ナデ 内面：ナデ，底部から胴部にかけて強いナデ 頸部下半に刺突文を2段めぐらす。	胎土：精緻 焼成：良好 色調：橙色・にぶい黄橙色 外面底部から胴部にかけて黒斑残る。
161	壺形土器	調査区内	口径 10.8	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は僅かに下方に肥厚し、平らに収める。	外面：口縁部ナデ，頸部ナデ後に波状文を施し再びナデ，胴部ハケ目後ナデ 内面：口縁部から頸部ナデ，胴部ヘラ削り 口縁端部直下の対になる2箇所に穿孔を施す。	胎土：1～2mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：橙色
162	鉢形土器	調査区内	口径 [42.6] 胴部最大径 [38.0] 底径 13.7 器高 25.4	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。体部は内湾しながら立ち上がる。底部は窪み底である。	外面：口縁端部ナデ，口縁部ハケ目後ナデ，体部ヘラ磨き，一部ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り後一部ナデ	胎土：1～2mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－赤褐色・橙色 内面－明赤褐色・橙色・にぶい褐色 外面体部下半一部及び内面口縁部，体部下半の一部に黒斑残る。
163	碗形土器	調査区内	口径 [10.8] 底径 [4.6] 器高 9.2	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり，口縁端部にかけて内傾しつつ，端部は丸く収める。底部は高台状で，中央が窪み底を呈し，周縁は平らに収める。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部ヘラ磨き，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り	胎土：精緻 焼成：良好 色調：外面－黄橙色 内面 黄橙色・橙色 外面一部黒斑残る。
164	碗形土器	調査区内	口径 10.4 底径 1.1 器高 7.0	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり，端部は丸く収める。底部は僅かに平底。	外面：口縁端部ナデ，口縁部から体部ヘラ削り後ナデ，底部ナデ 内面：ナデ，底部にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：1～2mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－橙色 内面－黒褐色 内面大半に黒斑残る。
165	碗形土器	調査区内	口径 12.0 底径 4.6 器高 9.8	体部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がり，端部は僅かに平らな面をもたせて収める。底部は平底である。	外面：口縁部ナデ，体部一部ハケ目後ナデ，底部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ヘラ削り後ナデ，体部中位にナデ時の指頭圧痕残る。	胎土：0.5～1mm大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－明黄褐色・橙色 内面－明褐色 外面一部に黒斑残る。

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
166	碗形土器	調査区内	口径 4.3 底径 1.2 器高 3.8	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。底部は平底。	手づくねによる成形, 内外面とも口縁部ナデ	胎土:精緻 焼成:良好 色調:にぶい黄褐色 内外面の一部黒斑残る。
167	不明	調査区内	胴部最大径 5.2 底径 2.0	体部は最大径の箇所内で反しながら立ち上がる。底部は平底である。	外面:ナデ 内面:ナデ 外面体部上半にヘラ状工具による刺突文をめぐらす。	胎土:精緻 焼成:良好 色調:にぶい黄褐色
168	甕形土器	調査区内	口径 13.1 胴部最大径 16.9 底径 3.5 器高 21.6	口縁部は「く」の字状に外湾し、端部は平らに収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は平底。	外面:口縁部ナデ, 胴部ハケ目, 底部ナデ 内面:口縁部ナデ, 胴部ヘラ削り 外面頸部に波状文を2段めぐらす。	胎土:精緻 焼成:良好 色調:外面-黄褐色・黄橙色 内面-黄褐色 外面一部に黒斑残る。
169	壺形土器	調査区内	口径 12.8	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外反し立ち上がる。口縁端部にかけて外湾しつつ端部は平らに収める。	外面:口縁部ナデ, 口縁部磨耗著しく不明, 頸部ナデ 内面:口縁部磨耗著しく不明, 頸部ナデ, ナデ時の指頭圧痕残る 外面頸部に波状文をめぐらす。	胎土:1mm大の砂粒含む 焼成:軟調 色調:浅黄褐色
170	壺形土器	調査区内	口径 [8.7] 胴部最大径 [12.6]	胴部から頸部にかけ「く」の字状に外反し, そのまま口縁部にむけて外上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。胴部は扁平な球形を呈する。	外面:口縁部, 頸部ナデ, 胴部ていねいなナデ 内面:口縁部ナデ, 口縁部ハケ目, 頸部上半ナデ, 頸部下半オサエ, 胴部ハケ目後ナデ 口縁部・頸部外面に16条の櫛描直線文をめぐらす。内面頸部に粘土接合痕残る。	胎土:精緻 焼成:良好 色調:外面-橙色 内面-明赤褐色・橙色 内面胴部下に黒斑残る。
171	壺形土器	調査区内	口径 20.9 胴部最大径 35.3 底径 11.2 器高 53.5	頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し, その端部に外湾気味に立ち上がる口縁部が内傾してつく複合口縁。口縁端部は平らに収める。頸部から胴部にかけて「く」の字状に外反し, 粘土帯を貼り付ける。胴部は倒卵形を呈し, 底部は平底。	外面:口縁部ハケ目後ナデ, 頸部ハケ目, 胴部ヘラ磨き, 底部ナデ 内面:口縁部ハケ目後ナデ, 頸部ナデ, 胴部上部ナデ, 胴部中～下部ヘラ削り後ナデ 外面口縁部に8条ないしは9条の凹線をめぐらす。粘土帯にハケ状工具による押引文をめぐらす。外面頸部下位から胴部上位に波状文を2段にめぐらす。	胎土:1mm大の砂粒含む 焼成:良好 色調:外面-明赤褐色・橙色 内面-明赤褐色 外面胴部の中位に黒斑残る。
172	鉢形土器	調査区内	口径 14.5 胴部最大径 13.2 底径 2.0 器高 9.6	口縁部は「く」の字状に外反し, 端部は丸く収める。胴部は内湾しつつ立ち上がる。底部は僅かに平底。	外面:口縁部ナデ, 胴部ハケ目後一部ナデ, 底部ナデ 内面:口縁部ナデ, 胴部ヘラ削り後ナデ	胎土:1~3mm大の砂粒若干含む 焼成:やや軟調 色調:外面-明赤褐色・橙色 内面-明赤褐色

番号	器種	出土位置	寸法 (cm)	器形	成形・調整	備考
173	碗形土器	調査区内	口径 10.6 底径 4.1 器高 6.5	体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり、端部は丸みを帯びるものの平らに収める。底部は高台状を呈し、窪み底である。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部へら磨き，底部ナデ 内面：口縁部から体部ハケ目，底部ナデ	胎土：1～3mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：淡黄色
174	高坏	調査区内	底径 [13.2]	坏部から脚部にかけて「く」の字状に外反し，脚部は「ハ」の字状にゆるやかに広がり，脚端部にかけて僅かに外湾し，端部は平らに収める。脚部の上位に4個と中位に残存部で3個の透かし孔を穿つ。	外面：坏部ナデ，脚部上位，下位はナデ，中位はへら磨き 内面：坏部へら磨き，脚部はナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－浅黄橙色 内面－にぶい黄橙色 脚端部一部に黒斑残る。
175	高坏	調査区内	口径 21.4	坏部の底部から内湾しつつ外にひろがり，体部半ばで「く」の字状に内反し，口縁部は「く」の字状に外湾し，端部は丸く収める。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目後一部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ハケ目後ナデ	胎土：0.5～1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色・浅黄橙色 内面一部に黒斑残る。
176	器台？	調査区内		残存する坏部は僅かに内湾しながらひろく。脚柱部は中央がふくらみを持つ形で内湾し，脚裾部にかけて「く」の字状に外反する。	外面：ナデ 内面：坏部は磨耗著しく不明，脚部はナデ 脚柱部内面に坏部と脚部の接合痕が残る。	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－浅黄橙色 内面－にぶい黄橙色・浅黄色 坏部外面一部に黒斑残る。
177	碗形高坏	調査区内	口径 [10.3] 底径 [16.8] 器高 [10.1]	坏部は体部から口縁部にかけて内湾しつつ立ち上がり，端部は丸く収める。脚部は「ハ」の字状にゆるやかに外湾しつつ広がり，脚端部は丸く収める。	外面：口縁部ナデ，体部ハケ目，脚部ハケ目後一部へら磨き，脚端部ナデ 内面：口縁部ナデ，体部ハケ目，脚部上位ナデ，脚部中位以下ハケ目，脚端部ナデ	胎土 精緻 焼成 良好 色調 橙色
178	甗形土器？	調査区内		頸部から口縁部にかけて「く」の字状に外湾し，その端部に外湾気味に立ち上がる口縁部が外傾してつく複合口縁。口縁端部は丸く収める。	外面：ナデ 内面：口縁部から頸部上半までナデ，頸部下半へら削り	胎土：0.5mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：黄橙色
179	不明	調査区内		体部から口縁部にかけては外上方に直線的に，口縁部は外湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味に収める。	外面：口縁端部ナデ，以下押型文（ネガ楕円文） 内面：口縁端部ナデ，体部上位押型文（ネガ楕円文），以下ナデ 内面口縁端部に縦方向の刻目文をめぐらす。	胎土：1～2mm 大の砂粒若干含む 焼成：良好 色調：にぶい黄橙色
180	不明	調査区内		体部から口縁部にかけて内湾気味に，口縁部は直線的に立ち上がる。端部は丸く収める。	外面：ナデ後押型文（ネガ楕円文） 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：やや軟調 色調：外面－にぶい黄橙色・橙色 内面－にぶい黄褐色
181	不明	調査区内		外上方に直線的に立ち上がる。	外面：押型文（山形文） 内面：ナデ	胎土：1mm 大の砂粒含む 焼成：良好 色調：外面－にぶい黄橙色 内面－橙色

第2表 三谷遺跡出土鉄器観察表

([]:復元値)

番号	種別	出土位置	計測数値 (cm、g)				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
182	鏃	SH6	[4.0]	3.2	0.3	10.3	無茎五角形凹基式鏃 断面形状-レンズ形
183	鏃	SH7	[3.0]	1.8	0.25	5.5	柳葉式鏃 断面形状-レンズ形
184	鏃	SH7 埋土	[3.7]	1.6	0.2	4.4	有茎柳葉式鏃 鏃身部断面形状-レンズ形基部断面形状-長方形
185	鏃	SH7 埋土	鏃身部 4.0 基部 [1.4]	鏃身部 2.0 基部 0.4	鏃身部 0.15 基部 0.3	7.8	有茎柳葉式鏃 鏃身部断面形状-レンズ形基部断面形状-長方形
186	鏃	SH7 埋土	鏃身部 3.0 基部 [0.5]	鏃身部 1.4 基部 0.7	鏃身部 0.2 基部 0.2	3.5	有茎柳葉式鏃 鏃身部断面形状-レンズ形基部断面形状-長方形
187	鏃	SH7 埋土	[2.9]	1.8	0.23	3.4	柳葉式鏃 断面形状-レンズ形
188	鏃	SH7 埋土	[2.3]	1.1	0.3	1.9	柳葉式鏃 断面形状-レンズ形
189	鏃	SH7 埋土	[2.0]	1.2	0.2	1.2	断面形状-蒲鋒形
190	鏃	SK13	[3.2]	2.5	0.2	4.5	断面形状-レンズ形
191	鏃?	SH7 埋土	[3.5]	1.2	0.2	3.4	側面に刃が無く未製品か? 断面形状-長方形
192	斧	SH7 埋土	5.1	2.7	0.6	21.3	袋状鉄斧
193	鎌	SH7 埋土	[3.3]	1.85	背部 0.15 刃部 0.1	5.9	
194	刀子?	SH7 埋土	[4.6]	1.5	0.45	13.5	
195	錐状鉄製品	SH7 埋土	[2.9]	0.2	0.2	0.5	断面形状-円形
196	錐状鉄製品?	SH7 埋土	[2.0]	0.3	0.28	0.6	断面形状-基部は方形 先端部は扁平な円形
197	錐状鉄製品?	SH7 埋土	[2.7]	0.3	0.3	0.6	断面形状-方形
198	錐状鉄製品?	SH7 埋土	[2.25]	0.25	0.25	0.7	断面形状-円形
199	錐状鉄製品?	SH7 pit	[3.1]	0.4	0.38	1.1	断面形状-扁平な円形
200	不明品	SH7	[3.3]	0.7	0.2	2.5	鏃基部か? 断面形状-長方形
201	不明品	SH7	[3.8]	0.6	0.2	3.4	木質残存 断面形状-長方形
202	不明品	SH7 炉	[2.4]	0.5	0.2	1	鏃基部か? 断面形状-長方形
203	不明品	SH7	[2.5]	3.4	0.4	12.3	切片か? 断面形状-長方形
204	不明品	SH7 埋土	2.8	刃部 1.7 基部 0.6	0.6	5.9	刃部断面形状-長方形 基部断面形状-長方形の中央部が 表裏とも窪んだ形
205	不明品	SH7 埋土	[4.5]	1.6	0.6	8.8	断面形状-くさび形

番号	種別	出土位置	計測数値 (cm、g)				備考
			長さ	最大幅	断面厚	重量	
206	不明品	SH7 埋土	[3.6]	0.6	0.25	2.2	鍬茎部か？ 断面形状－長方形
207	不明品	SH7 埋土	[3.2]	0.7	0.2	2.4	鍬茎部か？ 断面形状－長方形
208	不明品	SH7 埋土	[3.4]	0.35	0.25	2.3	断面形状－長方形
209	不明品	SH7 埋土	[3.0]	0.3	0.2	1	断面形状－扁平な円形
210	不明品	SH7 埋土	[2.8]	0.3	0.2	0.8	断面形状－方形
211	不明品	SH7 埋土	[3.6]	0.35	0.25	2.1	断面形状－長方形
212	不明品	SH7 埋土	[2.6]	1.7	0.3	2.9	切片か？ 断面形状－台形
213	不明品	SH7 埋土	[1.3]	1.9	0.38	1.8	切片か？ 断面形状－平行四辺形
214	鍬	SH16	[2.8]	1.2	0.25	3.5	柳葉式鍬 断面形状－レンズ形
215	刀子	SH23	[17.55]	1.2	0.3	21.9	
216	鑿	SH24	[7.5]	0.9	0.4	21.7	基部断面形状－長方形
217	刀子？	SH24 埋土	[4.2]	1.9	0.25	6.5	
218	鍬	SX2	鍬身部 4.5 茎部 2.0	鍬身部 2.0 茎部 0.3	鍬身部 0.2 茎部 0.3	7.2	有茎柳葉式鍬 鍬身部断面形状－レンズ形 茎部断面形状－長方形
219	鍬	3区埋土	鍬身部 5.3 茎部 1.5	鍬身部 2.2 茎部 0.5	鍬身部 0.2 茎部 0.4	10.7	有茎柳葉式鍬 鍬身部断面形状－レンズ形 茎部断面形状－長方形
220	鍬	4区埋土	鍬身部 3.6 茎部 1.6	鍬身部 1.45 茎部 0.5	鍬身部 0.25 茎部 0.3	5.8	有茎柳葉式鍬 鍬身部断面形状－レンズ形 茎部断面形状－長方形
221	鍬	4区埋土	鍬身部 3.1 茎部 2.5	鍬身部 1.3 茎部 0.55	鍬身部 0.25 茎部 0.2	5.2	有茎柳葉式鍬 鍬身部断面形状－レンズ形 茎部断面形状－長方形
222	鍬	4区埋土	鍬身部 3.4 茎部 [1.3]	鍬身部 1.5 茎部 1.1	鍬身部 0.2 茎部 0.3	8.4	有茎柳葉式鍬 鍬身部断面形状－レンズ形 茎部断面形状－長方形
223	鈍	10区埋土	頭部 4.0 身部 [1.1]	頭部 1.3 身部 0.85	頭部 0.2 身部 0.25	8.0	頭部は裏すきを持つ 身部断面形状－長方形
224	鍬	16区埋土	鍬身部 7.8 茎部 2.7	鍬身部 3.9 茎部 0.5	鍬身部 0.2 茎部 0.4	27.1	雁股式鍬 明瞭な関を有する 鍬身部断面形状－長方形 茎部断面形状－方形
225	不明品	22区埋土	[5.6]	0.3	0.25	2.0	断面形状－基部は方形 先端部は長方形

第3表 三谷遺跡出土石器観察表

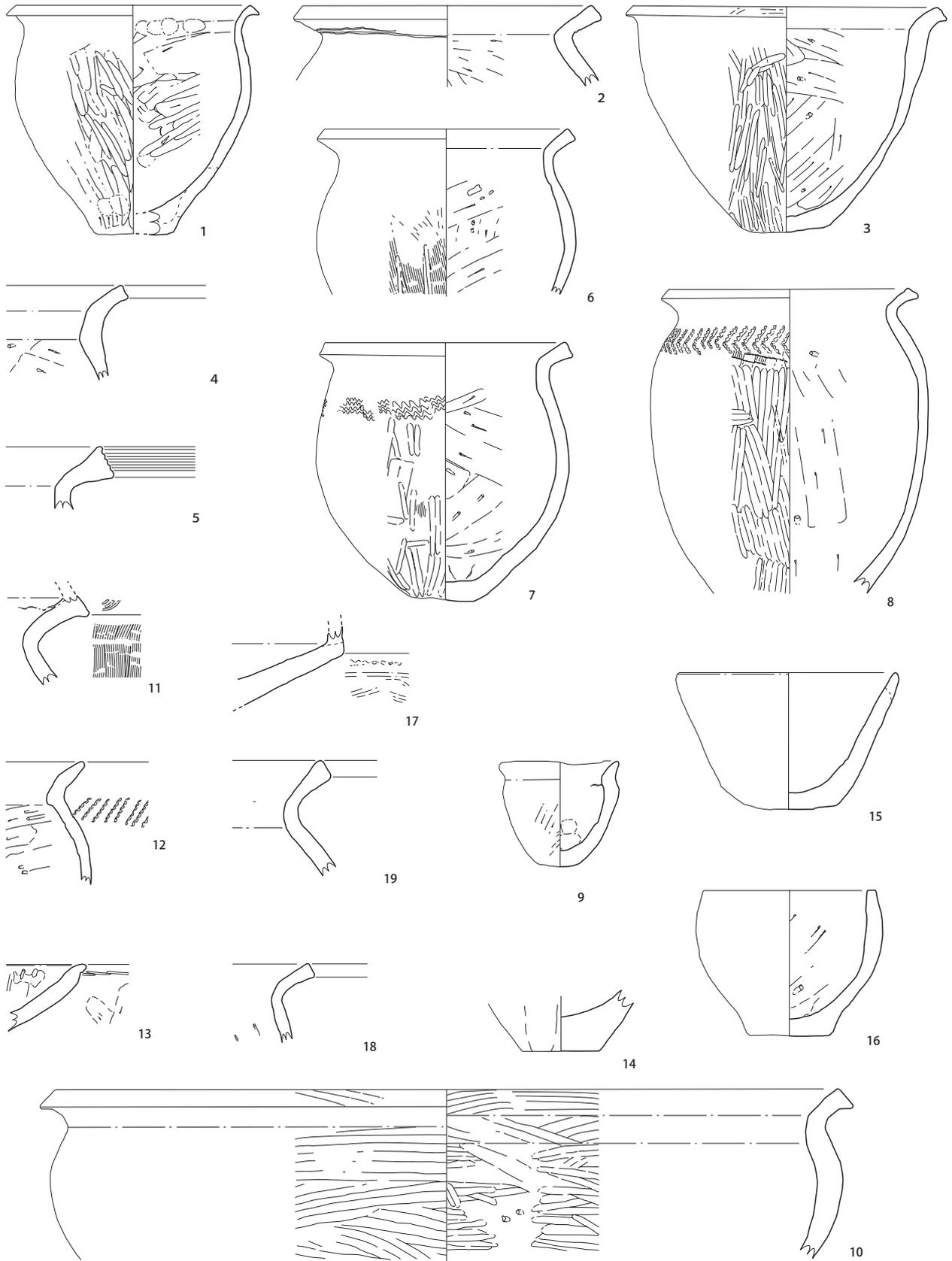
([]:復元値)

番号	種別	出土位置	計測数値 (cm、g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
226	台石	SH1	38.9	18.1	11.5	-	
227	砥石	SH2 埋土	5.6	5.6	1.1	22.9	2個に分離 使用面:2 材質:砂岩
228	敲石	SH3	21.3	8.2	6.7	-	1面に打撃による剥離
229	磨石	SH3 埋土	18.5	9.9	8.8	-	
230	台石	SH5	30.9	8.1	32.4	-	
231	台石	SH5 焼土上	37.5	15.3	7.6	-	
232	石斧	SH5 埋土	8.9	4.1	2.6	180	刃部の磨耗著しい 材質:黒雲母花崗岩
233	磨石	SH6	8.3	7.3	5.6	511.7	
234	磨石	SH7	16.6	9.9	7.7	-	
235	台石	SH12	28.2	16.9	8.6	-	
236	台石	SH13	34.3	17.7	12.4	-	
237	砥石	SH17	13.4	6.7	2.5	383.1	使用面:4 材質:頁岩
238	鏃	調査区内	[1.3]	1.5	0.3	0.6	材質:安山岩
239	鏃	調査区内	1.8	1.4	0.3	0.4	材質:安山岩
240	鏃	調査区内	2.7	1.4	0.4	1.7	材質:安山岩
241	鏃	調査区内	2.4	1.1	刃部0.3 茎部0.4	1.2	材質:頁岩
242	鏃	調査区内	[0.2]	0.2	0.3	0.7	材質:頁岩
243	鏃	調査区内	[1.9]	1.5	0.3	0.5	材質:頁岩
244	鏃	調査区内	1.5	1.1	0.2	0.3	材質:頁岩
245	鏃	調査区内	2.4	1.7	0.5	1.7	材質:頁岩
246	石斧	調査区内	[6.5]	[6.3]	[3.7]	[219.5]	材質:石英斑岩
247	石匙	調査区内	刃部4.7 茎部2.1	3.1	0.5	6.9	材質:安山岩
248	石匙	調査区内	[3.5]	[4.3]	0.7	8.7	材質:頁岩
249	砥石	調査区内	10.1	3.4	3.1	162.2	使用面:5 材質:砂岩

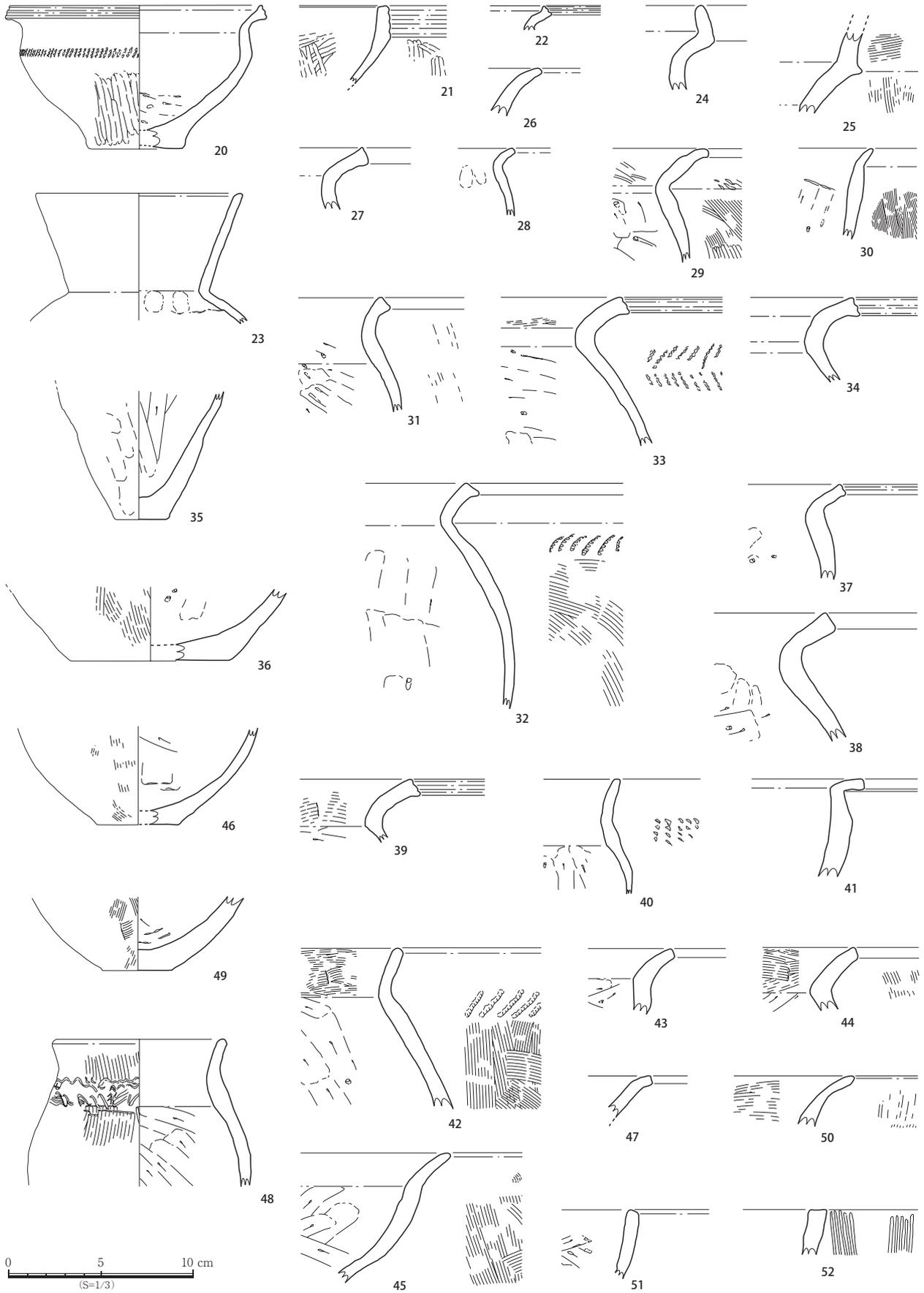
第4表 三谷遺跡出土土製品観察表

([]:復元値)

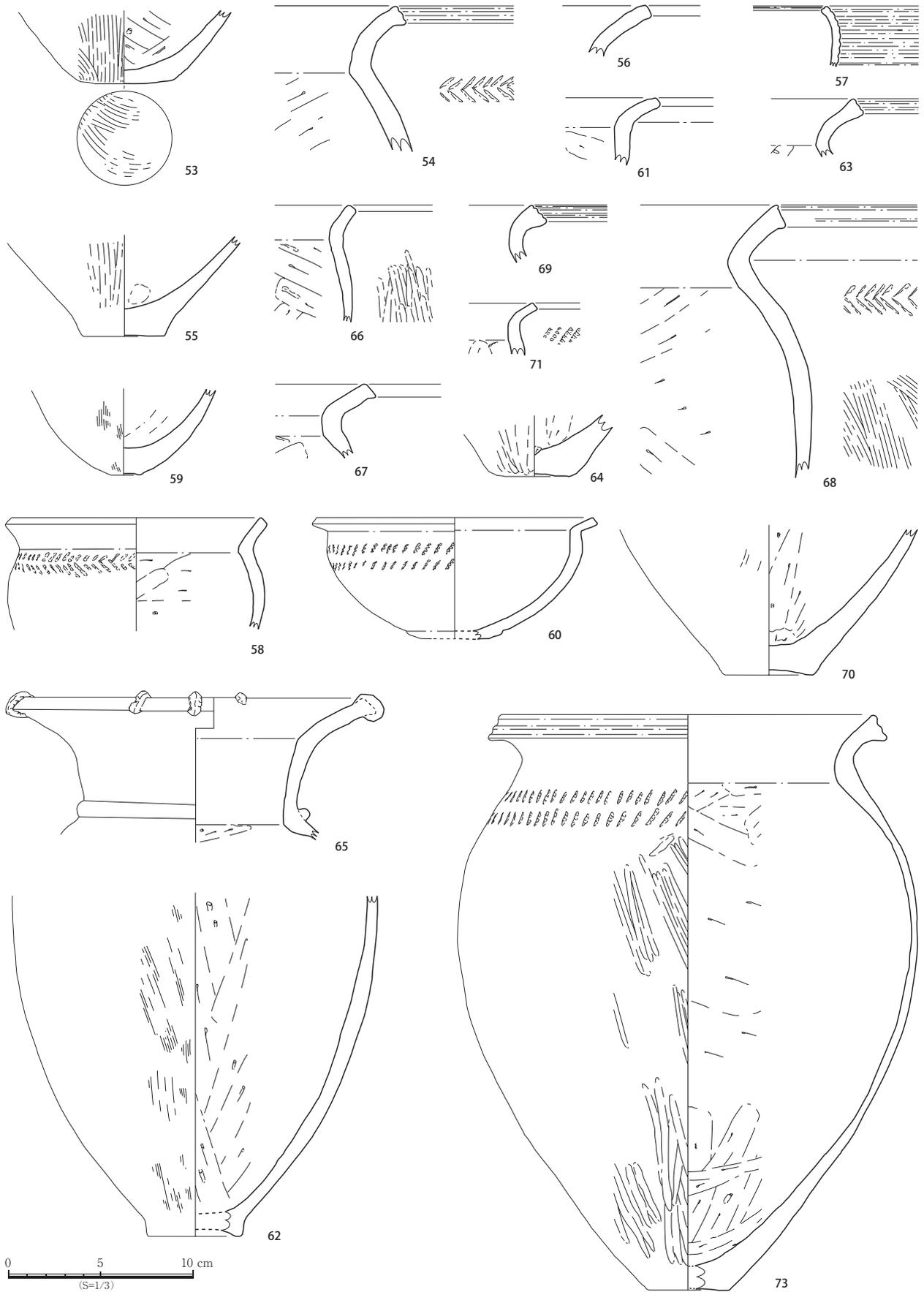
番号	種別	出土位置	計測数値 (cm、g)				備考
			長さ	幅	厚さ	重量	
250	管玉	SH7 張床	1.1	0.7	0.7	0.8	
251	板状土製品	SH6 埋土	[3.0]	5	1.0		1面から穿孔 繊維痕
252	勾玉	調査区内	4.6	1.9	1.8		両面から穿孔
253	勾玉	調査区内	[2.0]	[1.3]	[1.5]		
254	勾玉	調査区内	4.7	2.7	1.8		ひれ付勾玉
255	紡錘車	調査区内	[4.5]	[2.4]	0.9		



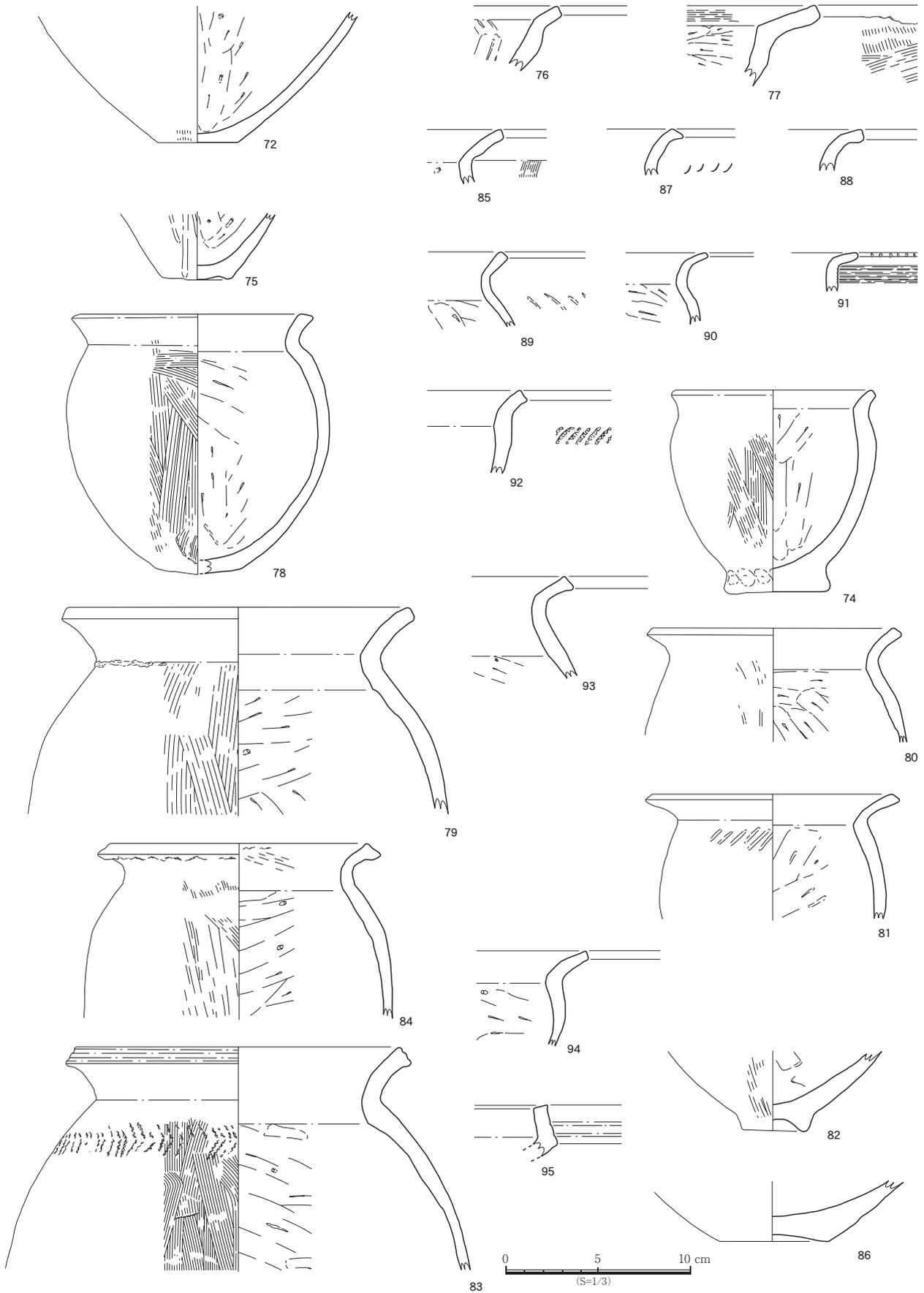
第 39 図 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)



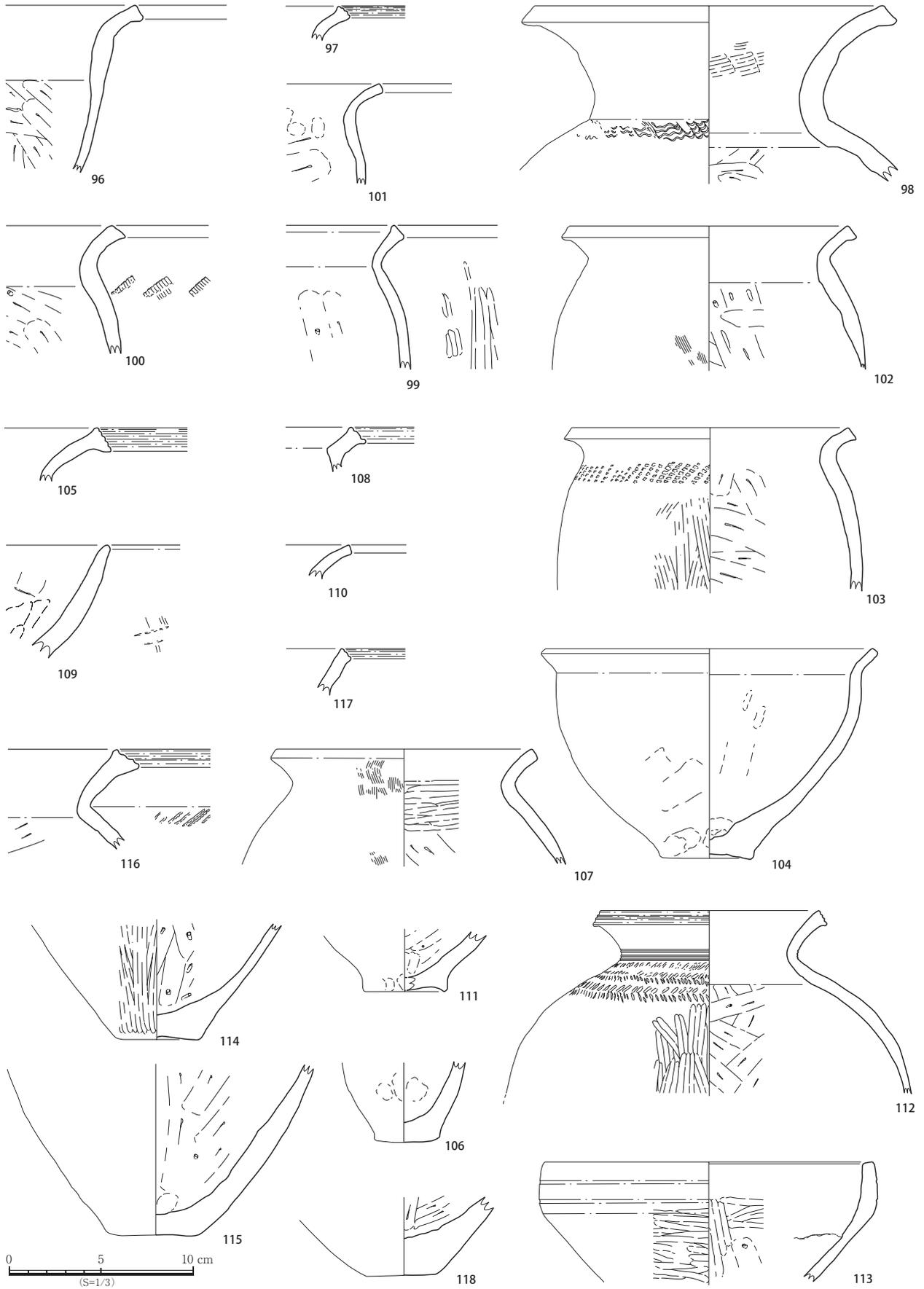
第 40 図 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)



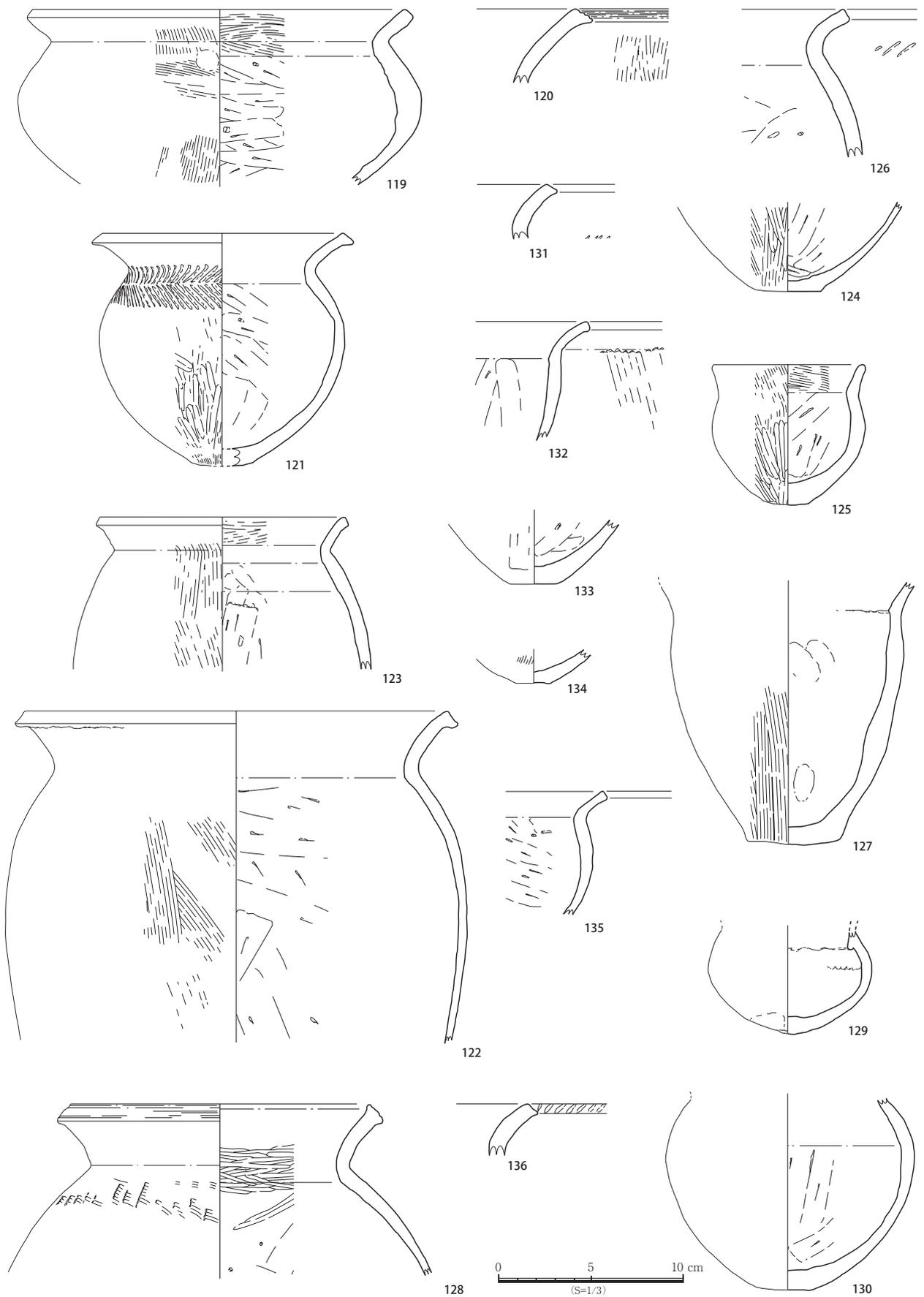
第 41 図 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)



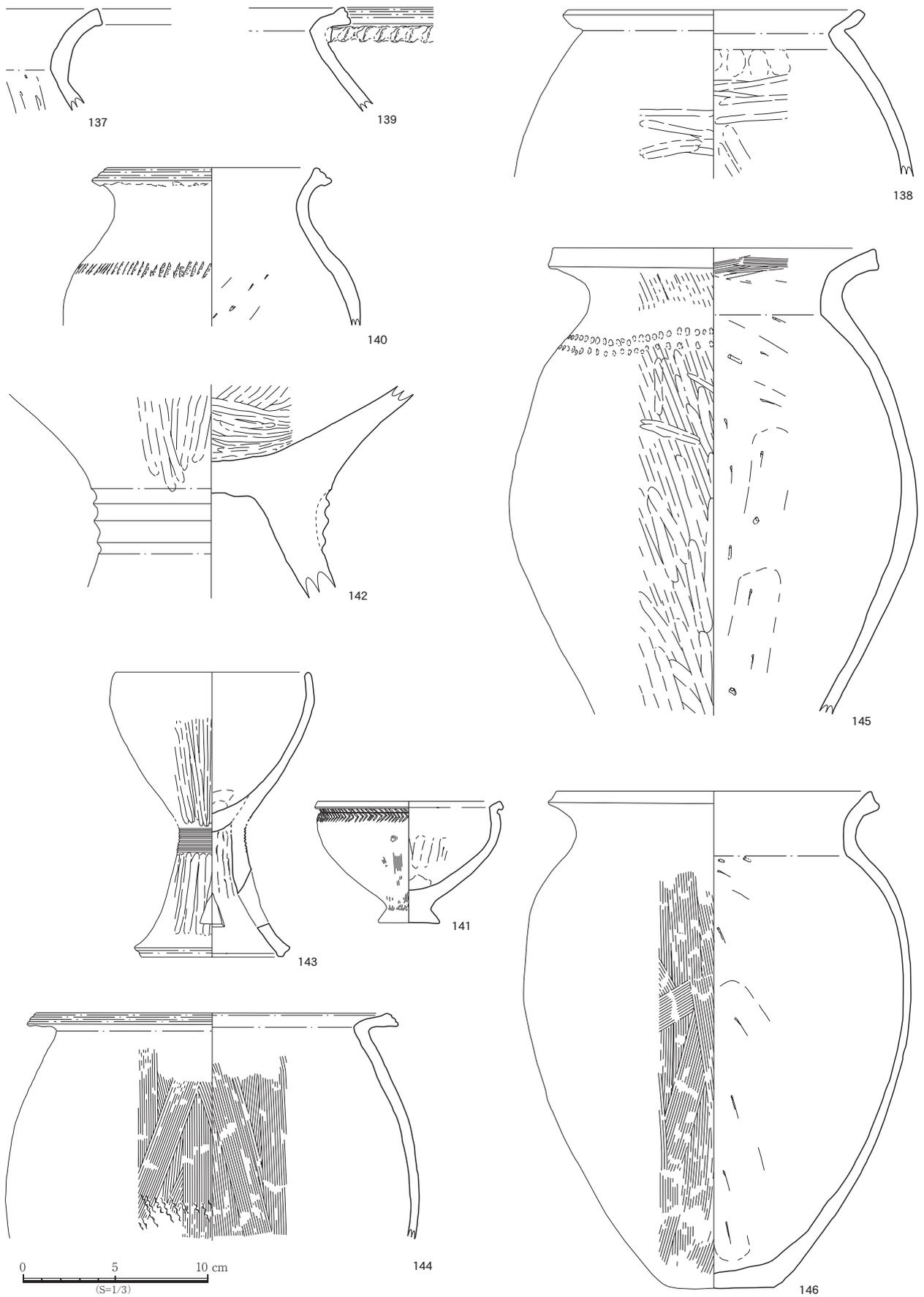
第 42 図 出土遺物実測図 (4) (S=1/3)



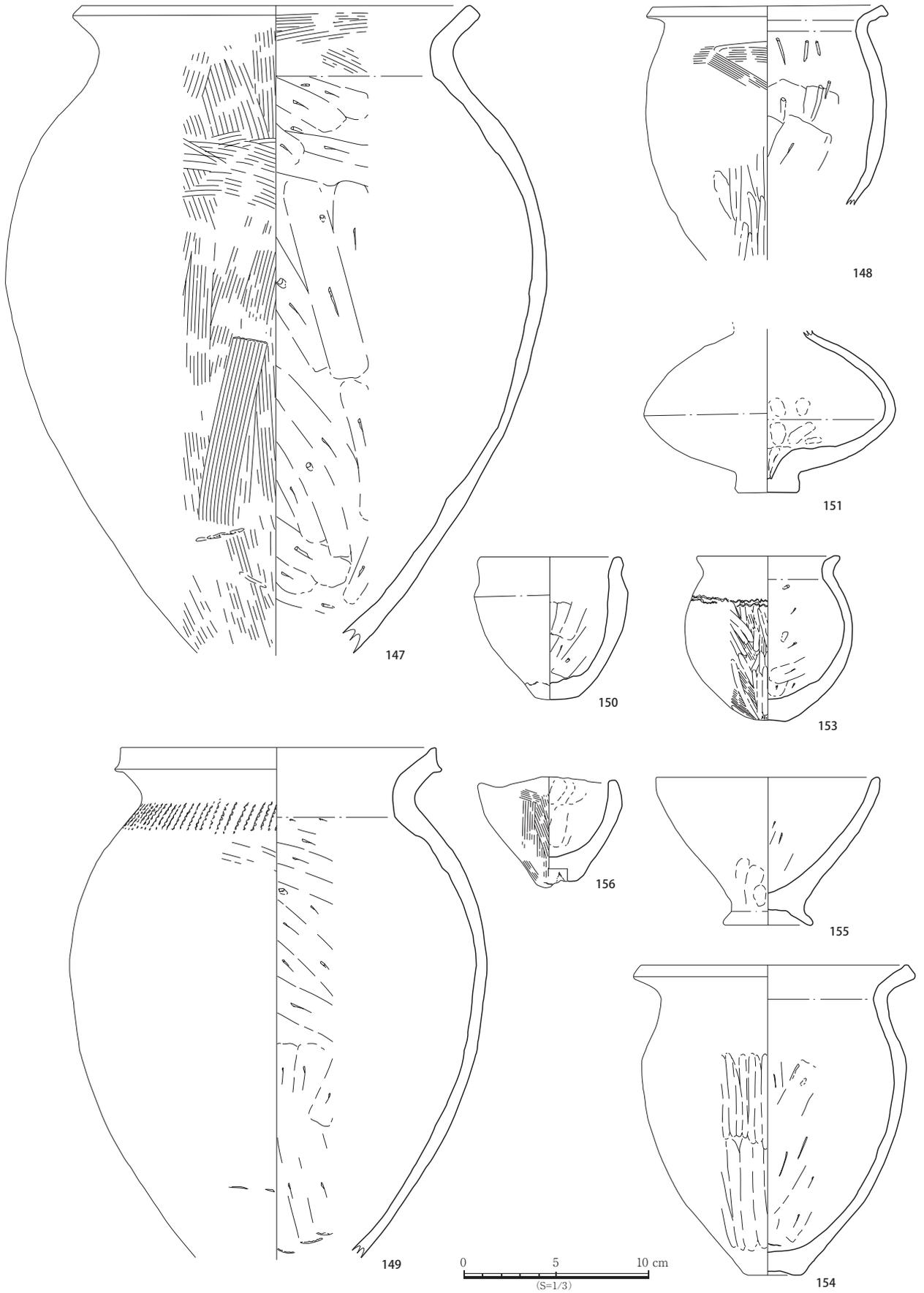
第 43 図 出土遺物実測図 (5) (S=1/3)



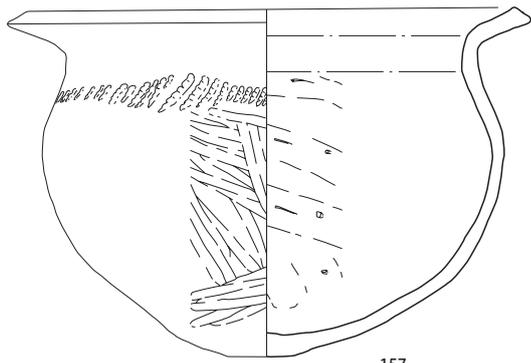
第 44 図 出土遺物実測図 (6) (S=1/3)



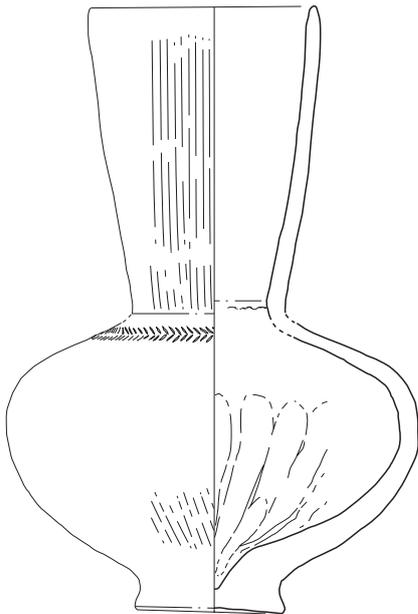
第 45 図 出土遺物実測図 (7) (S=1/3)



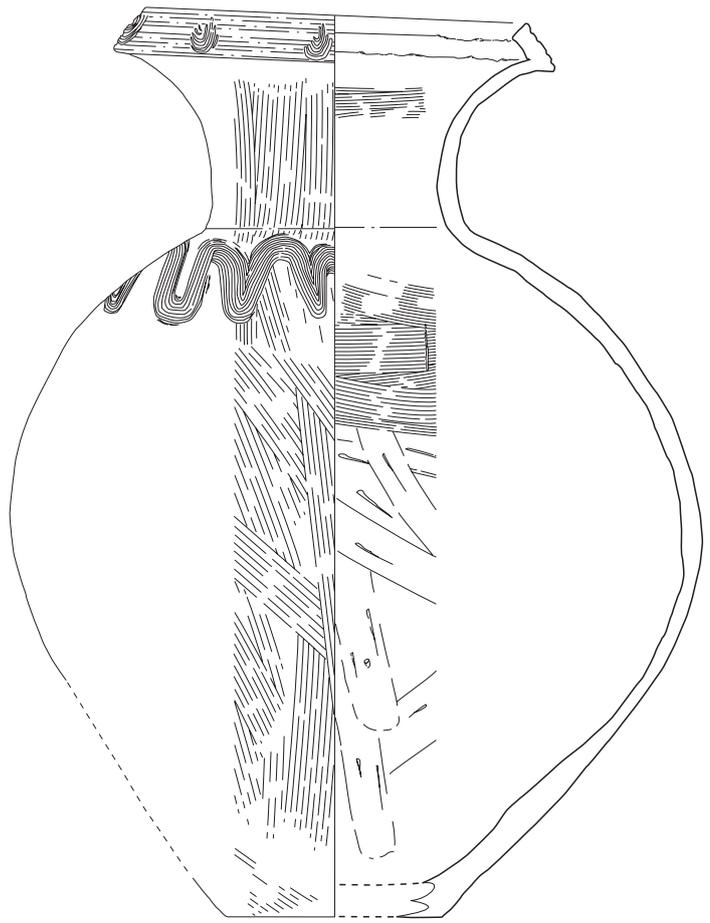
第 46 図 出土遺物実測図 (8) (S=1/3)



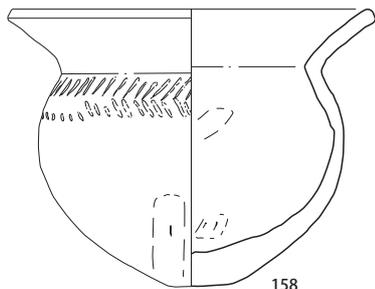
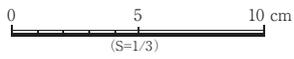
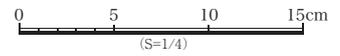
157



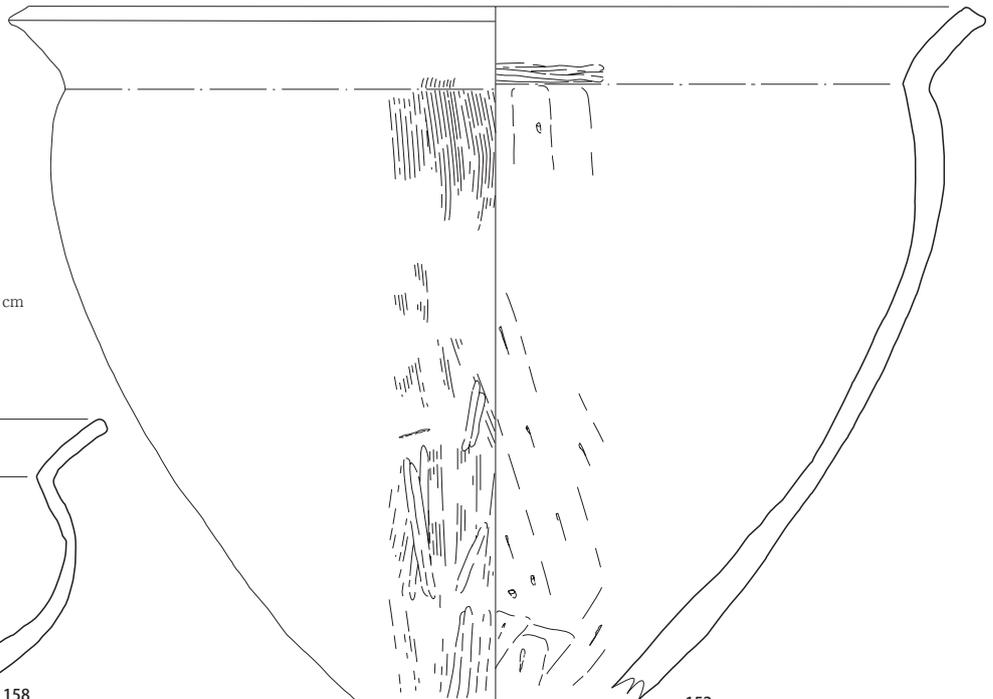
160



159

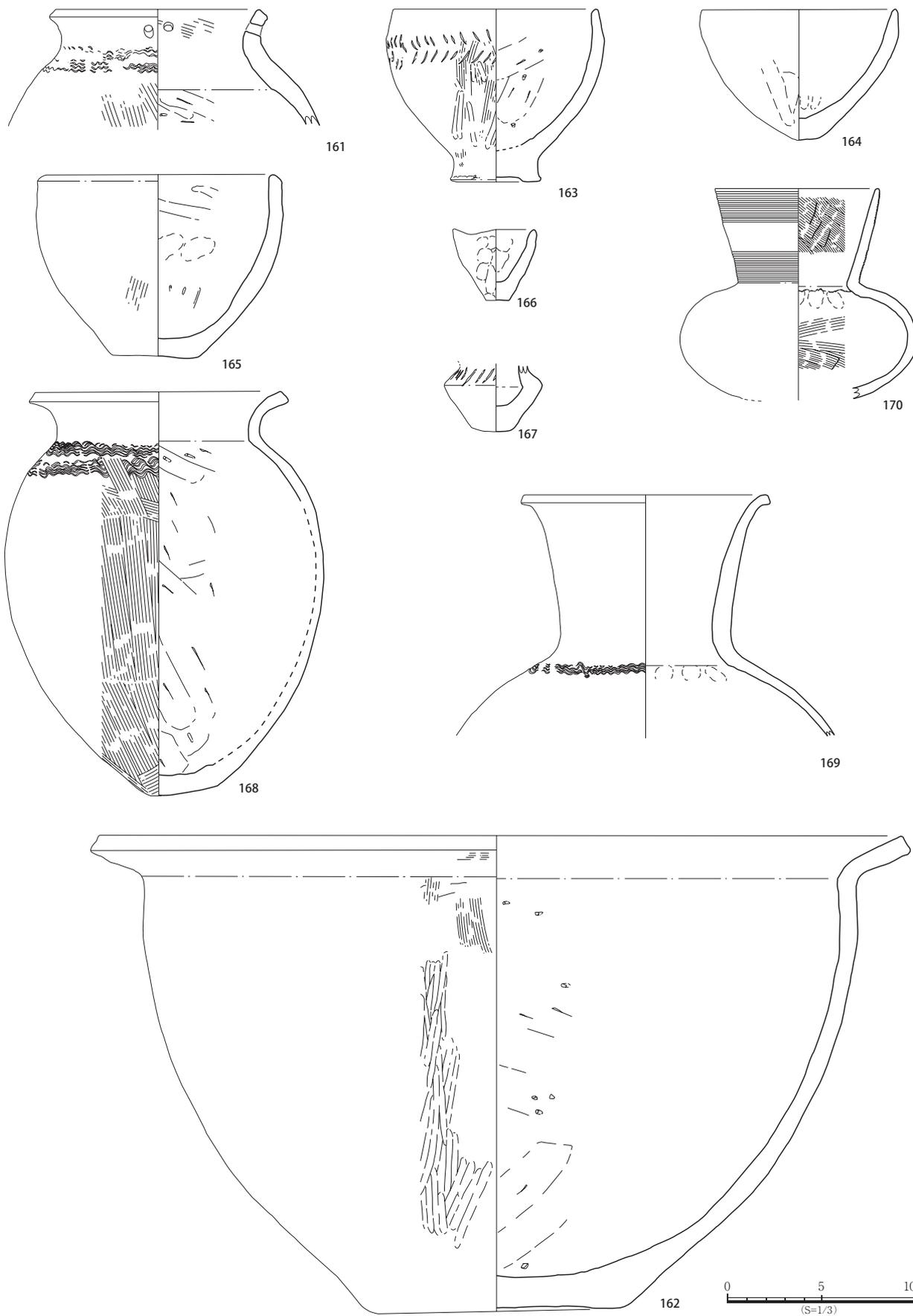


158

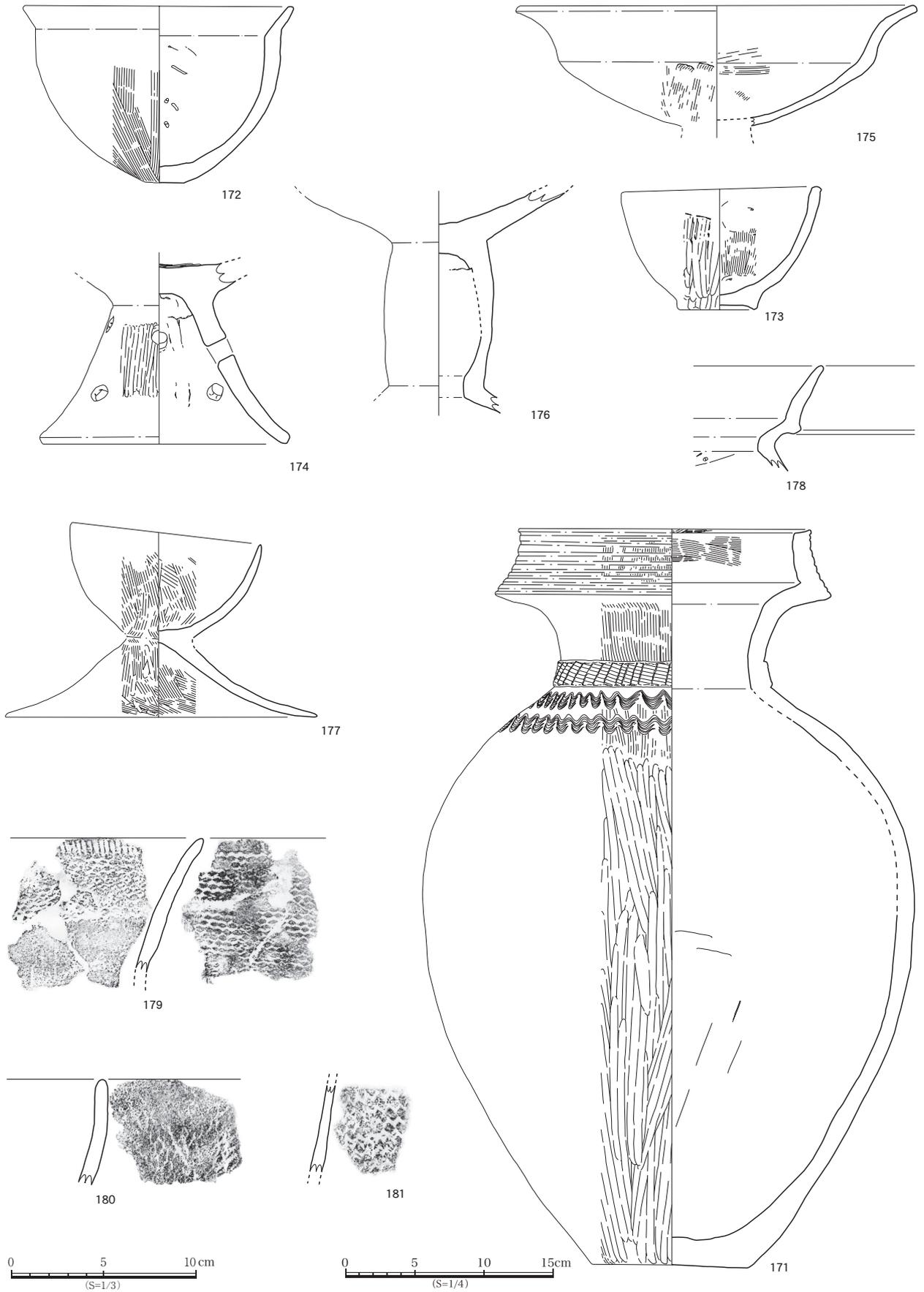


152

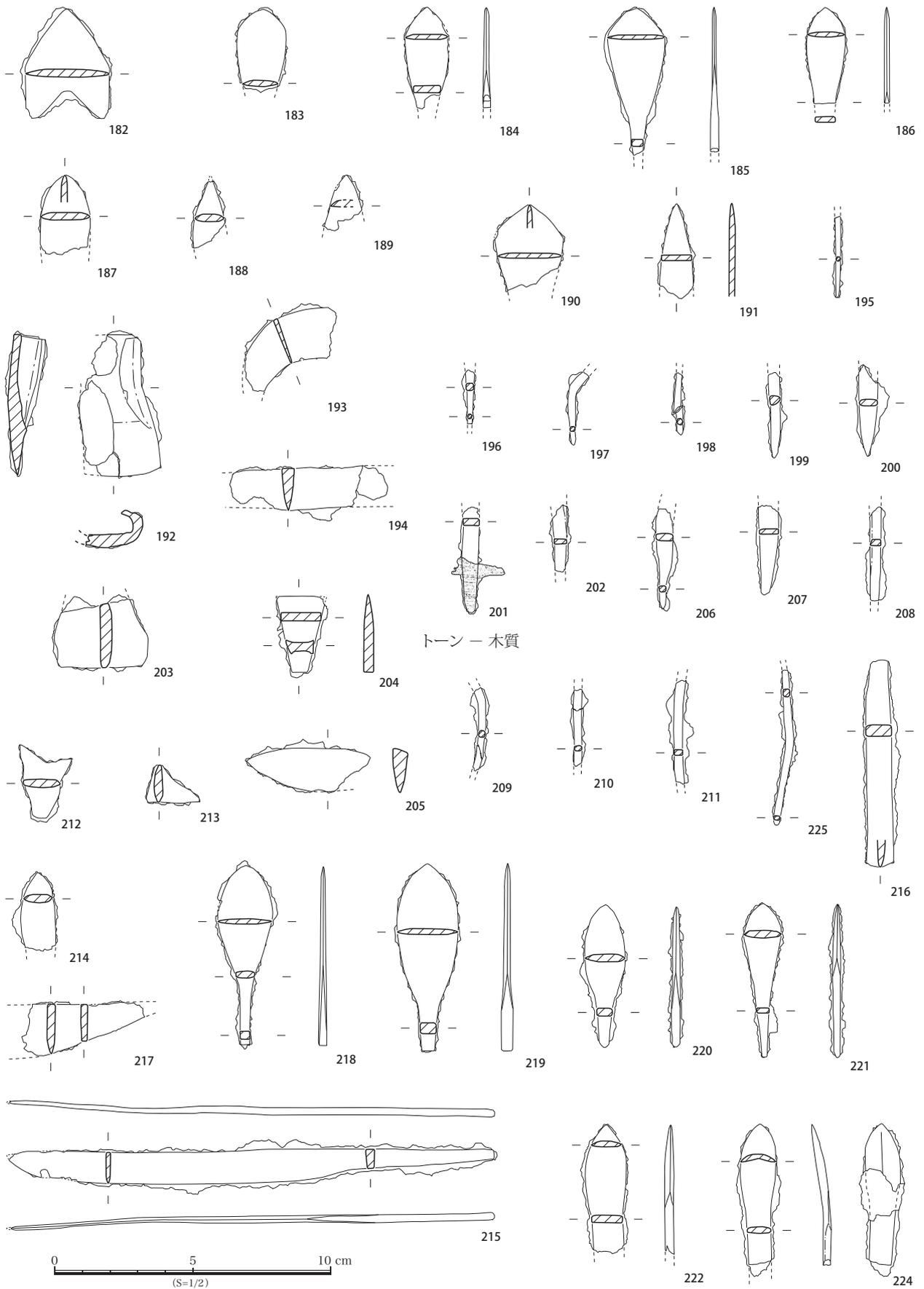
第 47 図 出土遺物実測図 (9) (S=1/3,152・159 のみ S=1/4)



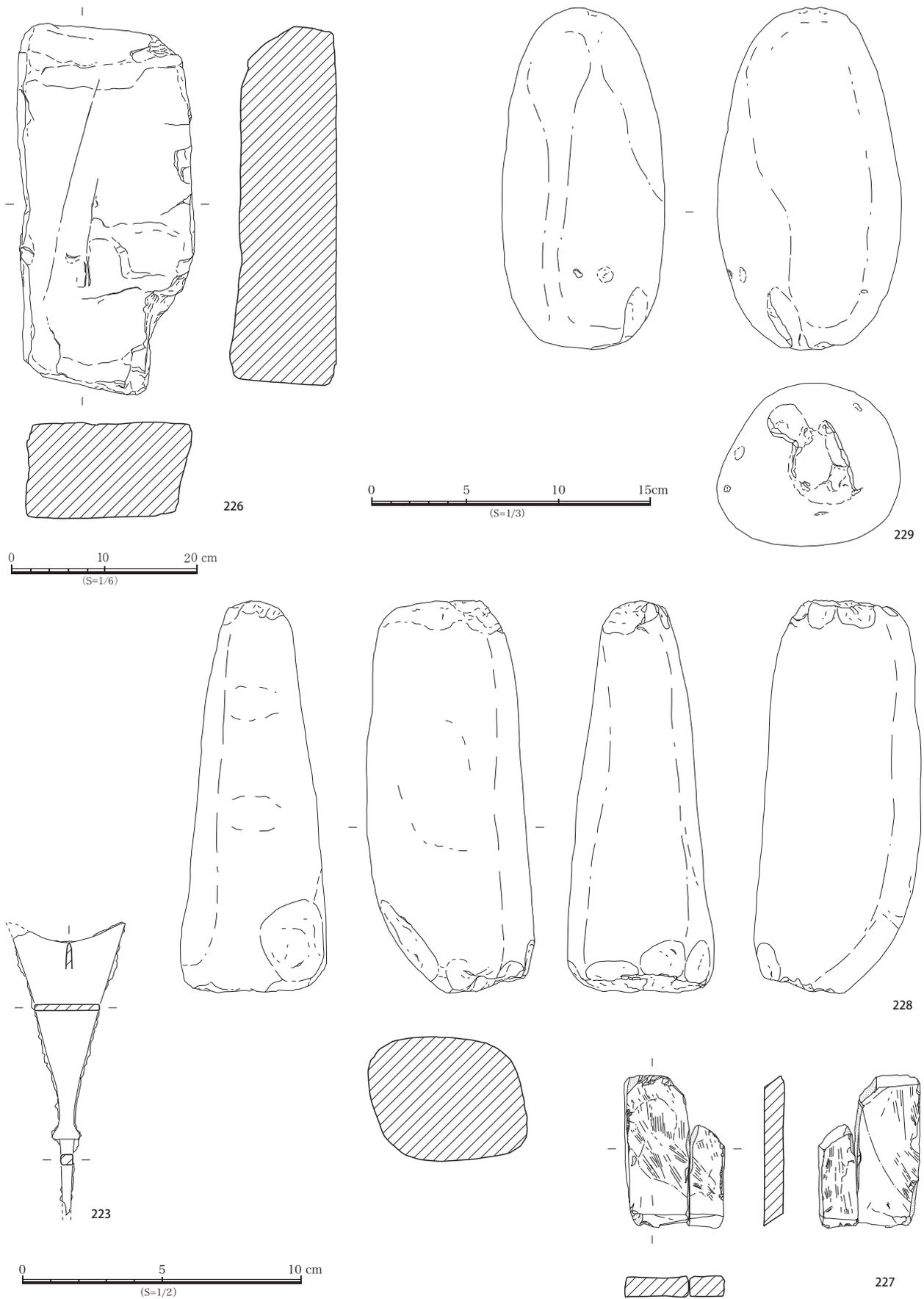
第 48 図 出土遺物実測図 (10) (S=1/3)



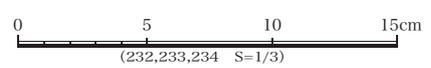
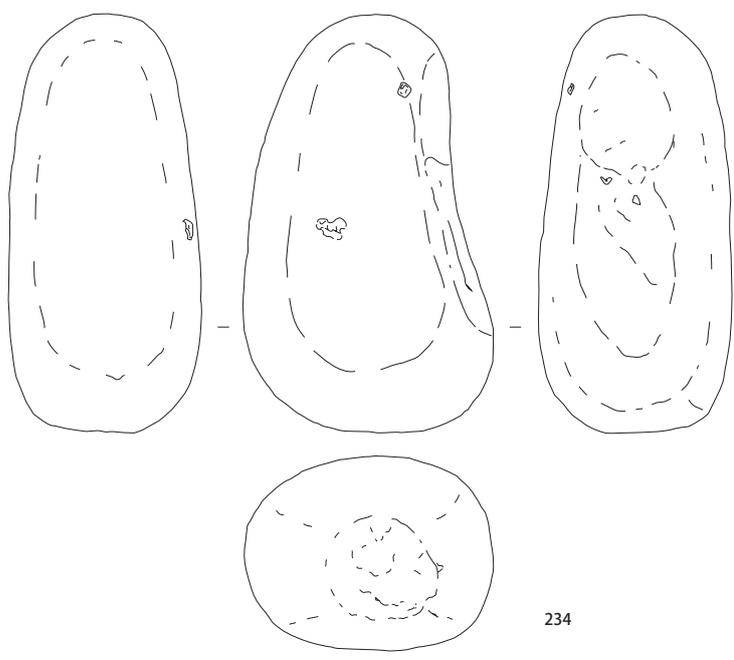
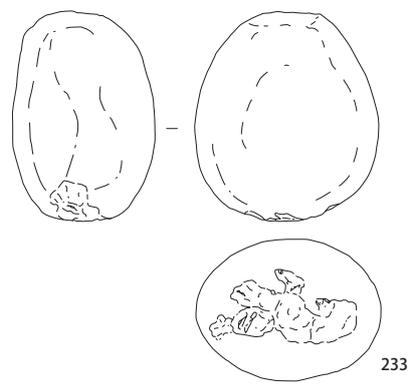
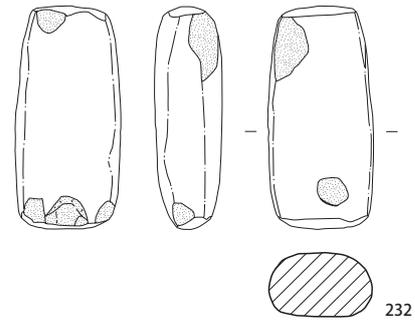
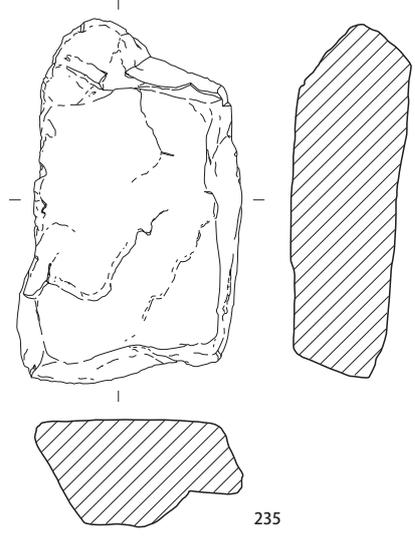
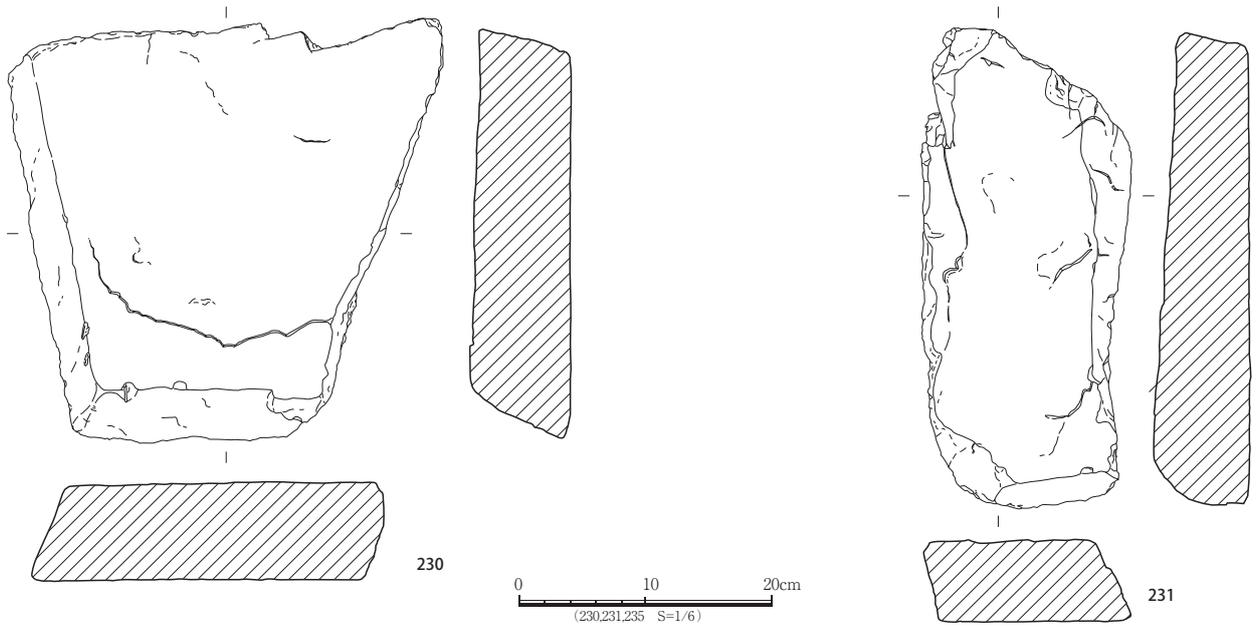
第 49 図 出土遺物実測図 (11) (S=1/3,171 のみ S=1/4)



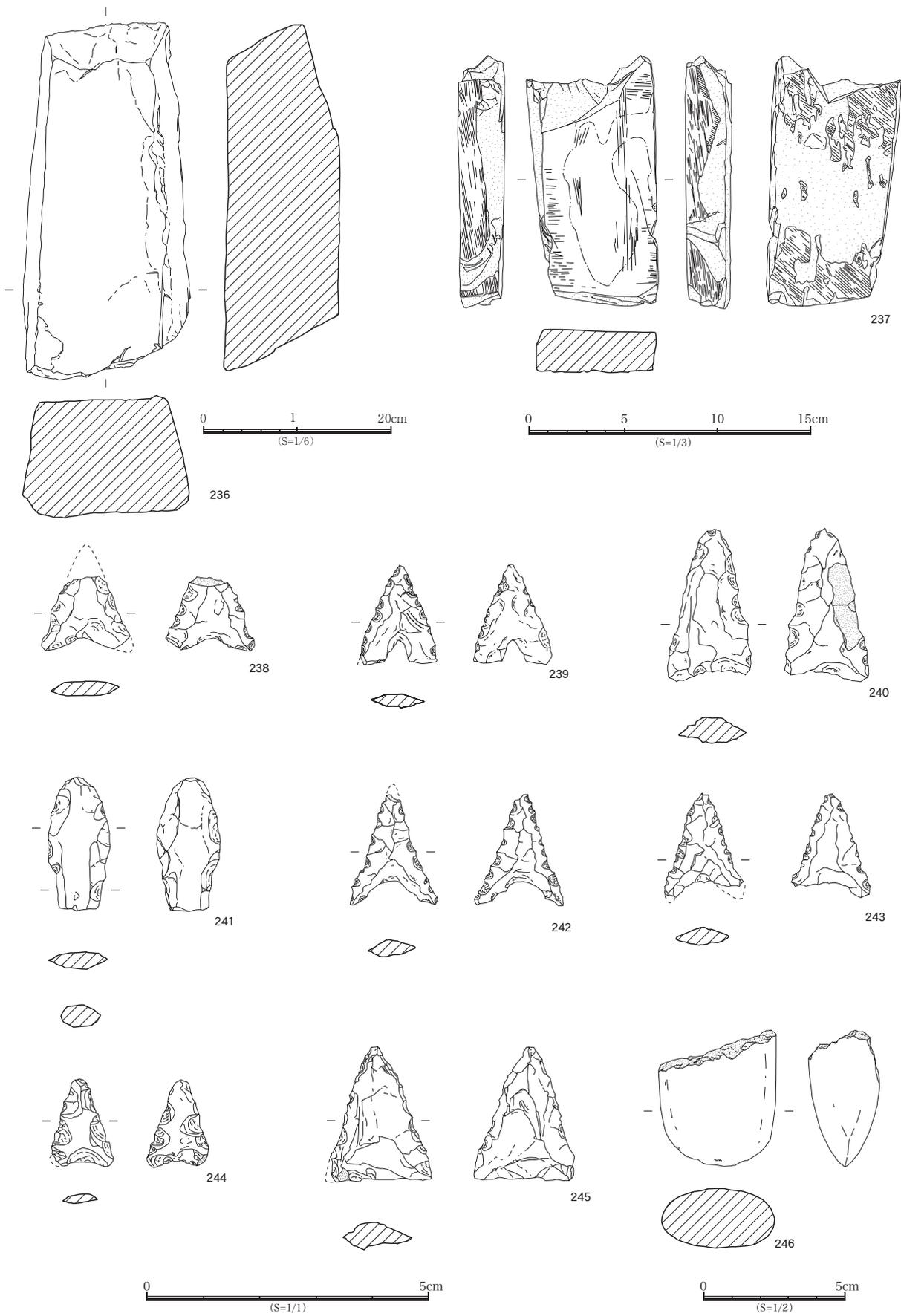
第 50 図 出土遺物実測図 (12) (S=1/2)



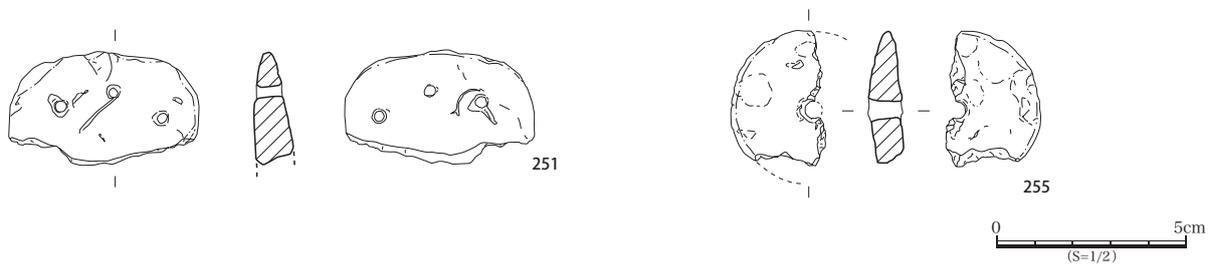
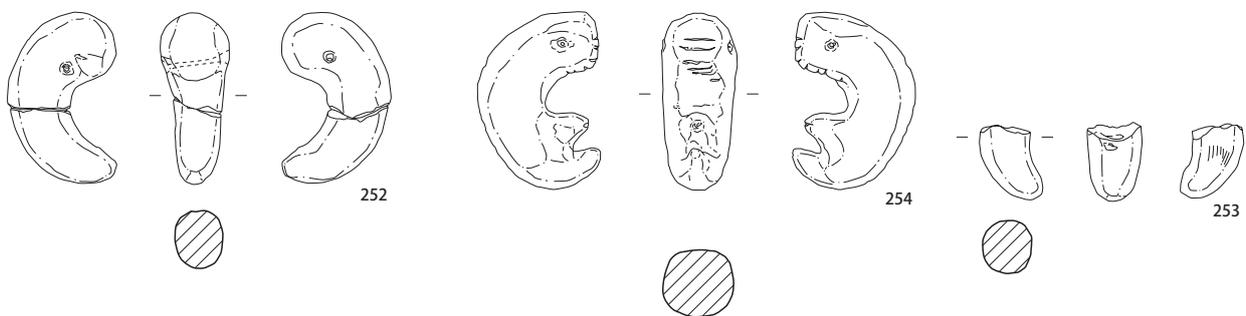
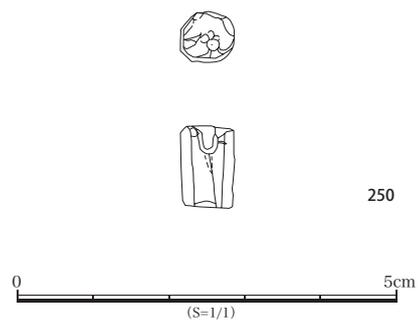
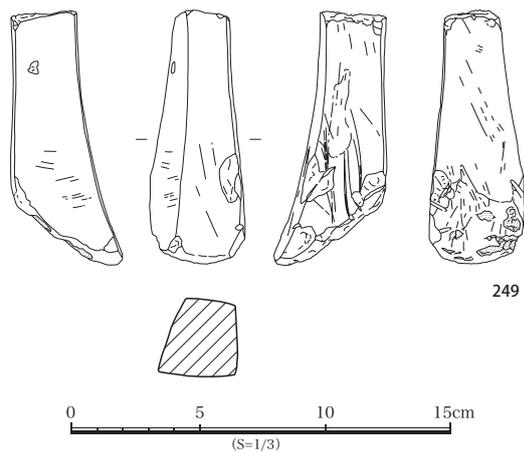
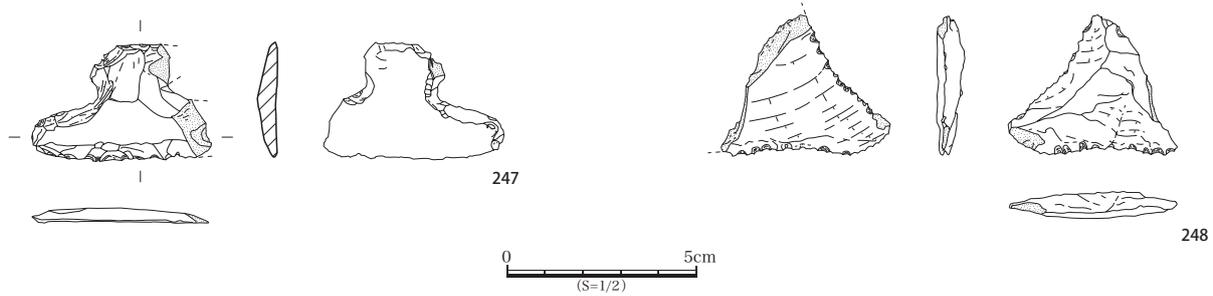
第 51 図 出土遺物実測図 (13) (S=1/3,223 は S=1/2,226 は S=1/6)



第 52 図 出土遺物実測図 (14) (S=1/3,230・231・235 は S=1/6)



第 53 図 出土遺物実測図 (15) (S=1/1,236 は S=1/6,237 は S=1/3,246 は S=1/2)



第 54 図 出土遺物実測図 (16) (S=1/2,249 は S=1/3,250 は S=1/1)

IV まとめ

1. SH7 の鉄器出土状況及びその性格に関する一考察

SH7 は長径約 840cm, 短径約 730cm の長円形の竪穴住居跡で, 広島市域では大型住居の部類に入る。本住居跡の床面及び埋土からは 58 点の鉄器が出土した。しかしながら, これらの鉄器が SH7 に伴うものであるか, SH6 や遺構外の斜面上方から流入した二通りの可能性がある。

これらの鉄器の出土状況から散布グラフを作成し, その性格について検討してみたい。グラフの作成は, 床面最高所からの比高を Y 軸に, 土層観察及び残存状況から判断できる埋土の流入, 及び遺構面の流失する元方向である P1 付近に, 流失方向と直行する線を設定し, その線上から鉄器出土地点への 90° の水平距離を X 軸に設定した散布グラフを作成した (第 5 表)。この結果, 以下のことが読み取れる。

- ① 床面最高所より 5cm 程度上までに分布するもの。
- ② 床面最高所より 10cm 程度上までに分布するもの。
- ③ 床面最高所より 10cm 以上に分布するもの。
- ④ 床面最高所より 5cm 程度下までに分布するもの。
- ⑤ 床面最高所より 10cm 以下に分布するもの。

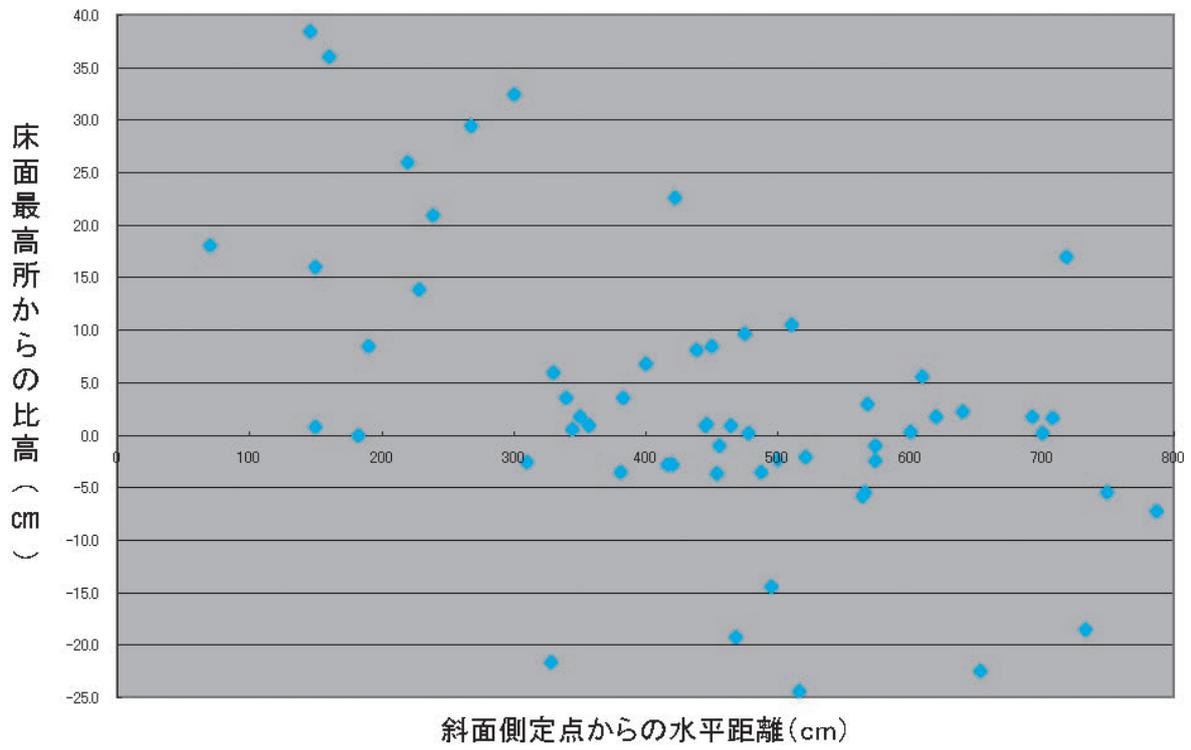
比高差から見ると, ①は検出床面の上に生活面が存在していたことを考慮すると, SH7 に伴うものと考えられる。また, 同様に②も埋没の過程で床面から浮き上がる範囲であることが予想され, SH7 に伴う可能性が高い。③は埋土からの検出であり比高差にもばらつきがあり, SH7 に伴うものとは断定できない。④は床面の傾斜を考慮すれば, SH7 に伴うもので, 生活時に床面に埋没したものであるとも考えられる。⑤はピット内から出土したもので, SH7 に伴うものか, もしくは前段階の SH8 のものと考えられる。水平距離から見ると, SH7 に伴う①④, もしくはその可能性が高い②⑤は 300cm ~ 700cm の範囲で集中して分布する。埋土中の③は 300cm までにほとんどが分布する。

以上のことから, ①②④⑤の鉄器については, その大半が SH7 に伴うものと考えられる。また, ③に関しては遺構の位置関係から, SH6 から流入した可能性がある。

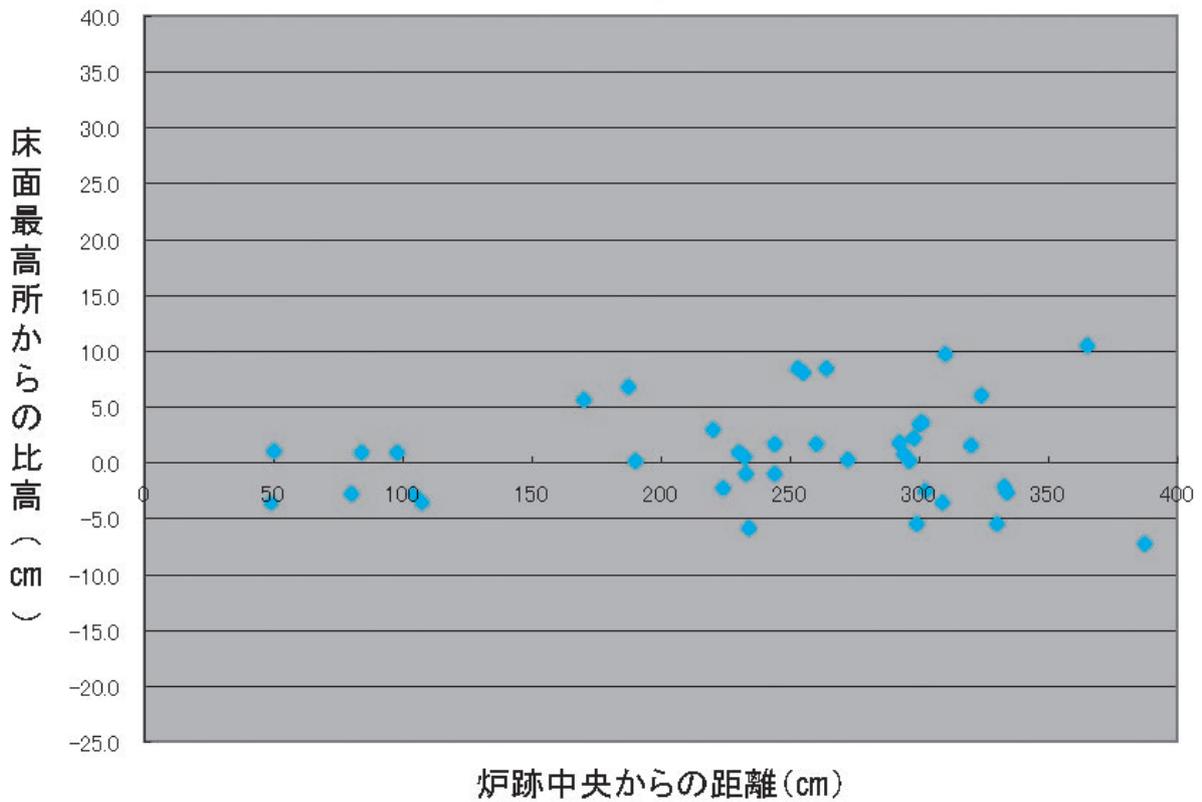
次に, 本住居跡の性格について考えたい。SH7 に伴う鉄器のうち, 前段階の遺構に伴う可能性が外せない⑤を除いた, SH7 固有の鉄器と考えられる①②④を, 床面最高所からの比高を Y 軸に, 床面中央の炉の中央からの水平距離を X 軸に設定した散布グラフを作成した (第 6 表)。この結果以下のことが読み取れる。

- ⑥ 50 ~ 100cm の範囲に分布するもの。
- ⑦ 220 ~ 330cm の範囲に分布するもの。

⑥は床面からの比高差がほとんどなく, 炉跡周囲で作業されたものと考えられ, 火を伴う作業に関したものである可能性が高い。⑦は炉跡からは離れた位置に分布するものがその大半を占め, 平面分布状況と合わせて推察すると, 貼床部周辺及び P10 ~ P11 の間の 2 か所に分布する。



第5表 SH7 出土鉄器分析表①



第6表 SH7 出土鉄器分析表②

以上のことと、Ⅲ章で述べた SH7 から鍛冶由来成分が検出できなかったことを含めて、本住居跡は、鍛冶工房ではなく素材を二次加工する低温鍛冶を行う加工場の性格を持っていた可能性がある。さらに、平面分布と垂直分布から、炉周辺での火を使う作業域と、貼床部周辺及び P10～P11 間の 2 か所の火を使わない作業域があることが推測できる。また、貼床部から管玉未製品が出土したこと、錐状鉄製品が出土したことから、本住居跡は、鉄器だけでなく、玉類の製作等も行っていた可能性もある。なお、SH6 については、鉄器が出土していること、③の鉄器が SH6 から流入している可能性があること、床面が SH7 と同様に多数の小ピットを持つことから、前段階の SH6 も鉄器などの加工場的な性格を持っていた可能性がある。

2. 集落の変遷及び構成について

三谷遺跡では、竪穴住居跡 24 軒、テラス状遺構 16 か所、柱穴群 1 か所、土坑 14 基などを確認した。これらの遺構は、弥生時代中期終末から後期末葉にわたり営まれているため、出土遺物や土層観察・重複関係から想定できる時期別に遺構を分類してみたい。

- ・中期終末－SH4・(SH11a・11c)

SH11 はⅢ章で述べたように 3 軒の重複があり、出土土器から想定できる I 期（若島一則氏による編年¹⁾）を存続時期の下限とするなら、先の 2 軒については中期後葉にさかのぼる可能性もある。

- ・後期初頭（I 期）－SH11b・14, SX5
- ・後期前葉（Ⅱ－1 期）－SH9・17・20, SX4 平坦面 a・12, SK1・4

SH20 と SX12 は重複しており、遺構の検出状況により SH20 が先行する。

- ・後期中葉（Ⅱ－2－①期）－SH1・6・16, SX11, SK3

SH2 は出土土器からⅡ－2－②期に属するが、①期の遺物も出土している上、住居の拡張がなされており、先行するものについてはこの時期にさかのぼる可能性も考えられる。

SH16 と SX11 は重複しており、土層観察により SX11 が先行する。

- ・後期中葉（Ⅱ－2－②期）－SH2・3・8, SX1, SK13 ?
- ・後期後葉（Ⅱ－2－③期）－SH7・15, SX4 平坦面 b・6・7・8・9・10・13・15, 柱穴群, SK6・8

ここで北側調査区の北東部に位置する SH15, SX6・7・8・9・10 には重複関係があり、同時期と想定できないものがある。そこで、これらの遺構の先後関係を整理すると SX6 → SX8 → SX7・9 となり、また SH15 → SX10 の順に営まれたと考えられる。

- ・後期末葉（Ⅱ－3 期）－SH5・10・12・13・18, SX2・16, SK12

以上、分類した遺構以外のものについてみると、SH21・24, SX3・14, SK2・5・14 については時期を想定するに至らなかった。SK10・11 については、本遺跡の遺構面構成土層より下層から遺構が掘り込まれているため、中期終末期より以前のもものと想定される。SD1 は土層観察により SH11 に先行することが確認されており、中期終末をさかのぼる可能性がある。SH19 は土層観察から、SX12 に先行するため、後期前葉以前のものである。SK9 については、SH2 が形成されてい

る土層より下層から掘り込まれており、後期中葉以前のもので想定される。SH23・22はSX13に先行することから、少なくとも後期後葉以前のものである。SK7は土層観察によりSH15より後出し、SK14は検出状況からSH7より後出するため、後期後葉以降のもので想定される。

なお、弥生時代中期末葉から後期末葉という存続時期については、遺構の時期から判断したものであり、遺物については弥生時代中期前葉から中期後葉までの土器も出土している。弥生時代中期前葉のもので考えられる土器についてはその後続く時期のものが出土していないため、集落との関連は考えにくい。ただ中期中葉からは各時期の土器が出土し、中期末葉に至るため、集落の形成がその時期にさかのぼる可能性も否定できない。

また、古墳時代初頭に属する遺物が、埋土中も含めて、全く出土しなかったことから、集落の廃絶時期は、弥生時代後期末葉であると想定される。

ここで、本遺跡の竪穴住居跡の規模を比較すると、径や一辺が3m前後の小型のもの、5m前後の中型のもの、7m以上の大型のもの三種に大別できる。また、SXとしている遺構の中にも住居の可能性が想定できるものもあることから、それも含めて各時期の集落構成を考察してみたい。

中期末葉であるが、SH11の一期目にあたるSH11aは遺構の遺存度が低いが、少なくとも中型の規模が想定できる。そのため、中型住居1軒、小型住居1軒の構成となる。

後期初頭（I期）は、SX5が住居であると想定すると、中型住居1軒、小型住居1軒である。また、SH11bの規模が想定できないため、規模不明住居1軒の構成となる。

後期前葉（II-1期）は、中型住居2軒、小型住居1軒の構成となる。ただし、小型住居SH20は途中で廃絶する。

後期中葉（II-2-①期）は、大型住居（SH6）1軒、中型住居1軒となる。小型住居はSX11が住居であると想定しても、SX11とSH16が同時に存在せず、1軒となる。

後期中葉（II-2-②期）は、大型住居（SH8）が1軒、中型住居1軒、小型住居1軒となる。

後期後葉（II-2-③期）は、SX7・8・9・13が住居であると想定すると、大型住居（SH7）が1軒、小型住居6軒となる。さらに柱穴群を掘立柱建物が数棟存在したと想定すると、倉庫群の存在の可能性が考えられる。ただ、先述したようにII-2-③期の遺構には先後関係を持つものがあるため、三期の細分が必要となる。ここで、先後関係を持たない遺構をII-2-③期を通じて存続したと仮定すれば、一期が大型住居1軒（SH7）、小型住居2軒（SH15、SX13）、二期が大型住居1軒（SH7）、小型住居2ないしは3軒（SH15、SX8・13）、三期が大型住居1軒（SH7）、小型住居3軒（SX7・9・13）となる。

後期末葉（II-3期）は、大型住居（SH5）1軒、中型住居1軒、小型住居3軒となる。

以上の傾向を見ると、中期末葉から後期前葉までは住居軒数が少なく、後期中葉から末葉までは、大型住居1軒と中・小型住居3軒前後という集落構成が見て取れる。しかしながら以下に述べるように、この構成がそのまま当時の集落構成であるとは考えにくい要素が多い。

まず、調査区の北西端に位置するSH23は調査範囲外へと延びており、北西側にも集落が広がることが想定される。北東側については、SX2などが調査範囲外に延びる。ただ北東側の範囲外は現状で段々畑であるが、全体的な地形が急傾斜で標高が上がるため、調査範囲内がほぼ集落の北東

限と想定される。ただし、北東側範囲外から流入したと考えられる土器が数多く出土するため、本遺跡より標高の高い尾根上や尾根中腹に、墓地や祭祀遺構等が存在する可能性はあろう。

北側調査区と南側調査区の間は、里道による削平や水路による浸食を受け、調査区との比高差が最大となる西側で約 4m ある。南側調査区の北東端では、直近の水路とほぼ同じレベルとなる位置から江戸期の銭貨が出土した。また、南側調査区の SX16 の遺構面を構成する土層は北側調査区との間で断絶するものの、北側調査区の遺構面を構成する土層と同一層と考えられる。さらに、北側調査区の南端部については、SH5・18 などの南側が流失している。これらの要素からは、集落の存続時期には、この北側調査区と南側調査区間の水路は存在していなかったか、存在していたとしても、谷底まで緩やかな傾斜で比高差がそれほどなかったことが想定できよう。

また、段々畑や棚田の築造による削平も考慮にいれねばならない。特に調査区西側については遺構面構成層を掘り込んで畑もしくは棚田が形成され、その西側が段状に下がることから調査範囲の西限を設定した。しかし、北側調査区西端に SK8 を確認したこともふまえると、集落の存続時期には、緩やかな斜面が続いていた可能性もある。また、SH17 から北側は SX11、SH24 付近まで遺構の空白地帯が続く。これは、広場であるという想定もあろうが、SH17 は畑面から遺構面までの埋土はほとんど無く、北西側は削平されていることから、その北側の空白地帯では遺構が削平され、確認し得なかった可能性も考えられる。さらに調査区全域でいえば、後出の遺構により先出の遺構が削平されたこと、土石流により流失し、その痕跡が遺存しなかったことも想定されよう。

これらの要素を考慮に入れると、それぞれの時期に数軒の住居が加わる可能性が想定される。遺存状況の良好な場所での同時期の遺構の密度を考えると、中期末葉から後期前葉を除き、大型住居 1 軒と中・小型住居 5 軒前後の集落構成が考えられよう。また、住居配置を見ると、大型住居については、北側調査区の標高 95.50 m から 97.50 m の範囲に位置し、特に SH6・8・7 と継続する時期は、ほぼ同じ場所に築造されている。中型のものは、おおむね調査区東半の標高の高い位置に、小型のものは、西半の低い位置に配置されている。

ここで大型住居の性格について考察してみたい。大型住居の中で最も良好に遺存する SH7 の場合、その床面や埋土から 58 点の鉄器が出土した。破片も含んでいるので、鉄製品としてはその点数を減じると想定されるが、1 軒の住居内からの出土量としては多い。この鉄器には鉄鏃のみならず、錐状鉄製品や刀子、鉄素材とも考えられる鉄片が含まれ、管玉の未製品も出土していることから、SH7 は居住空間としてより作業空間としての要素が強い。ただ、SH7 以外の大型住居については、遺存状態が悪く、作業空間である痕跡は確認し得なかった。いずれにしても、これらの住居規模は他の住居と一線を画していることから、居住を目的としないなら、集落の中心的な建物であり、集会所・作業場のな役割を果たすものと想定される。時期による性格の変容、例えば、集落構成員の中での階層分化により住居規模の格差が生じたケースも考えられるが、集落存続期間の中で末期にあたる後期後葉（Ⅱ-2-③期）の SH7 が居住空間とは考えにくいことから、大型住居については時期による階層分化によって住居規模の格差が生じたとは想定しにくい。

さて、以上見てきた集落の特徴をⅡ章で述べた太田川流域、八幡川・石内川流域における弥生時代の集落の分類と比較してみたい。本遺跡の立地は、尾根筋の中腹にあたり、丘陵上すなわち尾根

筋上には位置していない。しかしながら、河川沿いの平地の氾濫原を避け、支流の形成する小扇状地や谷間の狭い平地を農業用地としたため、集落を丘陵上に営んだとする考え方²⁾に基づけば、瀬野川沿いの平地を避け、支流である山王川の形成する扇状地を眼下に臨む高所に立地する本遺跡は、太田川流域、八幡川・石内川流域における集落と同様の様相を呈しているといえよう。また、本遺跡の存続時期は弥生時代中期末葉から後期末葉までで住居総数は24軒であり、拠点集落の条件を備えているといえよう。

しかしながら、太田川流域、八幡川・石内川流域の住居と本遺跡の住居の規模を比較すると、大型住居は比肩する規模であるにも関わらず、主流となる住居は小規模であり、2本しか支柱を持たない住居が時期により数軒含まれる場合もある。このことから、拠点集落としての機能や人口を保有し得ていたのか疑問が残る。この疑問を検証できる材料は本調査では見出せなかったが、本遺跡だけの機能では不十分であると想定した場合について考察してみたい。まず、考えられるのが、集落が今回の調査範囲より大規模である可能性であろう。先述したように、現在は住宅地となっている北西側へ向けて集落が広がることが想定され、西側もその範囲が西に約45～50m離れた山王川に迫るならば、拠点集落として十分な条件を備えることになる。

結び

三谷遺跡は、瀬野川流域で初めて確認された大規模な弥生時代の集落である。弥生時代中期末葉から後期末葉まで存続し、竪穴住居跡を24軒確認しており、継続期間の長い拠点集落と位置づけられる。集落の廃絶時期については、前述したように、弥生時代後期末葉と想定される。また、前項で述べたように本遺跡は尾根筋中腹に立地するが、周辺環境等から広島湾沿岸部の丘陵上に展開する集落と同類の集落といえる。

現在までの広島湾沿岸部での調査では、太田川流域で弥生時代の集落が丘陵上に展開するようになった時期は、弥生時代中期末葉頃から後期初頭頃、八幡川・石内川流域では、後期前葉頃と想定されている³⁾。本遺跡の集落の時期の上限は確実なもので中期末葉であるが、さかのぼる可能性もあることから、太田川流域で丘陵上に展開する集落が出現した時期と同じ頃に、同類の集落が本遺跡へ展開していたこととなる。若島氏は集落の丘陵上への展開を誘因した要素を「谷を耕地に開発する土木技術上の進歩か、あるいは谷水田における水稻栽培に対する農業技術上の進歩」⁴⁾と想定しているが、この考えを是とするなら、丘陵下の谷地を生産基盤とし得る技術を持つ集団が広島湾沿岸の他地域と比較しても早い時期に瀬野川流域に進出していたこととなる。

本調査で明らかになったことも多いが、瀬野川流域の弥生時代の状況を考察するには、周辺遺跡との関係や、特に本遺跡のある瀬野川東岸より日照条件の良い西岸の遺跡の状況を明らかにする必要がある。また本報告では広島市域との関係を意識して考察を進めているが、瀬野川源流である東広島市域との関係も考察していくことが今後の課題であろう。

とはいえ本調査は、従来明らかでなかった瀬野川流域の大規模な弥生時代の集落を確認した意義に加え、これまでの広島湾岸の弥生時代中期後半から後期にかけての丘陵上の集落を考察する上で新たな材料を提供したことで、広島市域の歴史を塗り替えるものと評価することができよう。

注

- 1) 若島一則「広島湾沿岸における弥生時代後期土器等に関する一考察」『研究連絡誌Ⅰ』財団法人広島市文化財団 2002年
以下，後期土器編年は若島氏の編年による。
- 2) 財団法人広島市歴史科学教育事業団『上深川北遺跡発掘調査報告』 1991年
- 3) 1に同じ。
- 4) 1に同じ。

図版



三谷遺跡遠景（航空写真・調査後・東から）

図版 1



a 三谷遺跡遠景（航空写真・調査前・北西から）



b 三谷遺跡（航空写真・調査前・北西から）



a 三谷遺跡（航空写真・調査後・西から）



b 三谷遺跡（航空写真・調査後・北西から）

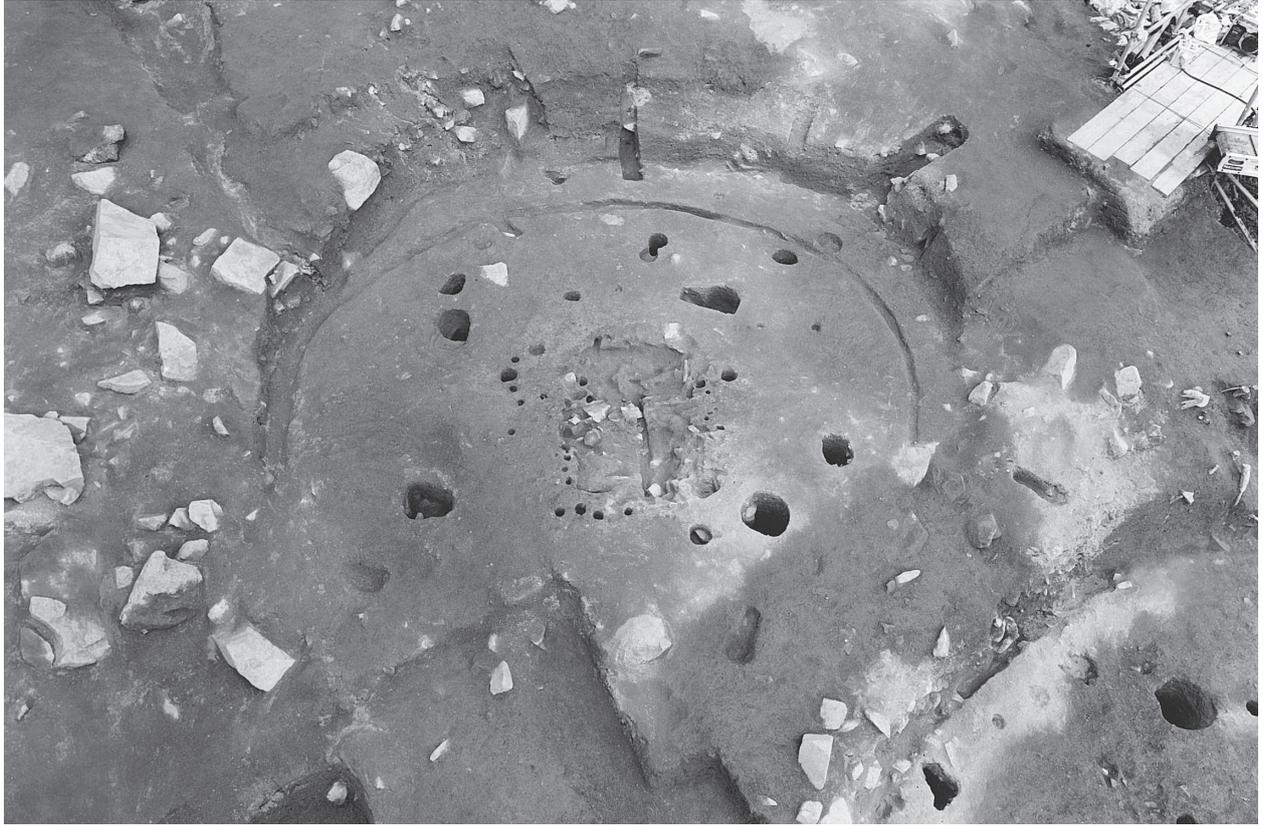
図版 3



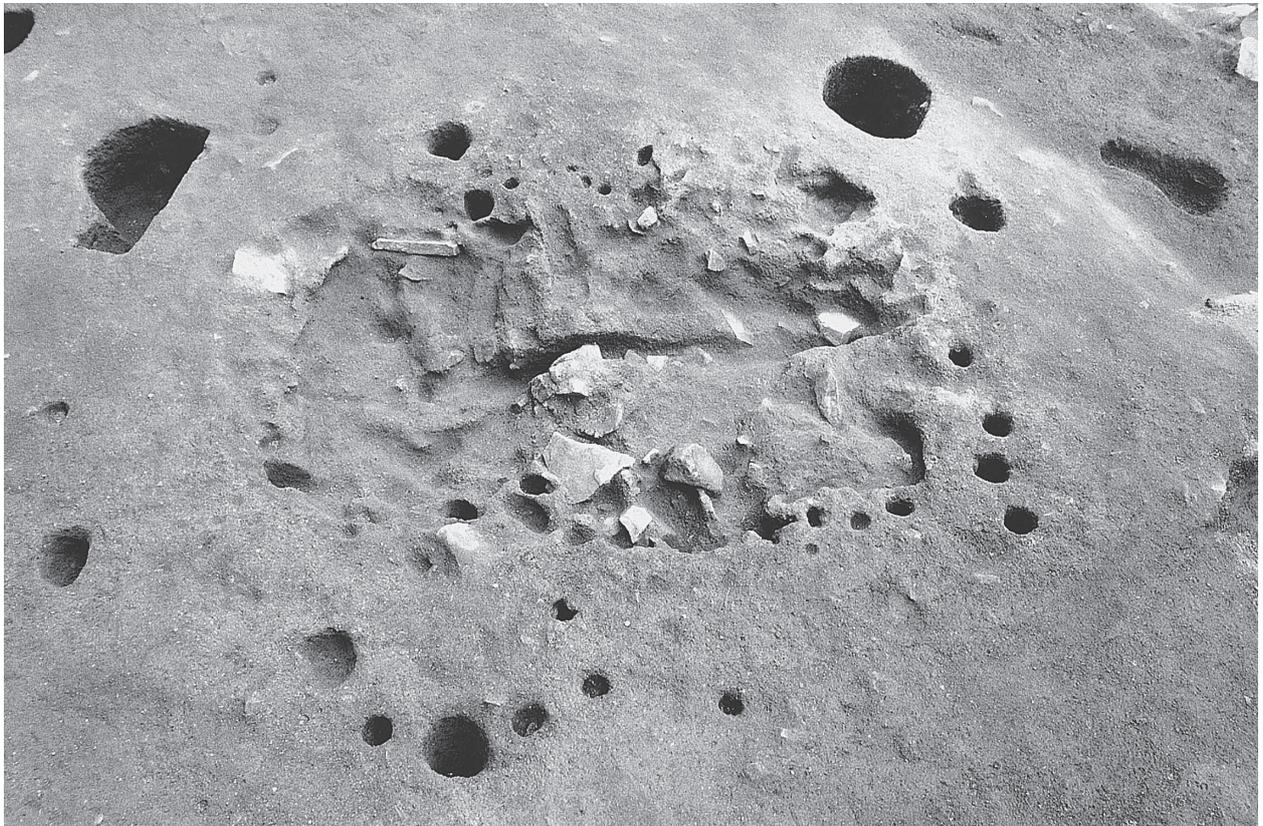
a SH1 炭化材検出状況（西から）



b SH1（北東から）

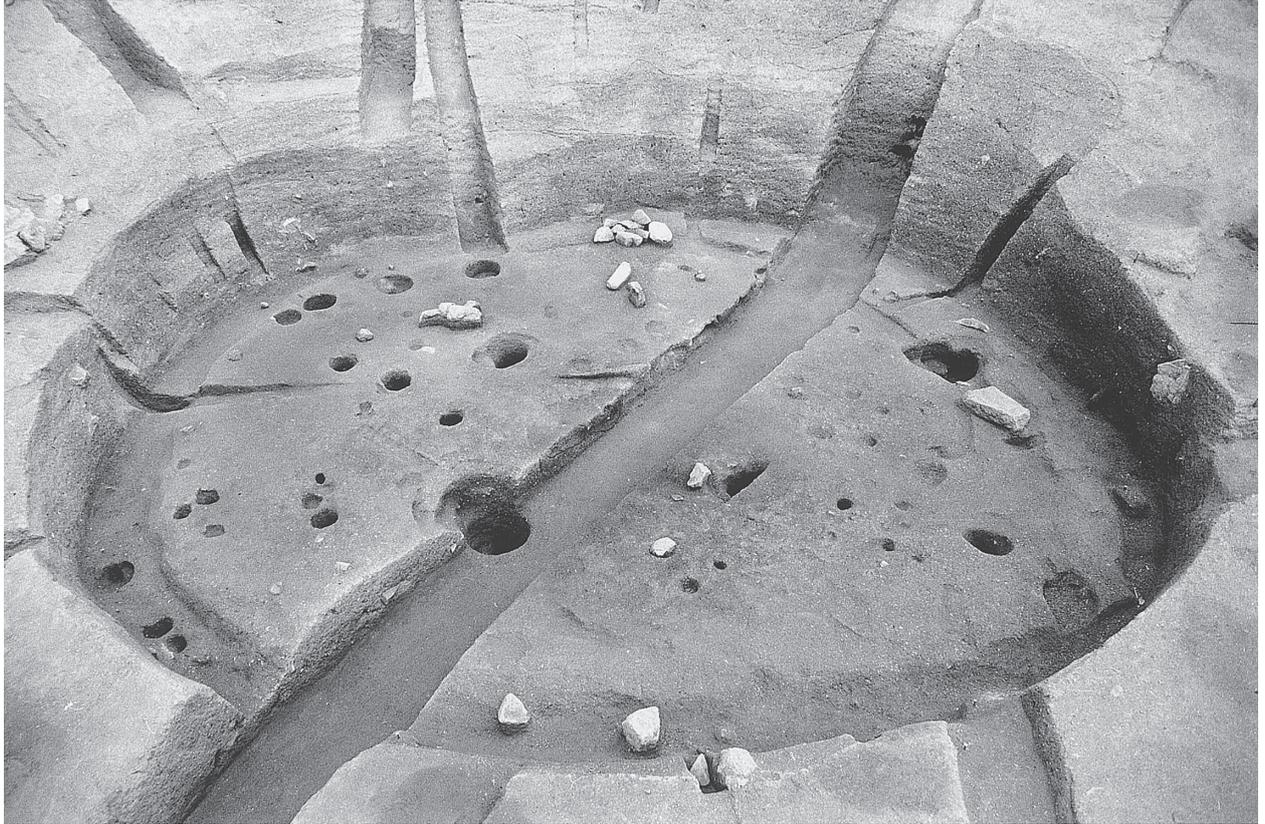


a SH2 (西から)



b SH2 炉跡 (北から)

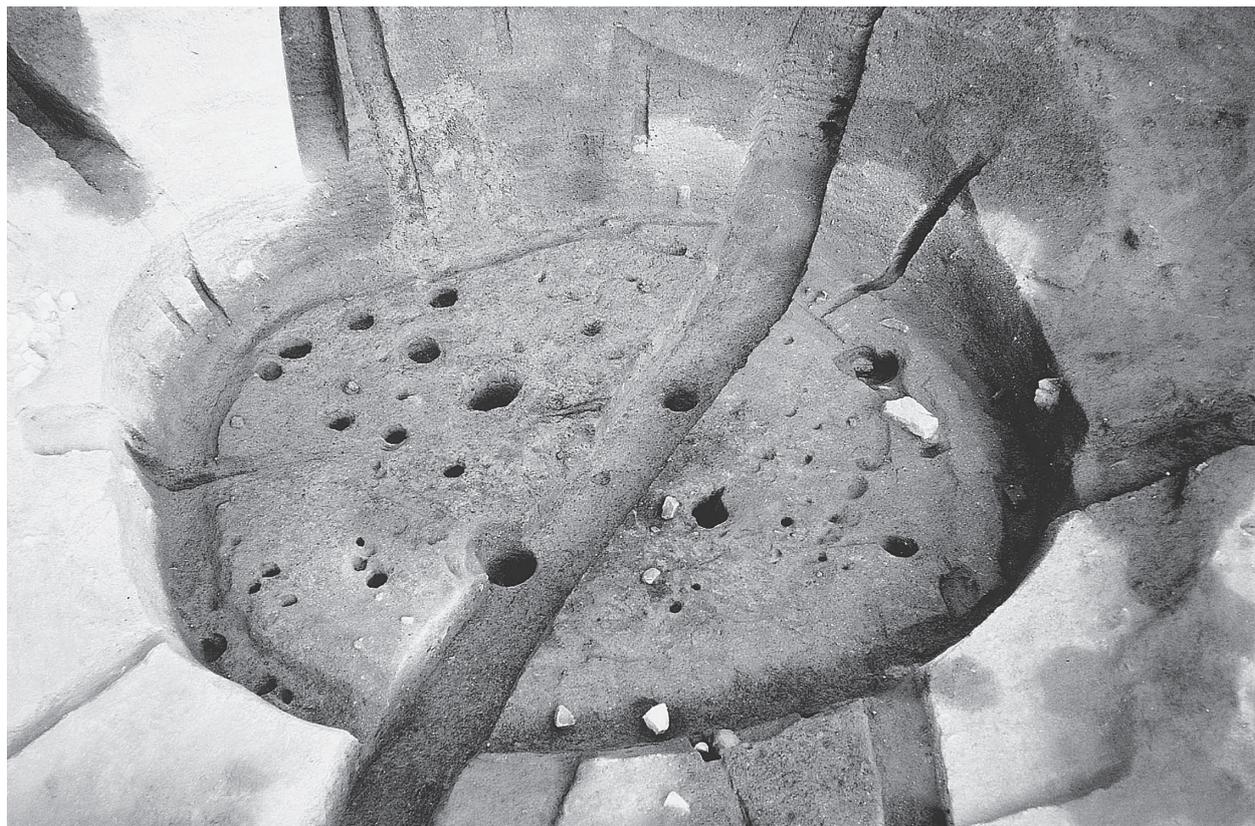
図版 5



a SH3 遺物出土状況（南西から）



b SH3 遺物出土状況（南西から）



a SH3 (南西から)



b SH4 ベッド状遺構検出状況 (北西から)

図版 7



a SH4 (西から)



b SH4・SH9・SX5 (西から)



a SH12 (南西から)



b SH4・12～16・SX2・5～11・SK7 (北西から)

図版 9



a SH5 (西から)



b SH5 炉跡 (北西から)



a SH6・7・8 (南西から)



b SH6・7・8 (北西から)

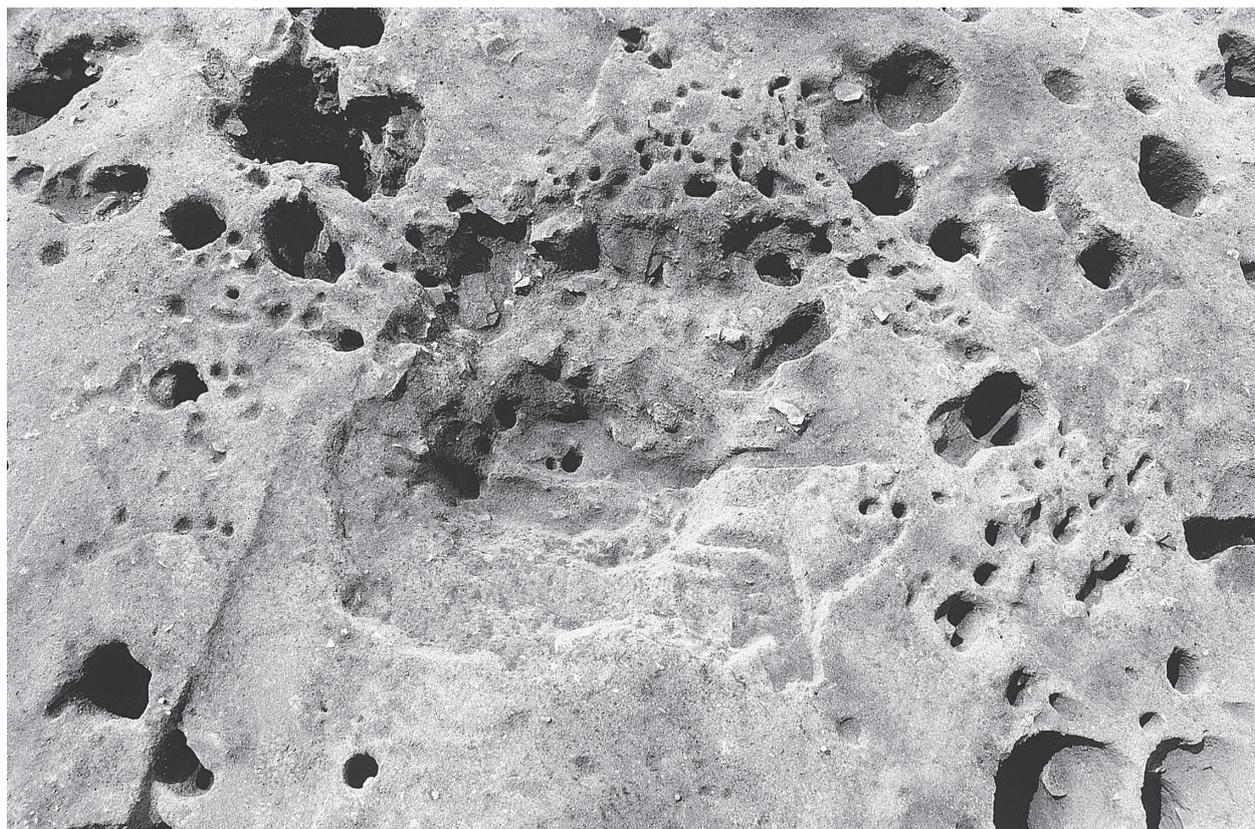
図版 11



a SH6 炉跡 (北から)



b SH7 P11 (西から)



a SH7 炉跡 (北東から)



b SH7 管玉出土状況 (西から)

図版 13



a SK12 礫検出状況 (北西から)



b SK12 (南西から)



a SK13 礫検出状況 (北西から)



b SK13 (北西から)

図版 15



a SK14(北東から)



b SH10 (西から)



a SH11 (北西から)



b SH11b 炉跡 (西から)

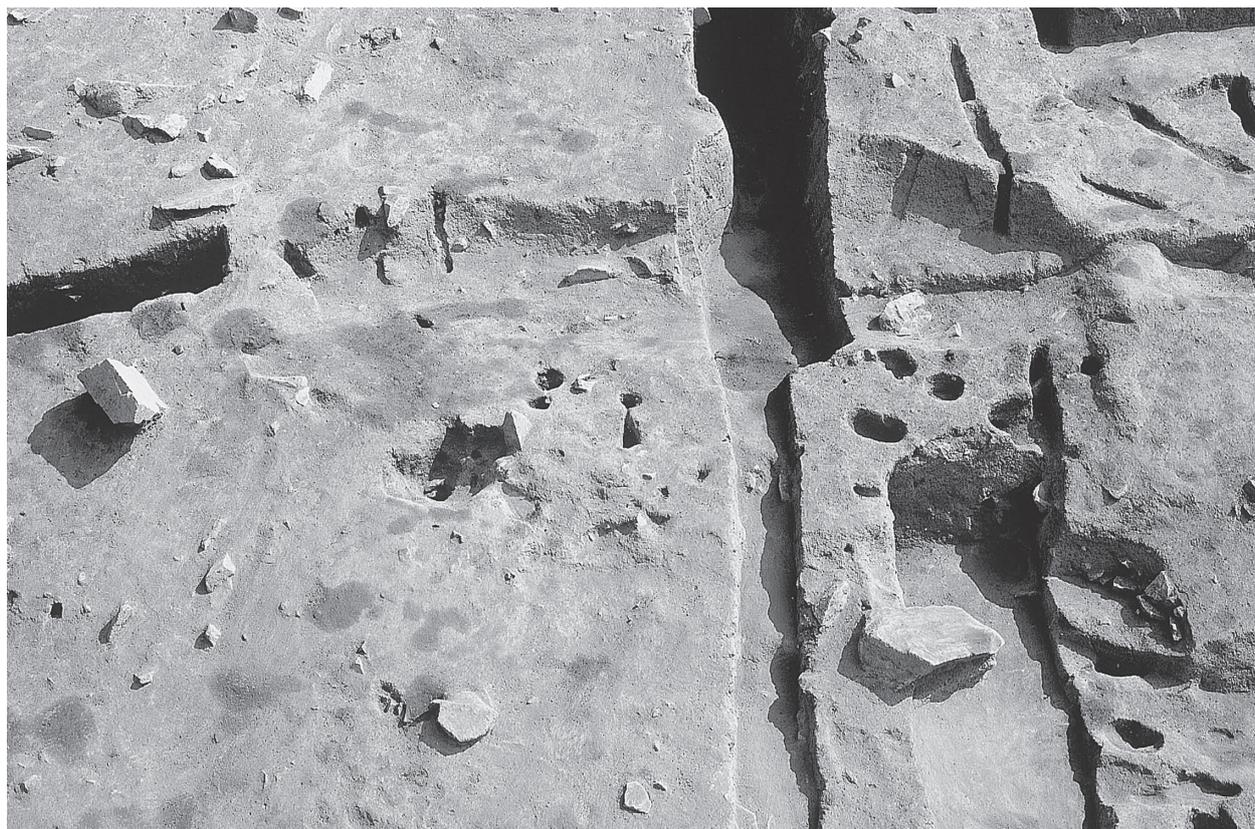
図版 17



a SH13 炭化材検出状況 (西から)



b SH13・SX6～9 (西から)



a SH14 (西から)



b SH15・16・SX10・11・SK7 (北西から)

図版 19



a SH17 周辺写真 (西から)



b SH17 (西から)



a SH18 (西から)



b SH19・20・SX12 (西から)

図版 21



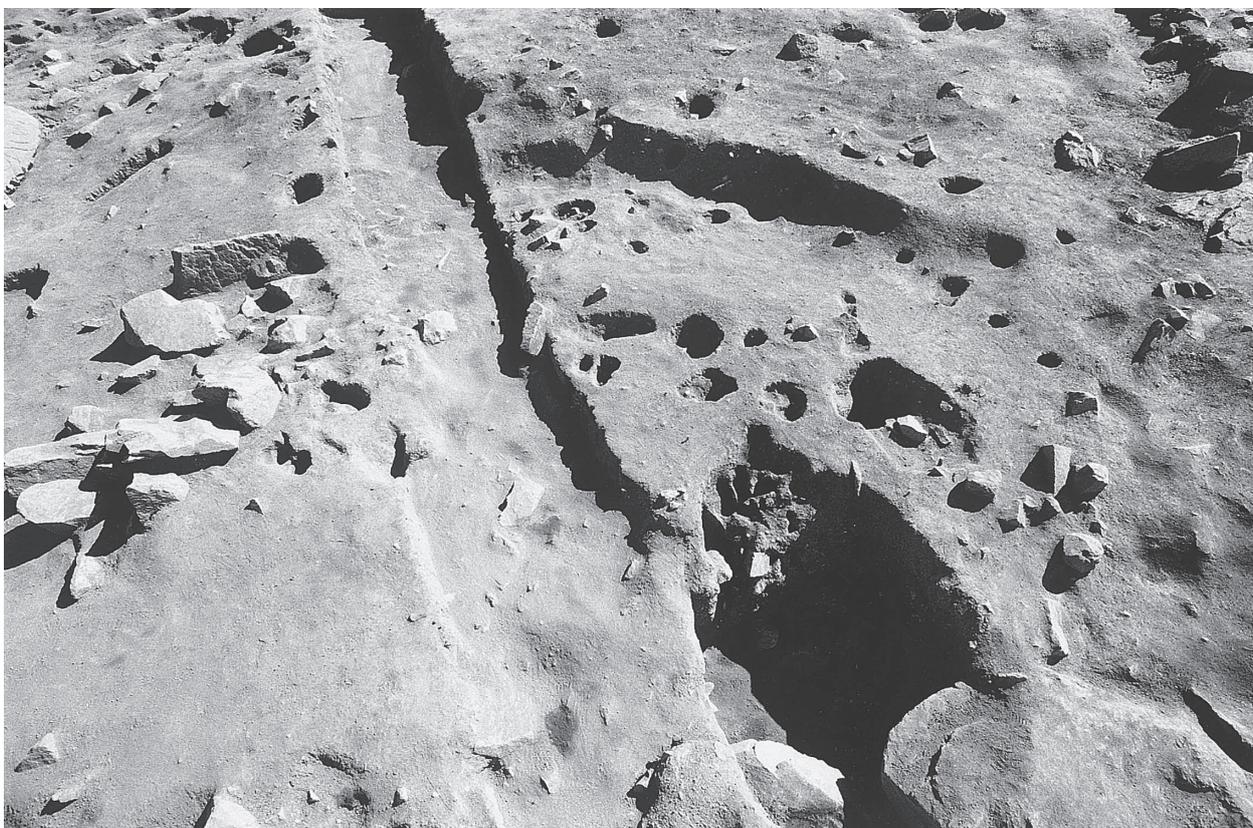
a SH21 ~ 23・SX13 (南西から)



b SH23 刀子出土状況 (北東から)



a SH23 (南西から)

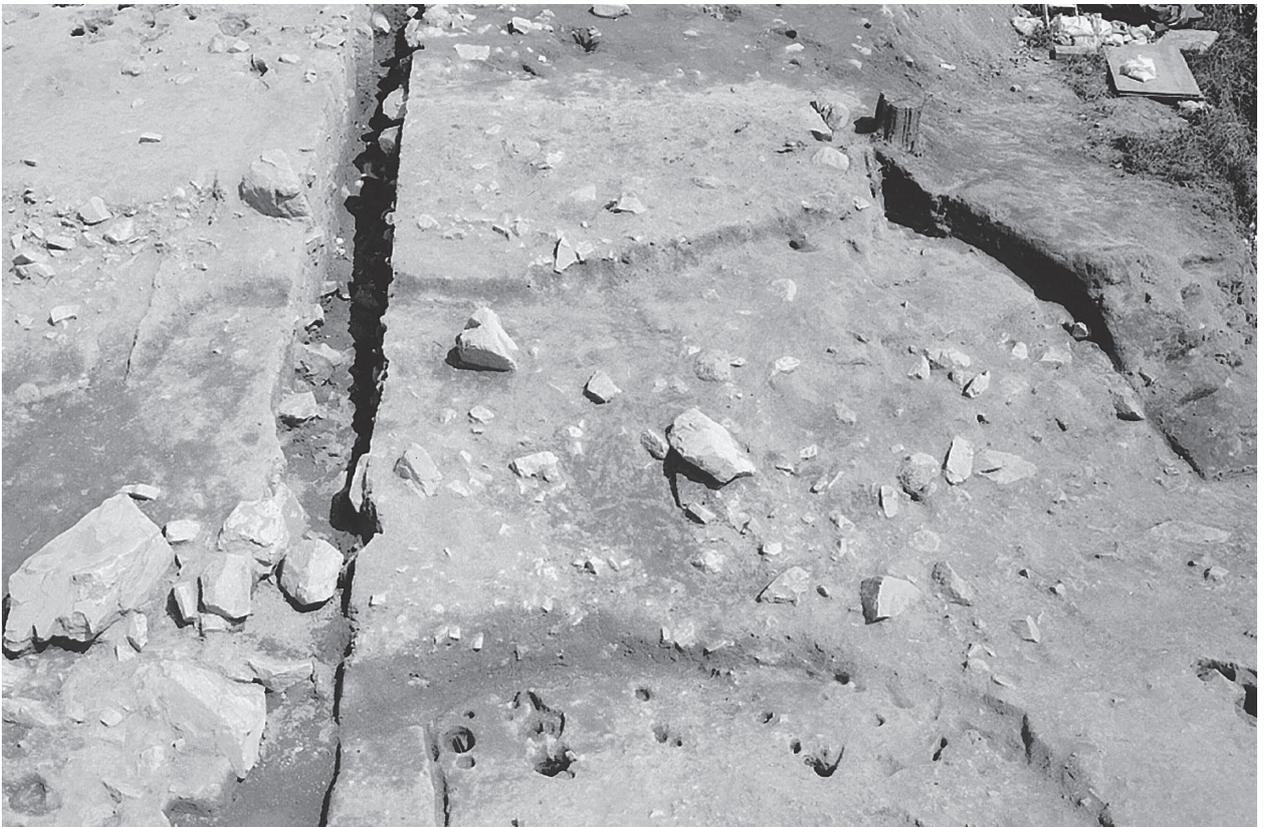


b SH24 (北西から)

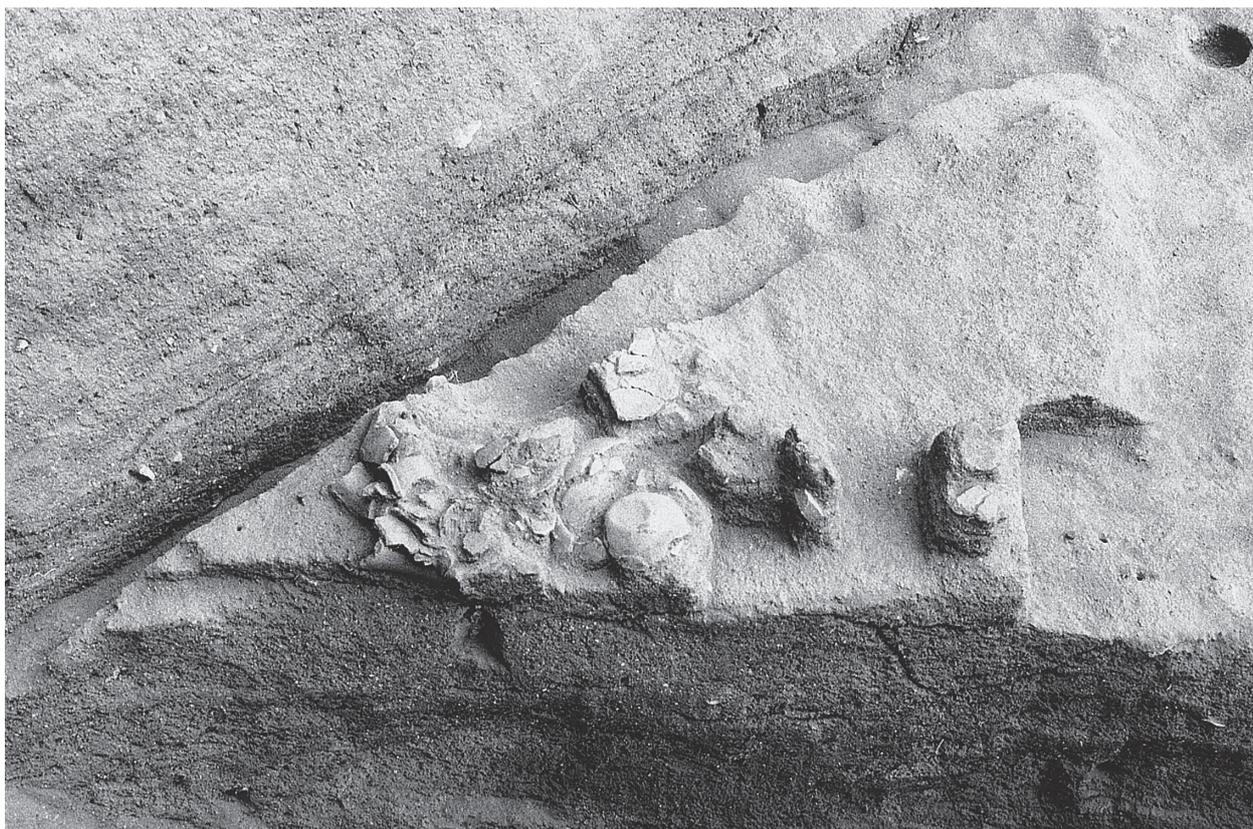
図版 23



a SX1 (西から)



b SX3 (西から)



a SX4 土器出土状況 (北西から)



b SX4 (西から)

図版 25



a SX14 (西から)



b SX15 (北西から)



a SX15 (西から)



b SX16 (南から)

図版 27



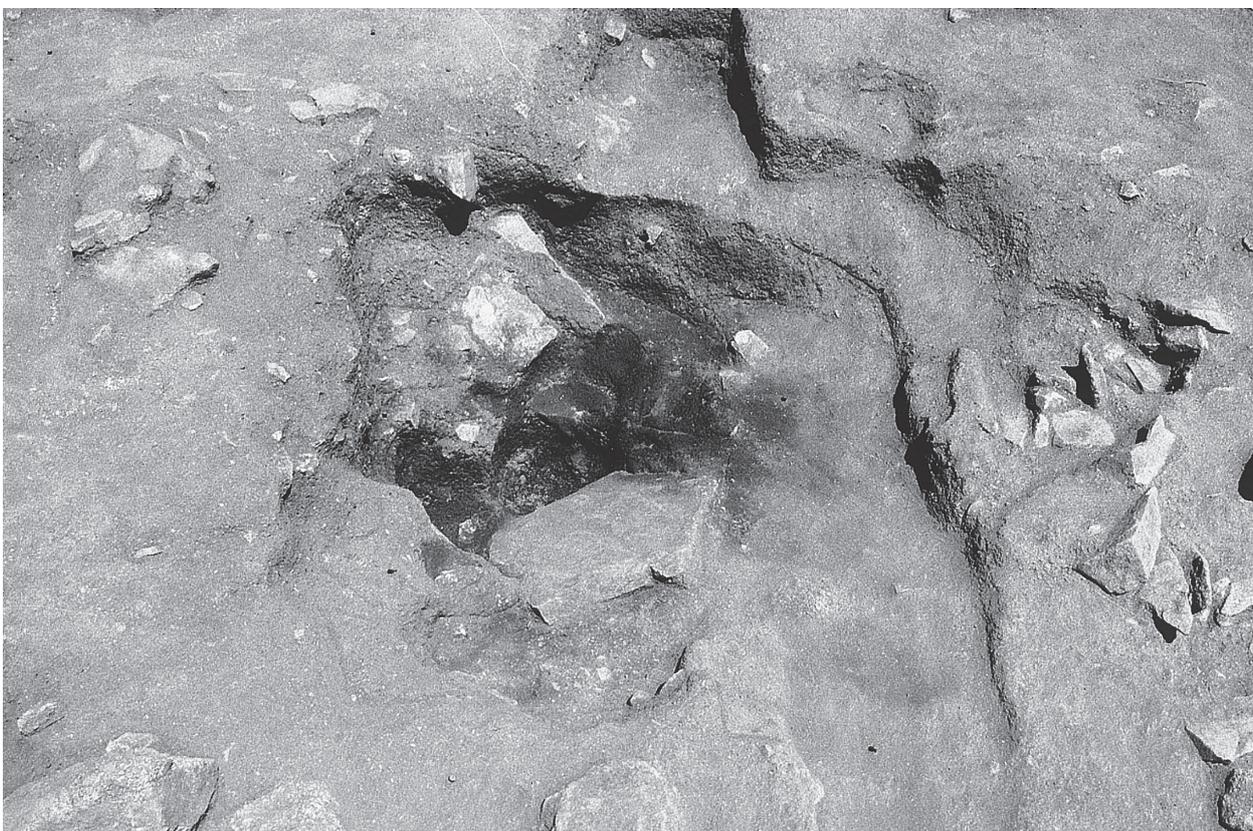
a 柱穴群 a・b (西から)



b 柱穴群 c (東から)



a 柱穴群 c (西から)



b SK1 (西から)

図版 29



a SD1・SK5 (北西から)



b SK2 貝殻出土状況 (北から)



a SK2 (北西から)



b SK3 礫出土状況 (南西から)



a SK3 (南西から)



b SK4 礫出土状況 (東から)



a SK4 (西から)



b SK6 礫出土状況 (北から)



a SK6 (北から)



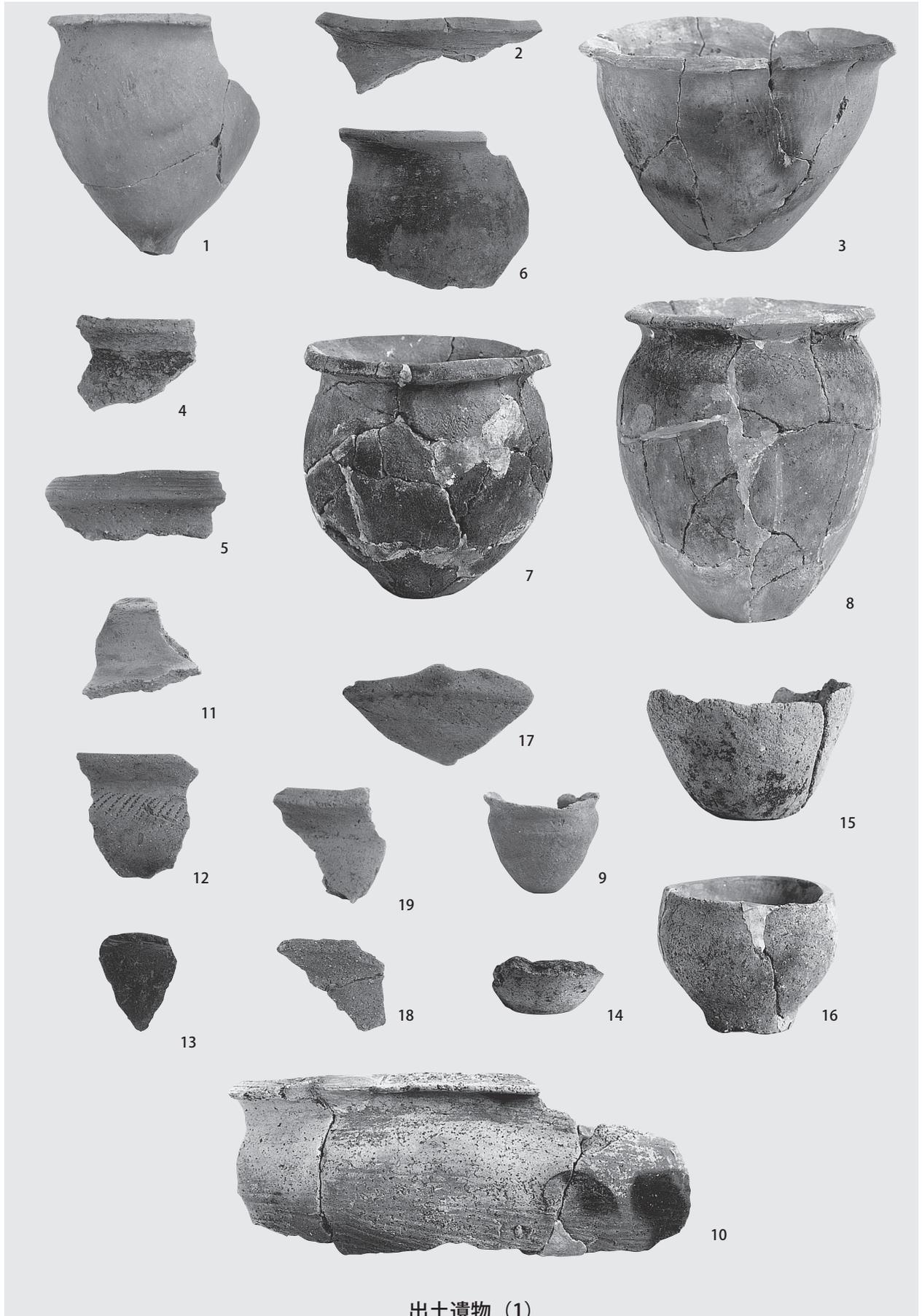
b SK8 (西から)



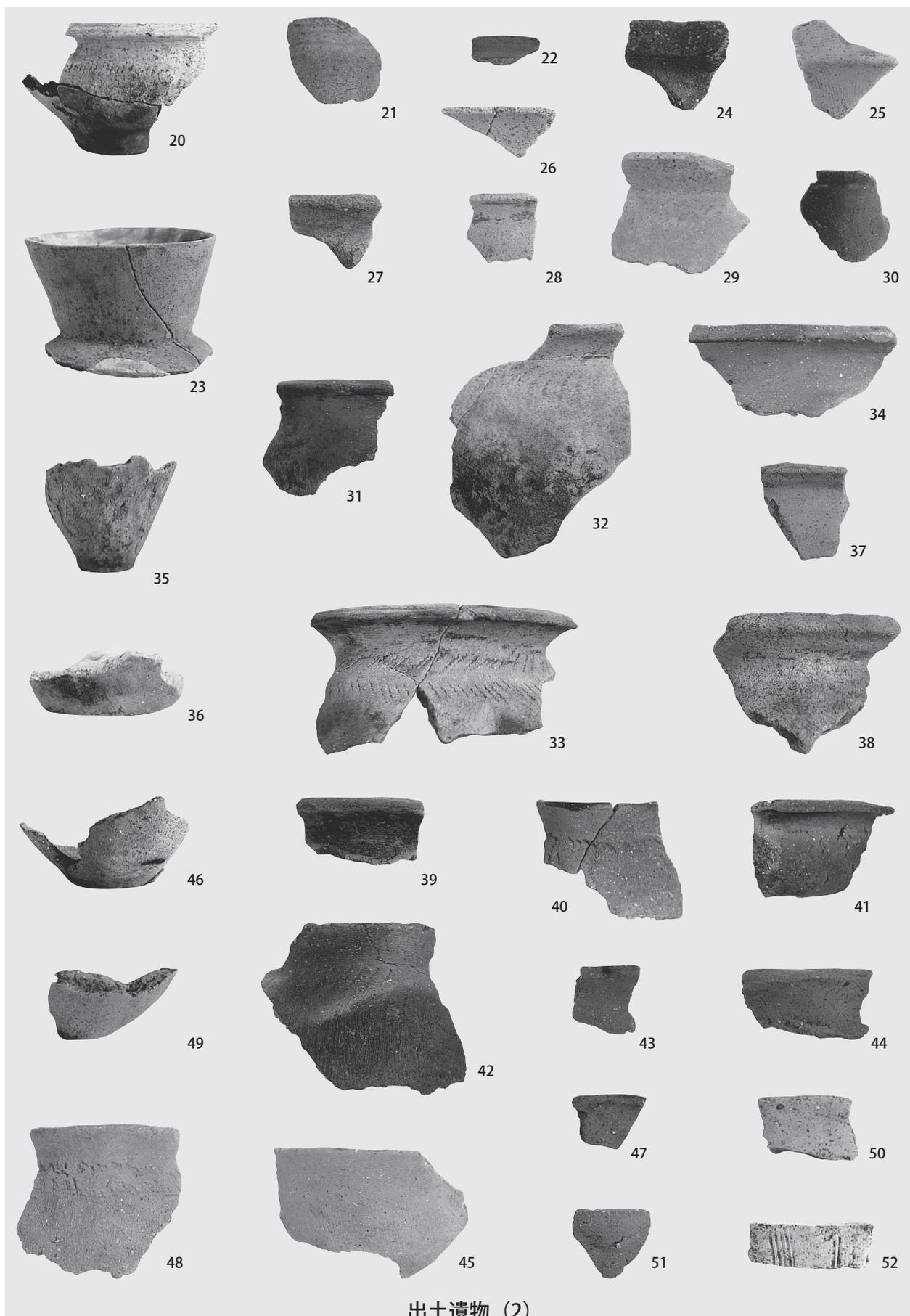
a SK9 (西から)



b SK10・11 (南西から)



出土遺物 (1)

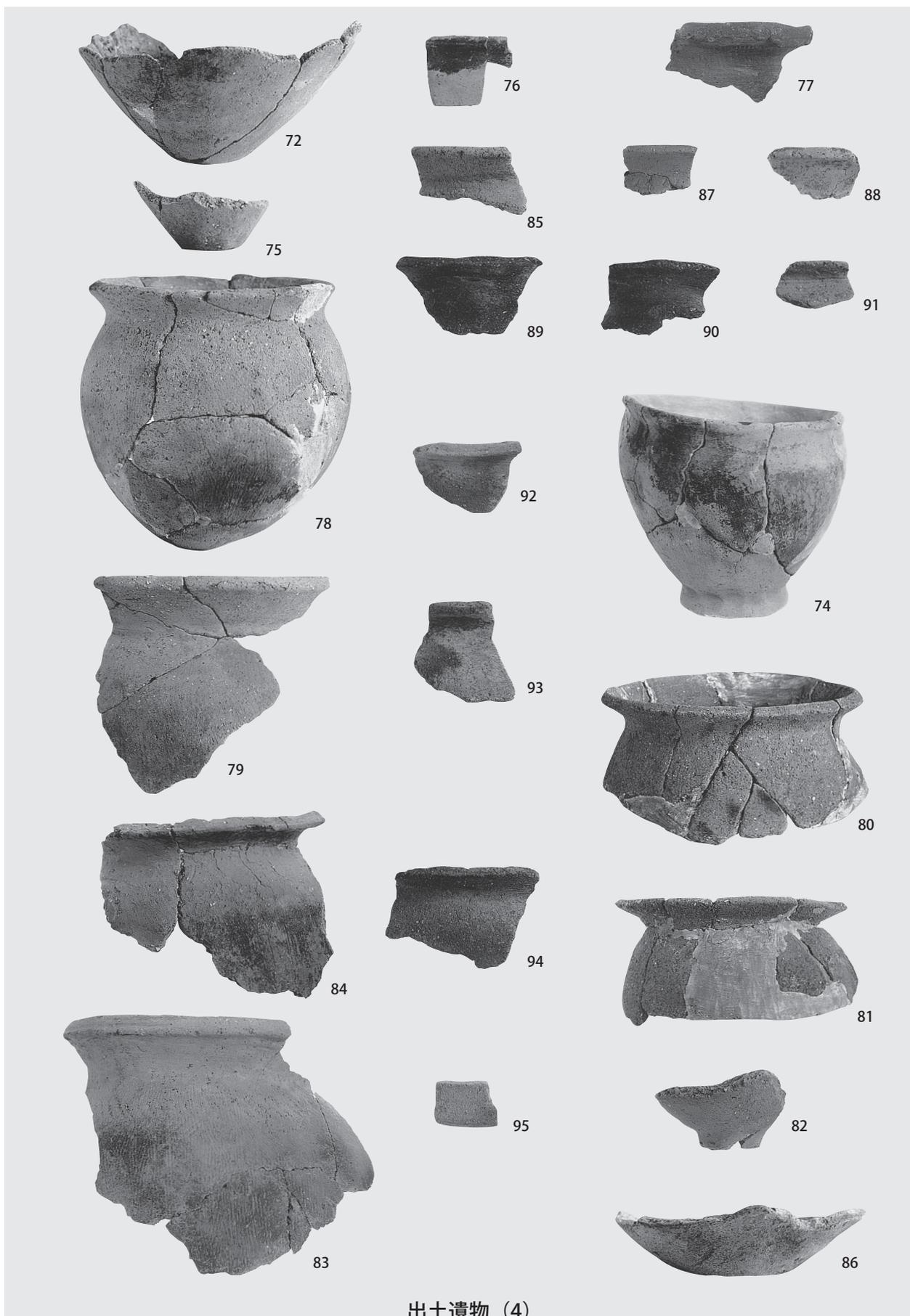


出土遺物 (2)

图版 37

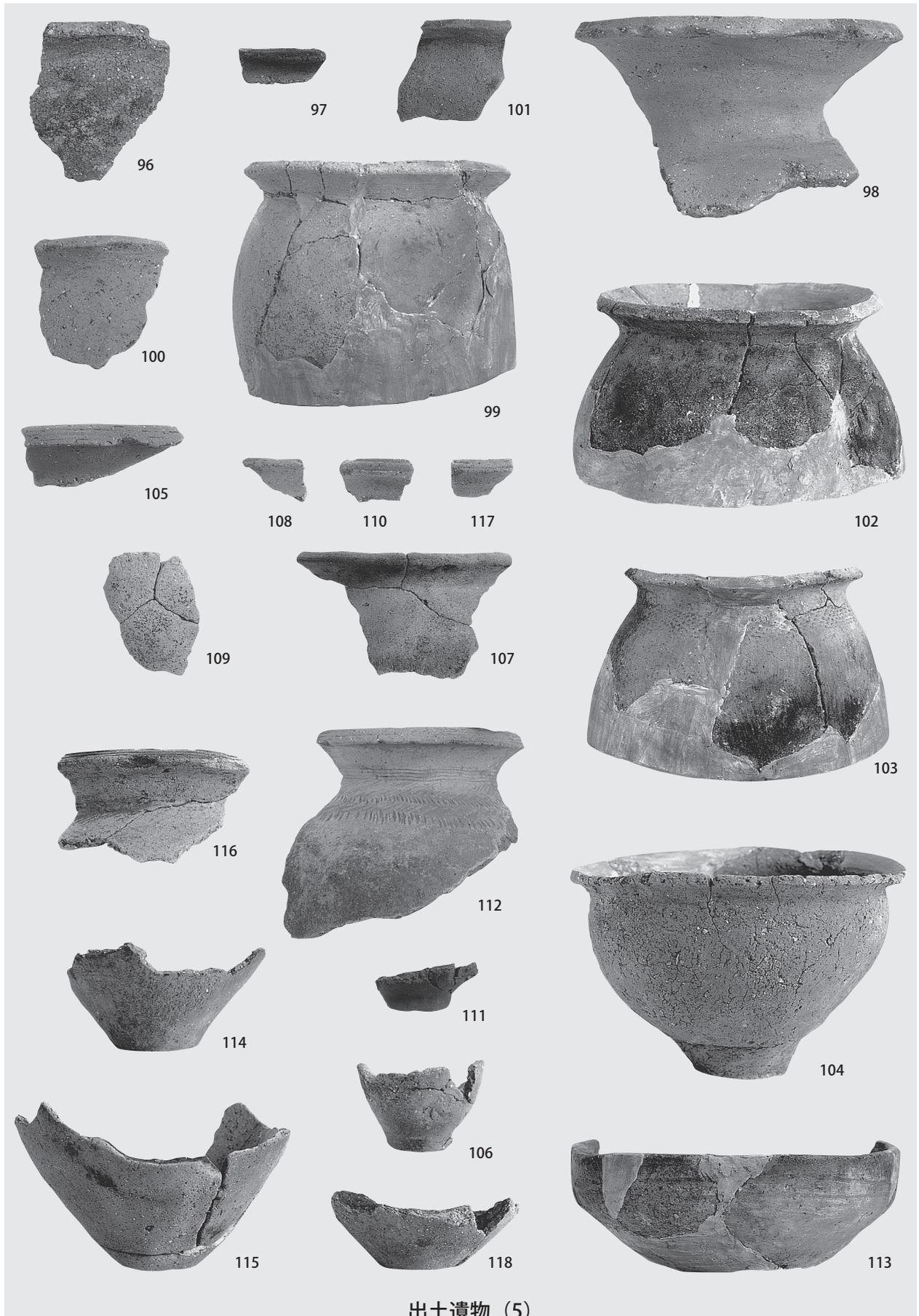


出土遺物 (3)

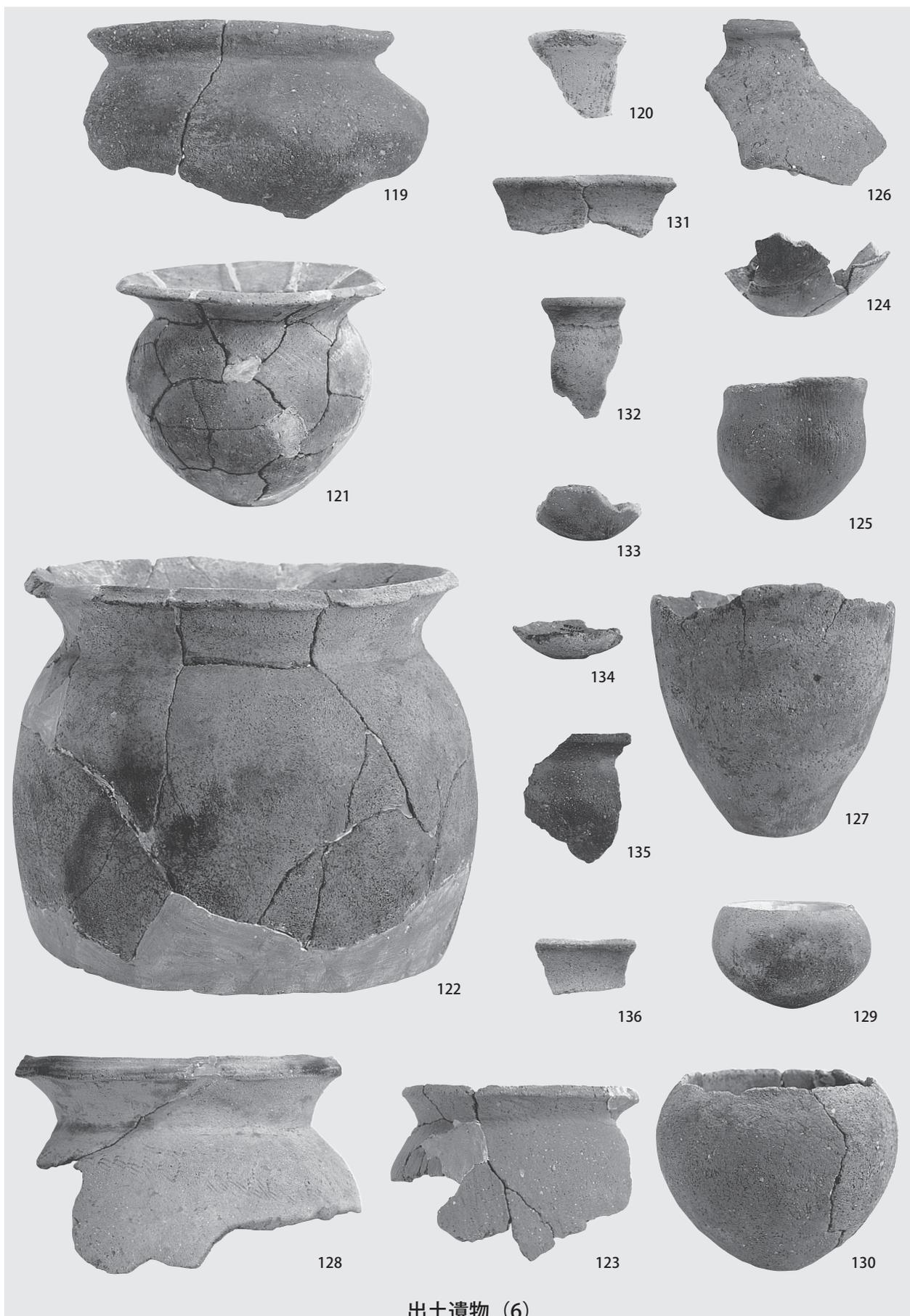


出土遺物 (4)

图版 39



出土遺物 (5)

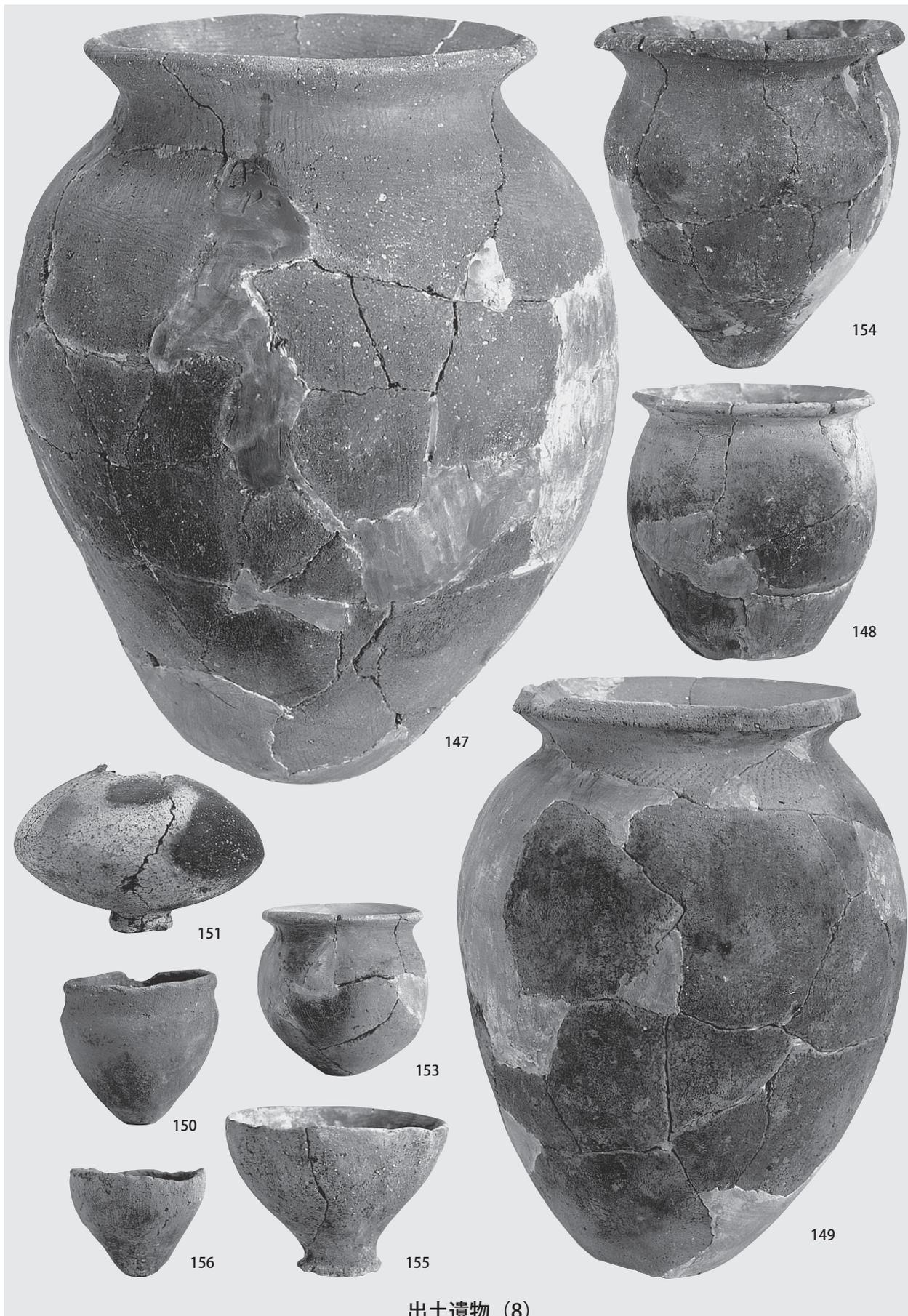


出土遺物 (6)

图版 41



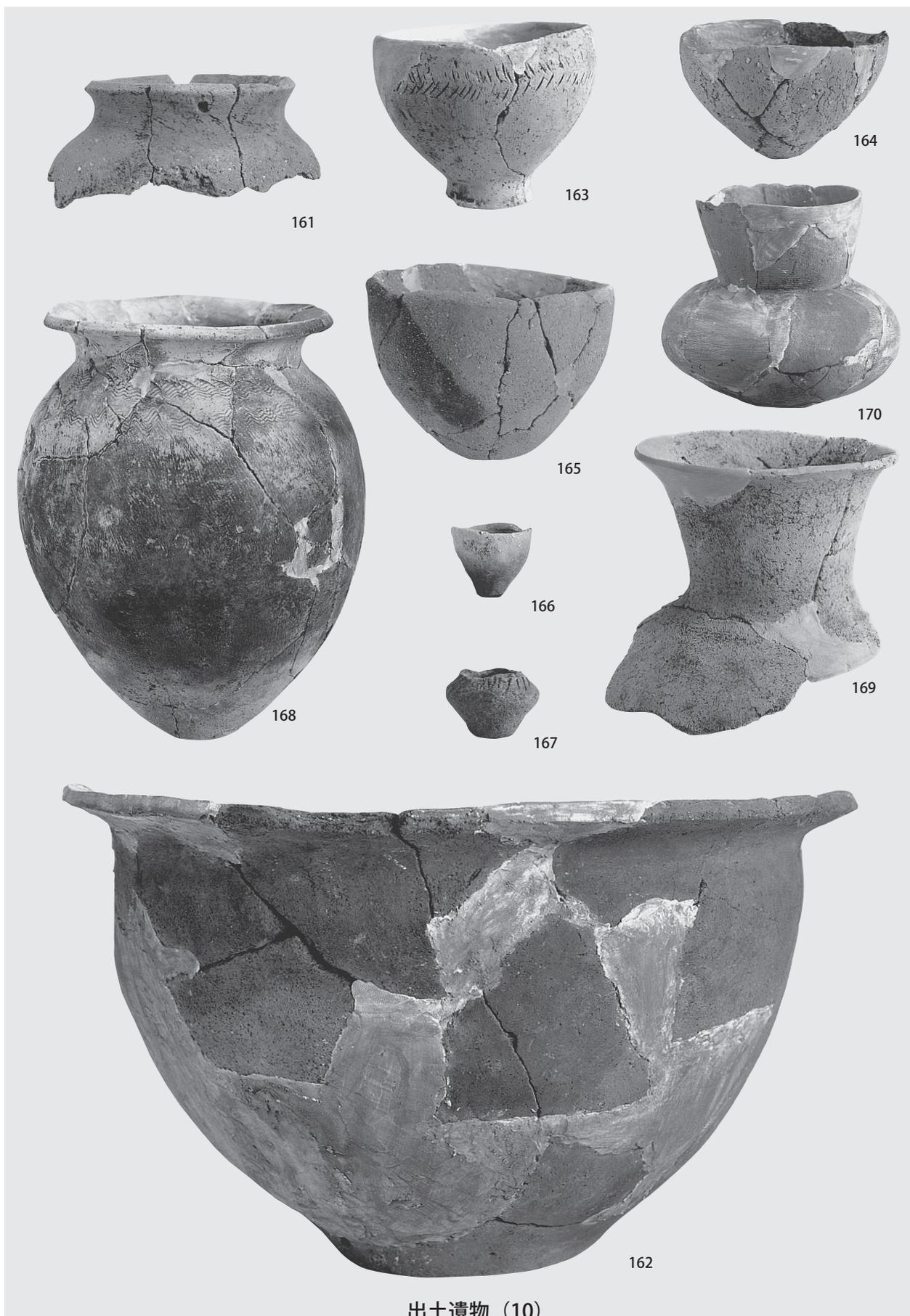
出土遺物 (7)



出土遺物 (8)



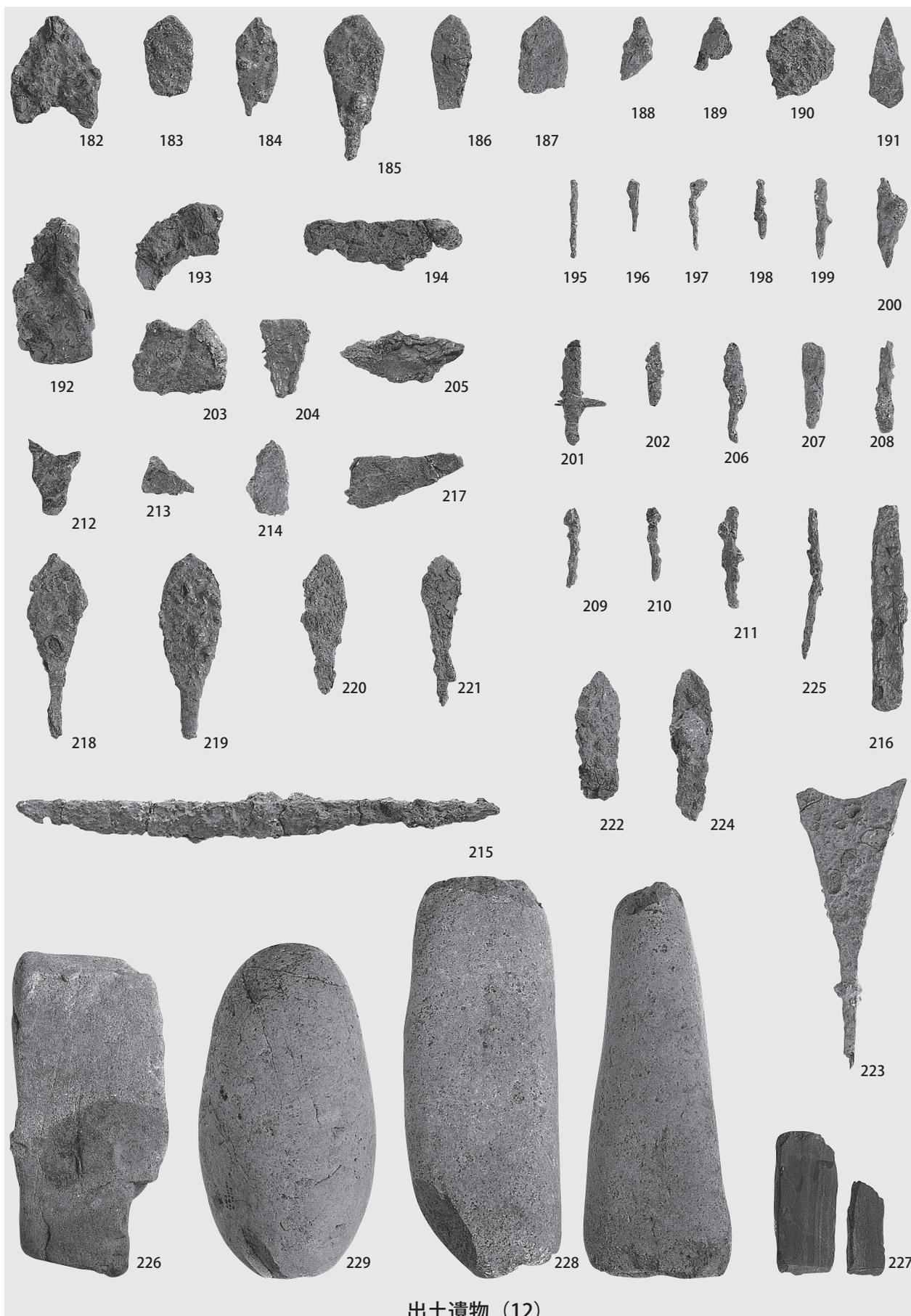
出土遺物 (9)



出土遺物 (10)

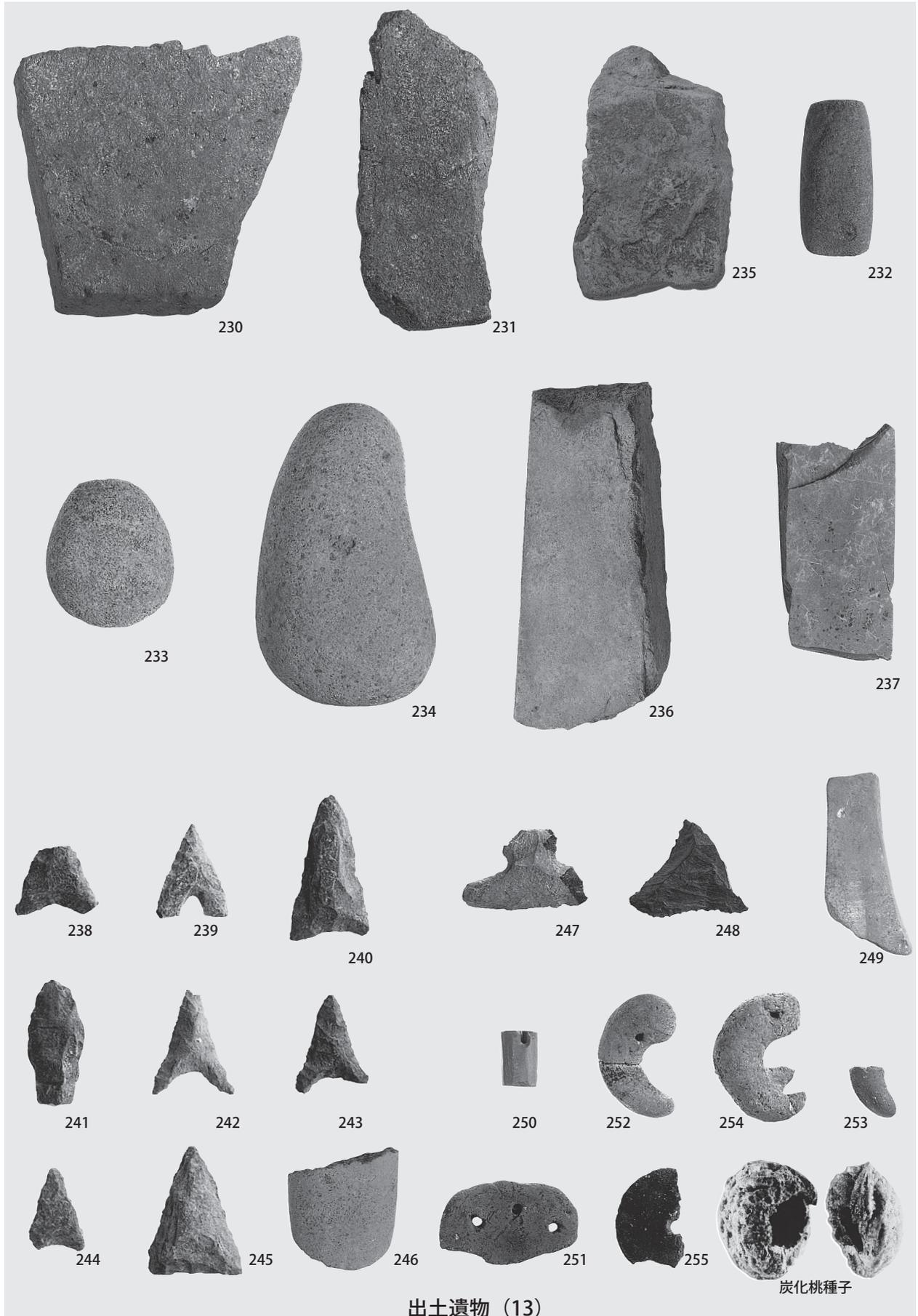


出土遺物 (11)



出土遺物 (12)

图版 47



出土遺物 (13)

炭化桃種子

報 告 書 抄 録

ふりがな	みたにいせき ーひろしましあきくなかのひがしさんちようめ・なかのひがしちようしょざいー							
書 名	三谷遺跡 ー広島市安芸区中野東三丁目・中野東町所在ー							
副 書 名								
巻 次								
シリーズ名	財団法人広島市文化財団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第 13 集							
編著者名	田村規充 松田雅之 楮木敬太							
編集機関	財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課							
所 在 地	〒 732-0052 広島県広島市東区光町二丁目 15 番 36 号							
発行年月日	西暦 2006 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 。 ’ ”	東経 。 ’ ”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みたにいせき 三谷遺跡	ひろしまけんひろしま 広島県広島 しあきくなか 市安芸区中 のひがしさんちよう 野東三丁 目・中野東 まち 町	34107	—	34° 23’ 33”	132° 34’ 50”	20010618 ~ 20020528 20020924 ~ 20031226	2000 m ²	一般国道 2 号 (東広島 バイパス) 建設工事に 伴う埋蔵文 化財発掘調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
三谷遺跡	集落跡	弥生時代	住居跡 24 軒 テラス状遺構 16 か所 柱穴群 1 か所 土坑 14 基		弥生土器 鉄器 石器			

(財) 広島市文化財団発掘調査報告書 第13集

三 谷 遺 跡

—安芸区中野東三丁目・中野東町所在—

2006年3月

編集発行

財団法人広島市文化財団文化科学部文化財課
〒732-0052 広島市東区光町二丁目15番36号
TEL 082-568-6511

印 刷

大村印刷株式会社
〒730-0847 広島市中区舟入南一丁目10番10号
TEL 082-503-1221